

鬼塚遺跡第8次発掘調査報告書

1997

財団法人 東大阪市文化財協会

序

東大阪市は、古代より栄えた河内の一画を占めています。市内には、旧石器時代以降各時代の遺跡が現在約130箇所、確認されており、埋蔵文化財の宝庫と言えます。なかでも、市域の生駒山の山麓には、今回報告します鬼塚遺跡をはじめ鬼虎川遺跡・西ノ辻遺跡など全国的にも著名な弥生時代の大集落が存在し、原始時代の繁栄の様子を今に示しています。

江戸時代以降は、商都大阪の近郊農村地帯でありましたが、現在市域の大半は住宅・工場などが立ち並びまとまった水田地帯はわずかとなり、市街化が進んでおります。

今回報告する鬼塚遺跡第8次調査は、伸線工場の跡地にマンションの建築が計画され、遺跡が破壊されるために実施したものです。

鬼塚遺跡は、鬼虎川・西ノ辻遺跡の南に隣接した遺跡で早い時期から弥生時代の開始を考えるうえに重要な遺跡と考えられていました。ただその実態は、まだ不明な点が少なくありません。この度の調査では、縄文・弥生・古墳時代に関する新たな発見が多くありました。多くの出土品は当時の人々の生活を偲ばせてくれるものであります。

本書が、原始・古代の社会を解明するうえでお役に立てれば幸いです。また、地域の文化財の学習資料となりますことを願っております。

最後になりましたが、調査および整理を実施するうえに、多大なご協力をいただきました正起工業株式会社をはじめとする関係機関、方々に心より謝意を表します。

財団法人 東大阪市文化財協会
理事長 日吉 亘

例 言

1. 本書は正起工業株式会社が計画したマンション建設工事に伴う、鬼塚遺跡第8次調査の発掘調査報告書である。
2. 本調査は財団法人東大阪市文化財協会が、正起工業株式会社の委託を受けて実施した。
3. 主要な現地調査は、昭和57年5月24日から11月8日まで福永信雄を担当として実施した。
4. 本書の執筆はIV章—4・5およびV章—3・4・5を中西克宏が行なった。附編のVI章については、それぞれVI-1パリノサーベイ株式会社、VI-2多賀谷昭、VI-3金弘美、VI-4安田博幸・井村由美、VI-5薦科哲男・東村武信（敬称略）に依頼し玉稿を賜った。その他の章の執筆と編集は福永が行なった。観察表については、小西優美・津田美智子の協力を得た。また、図章で用いた縄文時代晚期土器の統計処理は、小西優美が担当した。
5. 遺構写真は福永・中西克宏が撮影し、遺物写真撮影は落合信生氏に委託した。
6. 現地調査実施にあたっては、正起工業株式会社の方々から多大なご協力いただいた。記して謝意を表する。
7. 遺構実測図は調査に参加した全員で作成し、整図は中西・津田が担当した。遺物実測図は、中西・小西を中心に福永・津田・山本裕子が作成した。石器については松田順一郎の協力を得た。なお、本書掲載の遺物の挿図番号は、国版番号と一致させている。
8. 石材の鑑定は、パリノ・サーベイ株式会社に委託し報告を受けた。
9. 遺構実測図の水準高はT.P値を用いた。
10. 調査および本書作成にあたって、下記の方々から多くの教示を得た。心より謝意を表する。
(敬称省略・順不同)
西谷真治・金闇恕・中村五郎・中村友博・泉拓良・家根祥多・置田雅昭・木下密運・秋山浩三・森島康雄・濱田延充・那須考悌・柳野博幸・栗田薰
11. 現地調査および整理作業において、下記の方々の参加を得た。また、最終の整理作業は整理部が担当した。
丹山昌則・後藤義行・中森一矢・辻栄二・宮崎恵三・越野一朗・小松謙介・田中裕之・森田浩史・小西優美・津田美智子・山本裕子・松井朋子・石渡玲子・藤原雅子・天津正代・平泰子・山脇陽子・米谷佳世子・木梨昌美・堀内朋子・川越菊美・谷口純子・森田久美子・国分政子・百合藤厚子・西山由美・八田美代子

本文目次

| | | |
|---------------------------|-------|----|
| I. | 位置と環境 | 1 |
| 1. 位置 | 1 | |
| 2. 地理的環境 | 1 | |
| 3. 歴史的環境 | 2 | |
| II. | 調査概要 | 6 |
| 1. 従来の調査 | 6 | |
| 2. 調査に至る経過 | 7 | |
| 3. 調査方法・目的 | 8 | |
| III. | 層序 | 10 |
| 1. 第 I 調査区 | 10 | |
| 2. 第 II 調査区 | 14 | |
| 3. 第 I 調査区と第 II 調査区の層序の対応 | 15 | |
| IV. | 遺構 | 16 |
| 1. 縄文時代の遺構 | 16 | |
| 縄文時代後期（縄文 V）の遺構 | 16 | |
| 縄文時代晩期（縄文 IV～I）の遺構 | 16 | |
| 2. 弥生時代の遺構 | 24 | |
| 3. 自然流路 | 30 | |
| 4. 古墳時代の遺構 | 33 | |
| 5. 飛鳥時代の遺構 | 37 | |
| V. | 出土遺物 | 44 |
| 1. 縄文時代後期以前の遺物 | 44 | |
| 2. 縄文時代晩期の遺物 | 47 | |
| 縄文 IV 出土土器 | 50 | |
| 縄文 III 出土土器 | 51 | |
| 縄文 II 出土土器 | 56 | |

| | |
|--|-----|
| 縄文 I 出土土器 | 65 |
| 東海地方系土器 | 65 |
| 土製品 | 67 |
| 石製品 | 71 |
| 3. 弥生時代の遺物 | 74 |
| 弥生時代前期土器 | 74 |
| 弥生時代中期土器 | 76 |
| 弥生時代後期土器 | 80 |
| 4. 古墳時代の遺物 | 80 |
| 古墳時代前期土器 | 80 |
| 古墳時代中期土器 | 81 |
| その他の出土遺物 | 92 |
| 5. 飛鳥時代の遺物 | 93 |
| VI. 附編 | 131 |
| 1. 東大阪市鬼塚遺跡試料花粉分析及び植物珪酸体分析報告 | 131 |
| 2. 鬼塚遺跡出土人骨について | 136 |
| 3. 鬼塚遺跡出土の歯牙について | 138 |
| 4. 鬼塚遺跡出土の縄文時代晩期の数種の土器片に塗布された赤色顔料物質の科学分析 | 144 |
| 5. 鬼塚遺跡出土のサスカイト製石器、剝片の石材産地分析 | 146 |
| VII. 考察 | 160 |
| 1. 遺構について | 160 |
| イ. 調査地点における遺構の変遷と集落の推移 | 160 |
| ロ. 再葬墓（土壙墓1・2）について | 166 |
| 2. 縄文IV~Iの土器について | 170 |
| VIII. 総括 | 187 |

挿図目次

| | |
|--|-------|
| 第1図 調査地周辺遺跡分布図 | 3 |
| 第2図 調査地位置図 | 7 |
| 第3図 調査地区割図 | 9 |
| 第4・5図 調査地土層断面図 | 11・12 |
| 第6図 縄文時代後期遺構（縄文V）平面図 | 16 |
| 第7図 縄文時代晚期遺構（縄文IV）土壤墓1・2平面図 | 17 |
| 第8図 縄文時代晚期遺構（縄文IV）土壤墓1検出状況実測図 | 18 |
| 第9図 縄文時代晚期遺構（縄文IV）土壤墓2検出状況実測図 | 18 |
| 第10図 縄文時代晚期遺構（縄文IV）ピット他検出状況平面図 | 20 |
| 第11図 縄文時代晚期遺構（縄文IV）ピット・土壤断面実測図 | 20 |
| 第12図 縄文時代晚期遺構（縄文III）溝・土壤検出状況平面図 | 22 |
| 第13図 縄文時代晚期遺構（縄文III）土壤22検出状況平面図 | 23 |
| 第14図 縄文時代晚期遺構（縄文II）溝33検出状況平面図 | 23 |
| 第15図 弥生時代遺構（中期）方形周溝墓他検出状況平面図 | 25 |
| 第16図 弥生時代遺構（中期）木棺墓検出状況実測図 | 26 |
| 第17図 弥生時代遺構（中期）木棺墓墓壙内土層断面図 | 27 |
| 第18図 弥生時代遺構（中期）方形周溝墓3南側周溝供献土器検出状況実測図 | 29 |
| 第19図 自然流路平面図 | 31 |
| 第20図 古墳時代遺構（中期）掘立柱建物他検出状況平面図 | 34 |
| 第21図 古墳時代遺構（中期）掘立柱建物1検出状況実測図 | 35 |
| 第22図 古墳時代遺構（中期）掘立柱建物2検出状況実測図 | 36 |
| 第23図 飛鳥時代遺構、土壤3検出状況実測図 | 37 |
| 第24図 縄文時代中・後期以前土器実測図、拓影・断面図 | 45 |
| 第25図 縄文時代中・後期土器拓影・断面図 | 46 |
| 第26図 縄文時代晚期土器（縄文IV）実測図 | 49 |
| 第27図 縄文時代晚期土器（縄文IV）拓影・断面図 | 50 |
| 第28図 縄文時代晚期土器（縄文III・土壤22）実測図 | 51 |
| 第29図 縄文時代晚期土器（縄文III・土壤21・22・溝35）拓影・断面図 | 52 |
| 第30図 縄文時代晚期土器（縄文III・溝35）実測図 | 53 |
| 第31図 縄文時代晚期土器（縄文III・黒灰色粘土）実測図 | 54 |
| 第32図 縄文時代晚期土器（縄文III・黒灰色粘土）拓影・断面図 | 55 |
| 第33図 縄文時代晚期土器（縄文III・黒灰色砂質土下層）拓影・断面図 | 57 |
| 第34図 縄文時代晚期土器（縄文II・溝33）実測図 | 59 |

| | | |
|---------|---------------------------------|-----|
| 第35図 | 縄文時代晩期土器（縄文II・溝33）実測図 | 60 |
| 第36図 | 縄文時代晩期土器（縄文II・溝33）拓影・断面図 | 61 |
| 第37図 | 縄文時代晩期土器（縄文II・黒灰色砂質土）実測図 | 62 |
| 第38図 | 縄文時代晩期土器（縄文II・黒灰色砂質土）拓影・断面図 | 63 |
| 第39図 | 縄文時代晩期土器（縄文I・黄灰色シルト）拓影・断面図 | 64 |
| 第40図 | 縄文時代晩期土器（縄文II・東海地方系土器）拓影・断面図 | 65 |
| 第41図 | 縄文時代晩期土器（搅乱）実測図・拓影・断面図 | 66 |
| 第42図 | 縄文時代晩期土製品実測図 | 67 |
| 第43図 | 縄文時代晩期石器（石錐・石錐）実測図 | 68 |
| 第44図 | 縄文・弥生時代石器（石錐・石匙・打製尖頭器・打製石剣）実測図 | 69 |
| 第45図 | 縄文時代晩期石器（直刃削器他）実測図 | 70 |
| 第46図 | 縄文時代晩期石器（ビエス・エスキーエ他）実測図 | 71 |
| 第47図 | 縄文時代後・晩期石器（石錐・敲石）実測図 | 72 |
| 第48図 | 縄文時代後・晩期石器（磨製石斧・打製石斧・石皿）実測図 | 73 |
| 第49図 | 弥生時代前期土器実測図 | 74 |
| 第50図 | 弥生時代前期土器拓影・断面図 | 75 |
| 第51図 | 弥生時代中期土器（方形周溝墓3・南側周溝）実測図 | 77 |
| 第52図 | 弥生時代中期土器（土壤14・木棺墓他）実測図 | 78 |
| 第53図 | 弥生時代中期土器（自然流路他）実測図 | 79 |
| 第54図 | 弥生時代後期～古墳時代前期土器（自然流路他）実測図 | 80 |
| 第55図 | 古墳時代中期土器（須恵器）実測図 | 81 |
| 第56図 | 古墳時代中期土器（須恵器）実測図 | 82 |
| 第57図 | 古墳時代中期土器（須恵器）拓影、（土師器）実測図 | 83 |
| 第58図 | 古墳時代中期土器（土師器）実測図 | 85 |
| 第59図 | 古墳時代中期土器（土師器）実測図 | 87 |
| 第60図 | 古墳時代中期土器（韓式系土器）実測図・拓影・断面図 | 88 |
| 第61図 | 古墳時代中期遺物（製塙土器・鋳造鉄斧・紡錘車・織羽口他）実測図 | 90 |
| 第62図 | 飛鳥時代土器（須恵器・土師器）実測図 | 92 |
| 第63(1)図 | 鬼塚遺跡試料主要プランツオバールダイアグラム | 135 |
| 第64(1)図 | サヌカイト原産地 | 150 |
| 第65(2)図 | 金山・五色台地域のサヌカイト、ガラス質安山岩の原産地 | 151 |
| 第66図 | 縄文時代後期遺構（縄文V）位置図 | 160 |
| 第67図 | 縄文時代晩期遺構（縄文IV）位置図 | 161 |
| 第68図 | 縄文時代晩期遺構（縄文III）位置図 | 162 |
| 第69図 | 縄文時代晩期遺構（縄文II）位置図 | 163 |

| | |
|-------------------------------|---------|
| 第70図 縄文時代晚期遺構（縄文I）位置図 | 163 |
| 第71図 弥生時代中期遺構位置図 | 165 |
| 第72図 古墳時代中期遺構位置図 | 167 |
| 第73図 飛鳥時代遺構位置図 | 168 |
| 第74図 各遺構・層出土主要縄文土器（深鉢）一覧 | 171・172 |
| 第75図 各遺構・層出土主要縄文土器（深鉢・壺・底部）一覧 | 173・174 |
| 第76図 各遺構・層出土主要縄文土器（浅鉢）一覧 | 175・176 |
| 第77図 各遺構・層出土縄文土器器種構成円グラフ | 177 |
| 第78図 凸帯分類図 | 180 |
| 第79図 突起分類図 | 182 |

表 目 次

| | |
|------------------------------------|-----|
| 表1 遺構一覧表 | 38 |
| 表2 縄文土器觀察表 | 94 |
| 表3 土偶及び土製品觀察表 | 117 |
| 表4 石製品觀察表 | 118 |
| 表5 弥生土器觀察表 | 120 |
| 表6 古墳時代遺物觀察表 | 123 |
| 表7 飛鳥時代土器觀察表 | 129 |
| 表8 各遺構・層出土の縄文土器、器種別点数（口縁部） | 130 |
| 表9 縄文時代各遺構・層出土の石材一覧 | 130 |
| 表10 鬼塚遺跡試料表 | 131 |
| 表11 鬼塚遺跡花粉分析結果 | 132 |
| 表12 試料表 | 134 |
| 表13 鬼塚遺跡試料プラントオパール分析結果 | 135 |
| 表14 ジフェニルカルバジドによる呈色スポットのRF値と色調 | 145 |
| 表15 ジチゾンによる呈色スポットのRF値と色調 | 145 |
| 表16 各サヌカイトの原産地における原石群の元素比の平均値と標準偏差 | 152 |
| 表17 岩屋原産地からのサヌカイト原石66個の分類結果 | 153 |
| 表18 和泉・岸和田原産地からのサヌカイト原石72個の分類結果 | 153 |
| 表19 和歌山市梅原原産地からのサヌカイト原石21個の分類結果 | 153 |
| 表20 鬼塚遺跡出土のサヌカイト製石器、石片分析結果 | 154 |
| 表21 鬼塚遺跡出土の黒曜石、サヌカイト製石器、石片の原産地推定結果 | 157 |
| 表22 鬼塚遺跡各地点出土土器の時期と標高 | 169 |

| | |
|----------------------------|-----|
| 表23 深鉢凸帯の施文部位の分類 (%) | 181 |
| 表24 浅鉢凸帯の施文部位の分類 (%) | 181 |
| 表25 浅鉢、突起の個数と比率 (%) | 183 |
| 表26 黒色磨研および磨研風土器の個数と比率 (%) | 184 |
| 表27 浅鉢、煤付着の個数と比率 | 186 |

図版目次

- 図版1 調査地 上. 第I調査区調査開始風景（南西より）下. 第II調査区搅乱検出状況（北東より）
- 図版2 調査地土層断面 上. 第II調査区南壁断面（北より）下. 第II調査区東壁断面（西より）
- 図版3 調査地土層断面 上. 第II調査区南壁断面（北より）下. 第I調査区北壁断面（南より）
- 図版4 調査地土層断面・遺構 上. 第I調査区西壁断面（北より）下. 縄文V遺構（溝38・土壤48）検出状況（北より）
- 図版5 遺構（縄文IV）上. 第I調査区土壤墓1・2検出状況（北より）下. 第I調査区土壤墓1検出状況（東より）
- 図版6 遺構（縄文IV）上. 第I調査区土壤墓1中央集骨状況（北東より）中. 第I調査区土壤墓1石撤去後の状況（東より）下. 第I調査区土壤墓1完掘状況（北東より）
- 図版7 遺構（縄文IV） 上. 第I調査区土壤墓2検出状況（北より）下. 第I調査区土壤墓2検出状況（南より）
- 図版8 遺構（縄文IV） 上. 第I調査区土壤墓2集骨状況（南より）中. 第I調査区土壤墓2完掘状況（北東より）下. 第I調査区土壤墓1・2完掘状況（北より）
- 図版9 遺構（縄文IV） 上. 第II調査区ピット検出状況（南西より）下. 第II調査区ピット検出状況（北より）
- 図版10 遺構（縄文IV・III・II） 上. 第II調査区ピット検出状況（東より）下. 第II調査区溝35・33検出状況（北より）
- 図版11 遺構（縄文III・II） 上. 第II調査区溝35検出状況（南西より）下. 第II調査区溝33検出状況（北より）
- 図版12 遺構（縄文III・II） 上. 第II調査区溝33遺物出土状況（南西より）下. 第II調査区土壤22遺物出土状況（北より）
- 図版13 遺構（縄文IV・III・II） 上. 第II調査区溝33遺物出土状況（北より）中. 黒灰色粘土層遺物出土状況（北より）下. 第II調査区暗黄灰色粘土層深鉢出土状況（東より）
- 図版14 遺構（弥生時代中期） 上. 第I調査区土壤14甕出土状況（北より）下. 第II調査区方形周溝墓2周溝検出状況（南より）
- 図版15 遺構（弥生時代中期） 上. 第II調査区木棺墓検出状況（西より）下. 第II調査区木

- 棺墓蓋撤去後状況（北東より）
- 図版16 遺構（弥生時代中期） 上. 第II調査区木棺墓人骨検出状況（南より）下. 第II調査区木棺墓人骨取り上げ後の状況（東より）
- 図版17 遺構（弥生時代中期） 上. 第II調査区木棺墓人骨上半身検出状況（東より）下. 第II調査区木棺墓、掘方埋土の状況（南より）
- 図版18 遺構（弥生時代中期） 上. 第II調査区木棺墓、掘方埋土の状況（東より）下. 第II調査区方形周溝墓3、西側周溝供獻土器出土状況（北より）
- 図版19 遺構（弥生時代中期） 上. 第II調査区方形周溝墓3、西側周溝供獻土器出土状況（南より）下. 第II調査区方形周溝墓2、北側周溝供獻土器出土状況（南より）
- 図版20 遺構（弥生時代中期） 上. 第II調査区方形周溝墓2、北側周溝供獻土器出土状況（北より）中. 第II調査区方形周溝墓2、西側周溝臺出土状況（東より）下. 第II調査区自然流路3臺出土状況（南より）
- 図版21 遺構（自然流路） 上. 第I調査区自然流路1完掘状況（南より）下. 第I調査区自然流路1完掘状況（北より）
- 図版22 遺構（自然流路） 上. 第I調査区自然流路1完掘状況（東より）下. 第I調査区自然流路1肩口完掘状況（東より）
- 図版23 遺構（自然流路） 上. 第I調査区自然流路堆積土断面（東より）下. 第I調査区自然流路1肩口自然木検出状況（南より）
- 図版24 遺構（古墳時代中期） 上. 第I調査区遺構検出状況（北より）下. 第II調査区遺構検出状況（北より）
- 図版25 遺構（古墳時代中期） 上. 第II調査区遺構検出状況（東より）下. 第II調査区中央部北半遺構検出状況（東より）
- 図版26 遺構（古墳時代中期） 上. 第II調査区北西部遺構検出状況（東より）下. 第II調査区中央部南半遺構検出状況（東より）
- 図版27 遺構（古墳時代中期） 上. 第I調査区溝5遺物出土状況（西より）下. 第I調査区土壤4遺物出土状況（東より）
- 図版28 遺構（古墳時代中期） 上. 第I調査区東壁断面遺物出土状況（西より）下. 第I調査区遺物出土状況（北西より）
- 図版29 遺構（古墳時代中期） 上. 第II調査区溝21製塙土器他出土状況（北より）下. 第II調査区溝・ピット検出状況（北より）
- 図版30 遺構（古墳時代中期） 上. 第II調査区溝27遺物出土状況（南より）下. 第II調査区溝26遺物出土状況（西より）
- 図版31 遺構（古墳時代中期） 上. 第II調査区南西部溝・ピット検出状況（北より）下. 第II調査区ピット33柱根検出状況（西より）
- 図版32 遺構（古墳時代中期） 上. 第II調査区ピット32検出状況（北より）下. 第II調査区

- 掘立柱建物 1 柱穴（ピット32・33・35）断ち割り状況（西より）
- 図版33 遺構（古墳時代中期） 上、第II調査区ピット35断ち割り状況（西より）下、第II調査区ピット32断ち割り状況（西より）
- 図版34 遺構（古墳時代中期） 上、第II調査区ピット28根石検出状況（南より）中、第II調査区ピット28検出状況（東より）下、第II調査区ピット30根石検出状況（西より）
- 図版35 遺構（古墳時代中期） 上、第II調査区ピット10根石検出状況（南より）中、第II調査区ピット47根石検出状況（東より）下、第II調査区ピット33柱根取り上げ後の状況（西より）
- 図版36 遺物（縄文時代後期以前・土器） 上左、深鉢、上右、深鉢下、深鉢・浅鉢・底部
- 図版37 遺物（縄文時代後期以前・土器） 上、深鉢・浅鉢、下、深鉢・浅鉢・底部
- 図版38 遺物（縄文IV） 上、深鉢・浅鉢・底部、下、深鉢・浅鉢
- 図版39 遺物（縄文IV・III） 上左、深鉢、上右、深鉢、下、深鉢・底部
- 図版40 遺物（縄文IV・III・II） 深鉢（68・101・103・105・107）浅鉢（103）
- 図版41 遺物（縄文IV・III・II） 深鉢
- 図版42 遺物（縄文III） 上、深鉢・浅鉢、下、深鉢・浅鉢
- 図版43 遺物（縄文III） 上、深鉢・浅鉢、下、深鉢・浅鉢
- 図版44 遺物（縄文III） 上、深鉢・浅鉢、下、深鉢・浅鉢
- 図版45 遺物（縄文III） 上、深鉢・浅鉢・底部、下、深鉢・浅鉢
- 図版46 遺物（縄文III） 上、深鉢・浅鉢、下、深鉢・浅鉢
- 図版47 遺物（縄文III・II） 上、深鉢・浅鉢・底部、下、深鉢・浅鉢・底部
- 図版48 遺物（縄文II） 上、深鉢、下、浅鉢・底部
- 図版49 遺物（縄文II） 上、深鉢・浅鉢・底部、下、深鉢・浅鉢
- 図版50 遺物（縄文II） 上、深鉢・浅鉢、下、深鉢・浅鉢
- 図版51 遺物（縄文II） 上、浅鉢、下、深鉢・底部
- 図版52 遺物（縄文II） 上、浅鉢、下、浅鉢・壺
- 図版53 遺物（縄文II・I） 上、深鉢（東海地方系）、下、深鉢・浅鉢
- 図版54 遺物（縄文I） 上、深鉢・浅鉢、下、深鉢・浅鉢
- 図版55 遺物（縄文時代晚期・土器） 上、深鉢・浅鉢（搅乱出土）、下、深鉢・浅鉢（搅乱出土）
- 図版56 遺物（縄文時代晚期・土器・土製品） 上左上、浅鉢・上左下、ミニチャエ鉢、上右、蓋、下、土偶・土製品
- 図版57 遺物（石製品） 上、石錐・石錐、下、磨製石斧・打製石斧・石錐・石匙・打製石劍・打製尖頭器
- 図版58 遺物（石製品） 上、直刃削器他、下、ビエス・エスキーエ他
- 図版59 遺物（石製品） 上、石錐、下、磨石・敲石
- 図版60 遺物（弥生時代前期・土器） 上左上、甕、下左、蓋、下右、壺

- 図版61 遺物（弥生時代前期～中期・土器） 上. 壺・甕、上左下. 壺、上右. 壺底部、下. 甕
- 図版62 遺物（弥生時代中期・土器） 上左. 壺、上右. 壺、下左. 壺、下右. 壺
- 図版63 遺物（弥生時代中期・土器） 上左. 甕、上右. 甕、下. 壺・甕・高杯
- 図版64 遺物（弥生時代中期・土器） 甕(38) 壺(40・41・52) 甕(42) 鉢(50)
- 図版65 遺物（古墳時代中期・須恵器） 杯(1・2) 杯蓋(5～7) 有蓋高杯蓋(9・10) 有蓋高杯(11)
- 図版66 遺物（古墳時代中期・須恵器） 上左上. 有蓋高杯(12) 上左下. 甕(14) 上右上. 杯身
(15) 上右下. 杯蓋(20)、下. 有蓋高杯・壺・高杯・杯身・杯蓋
- 図版67 遺物（古墳時代中期・須恵器） 上左. 高杯(25) 上右上. 有蓋高杯(26) 上右下. 壺
(28)、下. 甕・壺・器台
- 図版68 遺物（古墳時代中期・土師器） 上左上. 鉢(56) 上左下. 壺(64) 上右上. 壺(63) 上右
下. 高杯(61)、下. 甕・高杯・壺他
- 図版69 遺物（古墳時代中期・土師器） 甕(65・66・70・71・73・74・75) 土製支脚(67) 高杯
(69)
- 図版70 遺物（古墳時代中期・土師器） 壺(76・77・91) 土製支脚(68) 移動式壺(78)
- 図版71 遺物（古墳時代中期・土師器） 甕(79・82～85・90)
- 図版72 遺物（古墳時代中期・土器） 上. 韓式系土器甕他、下. 製塙土器
- 図版73 遺物（土製品他） 土製紡錘車(15) 鋳造鉄斧(16) 土鍤(14) 滑石製双孔円板(17)
輪羽口(18) 須恵器鉄鉢(5)
- 図版74 遺物（縄文Ⅲ～Ⅱ・飛鳥時代・土器他） 上. 須恵器杯・杯蓋・甕、土師器椀他、下左.
綠豆の半割れ、下中. 米(玄米)圧痕、下右. 米(玄米)圧痕
- 図版75 遺物（縄文時代晚期・土器の刻目・調整） 口緑端部の刻目(1・2・5・6) 1条凸帯の刻
目(7・8・9) 2条凸帯の刻目(3) 体部の二枚貝調整(4)
- 図版76 遺物（縄文時代晚期・土器の調整） 板ナデ(1・2) ケズリ(3・4・5)
- 図版77 花粉化石 1. *Carduo I deae* 2. *Artem I s I a* 3. *Gram I neae* 4. *Monolete spore*
5. 6. 7. 状況写真
- 図版78 花粉化石 8～11. 状況写真
- 図版79 花粉化石 12・13. 状況写真
- 図版80 硅酸体化石 1～5. ファン型、6～9. 棒状型、10～12. ポイント型、13・14. サ
ナ型

I 位置と環境

1. 位置

鬼塚遺跡は、東大阪市箱殿町・新町に所在する。遺跡は、東から西に向かってゆるやかに傾斜する扇状地の扇央部、標高10~35m付近に位置する。近鉄奈良線額田駅より西へ約900m、生駒山の西麓を下った所に、旧枚岡電報電話局と東大阪市立枚岡中学校がある。

遺跡の範囲は、この付近を中心にして東西800m、南北500mに広がると推定されている。遺跡推定地の小字は「鬼塚」「古下」「惣の丸」「一本木」「柳原」「箱殿」などである。今回の調査地の標高はT.P 12~14m、現在の地名は東大阪市新町456番地で小字「一本木」「古下」の一画に当る。遺跡推定範囲の中では西よりの地で平野部に近い。枚岡中学校から西へ約100m下った所である。国土地理院発行1/25000地形図（生駒山）で見れば、左下隅から上へ1.2cm、左へ6.5cmの地点である。また東高野街道の後身である旧国道170号線と、大阪（玉造）と奈良を結んだ暗奈良街道の交差点の南西隅付近にあたる。

2. 地理的環境

遺跡の位置する扇状地は、背後の生駒山から西下する豊浦川によって形成されたものである。豊浦川のような生駒山地より流れ出した小河川が造った扇状地は、東大阪市北部から八尾市南部にかけての山麓に発達し、0.7~1km（ほぼ、0.9km）の間をおいて流れている。これら中小の河川は山麓部や平野部では、時代によって徐々に流れが異なることが今回の調査も含め最近の調査で明らかになりつつある。このような扇状地は、約15~5万年前に形成されたと考えられる低位段丘で、標高100~10m付近まで広がる。

背後の生駒山地は、新第3紀鮮新世（約1000万年前）から第4紀最新世中頃（約50万年前）までの基盤褶曲によって形成されたものである。主峰の生駒山の標高は642.3mである。生駒山地は、大阪府と奈良県の境に位置する。山地を等高線100m以上の範囲とすると、北の端は交野市私市、南の端は大和川で、南北距離は約27km、東西の幅約11kmのひろがりをもつ。主峰の生駒山を頂点とし、北では標高320m南では標高430mの等高性を保って南北に長く連なる。西の大坂側斜面は、東の奈良盆地側の斜面に比べて急である。

生駒山地を形成する基盤岩類は、黒雲母花崗岩、角閃石一黒雲母花崗閃緑岩、黒雲母石英閃緑岩、閃緑岩質斑れい岩などである。このうち東大阪市上石切町から横小路町にかけて分布する角閃石一黒雲母花崗閃緑岩などが風化した粘土でつくられた土器は、胎土中に有色鉱物の角閃石、黒雲母を多量に含み、「生駒山西麓の土器」として知られている。この土器は縄文時代以降、平安時代まで製作され時代により地域や量に異なりはあるものの、周辺地域にもたらされている。特徴的な胎土と茶褐色を呈する色調から各地の在地の土器と容易に識別できるため、各時代の土器の流通や社会を考えるうえで重要な指標の一つとされている。

本遺跡付近の弥生時代から中世の旧地形は、北に隣接する鬼虎川遺跡の最近の調査成果によれば、西側の段丘西端は縄文海進に伴う海食崖に起因する崖と考えられる。東側は山麓部につ

ながる。北及び南側は、前述した小河川が本遺跡の北端と南端を画して流れていたことが想定される。

地理的に見れば本遺跡は標高10~35mの山麓部に位置するが、すぐ西に平野部が存在し、平野部に隣接する段丘西端に営まれたといえる。

3. 歴史的環境

本遺跡は、既述のように縄文海進にともなう海食崖のすぐ東に隣接して存在する。鬼虎川遺跡で検出された当時の海岸からは、縄文土器（前期～中期前半）や解体痕のある獣骨などが出土している。

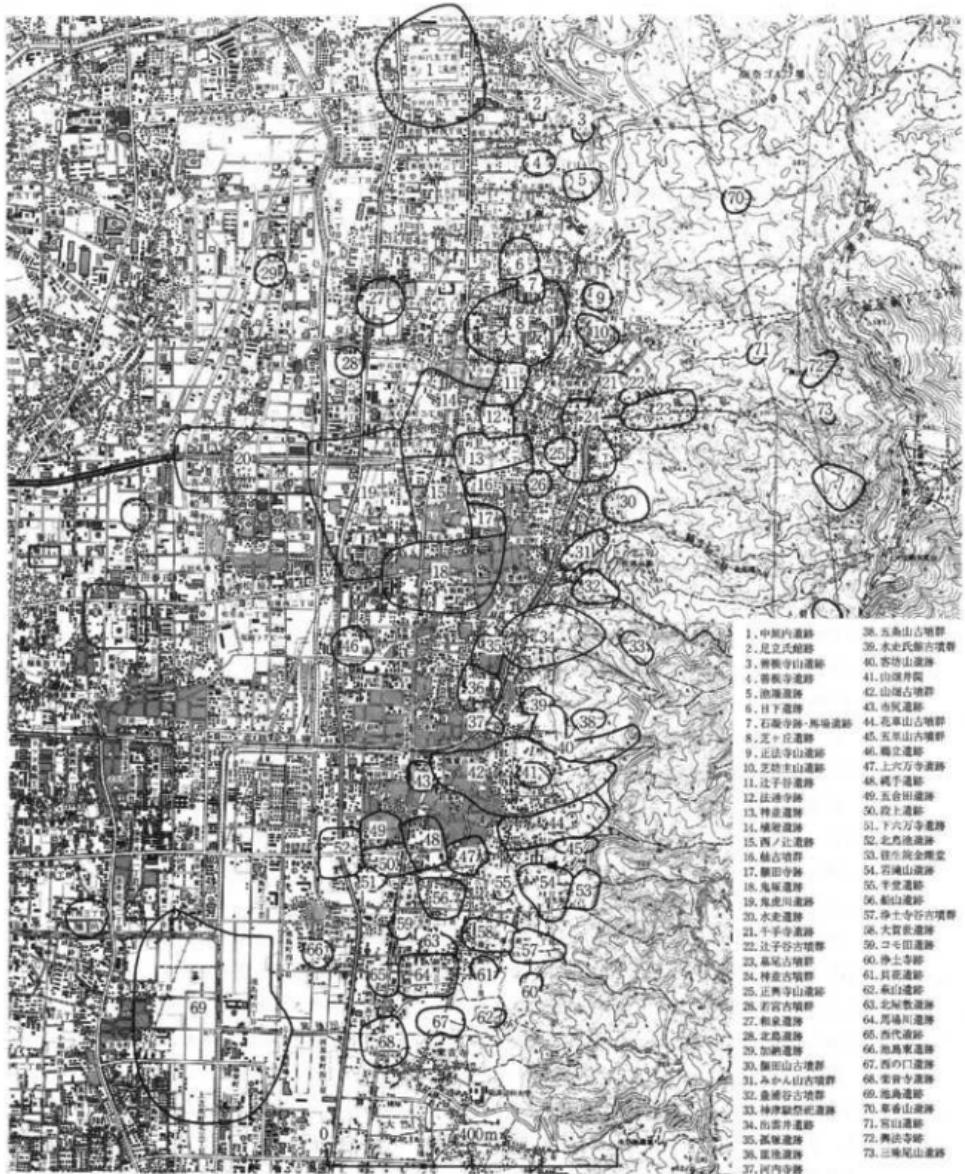
旧石器時代や縄文時代早期にも人々が活動していたことが、北に約500m離れて位置する神並遺跡（旧石器～縄文時代早期）や鬼虎川遺跡の海岸から出土した旧石器により明らかである。特に、神並遺跡からは膨大な量の土器・石器とともに土偶、屋外炉も検出されており、生駒山地を生活圏とする人々の主要拠点と考えられる。本遺跡においても、最近の調査で縄文時代早期の土器が少量出土している。

縄文時代前期～中期前半は、遺構は検出されていないが土器や動植物遺存体が鬼虎川遺跡の海岸から出土しており確実に生活が行われていたことを示している。

縄文時代中期後半～晩期前半の遺跡も、平野部に河内湾から河内潟に変化する水域が広がっていたため山麓部に存在する。中期前半の遺物は鬼虎川遺跡からしか出土していないが、中期後半以降、生駒山地から西下する小河川により南と北を画された段丘上（標高15~25m）にはぼ1ヶ所ずつ集落が存在する。北から南に善根寺（中期末・北3km）日下（後期末～晩期・北2km）芝ヶ丘（後期末～晩期・北1.5km）本遺跡（中期末～晩期）縄手（中期末～晩期・南1.5km）馬場川（中期～晩期・南3km）遺跡である。出土土器から見ると同時に存在したのは中期後半～後期が1~2遺跡、晩期が2~3遺跡程度と考えられる。遺跡の分布状況から見ておそらく、現在の市域の北半と南半で2ないし3集団が同時に居住し時期により居住域を替えたものと考えられる。

縄文時代晩期末から弥生時代初頭の同時期に並存した主な遺跡は、本遺跡の西1kmに水走遺跡と鬼虎川遺跡および北、1kmに位置する植附遺跡がある。水走遺跡は、河内湖縁辺の低湿な地に晩期後半以降、営まれた集落で貝塚と共に少量の弥生土器と多量の縄文土器が同時に使用されている。鬼虎川遺跡は、晩期末のいわゆる長原式土器が少量出土している。植附遺跡は、ごくわずかな縄文土器と多量の現状では河内地方で最も古いものの一つと考えられる畿内第Ⅰ様式古・中段階（以下、煩雑になるため畿内を略す）に属す弥生土器が出土している。

弥生時代中期には、山麓部に本遺跡のほか植附・西ノ辻・縄手、山麓に近い平野部には鬼虎川・水走遺跡が存在する。植附・鬼虎川・西ノ辻の3遺跡は、それぞれ河川・海食崖などの自然地形で画されているが隣接して存在する。出土遺物から見て、弥生時代における遺跡の開始順序は、植附→鬼虎川→西ノ辻遺跡の順であるが、遅くとも第Ⅱ様式の終り頃から第Ⅳ様式まで3遺跡が同時に存在していたことは確実である。一つの集落と見れば東西1.4km、南北1.6km



第1図 調査地周辺遺跡分布図

の大集落が想定される。河内における最大規模の集落としても過言ではない。それぞれの集落は、独自の墓域をもつことから、一定の独自性を保ちながら密接なつながりを保持していたと考えられる。本遺跡は、西ノ辻・鬼虎川遺跡の大集落に隣接して位置し特に第Ⅱ～Ⅲ様式には同時に存在していたことから濃密な関係を保持していたことは想像に難くない。上記3遺跡に本遺跡の範囲を加えれば、東西は変化がないが南北は1.5kmとなり河内湖東辺における最大の規模をもつ大集落群が想定される。河内湖南辺に位置する瓜生堂・山賀遺跡なども群としてみれば同様の規模をもつ。

これらの、大集落を支えた背景は後の時代に上述の遺跡がほとんど全て縮小することから河内湖縁辺の耕作地と背後の生駒山地の存在だけでは考えられない。おそらく、水運など他の富を得る手段が存在したものと考える。鬼虎川遺跡で出土した銅鐸をはじめとする鋳型や金属製品の存在も、この背景を踏まえて理解できると考える。

弥生時代後期は本遺跡と西ノ辻遺跡を残し、鬼虎川遺跡と植附遺跡が廃絶する。この時期は、山麓に近い平野部では本遺跡の南2.5kmに北鳥池遺跡が知られるが、小規模な集落と考えられる。むしろ、主な居住地は馬場川・上六万寺遺跡（南2km）など、より山側に移動しているがいずれも小規模な集落と考えられる。

古墳時代の集落も神並・繩手遺跡など山麓部が中心である。平野部では鬼虎川遺跡で5世紀後半から6世紀にかけての短期間に営まれた集落が知られている。これらの集落は、現状では5世紀後半から営まれるものが多い。しかし、今後調査が進めば後述する背後の古墳の存在などから見て居住地点は替えるものの、山麓部において全期間にわたって存在したいくつかの遺跡が明らかになると思われる。

弥生時代後期から古墳時代にかけての集落の状況変化は、原因の一つに自然環境の変化と共に旧大和川の運ぶ土砂により河内湖の水運が衰退したことが考えられる。

古墳は、南2.5kmに前期末のえの木塚古墳（径約30mの円墳）が、北0.5kmに中期前半の塚山古墳（径約20mの円墳）が知られるほか、市域南半の山麓、標高50～150mの間の各河川沿いに横穴式石室を主体とする後期群集墳が存在する。市域の北半は、後期の単独墳が存在する。しかし群集墳は知られていない。

後期群集墳の大半は、5～10基程度で、古墳の営まれた河川を利用する在地の有力家長の墳墓と考えられる。例外は、南東2.3kmに位置する山畠古墳群で、隣接する客坊・花草山古墳群と合わせ約100基からなる中規模群集墳である。山畠古墳群は調査された古墳中、約5割から馬具の副葬が確認され、大和政権に馬に関する職掌で仕えた氏族の古墳群と考えられる。

終末期の群集墳は、7世紀前半に築造された幕尾古墳群（北東1.5km）がある。単独墳は、標高約360mの山岳部に営まれた切り石造りの石室をもつイノラムキ古墳が存在する。また最近、植附遺跡から5世紀後半から7世紀後半にかけての小型低方墳や小石室を検出した。従前、平野部で検出されていたこの種の古墳が、山麓部においても存在したことが明らかになると同時に、横穴式石室の被葬者との階層差を示していると考えられる。

飛鳥時代から奈良時代にかけては山麓に石凝寺（北東1.5km）・法通寺（北東0.7km）・河内寺（南1.5km）が造営される。石凝寺は行基が建立し、残る2寺は在地豪族の氏寺と想定される。河内寺は、郡名を冠することから郡衙に付属した郡寺の性格もあわせもつ。寺院を建立した氏族が関係すると思われる火葬墓や土器棺墓が、山麓部上位付近で検出されている。現状は、ほとんど単独出土であるが、群集するものに墓尾古墳群隣接地で検出がある。

飛鳥時代は、遺物が西ノ辻遺跡などで出土しているが集落を示す遺構はまだ知られていない。今回、報告する土壙が現在市内で知られる唯一のものである。今後調査が進めば明らかになるであろう。

奈良時代の集落は神並遺跡と本遺跡で最近、検出されている。本遺跡では今回の調査地点の北東約500m（第13次調査・標高28~32m）付近で、奈良時代前期から平安時代初頭までの下級貴族の屋敷跡が明らかにされている。この下級貴族は、出土遺物などから法通寺と関係していたと推定している。

水走遺跡からは遺構は検出されていないが奈良時代、河内湖の縁辺で行なわれた祭祀に用いられたミニチュアの籠や壺など多数が出土し、西ノ辻遺跡でも同種の遺物や国産の小型海獣葡萄鏡が検出されている。これらの遺物は、律令国家が行った祭祀をこの地に居住した人々が忠実に実行したことを見ている。

平安時代中期の集落は西ノ辻遺跡で断片的に知られている以外、明確でないが平安時代後期以降、室町時代の集落は本遺跡や神並・西ノ辻・水走・上六万寺遺跡などで検出されている。

以上のように本遺跡の位置する山麓部は、旧石器時代から現代に至るまで人々が居住した地域と言える。なかでも本遺跡は、山麓を南北に通る東高野街道と河内平野を東西に通る奈良街道の交差地を含む範囲に位置する。両街道は、いつから存在したか明らかでないが東高野街道は沿道に绳文時代以降、各時期の遺跡が存在し早くから利用されたことは間違いない、奈良街道も難波と奈良を結ぶ最短ルートとして遅くとも奈良時代に存在したことはまちがいない。古代よりの交通の要衝に位置する遺跡ということができる。

参考文献

藤井直正・都出比呂志他 1966年『枚岡市史』第3巻資料編 枚岡市史編纂委員会

藤井直正・都出比呂志他 1967年『枚岡市史』第1巻本編 枚岡市史編纂委員会

東大阪市文化財協会 1984『歴る河内の歴史』

他、各遺跡調査報告書

II 調査概要

1. 従来の調査

平成7年現在、鬼塚遺跡の調査は20次に及んでいるがここでは今回報告する調査を実施する以前の調査成果を概観（第2図）したい。

本遺跡は、昭和35年に旧枚岡電報電話局の建設工事が行われた際に、排出された土砂の中から多数の縄文時代晚期土器と弥生時代前期土器が発見されたことで存在が知られた。この地点は標高18m付近で当初、A地点と呼ばれたが現在では第1次調査と称している。^{注1}

同年、今回の調査地の南に隣接する地点で第Ⅱ様式に属す完形の高杯と土師器・須恵器が採集された。当初は小字から古下遺跡と命名されたが、後に本遺跡の一画にあたる地点であることが判明した。

昭和40年には本調査地と道（旧170号線）を隔てて東に隣接する場所（最初の遺物発見地点からは西に約100m・B地点）で枚岡農業共同組合の建設工事が行われ再度多数の縄文晚期土器と土偶1点などが発見された。現在第2次調査と称している。^{注2}

昭和43年には第1次調査地の北に隣接する場所（標高19m付近）で、初めて発掘調査（C地点・現在第3次調査と称す）が実施され、縄文時代晚期土器と弥生時代前期土器が同一包含層中から出土したほか、弥生時代後期の壺棺も検出されている。この調査で畿内における縄文時代から弥生時代に移行する状況を知るうえに、本遺跡が重要な位置を占めることが認識されるに至った。^{注3}

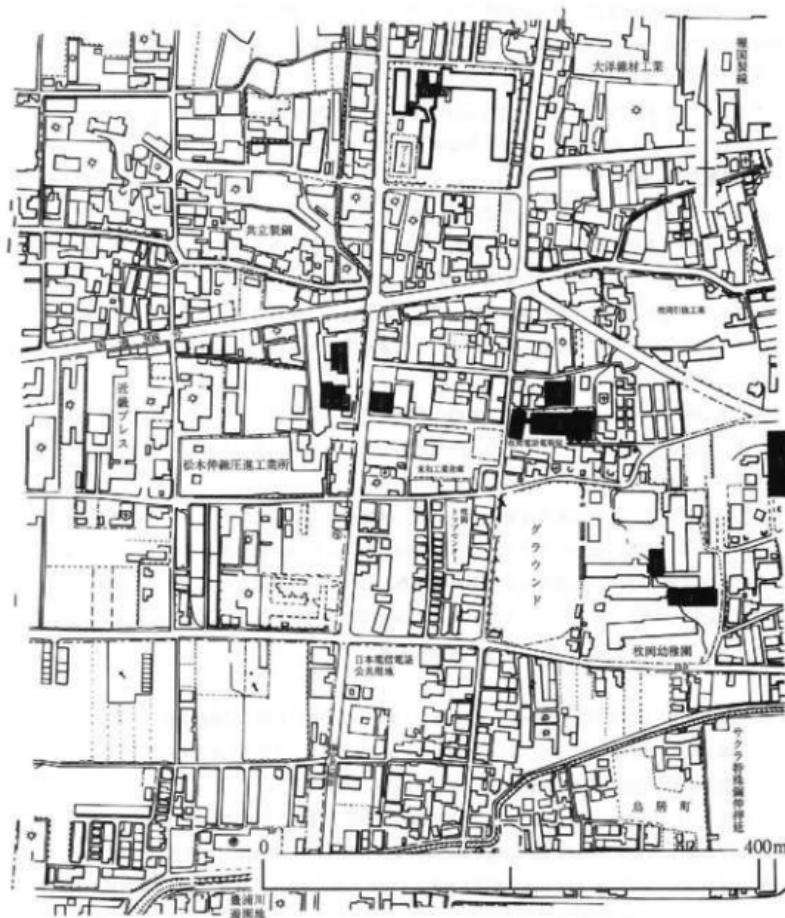
昭和47年、枚岡中学校の校舎改築（第1次調査地の南約200m）にともない第4次発掘調査が実施された。遺構は検出されなかつたが弥生時代後期の土器を中心に縄文時代晚期と弥生時代中期・古墳時代前期等の土器や土偶（1点）が出土した。^{注4}

昭和53年には、第1次調査地の東約200m、標高25m付近で第5次調査が実施され、弥生時代後期の火災にあった堅穴住居1棟をはじめとして弥生時代前期や古墳時代前期の土壙、平安時代の掘立柱建物が検出されている。特に堅穴住居は、建築部材が炭化して遺存しており当時の住居の構造を知るうえに貴重な資料とされる。^{注5}

昭和56年8月、枚岡西小学校校舎増築に伴い行われた第6次調査（第1次の北約300m）では古墳時代中期～後期初頭の溝と、これに伴う須恵器・土師器や滑石製勾玉などが検出されている。縄文時代や弥生時代の遺構・包含層は、認められずこの地点まで分布が及んでいないことが明らかになった。

同年10月、枚岡中学校校舎増築工事にともなって実施された第7次調査（第1次の南約150m）では、古墳時代前期初頭の掘立柱建物2棟（1×1・1×2間）と溝1条が同時期の土壙器とともに検出されている。他に弥生時代後期の土器や奈良から平安時代の須恵器・土師器が認められるが、縄文時代晚期後半や弥生時代前期の土器は出土していない。

以上のように本遺跡は、時代により居住地を替えるものの縄文時代晚期から平安時代に至る



第2図 調査地位置図

複合遺跡であることが判明している。

2. 調査に至る経過

今回の調査地は当初、江戸時代の水車工業の伝統を引く地場産業の一つである伸縮工場が存在していた。この跡地にマンションが建設されることとなり、遺跡が破壊されるため事前調査を実施することとなった。

伸縮工場の基礎で地下が破壊されていることも考えられるため、まず昭和57年4月12日～4

月14日に試掘調査を実施した。試掘調査は、マンション建設予定範囲に4×2mのトレチ5箇所を設けて行った。その結果、1箇所を除いて良好な遺物包含層と遺構の一部を検出したので搅乱部を除き調査を実施することとなった。

本調査は、昭和57年5月24日～11月9日まで行った。調査対象面積は、850m²である。調査は、原因者である正起工業株式会社より委託を受けて財団法人東大阪市文化財協会が担当した。

3. 調査方法・目的

調査は、南北にながいマンション建設予定地のうち試掘によって完全に破壊されていることが確認された中央部を除いて行った。搅乱部をはさんで北側を第Ⅰ調査区、南側を第Ⅱ調査区と仮称した。さらに第Ⅰ調査区北東隅より約6m離れた地点にベンチマークを設定した。このマークから東西南北にそれぞれ5m間隔でラインを設定し、東西ラインを1・2・3、南北ラインをA・B・Cと仮称する地区割を設定した。各地区的名称は、南西隅の交点の名称をもつて例えればB—1と仮称した。

調査地全域に約1mの厚さで存在する盛土を機械によって掘削し、耕土以下を人力で掘り下げたが、伸線工場の基礎などにともなった搅乱がかなりの部分で認められた。そこでまず搅乱部を掘り下げた後、各土層ごとに調査を行った。

今回の調査では、従前の調査成果から縄文時代晚期から弥生時代にかけてと古墳時代中期から後期の遺構・遺物の検出が予想された。ただ残念なことに、調査地付近のデーター（昭和35年に古下遺跡と呼ばれた調査および第2次調査）はいずれ工事にともなう採集品であるため遺構などは明確ではなかった。そこで予想される時期の遺構を明らかにし、調査地点の具体像を明らかにすることを第1の目的として調査を実施した。

注1. 藤井直正・都出比呂志他 1966年『枚岡市史』第3巻資料編 枚岡市史編纂委員会

注2. 藤井直正・都出比呂志他 1966年『枚岡市史』第3巻資料編 枚岡市史編纂委員会

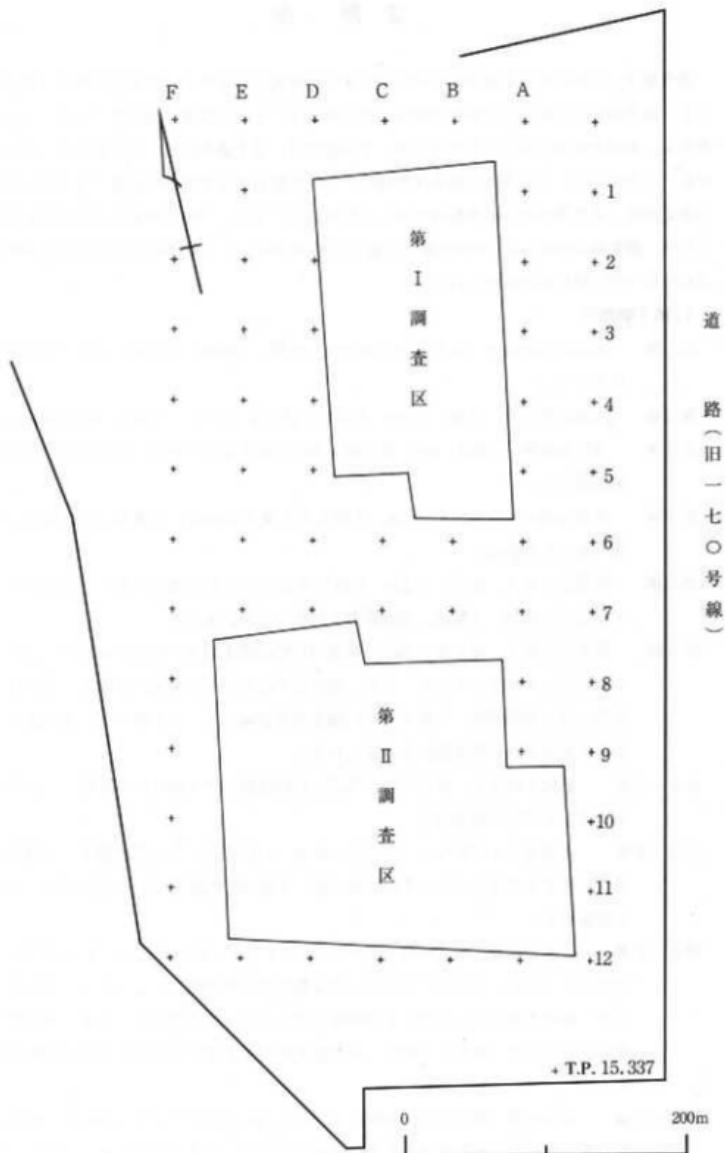
注3. 藤井直正 1969年『縄文晚期土偶の2例』『河内考古学』3号

注4. 久貝健他 1970年『鬼塚遺跡』『河内古代遺跡の研究』大阪府立花園高校地歴部

注5. 半本隆裕 1975年『鬼塚遺跡』『東大阪市遺跡保護調査会年報I』東大阪市遺跡保護調査会

注6. 下村晴文 1978年『鬼塚遺跡発掘調査概要I』『東大阪市埋蔵文化財包蔵地調査概報17』東大阪市教育委員会

半本隆裕 1979年『鬼塚遺跡II・若江遺跡発掘調査報告』『東大阪市埋蔵文化財包蔵地調査概報19』東大阪市教育委員会



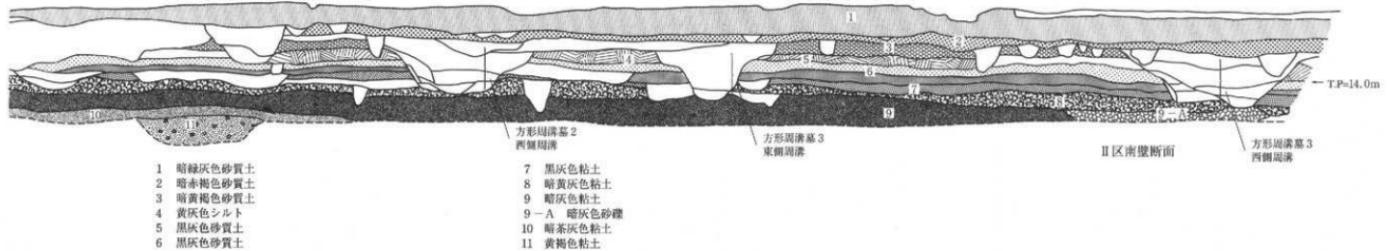
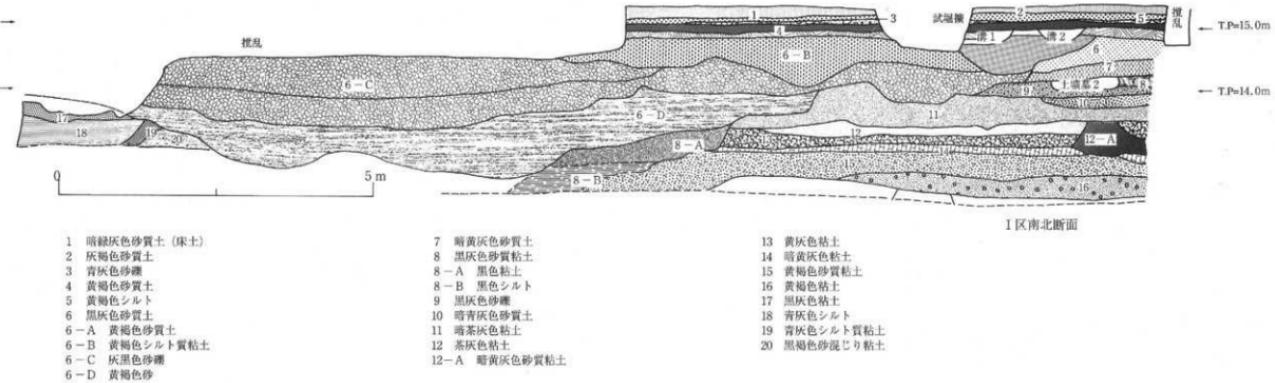
第3図 調査地区割図

III 層序

調査地は、前述の様に生駒山より西に派生する扇状地のゆるやかに傾斜する南側扇側部にある。扇状地化した段丘の土層の堆積は、周知のようにかなり複雑な様相を呈する。今回の調査地も、東西23m南北55mにわたるため、その層序は、第Ⅰ調査区と、第Ⅱ調査区でかなり異なる。したがって、それぞれの調査区の層序について堆積状況を明瞭に把握できた第Ⅰ調査区の南北断面、第Ⅱ調査区の東西断面を中心に模式化して述べ、ついで両者の土層の対応を行ないたい。調査地全域に、約100cmの厚さの盛土と20cmの厚さで工場が建設される直前の耕土が認められたが、層序の記述から省く。

1. 第Ⅰ調査区

- 第1層 暗緑灰色砂質土（床土）層厚約20cm。瓦器、土師器、須恵器、弥生土器などの細片が出土。
- 第2層 灰褐色砂質土。層厚7~12cm。北に行くほど厚くなる。土師器、須恵器出土。
- 第3層 青灰色砂礫。層厚4~8cm。第4層上面の凹地を埋めた状況で存在する。土師器、須恵器出土。
- 第4層 黄褐色砂質土。層厚8~13cm。上面より土壤3を検出。土師器、須恵器および種類不明の魚の骨出土。
- 第5層 黄褐色シルト。層厚8~12cm。北端で厚くなる傾向が認められる。上面より、溝、土壤などを検出。土師器、須恵器および馬の下顎臼歯出土。
- 第6層 黒灰色砂質土。層厚32~40cm。後述の自然流路1で切られているため、2ラインより北でしか検出できなかったが、南に行くほど厚くなる傾向がある。第Ⅱ様式の弥生土器（第53図50）と晩期後半の縄文土器少量出土。この層以下、第15層までは南側を各時期の自然流路により切られる。
- 第6-A層 黄灰色砂質土。最大の厚さ60cm。自然流路1の上部肩口の堆積土。土師器、須恵器および馬の切歯出土。
- 第6-B層 黄褐色シルト質粘土。厚さ32~80cm。自然流路1の上部堆積土。上面は古墳時代に削平を受けたとみえ平坦であるが、下面是凹凸が激しい。弥生土器、土師器、須恵器出土。
- 第6-C層 灰黒色砂礫。最大の厚さ120cm。1ラインより南に存在し、4ライン付近まで検出できたが、それから南については擾乱のため不明。2と3ライン中間より南では、礫の多少により上部と下部が分層できるが、出土遺物などに違いが認められないことから同一層として扱う。第V様式の弥生土器と少量の庄内式・布留式土器出土。
- 第6-D層 黄褐色砂。最大の厚さ100cm。2ライン以南に存在する。南端は、擾乱により不明であるが、残存部分より推定すると4ライン付近と考えられる。第Ⅰ~Ⅳ様



第4・5図 調査地土層断面図

式の弥生土器と、滋賀里Ⅲb式を中心同IV式併行の土器を少量含む晩期縄文土器およびシカの左中足骨など出土。

- 第7層 暗黄灰色砂質土。厚さ16~24cm。南側は、第6—C層で切られている。北に行くほど厚くなる傾向がある。晩期後半縄文土器少量出土。
- 第8層 黒灰色砂質粘土。厚さ16~20cm。1ラインより北に認められる。上面より土壌墓1・2、土壌15を検出。後期縄文土器出土。
- 第8—A層 黒色粘土。最大の厚さ48cm。2ラインより、3ラインまでに存在。後期縄文土器少量と晩期縄文土器、石斧およびサワラの歯、シカの角、イノシシの左側頭骨などが出土。晩期縄文土器は、滋賀里Ⅲb併行に属す。出土遺物と堆積状況からみて、第8および9層の上面より本来切り込んでいた自然流路の堆積土と思われる。
- 第8—B層 黒色シルト。厚さ44cm以上。第8—A層と同じ自然流路内の堆積土。遺物は出土しなかった。
- 第9層 黒灰色砂礫。厚さ24~12cm。3cm以下の礫と砂より成る。1と2ラインの中間付近より北に存在。1ラインより北では上部に第8層が堆積する。南側は自然流路により切られる。遺物は出土しなかった。
- 第10層 暗青灰色砂質土。厚さ20cm。1と2ラインの中間より北に存在。第11層の凹地をおおうように堆積。中期末、後期縄文土器出土。
- 第11層 暗茶灰色粘土。厚さ68~20cm。自然流路に南側を切られるため2と3ラインの中間より北に存在。北に行くほど薄くなる傾向がある。中期末、後期縄文土器出土。
- 第12層 茶灰色粘土。厚さ24~12cm。2ラインより北に第13層の凹地を埋める状態で存在。上面で溝38、土壌48を検出。中期末、後期縄文土器出土。第12—A層（自然流路）が北端で切り込む。
- 第12—A層 暗黄灰色砂質粘土・暗黄灰色粘土。最大の厚さ32cm。1ラインより北に存在。北東方向よりの浅い自然流路内の堆積土と考えられる。
- 第13層 黄灰色粘土。厚さ32~9cm。2と3ラインの中間より北に存在。この層以下、第16層までは生駒山西麓の扇状地化した段丘に存在する通有のいわゆる地山である。
- 第14層 暗黄灰色粘土。厚さ16~8cm。2と3ラインの中間より北に存在。北に行くほど厚くなる傾向が認められる。1ライン付近で第12—A層によって切られる。
- 第15層 黄褐色砂質粘土。厚さ40cm。3ラインより北に存在。
- 第16層 黄褐色粘土。厚さ36cm。2ラインより北に存在。
- 第17層 黑灰色粘土。厚さ20cm以上。自然流路1に切られて4ライン以南に存在。上部は擾乱を受ける。第2調査区まで広く分布する。
- 第18層 青灰色シルト。厚さ40cm以上。4ライン以南に存在。後期縄文土器少量出土。以下、20層まで自然流路の堆積土。
- 第19層 青灰色シルト質粘土。厚さ20cm。第18層と同じ自然流路内の堆積土。堆積状況か

らみて肩口の堆積と思われる。遺物は出土していない。

第20層 黒褐色砂混じり粘土。厚さ28cm以上。第19層に切られているが、この層も自然流路内の堆積土と思われる。

層の形成時期

各層の形成時期は、出土遺物と層の切り合い関係からみて第1層近世以降、第2・第3層飛鳥時代、第4層古墳時代後期前半、第5層古墳時代後期初頭、第6・第7層弥生時代中期初頭（第II様式）第17層縄文時代晚期中頃、第8～第12層縄文時代後期と考えられる。

自然流路の堆積である第6—A・B層は古墳時代後期初頭、第6—C層は弥生時代後期から古墳時代前期（布留式）、第6—D層は弥生時代中期、第8—A・B層縄文時代晚期中頃（滋賀里Ⅲb）第18～20層縄文時代後期と考えられる。

2. 第II調査区

第1層 暗緑灰色砂質土（床土）層厚12～44cm。東に薄く西に厚く存在。調査区西端では、上面が1段下がり棚田であった状況が認められた。陶磁器・瓦器・土師器・須恵器・弥生土器・晚期縄文土器出土。

第2層 暗赤褐色砂質土。層厚8～24cm。東端上面のT.P15.2m、西端はT.P14.8mである。上面で近世以降の耕作に伴うと思われる溝などを検出。土師器・須恵器と少量の弥生土器・晚期縄文土器および馬の臼歯出土。

第3層 暗黄褐色砂質土。層厚16～24cm。上面から自然流路2・3・4が切り込む。また、上面で古墳時代の土壤、ピット、溝、弥生時代の方形周溝墓、木棺墓などの遺構を検出。第I様式新段階の土器と晚期縄文土器少量出土。

第4層 黄灰色シルト。層厚16～20cm。滋賀里Ⅳ式併行の土器を中心にV式が少量混じる晚期縄文土器出土。

第5層 黒灰色砂質土。層厚14～24cm。東端上面のT.P14.6m、西端はT.P14.1mである。南東隅の上面で、土壟を検出。滋賀里Ⅳ式を中心V式併行の土器が少量混じる。晚期縄文土器およびシカ、イノシシの歯など出土。

第6層 黒灰色砂質土（下層）。層厚8～20cm。10ラインより南の調査区南半に存在。青灰色シルトがブロック状に混じることにより上層と区別した。上面で溝33を検出。滋賀里Ⅳ式を中心V式併行の土器が少量混じる。晚期縄文土器およびシカの角など出土。

第7層 黒灰色粘土。層厚12～20cm。上面で溝29、土壤などを検出。後期縄文土器少量と滋賀里Ⅳ式併行の晚期縄文土器およびシカの歯など出土。北に行くほど砂、礫が多く含まれる。

第8層 暗黄灰色粘土。層厚16～32cm。（W-13ラインより西には存在しない。）滋賀里Ⅲb式に属する晚期縄文土器と、少量の後期縄文土器および種類不明の動物遺存体出土。上面よりピット、土壤など検出。

第9層 暗灰色粘土。層厚20~40cm。北に行くほど厚くなる傾向がある。遺物は出土しなかった。上面より第9-A層が切り込む。

第9-A層 暗灰色砂礫。最大層厚20cm。調査区南西隅付近で検出した第9層上面より切り込む小さな自然流路の堆積土。

第10層 暗茶灰色粘土。層厚16~48cm。西に行くほど傾斜して下がるため東西断面では東側でしか認められない。南に行くほど砂分が減少する。出土遺物はない。

第11層 黄褐色粘土。層厚72cm以上。遺物は出土していない。

層の形成時期

各層の形成時期は、出土遺物などからみて第1層近世以降、第2層古墳時代後期前半、第3層弥生時代前期後半（第I様式新段階）、第4~6層繩文時代晚期後半（滋賀里IV~V）、第7層繩文時代晚期後半（滋賀里IV）、第8層繩文時代晚期中頃（滋賀里III b）、第9層繩文時代後期以前と判断した。

3. 第I調査区と第II調査区の層序の対応

2ヶ所の調査区で明らかになった土層のうち、同一層は第I調査区の第17層（以下1~17層と略す。他の層も同様）と第II調査区の第7層（第I調査区と同様に略す）と、1~16層と2~11層の2層と両地区の第1層である。その他の層は、搅乱や自然流路によって切られていることからつながりも明らかにできない。

このため、前記の層の形成時期から各層の対応をみてみたい。1~2・3層は、第II調査区では存在しない。本来存在しないのか、後世に削平されたのかは不明だが、2~1層の出土遺物からみると存在していたとしても遺物の量などは多くないと思われる。1~4層と2~2層は、ほぼ同一時期に形成されたと思われる。

1~5・6・7層は、第II調査区では、存在しないが、この時期の遺構が認められるため、本来これらに対応する層が存在したが、古墳時代に削平された可能性が高い。2~3層は第I調査区に存在しないが、この時期の遺物が出土していないことからみて本来なかった可能性が高い。

2~4・5・6・8層も第I調査区に認められないが、2~8層上面にこの時期の土壤墓が、検出されたことから、1~7層と1~8層の間に存在したと考えられる。しかし、1~17層で遺物が出土していないことや、第I調査区全体のこの時期の出土遺物をみると、遺物包含の多少は別として2~7・8層に対応する層の存在は想定できるが、2~4~6層は本来より存在していないかったと考えられる。

1~8~11層は、第II調査区では認められないが、出土遺物からみて2~8と2~9層の間に存在したと考えられる。しかし、第II調査区では、繩文時代中期末の土器が出土しておらず、後期の土器も少量であることから、これらの層は、主として第I調査区に存在したものと考えられる。1~13~15層は、2~9・10層に対応する地山（段丘）の上部層と思われる。

IV 遺構

今回の調査では、縄文時代の後期から近代にいたる各時期の遺構を検出した。溜池など近代の遺構を除き検出した遺構の内訳は、土壙48基、ピット87個、溝58条（方形周溝墓の周溝3条を含む）落ち込み2ヵ所、木棺墓1基、土壙墓2基である。

ここでは各時期の主要な遺構について記す。個々の遺構に関しては、別載の遺構一覧表（表1）を参照されたい。

1. 縄文時代の遺構

この時代の遺構面を5面確認したので、縄文I～Vとして古い時期（V）から順に記述する。

縄文時代後期（縄文V）の遺構（茶灰色粘土上面遺構）

第I調査区の北東隅近くで溝1条（溝38）、土壙1基（土壙48）を検出した。

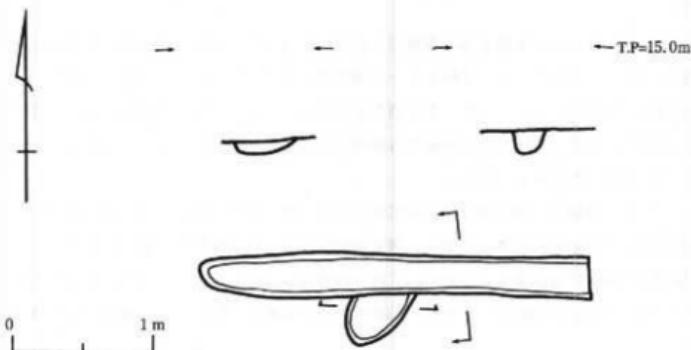
溝38

幅24cm、深さ16cmの溝で断面形はU字形を呈し、東から西に走る溝である。長さ1.4mを検出した。東端は調査区外に続くが、確認した東端と西端の底面の比高は、3.4cmである。堆積土は、淡灰青色砂質土で遺物は出土しなかった。

土壙48

溝38によって北端を切られる。平面形は長軸40cm以上、短軸38cmの楕円である。深さ8cmで、断面形は浅い皿状を呈する。堆積土は暗灰黑色粘土である。遺物は出土しなかった。

両遺構とも遺物が出土しなかった。しかし遺構面である茶灰色粘土層と、遺構をおおう暗茶灰色粘土層が、縄文時代後期前半の包含層であるため、この時期に属すと考えられる。切合いが認められたことから両者の遺構に時間差が存在する。この時期の遺構と遺物は、従来、鬼塚遺跡で知られておらず、本遺跡の開始を考える上に重要である。当時の集落は、包含層の堆積状況からみて今回の調査地の北から北東にかけて存在したと推定される。



第6図 縄文時代後期遺構（縄文V）平面図

縄文時代晩期（縄文IV～I）の遺構

この時期の遺構は、第Ⅰ調査区で、遺構面にして1面、第Ⅱ調査区で4面を検出した。上層の遺構面より、縄文I～IVとし、記述は、古い時期から順（IV～I）に行なう。

縄文IV（第Ⅰ調査区・黒灰色砂質粘土、第Ⅱ調査区暗黄灰色粘土上面遺構）

第Ⅰ調査区で、土壙墓2基と土壙1基を検出した。第Ⅱ調査区の遺構は、暗灰色粘土上面で検出したが、断面観察により遺構面が、一層上の暗黄灰色粘土上面であることが判明した。遺構は、ピット44個、土壙19基、小溝2条、落ち込み2ヶ所である。

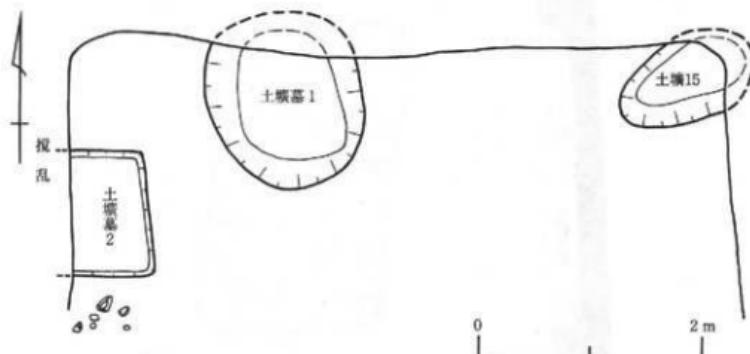
土壙墓1

第Ⅰ調査区北端のはば中央で確認した平面形は長軸150cm（推定、検出した長さ120m）短軸140cmの梢円形を呈する。北端は側溝によって破壊される。深さは32cmで埋土は、黒灰色粘土である。断面形は浅い皿状を呈する。内部より成人6人、小人1人を含む8個体以上の一一部焼けた骨や歯を含む人骨を検出した。人骨の埋葬状況は、8個体分の下顎骨を土壙の底縁にそって置き、その内部に長管骨を積み重ねていた。土壙の中央よりやや北に長管骨の直上に人頭大の角蝶を置いていた。焼骨は、これらの骨にかぶされた状態で検出した。なお、焼骨の中には、生焼けの骨や、歯の一部も含まれていた。埋土内より晩期縄文土器19点と焼土、サヌカイトフレーク各1点が出土した。

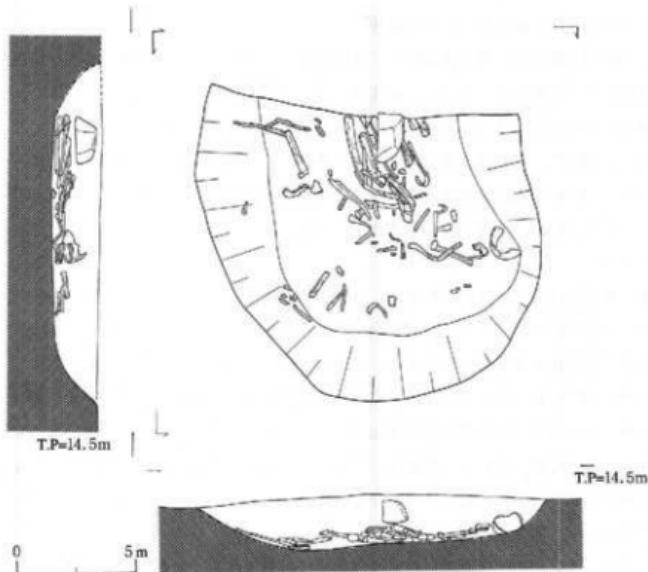
土器は、丸底の底部と肩部に稜をもつ体部が含まれる。これらの土器はすべて少破片で、複数の個体と考えられることから供獻されたのではなく、埋土に本来、包含されていたと考えられる。土壙墓の底面には、焼けた痕跡が認められない。したがって人骨は、土壙内ではなく別の場所で焼かれて土壙内に移されたことはまちがいない。

土壙墓2

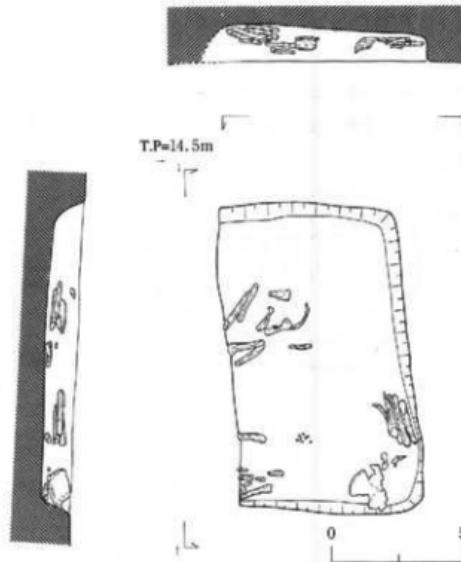
土壙墓1より南西に1mほど離れた位置で検出された。西側部分は搅乱により失われているが、平面形は方形で検出時の規模は1辺110cmと1辺70cm以上である。深さ30cm、埋土は黒褐



第7図 縄文時代晩期遺構（縄文IV）土壙墓1・2平面図



第8図 縄文時代晩期遺構（縄文IV）土壙墓1検出状況実測図



第9図 縄文時代晩期遺構（縄文IV）土壙墓2検出状況実測図

色粘土である。断面形は逆台形を呈する。内部に大人2人、小人1人以上の焼骨を含む人骨が葬られていた。人骨の埋葬状況は、北東と南東の隅に頭骨を置き、その間に長管骨をまとめて積み重ねていた。焼骨は、これらの骨にかぶされたり、埋土内に混じった状態で検出した。

土壙墓1では、自然礫を骨の上に置いていたが、土壙墓2では西側が破壊されているため不明瞭とはいえる、そのような状況は認められなかった。ただ土壙墓のすぐ南側で拳大から小児の頭大の自然礫6個をかたまたった状況で検出した。これらの自然礫は人為的に置かれた可能性が高く、土壙墓となんらかの関係をもつ（配石遺構？）と考えられる。

埋土内より晩期縄文土器片4点が出土した。これらの土器は出土状況からみて埋土に本来含まれていたものである。土壙墓の底面は、焼けた跡はなかった。

土壙墓1・2のつくられた時期は、遺構が縄文時代後期の包含層を切ること、土壙墓内より晩期縄文土器が出土していること、同一遺構面上で弥生時代中期初頭（第II様式）の土壙を検出していること、遺構面を弥生時代中期初頭の包含層がおおうことから、大きくみれば、縄文時代晩期から弥生時代中期初頭までの間である。しかし時間幅が広すぎる。土壙墓内から丸底の底部を含む晩期縄文土器しか出土していない点を重視し時期を限定し、滋賀里Ⅲb～IV式併行期に當まれたとしておきたい。この種の焼骨を含む洗骨再葬墓の類例から見ても矛盾がない。第II調査区との関係からすれば、縄文IVか縄文IIIの遺構のどちらかと同一時期と考えられるが、いずれに属すかは明らかでない。ここでは一応、住居址と思われるピットなど多数の遺構を検出した縄文IV（滋賀里Ⅲb式併行）の時期としておく。土壙墓1と土壙墓2の先後関係は明らかにできなかった。他に、1基の土壙14を検出したが遺物は出土していない。

第I調査区では第II調査区に比べて擾乱および自然流路からの晩期縄文土器の出土量が極端に少ない。縄文時代晩期の包含層は基本的にあまり厚くなく、土器量も少なかったためと考えられる。おそらく、この時期の包含層は、弥生時代中期初頭に削平されたのであろう。

ピット48～91

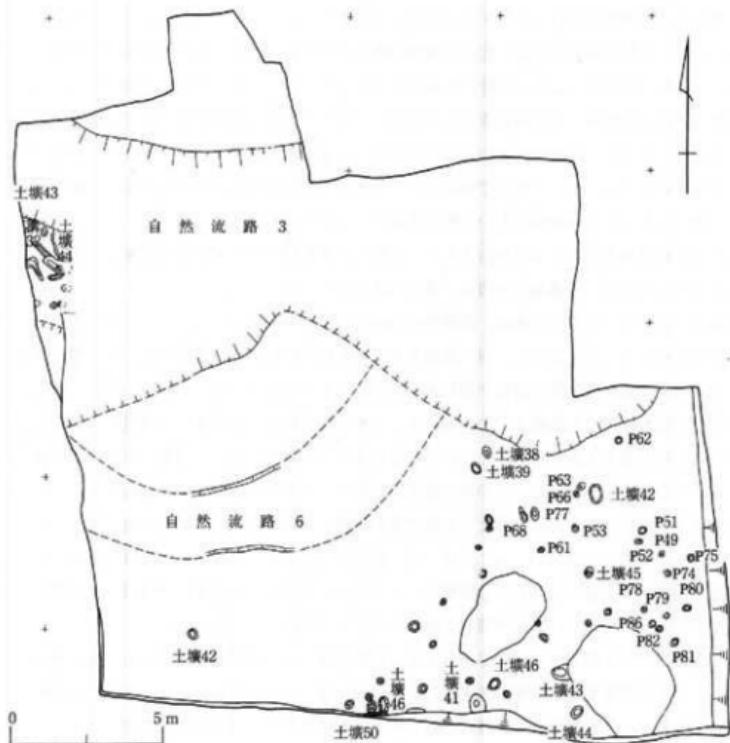
大部分、第2調査区の南東部に集中して認められた。少数は北西部にも存在した。平面形は梢円ないし円形を呈し、径は20cm前後である。深さは検出面から10～20cm前後であった。断面形は、ほぼ直立のU字形を呈する。堆積土は、灰黒色粘土が多く、ピット68のように暗灰色砂質土など少し異なる堆積土も認められたが、いずれも単一の土層である。ピット65・69などからは滋賀里IVに属す土器や焼土、サヌカイト製のフレーク片などが少量出土している。

溝36・37

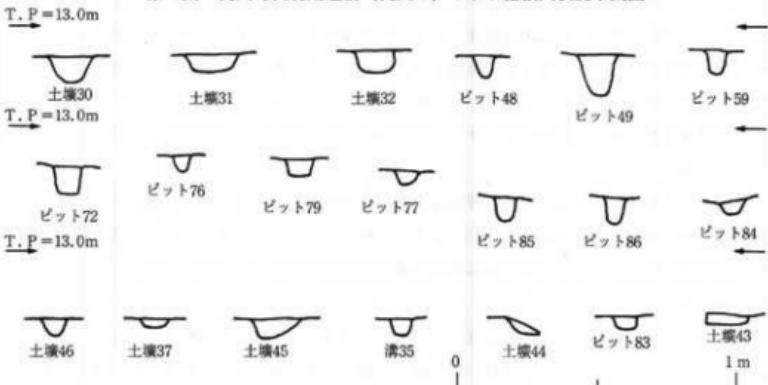
北西部で検出された小溝である。溝36は、北西から南東に走り南東側で土壙45に切られる。幅16cm・深さ16cmで、断面形はU字形を呈する。埋土は暗灰黄色砂質土である。縄文時代晩期後半の土器が出土している。溝は他に溝37が溝36の南約0.4mの所で検出された。

土壙30～47

ピットが検出された区域の中に存在した。平面形はすべて梢円形で長軸30～40cm前後、短軸24～30cm前後のものが多い。深さは、検出面から20cm前後のもの多い。断面形は、浅い皿状・



第10図 縄文時代晩期造構（縄文IV）ピット他検出状況平面図



第11図 縄文時代晩期造構（縄文IV）ピット・土壌断面実測図

逆台形・尖端がにぶいV字形などがみられる。埋土はすべて1層で灰黑色粘土が多いが、土壤43のように灰黑色砂質土など異なる土も認められる。一部の土壤からは、滋賀里IV式に併行する土器・石器・炭化物などが出土している。土壤34では、深鉢の破片とともに炭化したイチイガシの実、土壤45では石皿が出土している。

これらの遺構は、住居址に関連する遺構と思われる。ピットは、竪穴住居の柱穴、土壤34をはじめとする土壤の一部はゴミの処理穴と考えたい。第II調査区内の南東部と北西部に集中してみられることから、ほぼ同時期に少なくとも2棟以上の住居址が存在したことになる。

縄文III（黒灰色粘土上面遺構）

第II調査区のみに存在した。遺構は溝2条および土壤10基である。溝は、Cラインより東、9ラインより南で検出した。土壤は、調査区全域に散在して認められた。

溝34・35

溝35は南より北に走る。南端は調査区外に延び、北端は自然流路および搅乱により破壊される。確認した長さは10mで、幅22cm、深さ16cmである。断面形は浅い皿状を呈する。堆積土は暗黒灰色粘土である。堆積土中より、滋賀里IV式に併行する土器が多数出土した。（堆積土が単一であり、出土遺物からみても、短期間機能した溝と考えられる。）他に溝35の北端付近、東から西に走って切る溝34を1条検出した。

土壤20~29

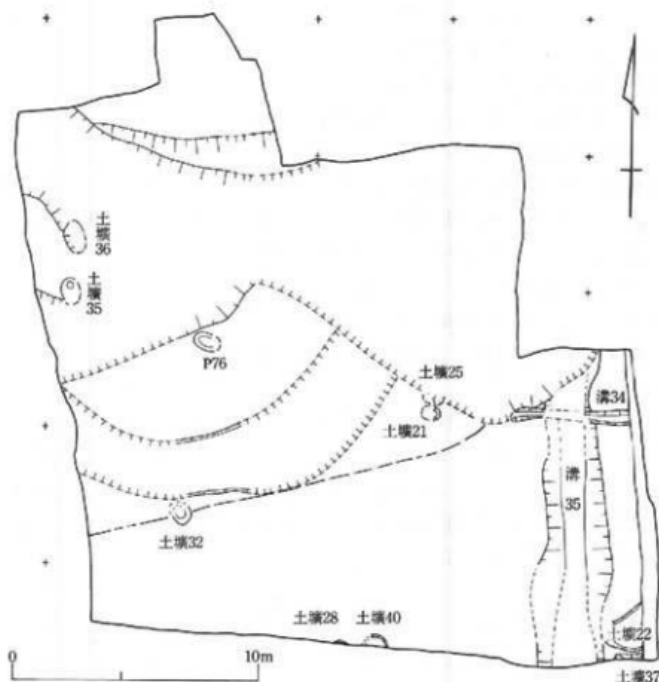
この遺構面で検出した土壤は埋土とベースの土の区別が困難であった。したがって、搅乱の断面や、土層観察用の壁面にあらわれたものしか検出できなかった。断面観察によれば検出した土壤より極端に多くなるとは考えられない。なお、後述するように掘り込まれた深さが検出した土壤すべて20cm前後であるため、縄文IVの遺構面には及んでいないと考える。平面形は、楕円形で、短軸は40~60cm前後のものが多い。深さは20cm前後で、断面形は、浅い皿状ないし逆台形を呈する。堆積土は、土壤27に2層（上より黒褐色粘土、暗灰色粘土）認められるだけで、他は単一の土である。堆積土は、遺構面の土層である黒灰色粘土とほとんど区別がつかず、断面観察によってわずかに色調が褐色味をおび、砂分が多いことが判明したが、平面からの識別は困難であった。この面の最大の土壤22（短軸140cm、長軸180cm以上、深さ12cm）からは、滋賀里IV式に併行する土器の他に、磨製石斧や大量の焼土塊などが出土した。また獸骨や焼土の入った土壤25・28なども認められた。土器は、土壤22を除いて細片が多かった。これらの土壤の性格は、遺物の出土状況からみて、ゴミの処理穴などが考えられる。

縄文II（黒灰色砂質土下層上面遺構）

第II調査区の南東隅で検出した溝33が唯一である。

溝33

南より北に向かい途中で方向をやや北西に変えて掘られる。南端は調査区外に延び、北東端は、搅乱と近・現代のため池によって破壊されている。また東肩の一部も方形周溝墓2の西側周溝（溝17）によって切られる。検出した長さは5.6mである。最大幅240cm、最大深さ20cmで



第12図 縄文時代晩期造構（縄文III）溝・土壤検出状況平面図

南端の底面より北東端の底面のほうが5cm程低く南より北に向かって流れていったことが知られる。断面形は逆台形を呈する。堆積土は暗褐色砂質土1層である。溝内より、滋賀里IVおよびV式に併行する土器多数と打製石斧・獸骨などが出土した。溝の堆積土が一層であり、さほど深く掘られていないことからみても、短期間だけ機能していたと思われる。この面での造構の中心は溝の走る方向から見て、調査区の南に存在するものと考えられる。

縄文I（黒灰色砂質土上面造構）

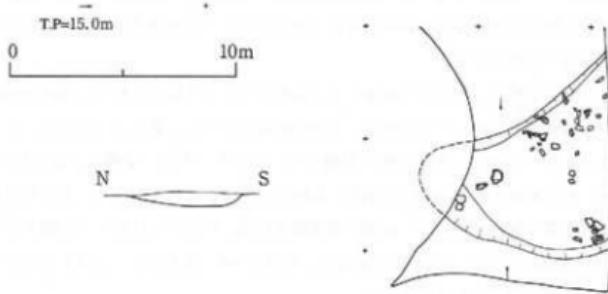
第II調査区の南東隅で3基の土壤（17～19）を検出した。

土壤17～19

土壤17は平面形が隅丸三角形を呈し、最大長辺40cm最小短辺36cmで最大の深さは7cmである。断面形は、逆台形をなす。堆積土は、黒灰色砂質粘土である。少量の縄文時代晩期土器細片が出土した。土壤17の南6.5mほどはなれて、土壤18、19を検出した。この面の造構は、検出状況からみて縄文II・IIIの造構と同じく調査区の南に存在すると考えられる。造構の時期は造構内出土の遺物では明らかにできないが、層序よりみて滋賀里V式の早い時期に併行すると思われる。



第14図 繩文時代晩期遺構（縄文II）溝33検出状況平面図



第13図 繩文時代晩期遺構（縄文III）土壙22検出状況平面図

2. 弥生時代の遺構（黒褐色砂礫・黄褐色砂質土上面遺構）

この時期の遺構は、第Ⅰ調査区で縄文IVの遺構面と同一面で検出された土壙1基（土壙14）と、第Ⅱ調査区で古墳時代遺構と同一遺構面で検出された土壙1基（土壙16）、溝1条（溝35）方形周溝墓3基（方形周溝墓1・2・3）である。方形周溝墓1に伴う木棺1基が検出された。

土壙14

土壙14は、第Ⅰ調査区の北東の隅近くで検出された。平面形は、梢円形で最大長軸64cm、最大短軸44cm、深さ8cmの規模をもつ、埋土は、暗黒褐色粘土である。埋土内より、底部に穿孔をもつ第Ⅱ様式に属す壺1点（図52—42）が出土した。

この土壙の北約0.5mの所に土壙15を検出したが、遺物が出土しなかったため、前述のように縄文IVに属すとして説明した。土壙14は、底部穿孔の壺が出土したことから、同時期の第Ⅱ調査区で検出された方形周溝墓と何らかの関連が考えられる。

溝32

第Ⅱ調査区の北端中央よりやや西よりの地点で検出した。東から西に走る小溝である。検出した長さは、2.7mで、両端とも調査区外に延びる。最大幅36cm、最大深さ8cmで、堆積土は、暗灰色砂礫である。堆積土中より様式不明の弥生土器が1点出土した。他の遺構からみて第Ⅱ～第Ⅲ様式に属するものであろう、東半分を土壙16によって切られる。

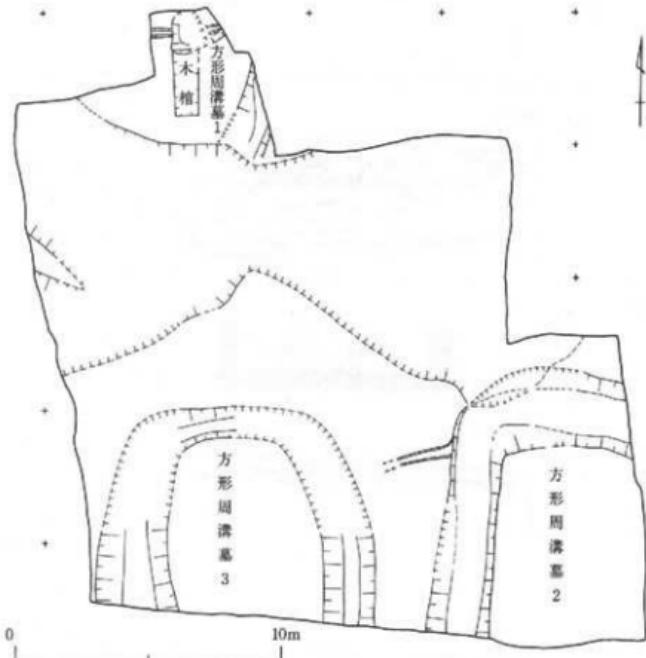
方形周溝墓1・2・3

方形周溝墓1

第Ⅱ調査区北辺の中央よりやや西よりで方形周溝墓1を検出した。北側は、調査区外に延び、南側は、後述する自然流路3によって切られているため、形状・規模は不明であるが、東辺の周溝の一部と主体部の一つと考えられる木棺1基を検出した。検出面で最大長1.2mを検出した周溝は、南北に長く東側にわずかに弯曲する弧状形を呈する。最大幅1.6m最大深さ0.6mの規模をもつ。堆積土は、上層より暗灰色砂質土、黒灰色砂質土、暗黃灰色砂質土の3層に分かれれる。暗灰色砂質土層の上面より溝29が切り込む。堆積土中より第Ⅲ様式に属する土器のほか、縄文時代晚期土器などが出土した。

主体部と考えられる木棺は、検出した周溝より2m離れた位置で検出された。西辺の周溝が調査区外に存在し検出されなかったことから、方形周溝墓の中央より東に寄った位置に作られているのは確実である。墓壙は、南北方向に長軸をもつ長方形である。墓壙は、最大長さ250cm、最大幅94cm、検出面からの深さ54cmである。底面は、わずかに凹凸があり、南半分が北半分に比べて10cmほど深く掘られている。墓壙の東西断面形は、底面が二段掘りの形態をもち、東側半分が平坦な西側に比べて一段深く約25cmほど半円形に掘り込まれる。このような形をとるのは、後述する木棺の組立て方と関連する。

掘り方内の埋土は、上より第1層（黄灰色砂質土）、第2層（暗黃灰色砂質土、黄褐色砂質土、黄灰色シルトのブロック含む）第3層（暗灰黄色粘土、黄褐色砂質土、黄灰色シルトのブ



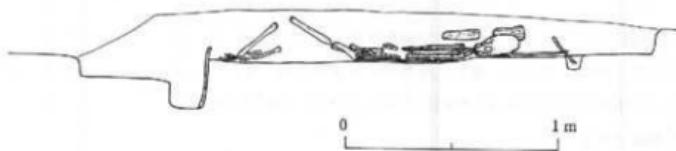
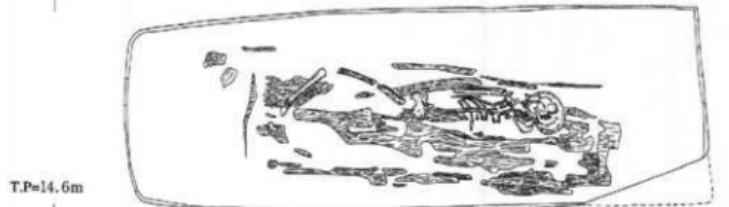
第15図 弥生時代遺構（中期）方形周溝墓他検出状況平面図

ロック含む）の3層に分けられる。

埋土は、いざれも遺構面ないしその下層の土であり墓壙を掘った際の排土を埋土としている。埋土の状況は、最初に第3層が墓壙の北辺から南へ約40cmを除く範囲に、最大厚さ18cmで埋められる。ついで第3層の上に、第2層が墓壙内全体に最大厚さ24cmで上面を平坦にそろえて埋められる。上面の高さは、北端に比して南端が2cm低く、南に向かって少し傾斜する。この面に木棺の底板が置かれる。木棺を内に組立てた後、最後に残った空間に第1層の黄灰色砂質土が埋められたことを示している。埋土内からは、縄文時代晚期土器、土偶と第Ⅲ様式に属す弥生土器などが出土したが、縄文土器は、ベースとなった包含層からの混入で、弥生土器も小破片であるため副葬品の可能性は少ないと考える。

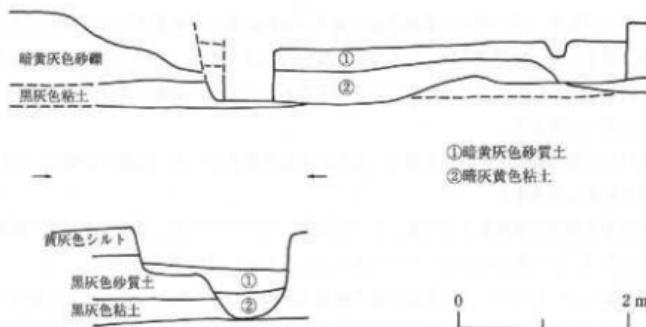
木棺

木棺の各部材は、一応遺存していたが腐朽が激しく原形を保つものはなかった。検出した各部板の厚さは1cm以下である。蓋は、被葬者の左半身を覆う形で検出され、縁辺が腐植した後、土圧によって木棺内部に落ち込んだ状況を示していた。規模は不明であるが、残存部よりみて一枚板と推測される。



第16図 弥生時代造構（中期）木棺墓検出状況実測図

T.P=13.0m



第17図 弥生時代遺構（中期）木棺墓墓壙内土層断面図

側板は、断続して西側が全長の約1/2、東側が約1/3ほど遺存していたが、上半部は消失しわざかに下半部の一部のみが認められた。大部分土圧によって内や外側に動いており、原位置を保っているのは東側が、被葬者の頭部付近、西側は腰部付近にかぎられる。東側側板は、底板の外縁より内側5cmのところに底板と接して長さ65cmほど検出された。西側側板のうち南側小口板付近に遺存したものは、土圧により外側に移動しているが、南端部は小口板より2cmほど南に突出して検出された。この状況からみて、側板は本来長さ185cm前後の一枚板で底板の上に置かれ、側端部は小口板より外側に突き出していたと思われる。

小口板は、南側で幅41cm、高さ29cm、北側で幅27cm、高さ16cm遺存していた。他の部材と同じく旧形は失われていたが、遺存状況は最も良かった。木口板の下端は、検出時で底板より南側で23cm、北側で4cm下に埋め込まれていた。当初は、いわゆる木口穴をもつと考えて調査を進めたが、墓壙を立剗った結果、木口穴ではなく木口板は、埋土によってさえられたものと判明した。残りが良かった検出状況からみて小口板は、南北とも幅46cm前後の一枚板と思われる。高さは不明であるが、南側のものが北側にくらべて、20cm前後高かったことは確実である。底板は、被葬者の上半身の下にあたる部分で比較的よく残っていたが、下半身側ではほとんど検出できず、わずかに右足の甲の付近に一部遺存しているのが認められた。

底板は、原位置を動いていないと考えられる。底板の平面の大きさは、長さ172cmで、幅65cm前後であろう。

木棺の主軸はN 5°Eで墓壙の主軸からは、6°東へずれている。被葬者は身長160cm以下、20代後半の女性で埋葬姿勢は仰臥屈葬であった。遺体は、頭部をほぼ北に向かって検出時で頭部と北側小口板との間には24cm、足と南側小口との間は8cmあけて収められていた。

これらのことから木棺の埋葬の順序を復元すれば以下のように想定される。

(1) 方形周溝墓の中心より東にはずれたマウンド上（既に古墳時代中期後に削平）より、

墓壙を掘る。この墓壙は、長辺にそって底面の東側半分を一段低く断面半円形に掘り下げる二段掘りである。

- (2) 南側小口板を一段下がった墓壙底面に置き、周囲に第3層を埋めてほぼ垂直に立てる。
- (3) 第2層を、第3層で埋め残した墓壙の北端付近にまず埋め、その上に北側小口板を置く。同じ土で木口板を立てるためその下端を埋め、ついで、墓壙全体に上面を平坦にそろえるように埋める。
- (4) 木口板の間に幅の広い底板を置く。底板の上に側板を立てる。側板の両端は、木口板よりも外側に突き出る。
- (5) 被葬者を棺内に収め蓋をした後、第3層によって埋められる。墓壙の底面を二段掘りにしたのは、木口板を立てるための工夫と考えられる。

上部が消失しているため、第3層は、(5)の段階で埋められると想定したが、(4)の段階で埋められ蓋の上から他の土がかぶせられた可能性もある。また、(3)(4)は、一部逆転、北側木口は底板を置いていた後、埋めた可能性も考えられる。

方形周溝墓2

第II調査区、南東隅で検出した。方形周溝墓1からは約12m南東に離れた位置に存在する。平面形は、東側と南側の周溝が調査区の外に存在するため不明確ながら、北側周溝のまわり方からみて、南北に長い長方形（東西4.8m以上・南北6.7m以上）と思われる。主体部および墳丘の盛土は、削平されて存在しなかった。

検出した周溝の規模は、北側周溝が長さ8.4m、最大幅2.68m、最大の深さ0.6m、西側周溝は長さ6.4m、最大幅2.4m、最大の深さ0.9mである。北側と西側周溝南端の底面の比高は、西側が48cm低い。溝の底は、平坦であることと粘土層に掘り込まれていることから雨水などは西側と南側周溝を中心に溜まつたものと考えられる。

周溝の断面形は、逆台形を呈する。北側周溝の堆積土は、第1層暗茶褐色砂質土、第2層茶褐色砂質土、第3層暗青灰色砂礫、第4層黒灰色砂質土（ブロック状に黄灰色シルト、黄褐色砂質土が少量混じる）第5層黒灰色砂質土（第4層に同じ）第6層黒褐色砂質土（黄灰色シルト、黄褐色砂質土ブロック状に混じる）である。

第1層を除く他の層は、堆積状況からみて両側の肩口からの流入土と考えられる。肩口からの流入土の厚さは、8~12cmとうすく、あまり堆積が進行しないうちに第1層がまとめて堆積したものと考えられる。中央よりやや東に寄った位置の第4層上面で、胴部下半に1孔の穿孔をもつ第II様式に属する壺が横おしの状態で1点出土した。この壺は、供獻土器と考えられるので、第4層は、周溝の掘削時の残土の可能性がある。

西側周溝の堆積土は、北側に比して複雑である。第1層黒灰色粘土、第2層暗灰色シルト、第3層黒灰色粘土、第4層暗灰色砂質土、第5層暗黃褐色砂質土、第6層暗灰色砂質土、第7層暗褐色砂質土の順に堆積している。層厚は、第7層が一番厚く最大52cmである。断面観察によつて第1~第5層は、徐々に堆積したのち、一度掘り直された後に第6・第7層が堆積した

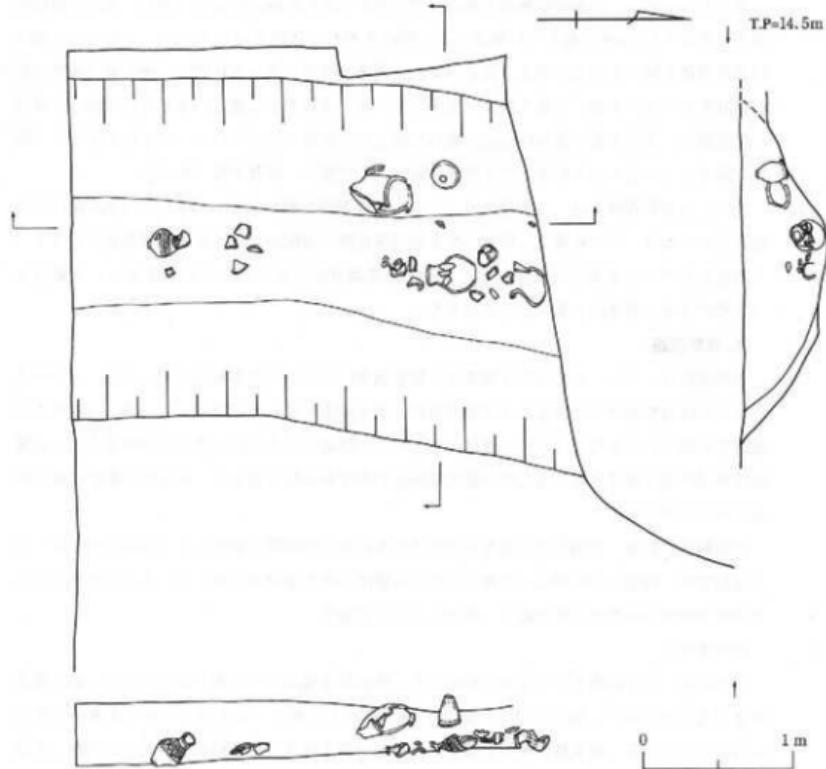
土の可能性が考えられる。南壁近くで第7層より、壺の下半部が1点出土した。供獻土器かどうかは不明である。

周溝は縄文時代晚期、弥生時代前期の包含層を切るために、これらの時期の遺物も出土したが、供獻土器よりみて方形周溝墓は第II様式に属す時期に營まれたと考えられる。

方形周溝墓3

方形周溝墓2の西約2mに隣接して存在する。南側周溝は、調査区外に延び北側と東・西側周溝と結ぶコーナー付近は、搅乱によって破壊される。全体の平面形は、検出できなかったが、周溝のめぐり方からみて南北に長い隅丸長方形（東西5.7m以上・南北7m以上）と考えられる。主体部および墳丘は削平されて存在しなかった。

検出した周溝の規模は、東側が長さ3.68m、最大幅2.0m、最大深さ0.92m、西側で長さ3.36m、最大幅3.2m、最大深さ0.8mである。北側周溝は、長さ2.4m最大幅1.6m最大深さ0.4mである。周溝の断面形は西と北側が逆台形、東側が2段掘りのU字形を呈する。周溝の



第18図 弥生時代遺構（中期）方形周溝墓3南側周溝供獻土器検出状況実測図

底は平坦であり、東側に比べて西側の底面は40cm低い。東側周溝の堆積土は、下より第1層暗黄褐色砂質土、第2層暗青灰色砂質土、第3層黄灰色砂質土である。第1・2層は、最大の層厚が16cmと8cmである。第3層は、最大の層厚80cmであり、第1・2層が薄く堆積した後、一挙に第3層が厚く堆積している。

西側周溝の堆積土は、下より第1層黄灰色シルト、第2層黒褐色砂質土、第3層暗褐色砂質粘土、第4層褐色シルト、第5層暗褐色砂質土、第6層褐色シルト、第7層暗褐色砂質土、第8層黄褐色砂質土である。方形周溝墓2と同様に西側周溝の土層の堆積は複雑である。第7層は、堆積土中で一番厚く、最大32cmの層厚をもつ。断面観察の結果、第4層堆積後に一度掘り直された後、第5層以下が堆積したものと考えられる。

第Ⅲ様式に属す供獻土器が、西側周溝より出土した。第5層をベースにして横倒しになつた状況で壺5個（底部付近に穿孔をもつもの4個）が認められた。壺5個のうち本地産の土器は1個で他は他地域産である。

穿孔をもつ壺は、3個が口縁部を南に向けて北から南に直線上に並んで倒れ、残り1個は南端の土器より1.2m南に離れて口縁部を北に向けて倒れた状況を示していた。これらの土器は、ほぼ原位置を保っていると考えられる。また、周溝の西肩に乗った状態で、壺2個（底部付近に穿孔をもつもの1個）が第7層より出土している。穿孔をもつ壺は口縁部を北に向けて横倒しの状態で、もう1個の壺は16cm北に離れて倒立した状態で検出された。出土状況よりみて肩口に置かれていたものが転落した可能性が高い。この壺も、供獻土器であろう。

検出した方形周溝墓は、3基である。しかし、調査区の他の場所が、攪乱と自然流路により破壊されており、その範囲と、群集する方形周溝墓群の通例からみて本来は調査地にもう1～2基存在したことも考えられる。したがって第Ⅱ調査区に存在した方形周溝墓は、3基以上（Ⅱ様式1基、Ⅲ様式2基）としておきたい。

3. 自然流路

自然流路は、大きくみれば第Ⅰ調査区と第Ⅱ調査区の大半に及ぶ範囲で検出した。いいかえれば今回は自然流路とその北および南の肩の一画を調査したことになる。これは、一回の水の流れで形成されたものではない。層序のところで一部述べたように、縄文後期以前より、古墳時代後期の間に堆積を繰り返しつつ最大幅50mの中である時は幅広に、ある時は幅狭に流れ形成されたものである。

断面観察の結果、判明した主要なものだけで8回以上の時期に流れたことが明らかとなった。（図19参照）機能した時期は、切り込んでいる層序と出土遺物から明らかにすることができた。各時期の流路の概要を自然流路1～8として以下に記す。

自然流路1

北の肩は、第Ⅰ期調査区の北端で検出した。南の肩は攪乱のため明らかでないが、第Ⅱ調査区まで及んでいない。幅20m以上、深さ2.2m、検出した長さ（以下同じ）6m北東から南西に向かって流れる。縄文時代晩期土器、弥生土器（第Ⅰ様式～第Ⅴ様式）、庄内式土器、布留



0 10m



第19図 自然流路平面図

式土器、須恵器など各時期の遺物が出土した。遺物の出土状況と層序からみて、弥生時代中期末ないし後期（第IVないし第V様式）から古墳時代中期中頃まで機能していないものと考えられる。この流路の下部に切られた状態で、滋賀里Ⅲbに併行する自然流路の一部を検出したが、規模などは不明である。

自然流路2

第II調査区の北西隅で一画を検出した。幅1m以上、深さ0.6m長さ2.4mで、北東から南西に向かって流れる。縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器が出土した。溝29、ピット46によって切られる。出土遺物と遺構の切り合い関係からみて古墳時代中期後半の短期間だけ機能していたと考えられる。

自然流路3

第II調査区の中央より北で検出した。幅7m、深さ2.2m以上、長さ22mで、東から西に向かって流れる。縄文土器、弥生土器、布留式土器が出土した。埋没したのち上面より古墳時代中期後半の溝、ピットなどが切り込む。

出土遺物と遺構の切り合い関係からみて、古墳時代前期から中期にかけて機能していたと考えられる。第II調査区に存在した弥生時代の方形周溝墓や縄文時代晩期の遺構や包含層を破壊している。破壊された周溝墓の被葬者と考えられる頭骨を1点単独で検出した他、供獻された土器と考えられる底部に穿孔を持つほぼ完形の壺も出土した。西壁付近で2つに分かれる。2つの自然流路が切り合うことも考えられるが明らかにできなかった。出土遺物には差異がないので一応1条の自然流路としておく。

自然流路4

第II調査区の南東隅で北端の一画を検出した。幅1.6m以上、深さ0.8m、長さ4mで、北東から南西に向かって流れる。縄文土器、弥生土器、須恵器、土師器が出土した。古墳時代中期後半の遺構面を切り込み、古墳時代後期前半の包含層によって覆われている。出土遺物と土層の関係からみて、古墳時代中期末から後期初頭にかけての短期間のみ機能していたと考えられる。

自然流路5

第II調査区の西壁中央付近で検出した。擾乱および自然流路3によって破壊されているため西壁断面で存在を確認した。幅2m以上、深さ0.5mで北東より南西に向かって流れていると考えられる。黄褐色砂質土上面より切り込み、自然流路3に切られる。したがって機能していた時期は、弥生時代中期初頭から古墳時代前期までの間となるが、規模からみて長期間の機能は考えられない。

自然流路6

第II調査区の北端で検出した。自然流路3や擾乱によって大半が破壊されているので、確認したのは、北の肩のみである。幅1.6m以上、深さ0.4m、長さ8mで、東から西に向かって流れる。黄褐色砂質土上面より切り込むと考えられる。埋没後、方形周溝墓1の溝により切られ

る。弥生時代中期初頭（第Ⅱ様式）の土器が出土したことと合わせて、この時期に機能していたことは確実である。

自然流路 7

第Ⅱ調査区のほぼ中央で検出した。搅乱および自然流路3で破壊されている部分が多い。幅2.2m、深さ0.2m、長さ6mで、北東から西に向かって南に弯曲しながら流れる。黒灰色粘土層上面より切り込む。規模と層序からみて、滋賀里IV式並行期に、短期間機能したものである。

自然流路 8

第Ⅰ調査区の南半分と第Ⅱ調査区の北側2/3ほどの範囲で検出した。第Ⅰ調査区は自然流路1で肩が破壊されているため正確な幅は不明である。推定で幅約40m、深さ2.4m、長さ18mで、東から西に向かって流れていたと考えられる。最上部の堆積土より縄文時代後期に属する粗製土器が出土しており、この時期以前の流路である。上限は、出土遺物がないため不明である。断面観察によって、1条の自然流路ではなく、複数の流路が集合しているのは確実であるが、規模、機能した時期などは不明である。縄文時代後期以前にかなり長期間にわたって存在していたことは、複数の流路が認められるためまちがいない。

自然流路が、縄文時代後期以前から古墳時代後期初頭の長期間にわたって存在したのは、調査地の中央付近の旧地形が、浅い凹地状を呈していたためと考えられる。そのためある時期に自然流路がほとんど埋没しても、次々と新しい流路ができるのであろう。今回、確認できた自然流路の機能した時期は、たとえば弥生時代前期など空白時期が存在する。しかし、古い時期の流れが新しいものに破壊されていることや、旧地形が凹地状を呈していたと考えられることからすると、幅の狭い広いは別として古墳時代後期初頭まで連続して自然流路が存在したと思われる。

古墳時代後期初頭で自然流路が流れを変えて以降、再び流れないのは古墳時代中期後に集落が営まれた際に、方形周溝墓のマウンドを削平するなどかなり大規模な地形の改変を行っておりこの際、自然流路の流れを人工的に変えたことも考えられる。

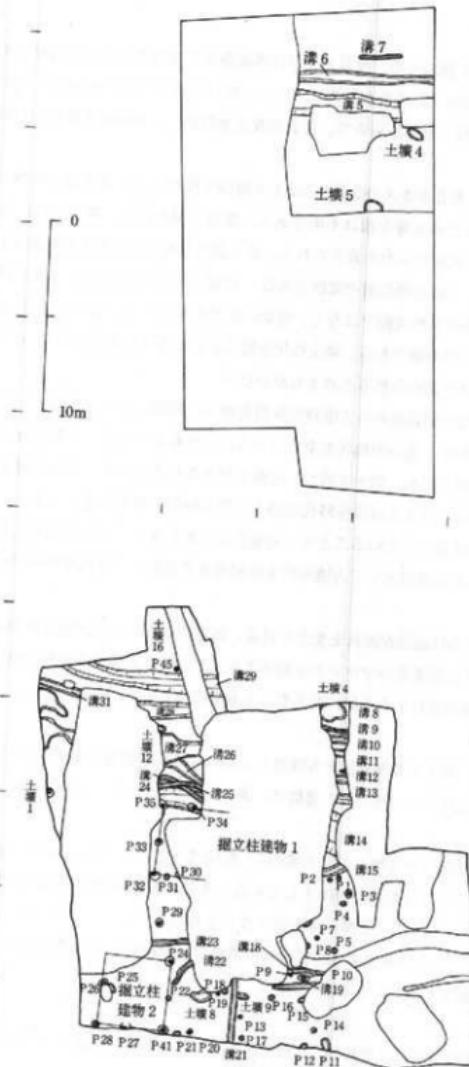
4. 古墳時代の遺構

古墳時代の遺構は、第Ⅰ・Ⅱ調査区とも既述したように既存の建物の基礎による大規模な搅乱のため良好な状態ではない。検出した遺構は、溝・掘立柱建物・ピット・土壤・落ち込み等である。

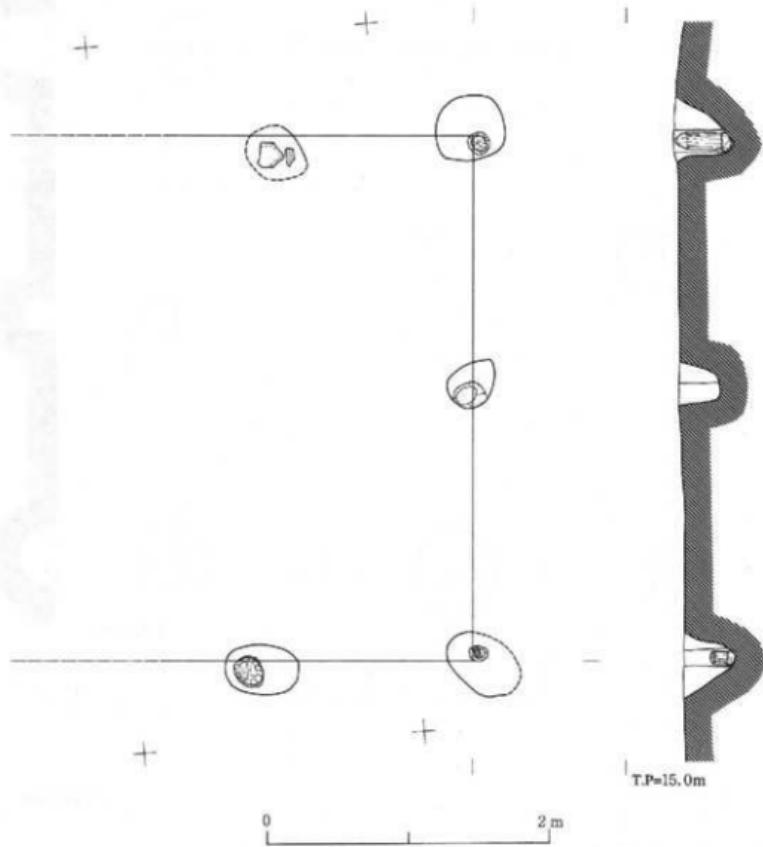
第Ⅰ調査区では黄褐色シルト層上面で土壤2基と溝3条を検出している。このうち、土壤4・溝5からは、比較的まとまった資料が出土している。また、第Ⅱ調査区では暗黄褐色砂質土層上面で掘立柱建物2棟・ピット・土壤・落ち込みなどを確認している。これらの遺構内からは、少量の遺物が出土しているのみである。これらの遺構は、層位関係と遺構内出土遺物から5世紀後半から6世紀初頭頃と推定できる。

掘立柱建物 1・2

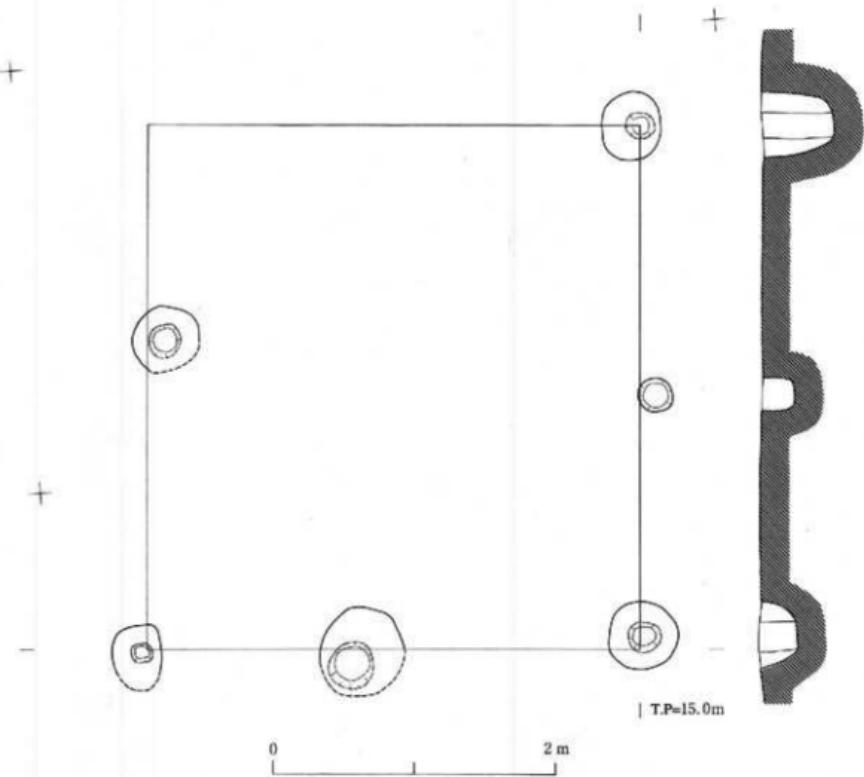
第Ⅱ調査区の中央部分から南半部分で2棟検出している。建物の周辺には、多数の柱穴が存



第20図 古墳時代遺構（中期）掘立柱建物他検出状況平面図



第21図 古墳時代遺構（中期）据立柱建物1検出状況実測図



第22図 古墳時代遺構（中期）掘立柱建物 2検出状況変測図

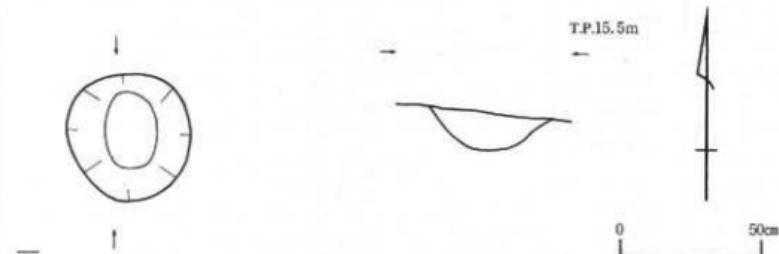
在することや擾乱によって既に削平された柱穴を考慮するとさらに多くの建物を想定できる。2棟の建物は、約4.5m離れて位置し、ほぼ同一方位をとる。第II調査区の中央部分にある掘立柱建物1は、東西1間以上・南北2間の規模である。柱間距離は、東西方向が1.65m・南北方向が1.9mを測る。総柱の建物の可能性もあるが擾乱のために不明。建物を構成する柱穴は直径50cm程度の梢円形で、各柱穴間に大小の差はない。しかし、各コーナーに位置する柱穴の深さが建物の柱列の中間にくる柱穴よりも深い傾向がある。柱穴の底面には、扁平な石を据え置き根石としているものもある。柱穴内には柱根の残存するものもある。柱根は、最も保存状態の良好なもので直径17.3cm・長さ54.5cmを測る。掘立柱建物2は第II調査区の南西端部分にある。建物の規模は、東西2間・南北2間に復元できる。柱間距離は、東西方向が1.7m・南北方向が1.6mを測る。建物2を構成する柱穴は、直径50cm程度の円形である。柱穴の底面には、建物1と同様に根石を据えるものもある。

以上の点から5世紀後半から6世紀初頭頃の今回の調査地は、集落の一画にあたるものと推定できる。同期の集落は、山麓部に位置する芝ヶ丘遺跡・西ノ辻遺跡・神並遺跡・市尻遺跡・繩手遺跡などでも確認されている。これらは、集落の継続期間や後述する渡来系の遺物を出土している点で共通している。

5. 飛鳥時代の遺構

第I調査区の灰褐色砂質土層・青灰色砂礫層・黄褐色砂質土層が6世紀後半から7世紀の須恵器・土師器を含む堆積層である。同期の遺構は、黄褐色砂質土層をベースとする土壙3を1基検出している。第II調査区では、同期の遺物を含む堆積層や遺構を確認できなかった。第I調査区で検出している土壙3は直径44cm・深さ12cmを測り、平面梢円形を呈する。土壙内からは、須恵器鉄鉢1個体分が出土している。

このような遺構の検出状況から本調査地点において5世紀後半から6世紀初頭まで継続していた集落は、6世紀中頃に断絶し、その後6世紀後半から7世紀頃に再び形成はじめたものと推定できる。このような集落の動向は、神並遺跡でも確認されている。



第23図 飛鳥時代遺構、土壙3検出状況実測図

表1 遺構一覧表

柱穴(ピット)

| 遺構名稱 | 埋土土層名 | 出土遺物 | 時期 | 平面形 径(cm) | 深さ(cm) | 柱根・根石 | 備考 |
|--------|------------------|-------------------|-----|----------------|--------|-------|----|
| ピット 1 | なし | 繩文土器・弥生土器 | 古 墳 | 楕円 長28-短20 | 27 | | |
| ピット 2 | なし | 繩文土器・弥生土器 | 古 墳 | 楕円 長24-短20 | 27 | | |
| ピット 3 | 暗茶褐色砂質土 | 縄文土器 | 古 墳 | 不規則 長40-短36 | 29 | | |
| ピット 4 | なし | | 古 墳 | 楕円 長28-短17 | 26 | | |
| ピット 5 | なし | 弥生土器・繩文土器 | 古 墳 | 円 24 | 不明 | | |
| ピット 6 | 淡茶褐色砂質土 | | 古 墳 | 楕円 長20 | 8 | | |
| ピット 7 | なし | 製塙土器・土師器 | 古 墳 | 楕円 長20-短16 | 12 | | |
| ピット 8 | 暗灰黄色砂質土 | | 古 墳 | 楕円 長28 | 14 | | |
| ピット 9 | なし | | 古 墳 | 楕円 長16 | 10 | | |
| ピット 10 | 淡黒褐色砂質土 | 製塙土器 | 古 墳 | 不規則 長60-短36 | 16 | 根石 | |
| ピット 11 | 暗茶褐色シルト | 弥生土器? | 古 墳 | 不規則 短48 | 20 | 根石 | |
| ピット 12 | 暗灰黄色砂質土 | 須恵器・土師器 | 古 墳 | 椭丸形 短28 | 13 | | |
| ピット 13 | 淡黒褐色砂質土 小鹿を含む | | 古 墳 | 円 16 | 10 | | |
| ピット 14 | 茶褐色砂質土 | 製塙土器・縄文土器 | 古 墳 | 楕円 短28 | 31 | | |
| ピット 15 | | | 古 墳 | 楕円 短28 | 不明 | | |
| ピット 16 | | | 古 墳 | 楕円 長24 | 2 | | |
| ピット 17 | 暗灰黄色砂質土 | | 古 墳 | 円 24 | 31 | | |
| ピット 18 | | 弥生土器 | 古 墳 | 楕円 短28 | 19 | | |
| ピット 19 | | | 古 墳 | 円 16 | 7 | | |
| ピット 20 | 暗黄褐色砂質土 | | 古 墳 | 楕円 長28-短21 | 13 | | |
| ピット 21 | 茶褐色砂質土 | | 古 墳 | 楕円 長40 | 20 | | |
| ピット 22 | | | 古 墳 | 円 24 | 10 | | |
| ピット 23 | | | 古 墳 | 円 12 | 6 | | |
| ピット 24 | 暗灰黄色砂質土 | | 古 墳 | 楕円 長46-短40 | 40 | | |
| ピット 25 | | | 古 墳 | 楕円 長52 | 22 | | |
| ピット 26 | 暗黃褐色砂質土 | 縄文土器 | 古 墳 | 円 48 | 30 | | |
| ピット 27 | 茶褐色砂質土 | 弥生土器? | 古 墳 | 楕円 長60 | 30 | | |
| ピット 28 | 茶褐色砂質土 | | 古 墳 | 楕円 短36 | 36 | 根石 | |
| ピット 29 | 暗黃褐色砂質土 | 土師器? 縄文土器 | 古 墳 | 楕円 長40-短32 | 62 | | |
| ピット 30 | 暗黃褐色砂質土 | | 古 墳 | 楕円 短40 | 28 | 根石 | |
| ピット 31 | | | 古 墳 | 椭丸形 短28-短23 | 9 | | |
| ピット 32 | 淡茶褐色砂質土 | 製塙土器・土師器 | 古 墳 | 椭丸形 短44 | 不明 | 柱軸・根石 | |
| ピット 33 | 淡黃褐色砂質土 | 製塙土器・土師器・ 縄文土器 | 古 墳 | 不規則 長40-短32 | 20 | | |
| ピット 34 | | 弥生土器・縄文土器 | 古 墳 | 楕円 長52-短36 | 不明 | 柱軸 | |

| 遺構名 | 埋土層名 | 出土遺物 | 時期 | 平面形 状(cm) | 深さ(cm) | 柱軸・板石 | 備考 |
|--------|------------------------|--------------|----|---------------|--------|-------|----|
| ピット 35 | 淡灰褐色砂質土・ 淡茶灰色砂質土(柱) | 製陶土器・土器器 | 古墳 | 楕円 長52 | 28 | 柱軸・板石 | |
| ピット 36 | 淡黄褐色砂質土 | 繩文土器 | 古墳 | 円 径20 | 10 | | |
| ピット 37 | 暗褐色砂質土 | | 古墳 | 楕円 径20 | 8 | | |
| ピット 38 | 茶褐色砂質土 | | 古墳 | 楕円 径32 | 36 | | |
| ピット 39 | 茶褐色砂質土 | | 古墳 | 楕円 長52 | 40 | | |
| ピット 40 | 茶褐色砂質土 | | 古墳 | 楕円 長36 | 21 | | |
| ピット 41 | 茶褐色砂質土 | | 古墳 | 楕円 32 | 20 | | |
| ピット 42 | 茶褐色砂質土 | | 古墳 | 楕円 長16 | 12 | | |
| ピット 43 | 茶褐色砂質土 | | 古墳 | 楕円 長20 | 16 | | |
| ピット 44 | 茶褐色砂質土 | | 古墳 | 楕円 長40 | 25 | | |
| ピット 45 | 暗黃褐色砂質土 | | 古墳 | 楕円 径36 | 24 | | |
| ピット 46 | 暗黃褐色砂質土・礫を含む | | 古墳 | 楕円 長40 | 36 | 板石 | |
| ピット 47 | 黒褐色砂質土 | 炭化物 | 古墳 | 楕円 長52 | 40 | 板石 | |
| ピット 48 | 灰黑色粘土 | 桃土・炭化物 | 縄文 | 楕円 長52・短17 | 16 | | |
| ピット 49 | * | 炭化物 | * | 円 16 | 16 | | |
| ピット 50 | * | 焼土・炭化物 | * | 円 24 | 38 | | |
| ピット 51 | * | 炭化物 | * | 円 20 | 8 | | |
| ピット 52 | * | 炭化物・燒土 | * | 円 20 | 10 | | |
| ピット 53 | * | 炭化物・燒土 | * | 楕円 長20・短16 | 4 | | |
| ピット 54 | * | 土器・炭化物・燒土 | * | 円 24 | 8 | | |
| ピット 55 | * | 土器・炭化物・燒土 | * | 楕円 長21・短13 | 9 | | |
| ピット 56 | * | 土器・炭化物・燒土 | * | 円 19 | 7 | | |
| ピット 57 | * | 燒土・炭化物 | * | 円 24 | 8 | | |
| ピット 58 | * | 土器・燒土・炭化物 | * | 楕円 長25・短17 | 11 | | |
| ピット 59 | * | 燒土・炭化物・土器 | * | 円 16 | 10 | | |
| ピット 60 | * | 土器・燒土・炭化物 | * | 楕円 長29・短16 | 17 | | |
| ピット 61 | * | 燒土・炭化物・サヌカイト | * | 楕円 長20・短12 | 10 | | |
| ピット 62 | * | 燒土・炭化物 | * | 楕円 長21・短12 | 8 | | |
| ピット 63 | * | 土器・燒土・炭化物 | * | 円 18 | 9 | | |
| ピット 64 | * | 燒土・炭化物 | * | 円 17 | 12 | | |
| ピット 65 | * | 土器・燒土・炭化物 | * | 楕円 長24・短16 | 8 | | |
| ピット 66 | * | 土器・燒土・炭化物 | * | 楕円 長26・短16 | 13 | | |
| ピット 67 | * | 土器・燒土・炭化物 | * | 楕円 長21・短16 | 8 | | |
| ピット 68 | * | 燒土・炭化物・土器 | * | 円 20 | 8 | | |
| ピット 69 | * | 土器・燒土・炭化物 | * | 楕円 長21・短15 | 6 | | |
| ピット 70 | 黑褐色粘土 | 土器・燒土・炭 | * | 円 10 | 10 | | |
| ピット 71 | 黑灰色粘土 | 土器・炭化物 | * | 円 24 | 30 | | |

| 遺構名稱 | 埋土土層名 | 出土遺物 | 時期 | 平面形 様(cm) | 深さ(cm) | 柱窓・板石 | 備考 |
|--------|---------|-------------|-----|---------------|--------|-------|----|
| ピット 72 | 炭黑色粘土 | 炭化物 | 绳文N | 円 21 | 7 | | |
| ピット 73 | * | 炭化物 | * | 円 23 | 20 | | |
| ピット 74 | * | 炭化物 | * | 椭円 長20・短16 | 5 | | |
| ピット 75 | * | 炭化物 | * | 椭円 長32・短21 | 8 | | |
| ピット 76 | * | 燒土・炭化物 | * | 椭円 長20・短16 | 9 | | |
| ピット 77 | * | 炭化物 | * | 円 17 | 12 | | |
| ピット 78 | * | 燒土・炭化物 | * | 長22・短16 | 9 | | |
| ピット 79 | * | 炭化物 | * | 椭円 長32・短25 | 6 | | |
| ピット 80 | * | 土器・炭化物・繩文土器 | * | 円 18 | 12 | | |
| ピット 81 | * | 土器・炭化物・繩文土器 | * | 椭円 長25・短21 | 6 | | |
| ピット 82 | * | 炭化物 | * | 椭円 長29・短22 | 12 | | |
| ピット 83 | 暗黒褐色砂質土 | | * | 椭円 短18 | 19 | | |
| ピット 84 | 暗黒褐色砂質土 | 绳文土器 | * | 椭円 短18 | 8 | | |
| ピット 85 | 暗灰色砂質土 | | * | 椭円 短18 | 16 | | |
| ピット 86 | 暗黒褐色砂質土 | 炭化物・繩文土器 | * | 円 18 | 20 | | |
| ピット 87 | 暗黃褐色砂質土 | | * | 円 12 | 10 | | |
| ピット 88 | 暗灰色粘土 | 炭化物 | * | | 21 | | |
| ピット 89 | 暗灰色粘土 | 炭化物 | * | | 28 | | |
| ピット 90 | 暗灰色粘土 | 炭化物 | * | | 24 | | |
| ピット 91 | 暗灰色粘土 | 炭化物 | * | | 24 | | |

溝

| 遺構名稱 | 埋土土層名 | 出土遺物 | 時期 | 幅(cm) | 深さ(cm) | 方向 | 備考 |
|------|-----------------------|------------------------|----|-------|--------|-------|----|
| 溝1 | オリーブ無色砂質土 | 弥生土器 | 近代 | 24 | 88 | E→W | |
| 溝2 | 暗オリーブ色砂質土 | 弥生土器 | 近代 | 40 | 28 | E→W | |
| 溝3 | 暗茶褐色砂質土 | 須恵器・陶器・弦文土器・土師器 etc. | 近代 | 120 | 100 | NW→SE | |
| 溝4 | * | 瓦・横管・陶器 etc. | 近代 | 100 | 40 | E→W | |
| 溝5 | 暗灰褐色粗砂 | 須恵器・土師器 | 古墳 | 16 | 108 | E→W | |
| 溝6 | 淡灰褐色砂質土 | 須恵器・土師器・铁斧 | 古墳 | 12 | 60 | E→W | |
| 溝7 | 淡灰褐色砂質土 | 須恵器・土師器 | 古墳 | 4 | 16 | E→W | |
| 溝8 | 黃灰色砂質土 | 須恵器 | 古墳 | 5 | 18 | E→W | |
| 溝9 | 暗灰褐色砂質土 | 須恵器・土師器 | 古墳 | 12 | 36 | E→W | |
| 溝10 | 暗灰褐色砂質土 (1cm前後の確認) | 弥生土器・土師器・ 須恵器・繩文土器 | 古墳 | 8 | 40 | E→W | |
| 溝11 | 暗黃褐色砂質土 | 弥生土器(繩文?) | 古墳 | 7 | 16 | E→W | |
| 溝12 | 暗黃褐色砂質土 | 縄式土器・製糞土器・ 繩文土器・土師器 | 古墳 | 9 | 45 | E→W | |
| 溝13 | 淡黑褐色砂質土 | 土師器・製糞土器・ 須恵器 | 古墳 | 16 | 48 | E→W | |

| 遺構名 | 埋土層名 | 出土遺物 | 時期 | 幅(cm) | 深さ(cm) | 方 向 | 備 考 |
|-------|------------------|---------------------------|-------|-------|--------|-------|------------|
| 清14 | 黒褐色砂質土 | 土師器・製造土器 | 古 墳 | 12 | 212 | NW→SE | |
| 清15 | 淡灰色砂礫 | なし | 古 墓 | 6 | 49 | NE→SW | |
| 清16 | 暗灰色砂質土 | 弥生土器 | 弥 生 | 5 | 40 | E→W | |
| 清17 | 暗褐色砂質土 | 縄文土器・ 弥生土器・石器 | Ⅱ様式 | 60 | 280 | E→S→N | 方形周溝墓 2 |
| 清18 | 淡灰黃色砂質土 | | 古 墓 | 6 | 280 | E→W | |
| 清19 | 暗灰黃色砂質土 | 製塙土器・土師器・ 埴輪器・縄文土器 | 古 墓 | 10 | 280 | E→W | |
| 清20-1 | 黃褐色砂質土 | 弥生土器Ⅰ様式・ Ⅱ様式・縄文土器 | 弥 生 | 92 | 200 | S→N | 方形周溝墓 3 |
| 清21 | 茶褐色砂質土 | 製塙土器・弥生土器 | 古 墓 | 25 | 30 | S→N | |
| 清22 | 灰褐色砂質土 | 製塙土器・土師器・ 弥生土器 | 古 墓 | 130 | 28 | NE→SW | |
| 清23 | 淡灰褐色砂質土 | 製塙土器・弥生土器 | 古 墓 | 7 | 28 | E→W | |
| 清20-2 | 淡灰褐色砂質土 | 弥生土器 | 弥 生 | 30 | 98 | E→W | 方形周溝墓 3 |
| 清24 | 淡灰褐色砂質土 炭化谷壳 | 土師器・製塙土器・ 弥生土器 | 古 墓 | 8 | 34 | SW→NE | |
| 清25 | 淡褐色砂質土 | 製塙土器・土師器・ 炭化谷壳 | 古 墓 | 8 | 24 | E→W | |
| 清26 | 暗灰褐色砂質土 | 製塙土器・土師器・ 炭化谷壳・弥生土器 | 古 墓 | 8 | 84 | SE→NW | |
| 清27 | 灰褐色砂質土 | 製塙土器・土師器・ 弥生土器・須恵器 | 古 墓 | 9 | 160 | E→W | |
| 清28 | 暗褐色砂質土 | 須恵器・ 土師器 | 古 墓 | 13 | 96 | E→W | |
| 清29 | 淡褐褐色砂質土 小穂子谷壳 | 土師器・製塙土器・人骨・ 弥生土器・縄文土器 | 古 墓 | 16 | 96 | E→W | |
| 清30 | 暗灰褐色砂質土 | 弥生土器・縄文土器 | 弥生Ⅲ様式 | 60 | 60 | N→S | 方形周溝墓 1 |
| 清31 | 灰黑褐色砂質土 炭化谷壳 | 須恵器・土師器・ 製塙土器・弥生土器 | | 8 | 38 | E→W | |
| 清20-3 | 黃褐色砂質土 | 弥生土器 | 弥 生 Ⅲ | 80 | 320 | S→N | 方形周溝墓 3 |
| 清32 | 暗灰褐色砂礫 | 弥生土器 | 弥 生 | 8 | 36 | E→W | 土壤16に切られる |
| 清33 | 暗褐色砂質土 | 縄文土器・石器・石 | 縄 文 Ⅲ | 20 | 240 | S→NW | 方形周溝墓 |
| 清34 | 暗灰褐色砂質土 | 縄文土器・石 | 縄 文 Ⅲ | 24 | 52 | E→W | |
| 清35 | 暗黑灰褐色土 | 縄文土器・石 | 縄 文 Ⅲ | 16 | 220 | S→N | |
| 清36 | 暗灰褐色砂質土 | 縄文土器 | 縄 文 Ⅳ | 13 | 160 | NW→SE | |
| 清37 | 暗灰褐色砂質土 | 縄文土器 | 縄 文 Ⅳ | 7 | 27 | NW→SE | |
| 清38 | 淡灰褐色砂質土 | なし | 縄 文 V | 16 | 24 | E→W | 縄文後期 |

土 壤

| 遺構名 | 埋土層名 | 出土遺物 | 時 期 | 平 圓 形 (cm) | 深さ(cm) | 備 考 |
|-----|-------------------|------------------|-------|---------------|--------|-----|
| 土壤1 | 赤褐色砂質土 | なし | 近世～近代 | 楕円 長168 | 68 | |
| 土壤2 | 暗茶褐色砂質土 | 陶器・弥生土器 | 近世～近代 | 楕円 長128 | 56 | |
| 土壤3 | ナリーブ黒色 小穂子・混り土 | 須恵器 etc. | 飛 鳥 | 円 44 | 12 | |
| 土壤4 | 暗褐色砂質土 | 須恵器・土師器 | 古 墓 | 長88・短44 | 5 | |
| 土壤5 | 淡黃褐色砂質土 | 土師器・製塙土器 | 古 墓 | 楕円 長90 | 28 | |
| 土壤6 | 暗褐色砂質土 | 須恵器・土師器・ 製塙土器 | 古 墓 | 不整円形 長70 | 4 | |
| 土壤7 | 暗褐色砂質土 | 土師器 | 古 墓 | 楕円 長50 | 30 | |

| 遺 情 名 称 | 埋 土 層 名 | 出 土 遺 物 | 時 期 | 平 面 形 状 (cm) | 深 度 (m) | 備 考 |
|---------|------------------|------------------|--------|-----------------|---------|----------------------|
| 土壤8 | 茶褐色砂質土 經灰色砂質土 | 鐵鑄器・土師器 | 古 墳 | 圓円 長120-短50 | 28 | |
| 土壤9 | 暗灰褐色砂質土 | 鐵文土器 | 古 墓 | 圓円 短29 | 5 | |
| 土壤10 | 茶褐色砂質土 | 鐵鑄器・土師器 | 古 墓 | 圓円 48 | 15 | |
| 土壤11 | 茶褐色砂質土 | 鐵文土器 | 古 墓 | 不整圓形 長40-短24 | 5 | |
| 土壤12 | 淡灰褐色砂質土 | 土師器 | 古 墓 | 圓円 短36 | 10 | |
| 土壤13 | 茶褐色砂質粘土 | | 古 墓 | 圓円 長136 | 24 | |
| 土壤14 | 暗灰褐色粘土 | 株生土器 | 弥 生 | 圓円 長64-短44 | 8 | 底部穿孔の癡1 |
| 土壤15 | 明黑褐色粘土 | 灰 | 萬文or春生 | 圓円 短80 | 16 | |
| 土壤16 | 暗灰褐色砂質土 | 株生土器 | 弥 生 | 圓円 短120 | 22 | |
| 土壤17 | 黑灰色砂質粘土 | 鐵文土器 | 鐵文 I | 圓丸三角 長40-短36 | 7 | |
| 土壤18 | 黑灰色シルト質粘土 | 炭化物 | 鐵文 I | ひし形 長80-短52 | 20 | |
| 土壤19 | 綠灰色砂 | なし | 鐵文 I | 圓円 短24 | 19 | |
| 土壤20 | 黑褐色砂質粘土 | 鐵文土器 | 鐵文 II | 圓円 短40+α | 32 | |
| 土壤21 | 黑褐色砂質粘土 | 鐵文土器 | 鐵文 III | 圓円 短52 | 16 | |
| 土壤22 | 黑褐色砂質粘土 | 鐵文土器・石斧・燒土 塊 | 鐵文 III | 圓円 短140 | 12 | 西端は複瓦で破損。東端は調査区外にのびる |
| 土壤23 | 暗灰褐色粘土 | 鐵文土器 | 鐵文 III | 圓円 短68 | 24 | |
| 土壤24 | 淡灰褐色砂質粘土 | 鐵文土器 | 鐵文 III | 圓円 短60 | | |
| 土壤25 | 黑褐色砂質粘土 灰を含む | 鐵骨・燒土・土器 | 鐵文 III | 圓円 短45+α | 20 | |
| 土壤26 | 黑褐色砂質粘土 | 鐵文土器 | 鐵文 III | 圓円 長80+α | | |
| 土壤27 | 黑褐色粘土 暗灰色粘土 | 炭化物 | 鐵文 III | 圓円 長52 | 27 | |
| 土壤28 | 暗灰褐色粘土 | 鐵骨・炭化物・燒土 | 鐵文 III | 圓円 長72 | 28 | |
| 土壤29 | 暗灰褐色粘土 | 灰 | 鐵文 III | 圓円 長36-短24 | 16 | |
| 土壤30 | 灰黑色粘土 | 鐵文土器・燒土・炭化 物 | 鐵文 IV | 圓円 長40-短24 | 12 | |
| 土壤31 | 灰黑色砂質土 | 鐵文土器・燒土・炭化 物 | 鐵文 IV | 圓円 長40-短24 | 24 | |
| 土壤32 | 灰黑色粘土 | 燒土・燒骨・灰 | 鐵文 IV | 圓円 長40-短24 | 24 | |
| 土壤33 | 灰黑色粘土 | 燒土・炭化物 | 鐵文 IV | 圓円 長60-短40 | 21 | |
| 土壤34 | 灰黑色粘土 | 植物の種子・土器・ 炭化物 | 鐵文 IV | 圓円 長32-短30 | 20 | |
| 土壤35 | 灰黑色粘土 | 土器・燒土・炭化物 | 鐵文 IV | 圓円 短44 | 12 | |
| 土壤36 | 灰黑色粘土 | 土器・炭化物・燒土 | 鐵文 IV | 圓円 長44-短28 | 9 | |
| 土壤37 | 暗青灰褐色砂質土 | 燒土・炭化物・土器 片 | 鐵文 IV | 圓円 長40-短30 | 8 | |
| 土壤38 | 灰黑色粘土 | 炭化物 | 鐵文 IV | 圓円 長53-短24 | 8 | |
| 土壤39 | 灰黑色粘土 | 炭化物 | 鐵文 IV | 圓円 長36-短24 | 7 | |
| 土壤40 | 灰黑色粘土 | 炭化物 | 鐵文 IV | 圓円 長36-短32 | 16 | |
| 土壤41 | 暗灰褐色粘土 | 土器・炭化物 | 鐵文 IV | 圓円 短56 | 56 | |
| 土壤42 | 灰黑色砂質土 | 土器・炭化物 | 鐵文 IV | 圓円 長33-短24 | 5 | |
| 土壤43 | 暗灰褐色砂質土 | 鐵文土器 | 鐵文 IV | 圓円 短45 | 8 | |
| 土壤44 | 暗灰褐色砂質土 | 鐵文土器 | 鐵文 IV | 圓円 長92 | 12 | |

| 遺構名 | 埋土層名 | 出土遺物 | 時期 | 平面形状(cm) | 深さ(cm) | 備考 |
|------|---------|----------|----|------------|--------|------|
| 土壤45 | 暗灰色砂質土 | 石器・土器・石皿 | 縄文 | 圓形 直徑40 | 13 | |
| 土壤46 | 明風褐色砂質土 | 縄文土器 | 縄文 | 圓形 直徑12 | 12 | |
| 土壤47 | 暗灰色粘土 | 灰 | 縄文 | 長80cm以上 | 20 | 南壁前面 |
| 土壤48 | 暗灰色粘土 | なし | 縄文 | 圓形 直徑38 | 8 | |
| 土壤49 | 暗灰色粘土 | 灰・燒土・土器 | 縄文 | | 44 | |
| 土壤50 | 暗灰色粘土 | 灰 | 縄文 | | 24 | |
| 土壤51 | 暗灰色粘土 | 灰 | 縄文 | | 36 | |

方形周溝墓

| 遺構番号 | 堆丘規模(m) | 周溝(m) | 周溝幅(m) | 周溝深(m) | 墓壙(m) | 木棺(m) | 埋葬主体 | 供獻土器 | 備考 |
|--------|------------|-------------|-----------------|-----------------------------|-----------------|--------------------------|----------------|--------------------------|-----------------|
| 方形周溝墓1 | 7×5.6m以上 | 7×3.3m | 1.6 | 0.6 | 2.5×1 深0.6以上 | 底板1.7m×0.6 内方1.7m×0.6 | 20代後半女性 頭位北 | | 周溝及び墓壙内に第Ⅲ式様の土器 |
| 方形周溝墓2 | 6.72m×4.8m | 8.4m×6.4m | 2.68 2.4 | (北)0.6 (西)0.68 | | | | 第Ⅲ式土器1(北) 樂子半部1(西) | |
| 方形周溝墓3 | 7.06m×5.76 | 7.68m×10.56 | 2 3.2 1.6 | (東)0.92 (西)0.8 (北)0.4 | | | | 第Ⅲ式土器1(北), 樂子2,瓦1(西側) | |

自然流路

| 名 称 | 幅(m) | 深さ(m) | 長さ(m) | 方向 | 堆 積 土 | 出 土 遺 物 | 時 期 | 備 考 | | |
|-------|------|-------|--------|-------|----------------------------|----------------------------|----------------------|-------------|----------------|--|
| 自然流路1 | 20以上 | 2.2 | 6 | NE-SW | 黃褐色土、黃褐色シルト質土上、灰黑色細沙、青白色等。 | 弥生V、布留1、須恵器、庄内、佐世1-V、萬葉地相 | 弥生B-V~古墳中頃中壇 | 第1調査区 | | |
| * | 2 | 1以上 | 0.6 | 2.4 | NE-SW | 黃褐色土、暗褐色土等、等厚地相、青白色等。 | 須恵器、土師器、弥生I-V、繩文晚期土器 | 古墳中頃中壇 | 薄とピット46に切られる | |
| * | 3 | 7 | 2.2以上 | 2.2 | E-W | 黃褐色土、黃褐色シルト質土上、灰黑色細沙、青白色等。 | 繩文、弥生、布留式土器 | 古墳中頃中壇 | 前より古墳時代中期後半の遺構 | |
| * | 4 | 1.6以上 | 0.8m以上 | 4 | NE-SW | 黃褐色土、黃褐色沙織 | 須恵器、土師器、弥生、繩文式土器 | 古墳後周初期 | 古墳後周初期後半遺構を切り | |
| * | 5 | 2以上 | 0.5 | | | 黃褐色土、黃褐色沙織土上 | なし | 弥生II~晩晉 | 断面で確認 | |
| * | 6 | 1.6以上 | 0.4以上 | 8 | E-W | 黃褐色土等 | 弥生III | 方形周溝墓1の横に切る | | |
| * | 7 | 2.2以上 | 0.2 | 6 | NE-SW | 黑褐色細沙 | なし | 滋賀里IV | 黒褐色粘土上面より切る | |
| * | 8 | 40 | 2.4以上 | 18 | E-W | 黃褐色細沙、暗褐色シルト | 绳文土器 | 绳文後期以降 | いくつかの流路の集合 | |
| その他の | | 1以上 | 2? | | | 黑色粘土、黑色シルト | 滋賀里III~VI | 第1調査区 | | |

墓

| 遺構名 | 埋土層名 | 出土遺物 | 時期 | 深さ(cm) | 平面圖 直徑(cm) | 備考 |
|------|-----------------------|------------------------|-------------------|--------|-----------------------|-----------------|
| 本格墓1 | 暗褐色細沙土・暗褐色シルトのブロック状等。 | 弥生土器、縄文土器 墓内目録式木棺22 | 撫刀方54 木棺170×48 | | 撫刀方220×94 木棺170×48 | 黄褐色シルト 上面で検出 |
| 土壙墓1 | 黒灰色粘土 | 石、縄文土器 | 泥質黑II b | 19 | 橢円形 160×90×140 | 埋土内出土土器 |
| 土壙墓2 | 黒褐色粘土 | 石、縄文土器 | 泥質黑III b | 15 | 方形 56×(34+a) | 埋土内出土土器 |

落ち込み

| 遺構名 | 埋土層名 | 出土遺物 | 時期 | 深さ(cm) | 備考 |
|-------|--------|--------------|----|--------|------------|
| 落ち込み1 | 黒褐色砂質土 | 縄文土器、深鉢 | 縄文 | 約20 | 埋め戻しの可能性有り |
| 落ち込み2 | 黒褐色砂質土 | 縄文土器、焼土 etc. | 縄文 | 約30 | |

V 出土遺物

今回の調査で出土した遺物は、縄文時代から近代に至る各時期のものがある。その量は、コンテナ300個以上にのぼる。このうちの大部分は、縄文～古墳時代に属す遺物である。

遺物の時期別量の内訳は、縄文時代に属すものが最も多くコンテナ120個、次いで古墳時代中期の遺物コンテナ100個、弥生時代の遺物コンテナ50個、古墳時代後期以降現代に至る遺物コンテナ30個である。

古墳時代後期以降現代に至る土器は、7世紀代の遺構が少数認められた以外、他は一部の近代のものを除いて、旧耕土および床土よりの出土である。旧耕土及び床土より出土した古代・中世・近世の遺物は、鬼塚遺跡が縄文時代より現代に至るまで存続していたことを示すものであるが、本調査地点においては当該時期の遺構を検出しておらず、現代のものを除いてその出自を明確にできない。

したがって、この章では遺構などを伴ない本調査地点における出自が明らかな時期の遺物を縄文時代後期以前、晚期、弥生時代前期・中期・後期、古墳時代前期・中期、飛鳥時代に分けて記述する。なお、古墳時代中期のなかには後期初頭に属すものも含める。

土器の胎土については、現在の東大阪市域の生駒山地の一部を形成する閃綠岩などが風化した粘土に含まれる角閃石を含み、色調が茶褐色を呈するいわゆる生駒山地西麓産あるいは河内産ともよばれる土器について在地産とし、異なるものについては他地域産とする。

在地産の土器の中には、角閃石を多量に含むものと少量含むもののが存在する。これについては、第IV章の2で述べる。本書に掲載した遺物実測図および拓影の個々の説明は、観察表を参照していただきたい。本文中では遺物の概要と明らかにした事柄について記述する。

1. 縄文時代後期以前の遺物

縄文時代後期以前の遺物が全部でコンテナ1/5程度、出土している。

縄文時代後期以前の土器

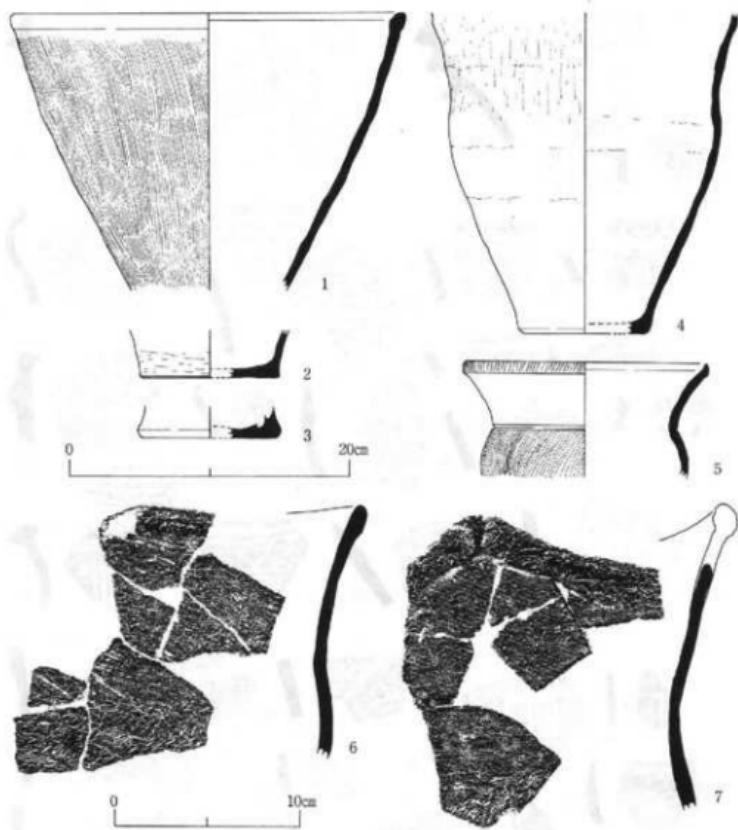
加曾利E II式系(咲烟式)の土器は、口縁部外面に撚糸文、隆帯による溝文を施し溝文の下に押し引きによる並行沈線をもつ図8～10を代表とする。里木II式系の土器は外方に開く体部から内側する口縁部をもつ図14のようなものが出土している。

器種は、精製、粗製の深鉢が認められる。土器はほとんど小破片で、わずかに平底で体部上半の外面を縱方向のケズリ調整をする粗製の深鉢図4が、ある程度の形を知ることのできるものである。土器の胎土は、在地産も見られるが後・晚期の土器に比して他地域産の比率が高い。第I調査区から出土した。周辺ではこの時期の資料はほとんど知られていない。

縄文時代後期中頃の土器

後期中頃の土器は、北白川上層II式を主にするものである。一部、同I式に属すかと考えられる。器種は、深鉢が大半で浅鉢も少量認められる。深鉢は、縄帶文をもつものが多い。

土器は小破片が多い。波状口縁をもち口縁部外面と体部下半に縄文を施す深鉢図6・7や体



第24図 縄文時代中・後期以前土器実測図、拓影・断面図

部外面を貝殻により調整する図1などは全形をある程度知ることのできるものである。

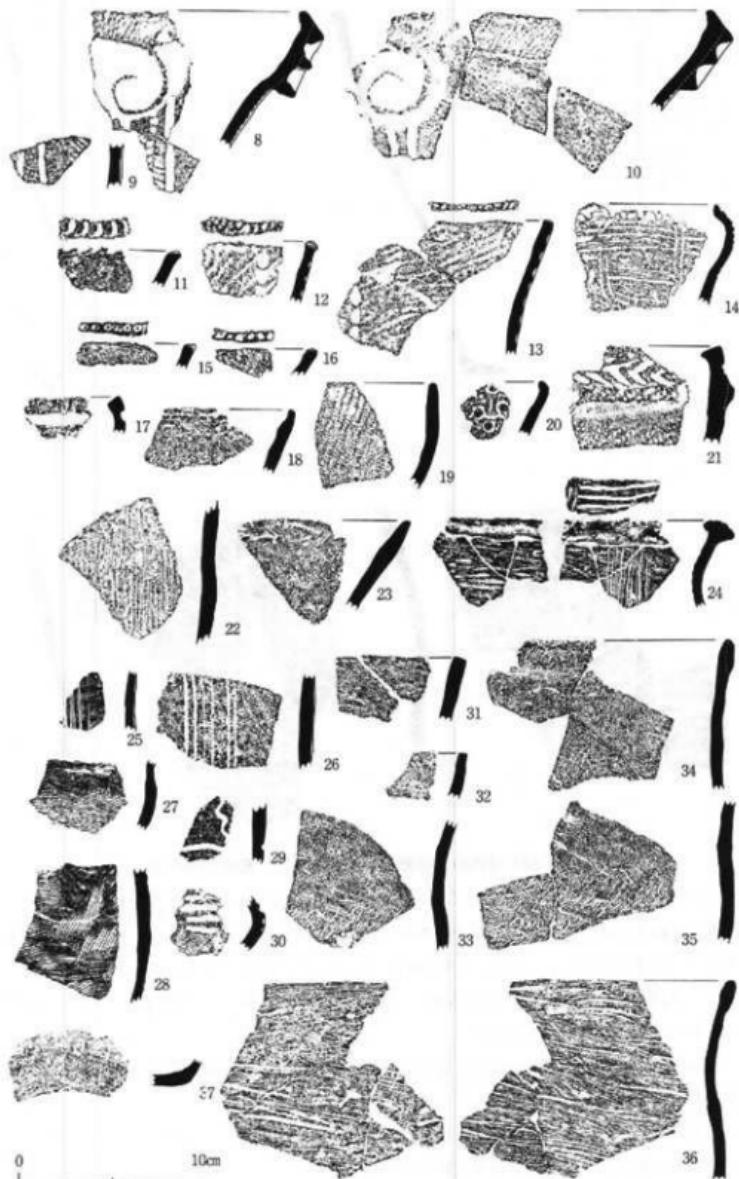
精製の浅鉢は図19のように口縁部から体部に縄文を施すものと、深鉢と同じく口縁部外面と体部下半に縄文を施す図5がある。土器の胎土は、図5の浅鉢を除き全て在地産である。

第I・II調査区の包含層や、自然河川から出土しているが遺構からは検出していない。遺物の出土量は、第II調査区の方が多い。

この時期の土器は、周辺では縄手・日下遺跡などで知られており縄手遺跡では主体をなす。

石製品

淡黄褐色粘土層から出土した石匙（図17）があげられる。搅乱から出土した石錐1点（図51）も形態から見てこの時期に属すと考えられる。



第25図 繩文時代中・後期土器拓影・断面図

2. 縄文時代晩期の遺物

この時期の遺物は、遺構および包含層や搅乱から出土した。遺物の内訳は、土器を中心に土偶などの土製品と石鐵などの石製品がある。動物遺存体（シカ・イノシシ・サワラなど）・植物遺存体（イチイガシなど）も少量認められる。

土器の時期を細かく分ければ、晩期後半の滋賀里Ⅲb～V式併行までの土器に細分される。それぞれの土器は土層・遺構別に見れば、滋賀里Ⅲb式併行の土器が、暗黃灰色粘土層および上面で検出した土壤34や堅穴住居を構成したと考えられるピットなどの造構（縄文IV）から出土している。

滋賀里IV式併行に属す遺物が黒灰色粘土・黒灰色砂質土下層と黒灰色粘土層の上面より切り込まれた溝35などの造構内（縄文III）より出土し、滋賀里V式併行に属す土器が黒灰色砂質土下層上面に切り込まれた溝33やこれを覆う黒灰色砂質土・黃灰色シルト（縄文II・I）から出土している。

土製品と石製品に関しては別にまとめる。土器をはじめとする個々の遺物の詳細は観察表を参照されたい。また、各遺構・包含層出土土器の個体数（口縁部から算出）を表8に掲げたので併せて参照されたい。

土器は、深鉢・浅鉢・壺を形態からいくつかのタイプに分類した。分類基準の概要を記した後、遺構面と同じく縄文IV～Iに分けて説明する。

深鉢はA～Iとその他（1点しか出土していないので浅鉢の可能性も考えられる）の10タイプに分類した。

深鉢A 肩の張る体部と外反する口縁部をもつ。口縁部内外面はナデ肩部以下の外面はケズリで仕上げる。ケズリの方向は肩部付近を水平、下半は底部から上に向かう縱方向である。滋賀里遺跡出土の滋賀里Ⅲ式に属す壺E₂に相当する。

深鉢B 深鉢Aの口縁端部に刻目を施すものである。滋賀里遺跡では滋賀里Ⅲ式に属す壺E₂の中に含まれるものに相当する。

深鉢C 深鉢Bの口縁部外面に1条の刻目凸帯を巡らすものである。刻目をもたない凸帯や口縁端部に刻目を持たないものも少量認められる。滋賀里遺跡では滋賀里IV式に属す壺M₁に相当する。船橋遺跡などで類例が知られる。

深鉢D 深鉢Cの口縁端部に刻目をもたないものである。滋賀里遺跡では滋賀里IV式に属す壺M₂に相当する。船橋・森の宮遺跡に類例が知られる。

深鉢E 深鉢Dの肩部に1条の凸帯を巡らす。凸帯には刻目を施すものが多いが、少数無いものもある。滋賀里遺跡では滋賀里V式に属す壺Pに相当する。船橋遺跡に類例が知られる。

深鉢F 孵卵状の器体をもつもので外面はケズリ内面はナデで仕上げる。口縁端部に刻目をもたないものをF₁、施すものをF₂と細分する。F₂は少ない。滋賀里遺跡では滋賀里IV～V式に属す深鉢Gに相当する。長原遺跡などに類例が有る。

深鉢G 深鉢Fの口縁部外面に1条の刻目凸帯を巡らす。口縁端部に刻目を施すものをG₁、

もたないものG₂と細分する。滋賀里遺跡では滋賀里IV～V式に属す深鉢Gに含まれる。長原遺跡などに類例がある。

深鉢H 深鉢Dの形態に類似するが口縁部外面に巡らす1条の凸帯に刻目を持たない。波状口縁を呈するものがある。滋賀里遺跡では滋賀里IV式に属す壺K₁に相当する。日下遺跡などに類例がある。

深鉢I 体部から口縁部にかけて2段に屈曲するものである。滋賀里遺跡では滋賀里III式に属す深鉢A₁に相当する。2個体分出土している。馬場川遺跡などに類例がある。

その他は、口径が大きく器高も高くなることが予想されるため深鉢としたが内外面ともミガキ調整することから後述する浅鉢Eとすべきかも知れない。1点出土している。

壺は、凸帯の有無などの形態の違いからA～Cの3タイプに分類した。

壺A 内傾する口縁部をもつ。口縁端部は丸くおさめる。内外面ともナデで仕上げる。長原遺跡などに類例がある。

壺B 口縁部外面に1条の刻目をもたない凸帯を巡らす。内外面ともナデで仕上げる。馬見塚遺跡F地点などに類例がある。

壺C 口縁部外面に1条の刻目凸帯を巡らす。滋賀里遺跡では滋賀里IV～V式に属す壺Cに相当する。船橋遺跡などに類例がある。

浅鉢は、形態の異なりなどからA～Fの6タイプに分類した。

浅鉢A 著しく外反する体部から頸部はほぼ直立して短く立ち上がり、口縁部は再度外反する。口縁端部は肥厚する。口縁部に突起をもつものがある。滋賀里遺跡では滋賀里III式に属す浅鉢B₂に相当する。日下遺跡などに類例がある。

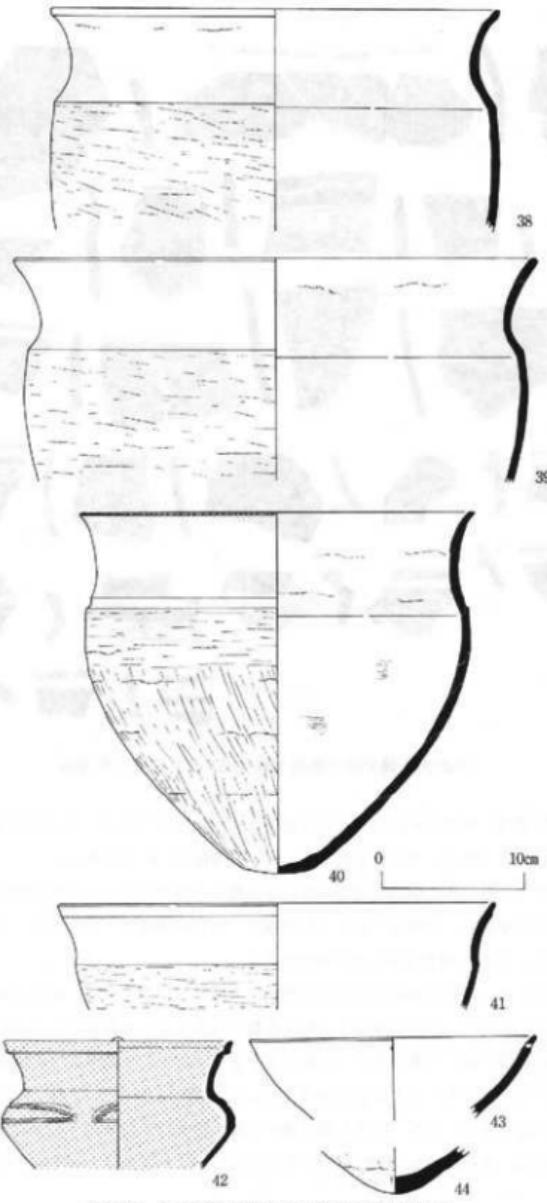
浅鉢B 体部が浅くかつ屈曲する。口縁部は短く外反し口縁端部を肥厚させる。口縁部に突起をもつものがある。滋賀里遺跡では滋賀里III式に属す浅鉢E₁に相当する。日下遺跡などに類例がある。

浅鉢C 口縁部と体部の区別のない椀状を呈するものである。口縁端部に刻目をもつものがある。外面にケズリを施すものをC₁、内外面ともミガキで仕上げるものをC₂と細分する。C₁は滋賀里遺跡では滋賀里IV～V式に属す鉢B₁、C₂は鉢B₂に相当する。長原遺跡などに類例がある。

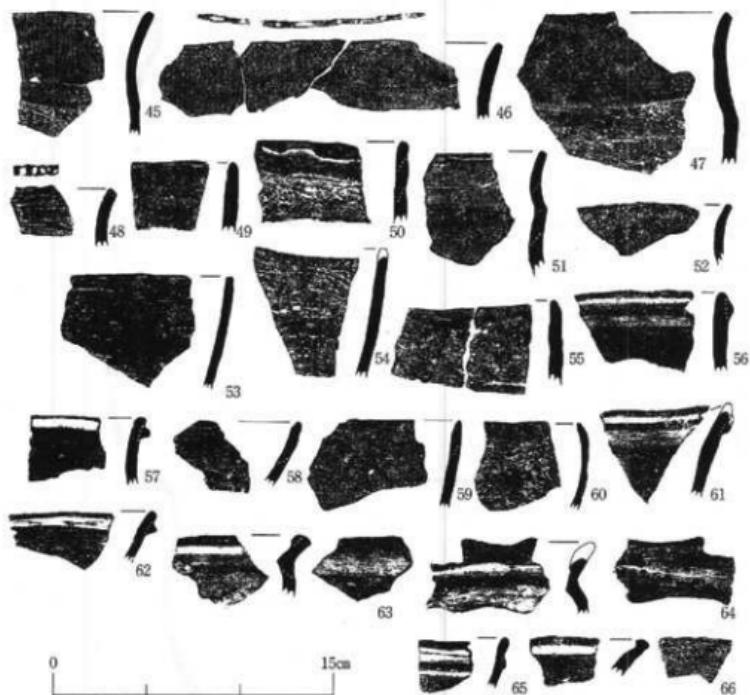
浅鉢D 直口の体部に凸帯が1条巡るものである。凸帯の大半は刻目をもたないが、少量もつものがある。内外面ともミガキで調整する。馬見塚遺跡F地点に類似したものがある。

浅鉢E 肩の張る体部から口縁部が内傾気味に外反するものである。口縁部外面に刻目をもたない凸帯を1条巡らす。滋賀里遺跡では滋賀里IV～V式に属す浅鉢G₁に相当する。船橋遺跡などに類例がある。

浅鉢F 肩のはるの体部に内傾する口縁部をもつ。口縁端部は丸くおさめる。口縁部外面を横ナデ、内面を横方向のミガキで仕上げる。滋賀里遺跡では滋賀里IV～V式に属す浅鉢G₂に相当する。穴森口酒井遺跡などに類例がある。



第26図 縄文時代晩期土器（縄文IV）実測図



第27図 繩文時代晩期土器（縄文IV）拓影・断面図

浅鉢G 口縁部と体部の区別がなく口縁部が外反するものである。口縁端部は肥厚する。口縁端部内面に棒状工具による沈線を巡らす。口酒井遺跡などに類例がある。

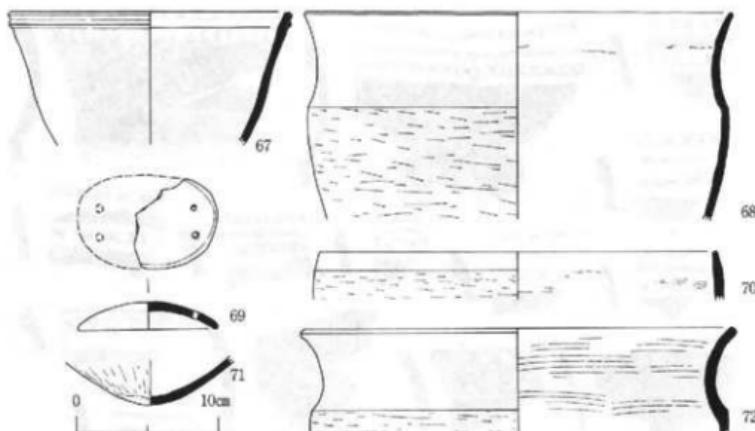
浅鉢H 浅くて肩の張る体部に大きく外反する長い口縁部をもつ。口縁端部は肥厚するものと、しないものがある。内外面ともミガキを施す。滋賀里遺跡では滋賀里Ⅲ～Ⅳ式に属す浅鉢A₁に相当する。大県・恩智遺跡などに類例がある。

縄文IV出土土器（暗黄灰色粘土および上面に營まれたビット・土壤・落ち込み・土壤墓）

柱穴と考えられるビットや土壤内などや包含層から出土した滋賀里Ⅲ b式並行の土器である。出土量は他の時期に比して多くない。比較的まとまって出土した遺構は、土壤34である。

深鉢はA・B・F・H・Iの計27点出土した。浅鉢はB・C₁・C₂・D・E・Hの計19点が認められる。壺は存在しない。出土土器全体から見た割合は、深鉢56.8%、浅鉢43.2%である。

深鉢の内訳は、Aが最も多く52%次いでFが28%、B・H 8%、Iが4%である。少量なが



第28図 縄文時代晩期土器（縄文Ⅲ・土壤22）実測図

ら刻目をもたない凸帯をもつHと、前代からの系譜を引くIの存在が注目される。

浅鉢はC₁が最も多く36.8%次いでDが26.3%、B15.8%、C₂10.5%、E・H5.3%と続く。

馬場川遺跡出土品と形態の類似した黒色磨研でベンガラを塗布したEが認められる。

胎土は深鉢では在地産が92%、他地域産が8.0%、浅鉢は在地産が73.7%、他地域産が26.3%である。深鉢・浅鉢を合わせた場合は、在地産84.1%、他地域産15.9%となる。深鉢は大半が在地産であることに注意したい。

縄文Ⅲ出土土器（黒灰色粘土および上面に営まれた溝・土壤・黒灰色砂質土下層）

包含層と溝や土壤内などから出土した土器である。比較的まとまって出土した遺構は溝35・土壤22で、これらの遺構のベースとなっている黒灰色粘土層からの出土も多い。

深鉢は、A・B・C・D・F・G₁・G₂・H・I、浅鉢はA・B・C₁・C₂・D・E・G・Hが存在する。壺は認められない。

黒灰色粘土層の出土土器全体（277点）から見た割合は、深鉢65.6%、浅鉢34%、蓋0.4%である。溝35出土品（55点）では、深鉢72.6%、浅鉢27.4%である。蓋は認められない。両者とも7割前後が深鉢であることを示している。蓋については存在していることは確実であるが主要な器形ではない。

以下、まとまって土器の出土した黒灰色粘土層と溝35の出土品の器種構成について述べるが最初に粘土層、次の（ ）内に溝35における割合を記す。溝35はやや新しい傾向を示す。

深鉢は182（40）点出土している。内訳は、Aが最も多く43.4（47.5）%、次いでCが24

（30）%、H9.9（2.5）%、F8.3（0）%、G₂8.3（2.5）%、B3.8（12.5）%、G₁2.2（0）



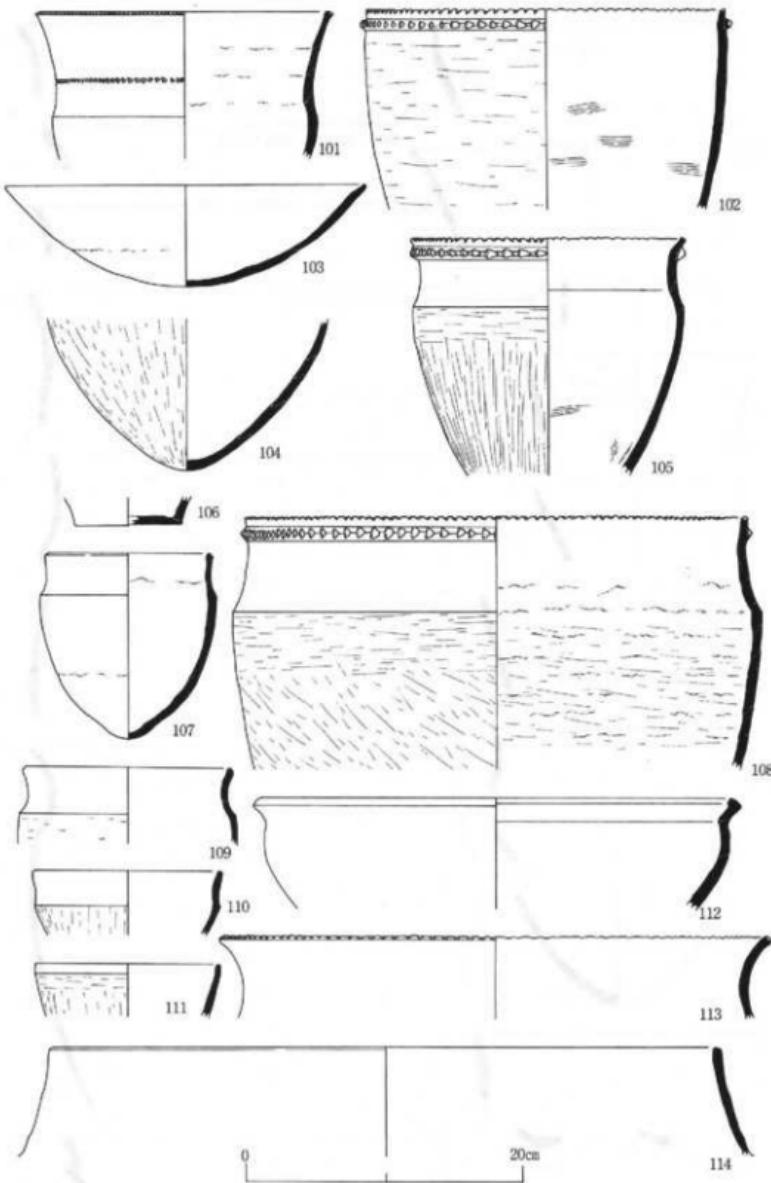
第29図 縄文時代晩期土器（縄文Ⅲ・土壤21・22、溝35）拓影・断面図

%、D0.5 (2.5) %である。1条の刻目凸帯を施すC・D・Gが出現している。主体をなす器形はA・Cである。両者、合わせると7割前後にのぼることから明らかである。

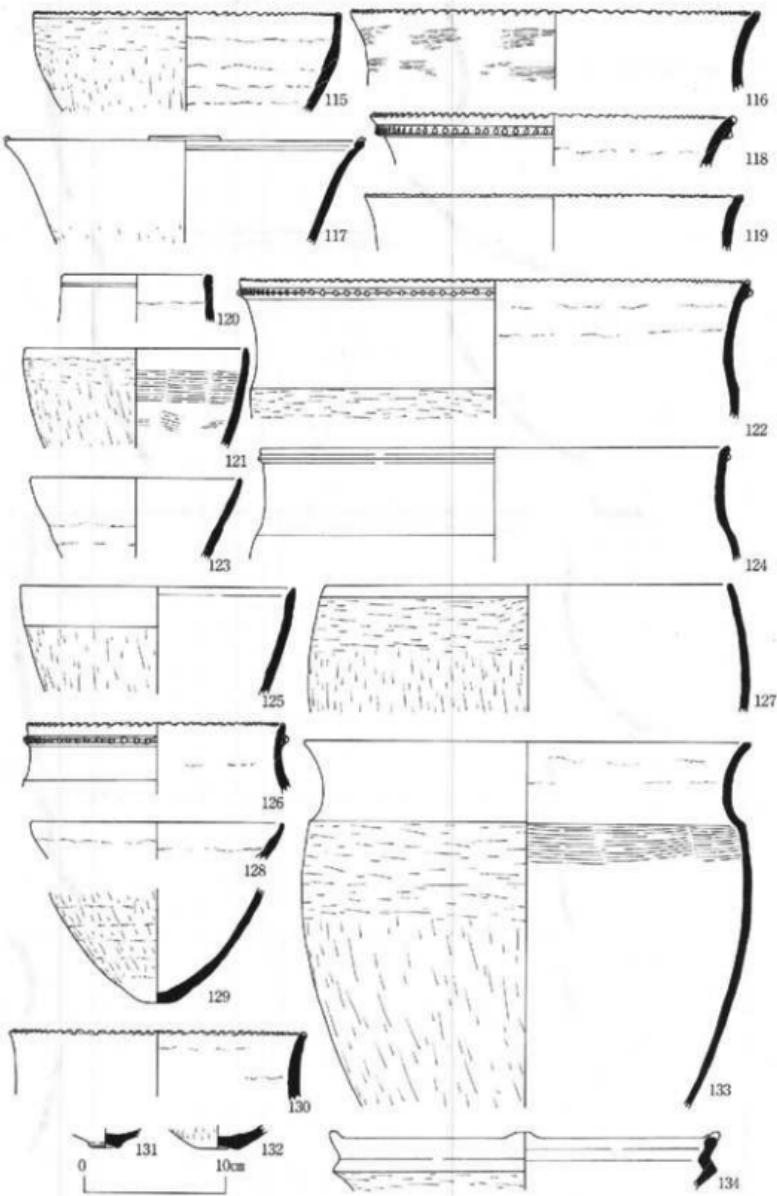
前代からの系譜を引くAがまだ5割近くと最大の比率を占めているものの、刻目凸帯をもつC・D・Gの出現が注目される。特にCは、約2～3割を占め主要なタイプの一つとなっている。また、口縁端部に刻目を施さないDも少数ながら存在する。

浅鉢は93 (15) 点出土している。C₁が最も多く41.9 (40) %次いでEが30.1 (13.3) %、B6.5 (26.7) %、H6.5 (0) %、D5.4 (13.3) %、A3.2 (0) %、その他3.2 (0) % G2.1 (0) %、C₁1.1 (6.7) %と続く。

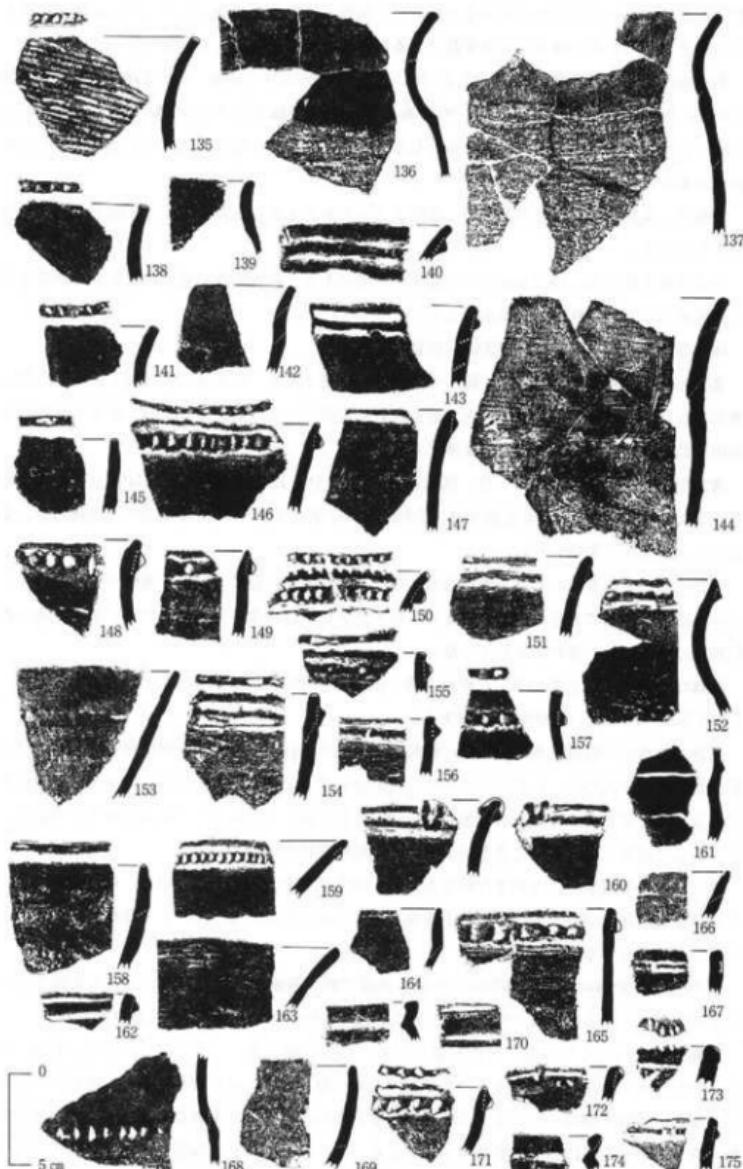
浅鉢は、黒灰色粘土層と溝29とも最も単純な器形であるC₁が約4割と変わらないが、他は



第30図 縄文時代晩期土器（縄文Ⅲ・溝35）実測図



第31図 縄文時代晩期土器（縄文Ⅲ・黒灰色粘土）実測図



第32図 繩文時代晩期土器（縄文Ⅲ・黒灰色粘土）拓影・断面図

割合が異なる。しかしEを合わせると前者が7割強、後者が5割強となりこの2器種が主体を占めると考えられる。縄文IVでは少数であるEが主要なタイプとして存在している。

胎土は深鉢では在地産が88.1(87.5)%、他地域産が11.9(12.5)%、浅鉢では在地産が91.4(93.3)%、他地域産が8.6(6.7)%である。深鉢・浅鉢を合わせた場合は、在地産89.2(89.1)%、他地域産10.8(10.9)%となる。縄文IVと異なり深鉢、浅鉢ともに在地産が約9割を占める点を注意しておきたい。

底部は、丸底がほとんどであるが一部凹底ぎみのものも見られる。また、平底が溝35で1点出土している。

黒灰色粘土層から、稻であることは確実で玄米である可能性の高い種子圧痕をもつ体部片が1点認められた。(那須氏の教示による)

縄文II出土土器(溝33および黒灰色砂質土)

溝33と上部を覆う黒灰色砂質土層から出土した土器である。出土量は他に比して多い。特に溝33からは、今回検出した遺構の中で最も良好な資料が出土した。以下では、溝33と同砂質土層出土品についてそれぞれ概要を説明する。

溝33出土土器 深鉢は、A~H、浅鉢はC₁・C₂・D・Eが存在する。壺はA~Cの全てが存在する。この遺構の出土土器全体(129点)から見た割合は、深鉢66.6%、浅鉢31%、壺2.4%、蓋0.8%である。

壺は、出現するもののまだ主要な器形とはなっていない。蓋についても前代と同じく存在していることは確実であるとするに留まる。以下、タイプ毎に深鉢・浅鉢の比率を示す。壺・蓋は検討できるだけの量が出土していない。

深鉢は、86点出土している。Cが最も多く61.6%、次いでAが17.4%、G6.9%、B・H・D各3.5%、E・F・G₂が各1.2%である。

深鉢は船橋式の特徴である口縁部と肩部に各1条の刻目凸帯を施すEが出現している。Cが約6割と主体を占める。Aがそれにつぎ、两者合わせると約8割にのぼりこの2タイプを中心であることを示している。Aの形態は、縄文IV~IIIと新しくなるほど口縁部の外弯度を弱めるが、ここでは更に弱まり直立ぎみになる。Bの形態変化も同様である。

前代からの形譜を引くAがまだ約2割弱と一定の比率を占めているものの、刻目凸帯をもつCが縄文IIIに比して約6割と倍増し主体を占める点が注目される。また、2条凸帯をもつEも少数ながら存在する。

Cの中には図136のように頸部にヘラ描き沈線で粗い鋸歯文を描く瀬戸内地方の影響を受けたものが認められる。Hは、図105のように波状口縁をもつもの的存在が注目される。

浅鉢は42点出土している。前代と変わらずC₁が50%最も多い。次いでEが25%、D22.5%、C₂2.5%と続く。C₁が5割と主要なタイプである。D・Eも、两者合わせると5割近くを占めこの3者が浅鉢を構成していると言って差し支えない。縄文IIIで主要なタイプとなったEと少数存在したDがこの段階で主要なタイプとなる。D・Eいずれも口縁部に凸帯を施すタイプで



第33図 縄文時代晩期土器（縄文Ⅲ・黒灰色砂質土下層）拓影・断面図

ある。深鉢と共に浅鉢も、凸縁文をもつものが中心になることができる。

胎土は深鉢は在地産が91.9%、他地域産が8.1%、浅鉢は在地産が83.3%、他地域産が16.7%である。深鉢・浅鉢を合わせた場合は、在地産89.1%、他地域産10.9%となる。縄文Ⅲと同じく深鉢・浅鉢ともに在地産が約9割を占める。

底部は丸底が多いが、丸底に粘土紐を貼り付け平底とするものや円板貼り付けのものが存在する。丸底と平底の割合は約7対3である。

実用品とは考えられないミニチュアの鉢も認められる。

玄米（稻であることは確実）と綠豆の半割れの可能性の高い種子圧痕をもつ体部片が、各1点認められた。（那須氏の教示による。）

黒灰色砂質土出土土器 溝33を覆う包含層出土品である。深鉢はA～D、F～I、浅鉢はA～Hが存在する。壺は口縁部外面に刻目がない1条の凸縁を巡らすBが1点存在する。

この層の出土土器全体（317点）から見た器種構成の割合は、深鉢62.2%、浅鉢37.5%、壺0.3%、である。

壺は、存在するもののまだ主要な器形とはなっていない。蓋は出土していない。

以下、各タイプ毎に深鉢・浅鉢について比率を示す。壺は検討するだけの量がない。

深鉢は、197点出土している。Aが最も多く38.1%、次いでCが27.9%、F14.7%、B6.6%、G₁・H各4.6%、D・G₂各1.5%、I0.5%である。

溝33と異なりAとCの比率が逆転している。また、Eが現われていないが口縁部で個体数を数えたためで、図335のように体部片が見られるため存在することは確実である。縄文Ⅳで少量存在したIが1点認められるが縄文Ⅲでは存在せず混入と考える。

AとCの比率の逆転もAの中に混入品を含むためと思われる。おそらくこの段階のAの比率は、縄文Ⅲと溝30の状況からみてCよりは低くなると考えられる。同様の理由でFももう少し低くなるであろう。

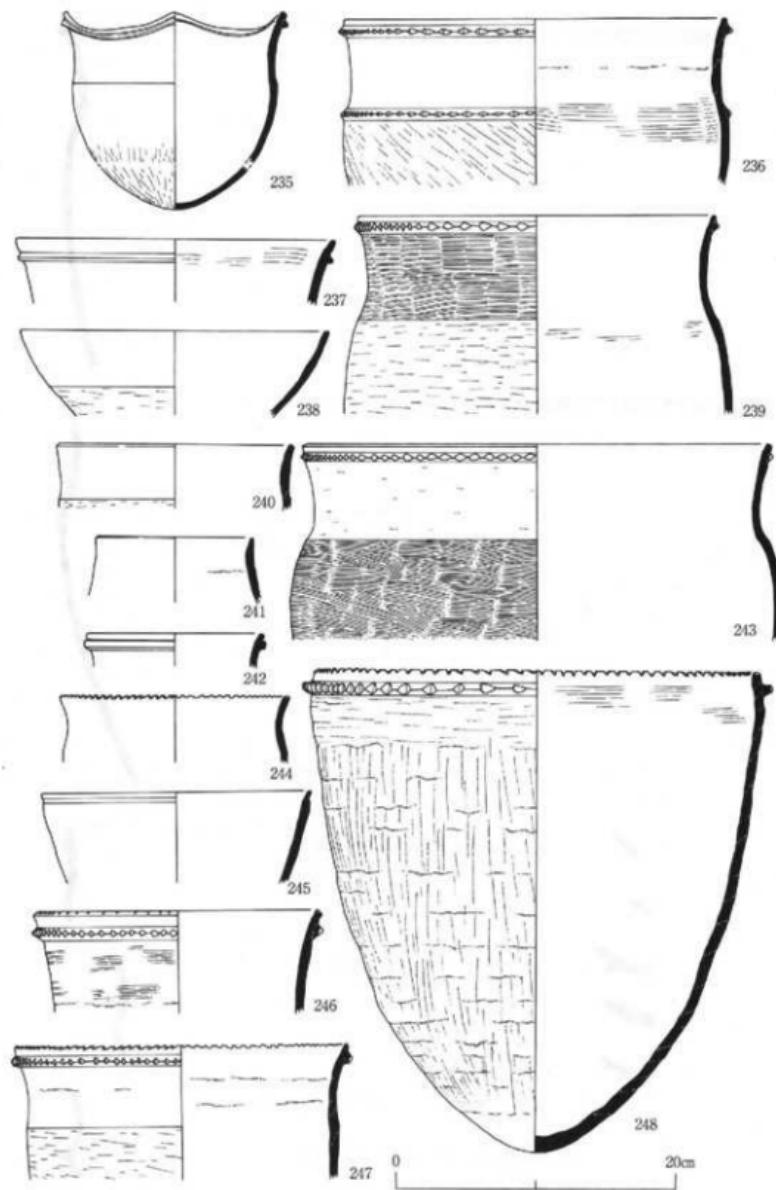
しかしA・C合わせると深鉢の約7割にのぼり、この2タイプを中心であることに変わりはない。A・Bの形態は、溝33と同じく口縁部が直立ぎみになるものがかなり見られる。図310は、直立ぎみに外反する口縁部と肩部の境に、2条のヘラ描き沈線を施していく肩部の縁を除けば前期弥生土器の壺を彷彿とさせる。

Cの中には図292・348などのように肩部に半截竹管を連続して押捺する瀬戸内地方の影響を受けたものが認められる。

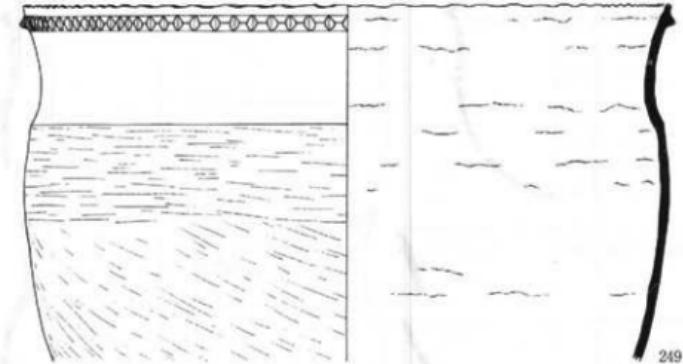
浅鉢は119点出土している。前代と変わらずC₁が37.8%で最も多い。次いでEが26.9%、D11.8%、A5.9%、B・H各5.0%、F・その他2.5%、C₂1.7%、G0.9%と続く。

C₁が約4割と最も多い。溝33でC₁とともに中心を占めたD・Eは、両者合わせると4割弱である。この3者が浅鉢を構成している傾向は変わらないが、浅鉢の各タイプが含まれており、溝33に対して比率が下がる。

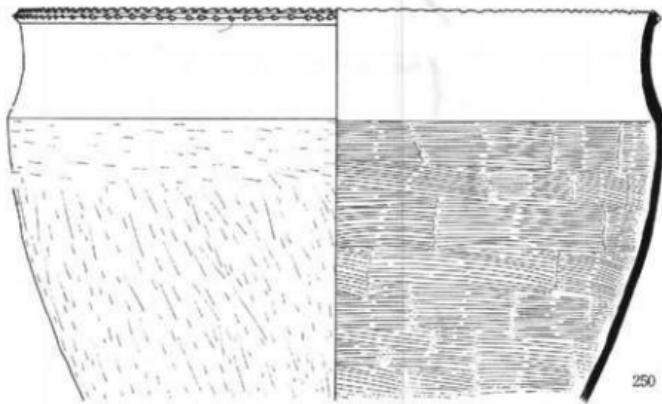
深鉢で述べたように、包含層出土品のために混入品が含まれていることを示しているのであ



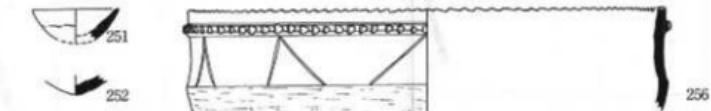
第34図 縄文時代晩期土器（縄文II・満33）実測図



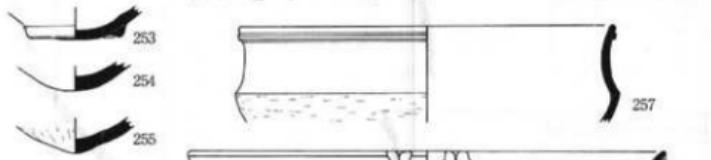
249



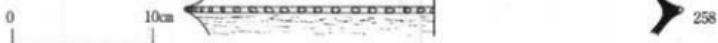
250



256

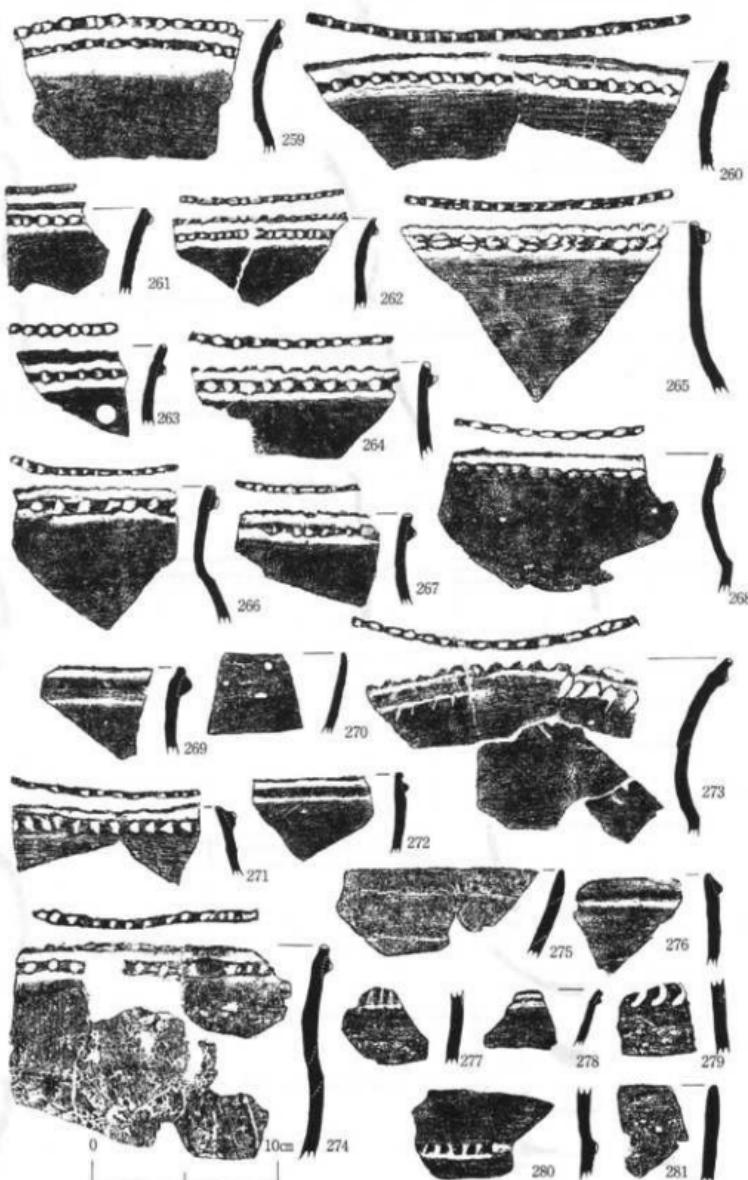


257

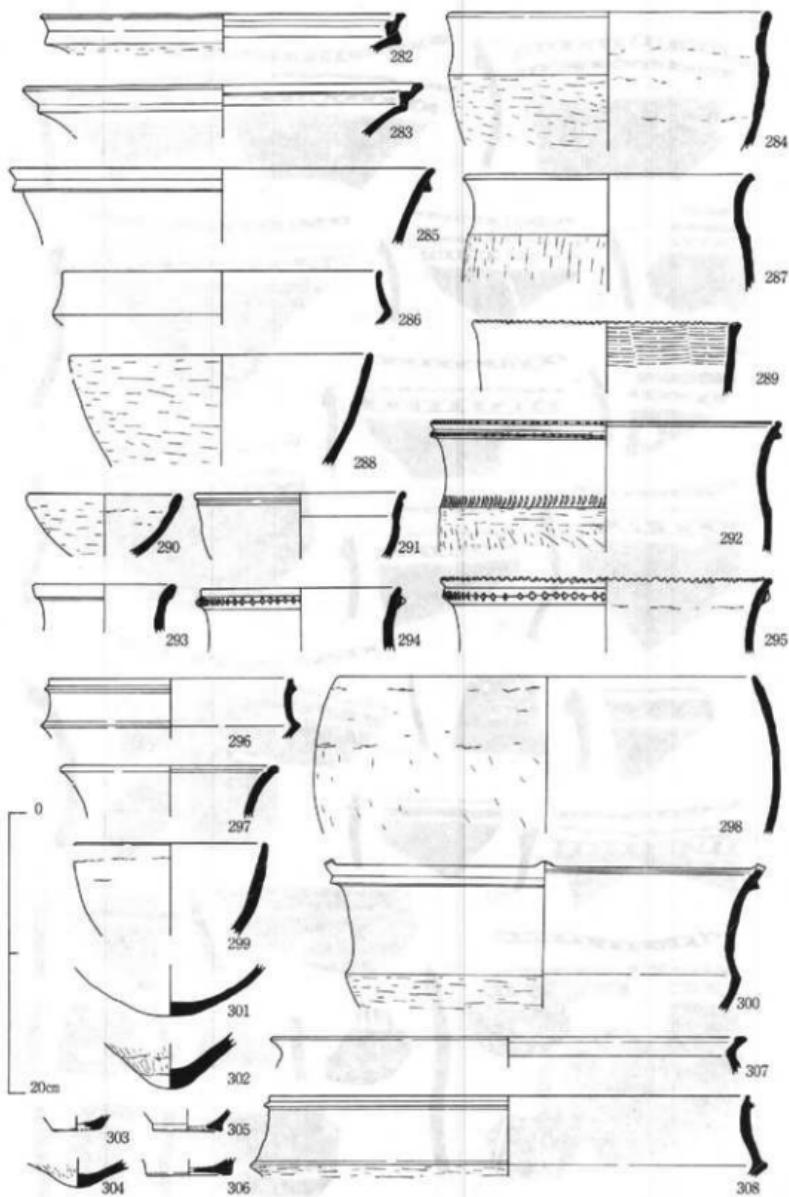


258

第35図 縄文時代晩期土器（縄文II・溝33）実測図



第36図 縄文時代晩期土器（縄文II・溝33）実測図



第37図 縄文時代晩期土器（縄文Ⅱ・黒灰色砂質土）実測図



第38図 縄文時代晩期土器（縄文II・黒灰色砂質土）拓影・断面図



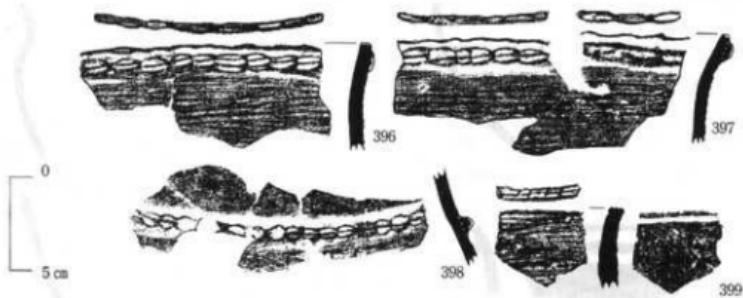
第39図 縄文時代晩期土器（縄文I・黄灰色シルト）拓影・断面図

ろう。したがって、混入品を除いて考えれば溝33と同様の器種・形態をもつ土器が出土しているといえるであろう。

Eの中には、図296のように口縁部だけでなく肩部にも刻目のない凸帯を巡らし2条凸帯とするものがある。

胎土は、深鉢は在地産が88.3%、他地域産が11.7%、浅鉢は在地産が86.7%、他地域産が13.3%である。深鉢・浅鉢を合わせた場合は、在地産87.7%、他地域産12.3%となる。溝33と同じく深鉢・浅鉢ともに在地産が約9割を占める。

底部は、丸底がほとんどであるが、丸底に粘土絆を貼り付け平底とするものも存在する。溝33に比して平底が目につく。



第40図 繩文時代晩期土器（縄文II・東海地方系土器）拓影・断面図

縄文I出土土器（黄灰色シルト）

黒灰色砂質土の上部に堆積した包含層である。土器の出土量は多くない。

深鉢はA・B・C・F・G₁・G₂・Hの計45点出土した。浅鉢はA・B・C₁・D・E・H・その他の計19点が認められる。壺Aと蓋が少量存在する。出土土器全体から見た割合は、深鉢67.2%、浅鉢28.3%、壺1.5%、蓋0.8%である。

深鉢の内訳は、Cが最も多く44.5%次いでAが31.1%、F・H各8.9%、B・G₁・G₂各2.2%である。Eの数値は上げていないが、図385のように体部片が存在している。

浅鉢は、Eが最も多く36.8%次いでDが26.3%、C21.0%、B5.5%、A5.3%と続く。

胎土は深鉢では在地産が91%、他地域産が9.0%、浅鉢は在地産が72%、他地域産が28%である。深鉢・浅鉢を合わせた場合は、在地産85%、他地域産15%となる。深鉢と浅鉢を比べた場合、深鉢の方が在地産の比率が高いことに注意したい。

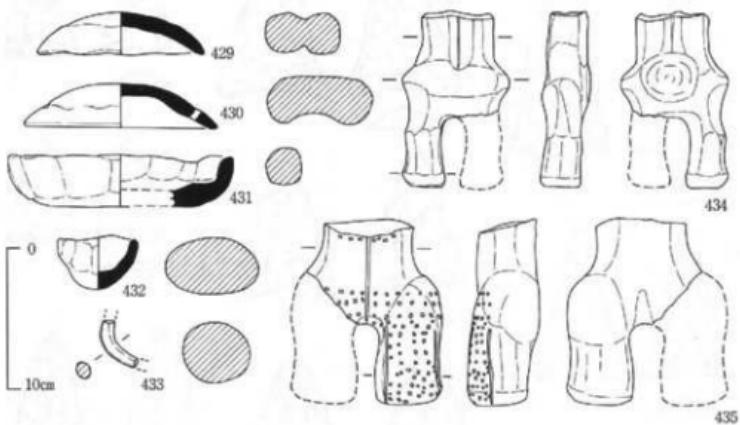
東海地方系土器

第II調査区、黒灰色砂質土層内より口縁部外面を2枚貝で調整し凸帯の刻みも同様に施す2点と、凸帯はもたないが外面を同様に調整し口縁部内面に1条の棒状工具による沈線を施すもの1点、計3点の東海地方系の縄文時代晩期土器が出土している。図396・397は在地産で同一個体の可能性が高いと考えられる。図398・399は他地域産である。これらの土器と伴出したものは、上述のように滋賀里IV～Vの土器である。

一層下層の上面より切り込んだ溝33からは、滋賀里IVに属す土器と、2条凸帯をもって特徴づけられる滋賀里V式（船橋式）に属す土器が共存して出土している。黒灰色砂質土、直上の黄灰色シルト層より滋賀里IV～V式、もう一層上の暗黄褐色砂質土層は第I様式中～新段階に属す土器の包含層であることから、これらの土器が、滋賀里V式初頭に堆積した黒灰色砂質土層中に包含されていたことはまちがいない。しかし、同一包含層中より出土した土器は、前記の如く滋賀里IV～V式であることから、この土器は、厳密には滋賀里IV（おそらくは最終段階）～V式初頭に属すと言うことができる。さて、東海地方でこのタイプの土器は、馬見塚F



第41図 縄文時代晩期土器（擾乱）実測図、拓影・断面図



第42図 縄文時代晩期土製品実測図

地点に見ることができる。同地方ではこの時期の土器編年については、いくつかの意見が存在するようであるが大きく見れば五貫森式に相当すると考える。

土製品

土偶やミニチュア土器、用途不明土製品が第II調査区の造構や包含層内、あるいは上層の別時代の造構や包含層より少量出土した。詳細は、観察表(表3)を参照されたい。

土偶 4点出土している。いずれも在地産である。図434は体部下半の破片で右足を欠失する。胸部の表裏に縦方向の窪みを付けている。腰に窪みを付け尻を表現している。

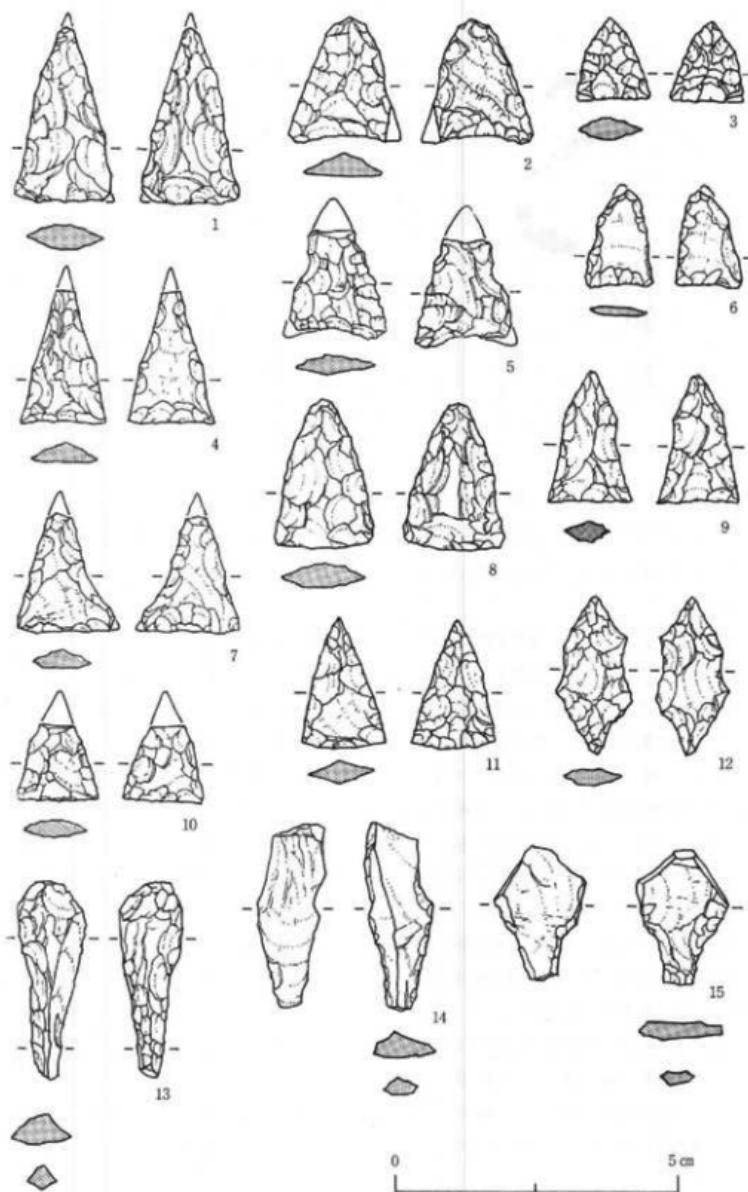
図435は、同じく体部下半の破片である。左足を欠失する。腹部を除く腰から脚と体部上半の表面に刺突文を施す。腰から下の刺突文はあたかもズボンを表現したかのように見える。体部中央に1条のヘラ描き沈線を縱に施している。2点とも黒灰色砂質土層出土。他に体部(後世造構)と脚部(黒灰色砂質土層)の破片が各1点存在する。

ミニチュア土器 すでに満33出土土器で1点説明したが他に1点、黒灰色砂質土層から出土した鉢がある。半球状の手づくねで製作されたものである。在地産。

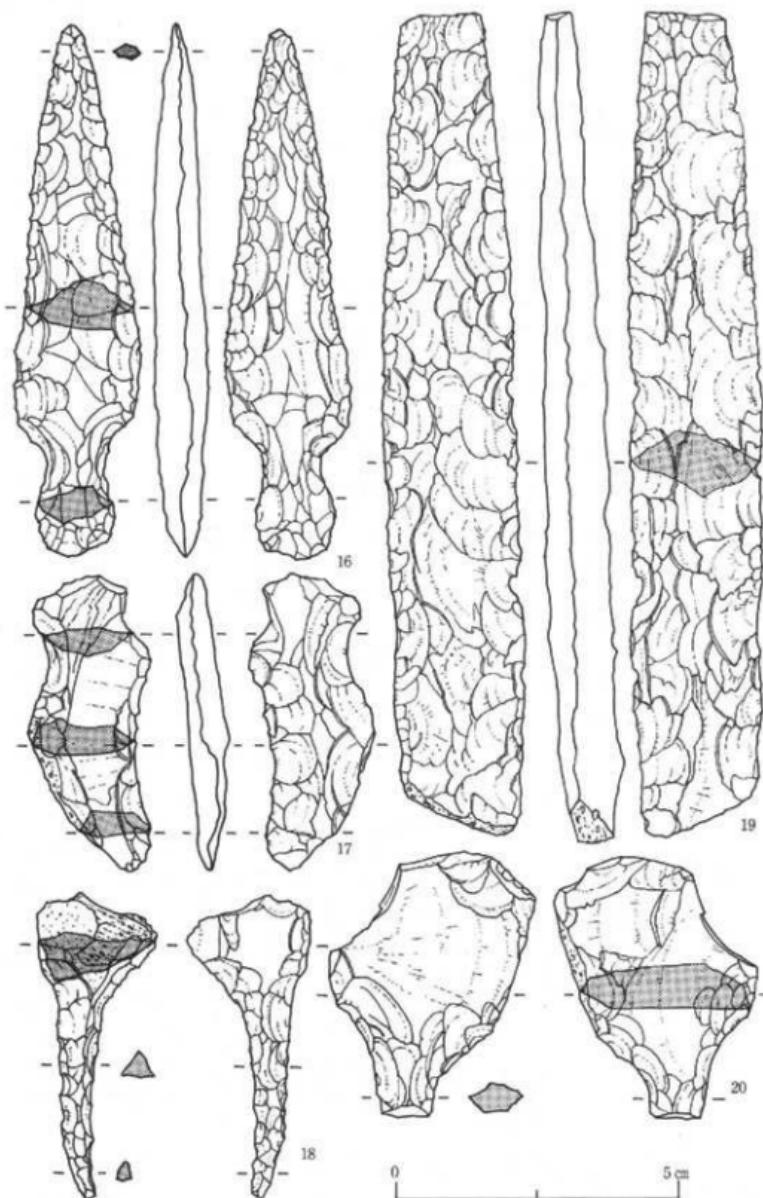
図431は皿状のものである。蓋の可能性もあるが、形態が少し異なるため、この中に含めた。黒灰色砂質土層出土。在地産。

用途不明土製品 図433はリング状になると考えられるものである。長原遺跡に類例が認められる。黒灰色砂質土層出土。在地産。

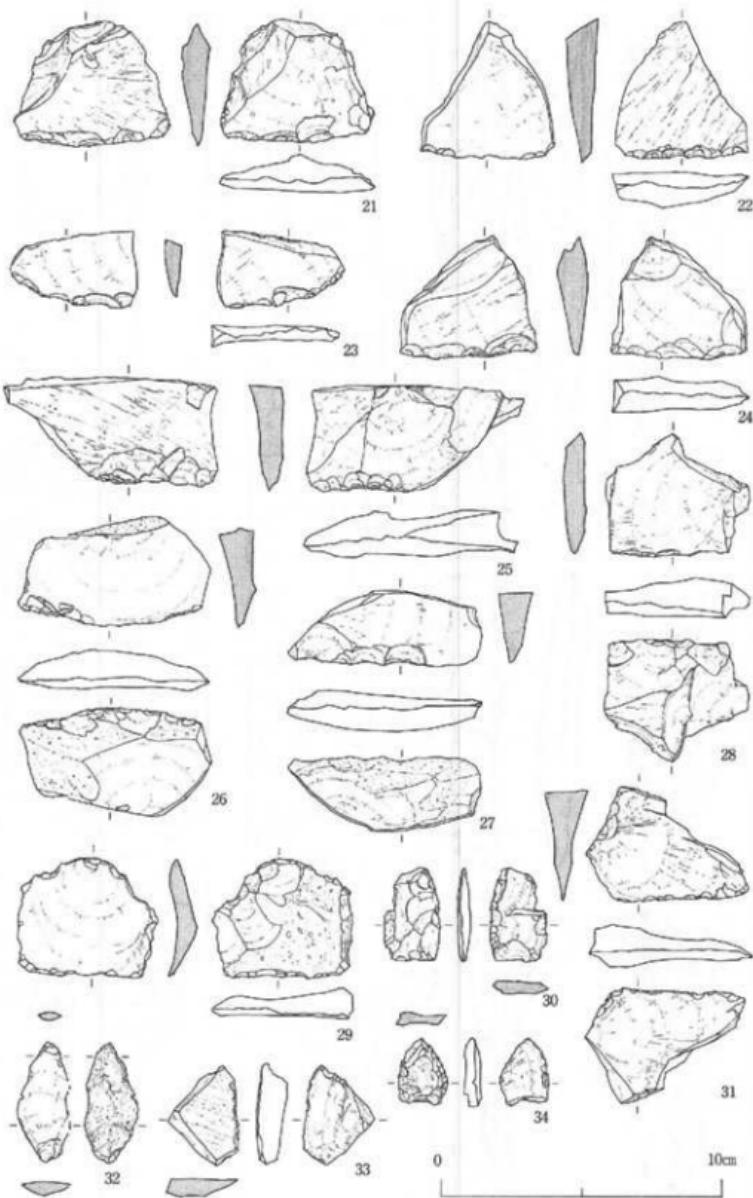
他に黒灰色砂質土下層から鬲の脚状を呈する在地産のもの、ピット内から孤状に刻目を施すもの(在地産)などが出土しているが、いずれも少破片で全形を知ることができない。



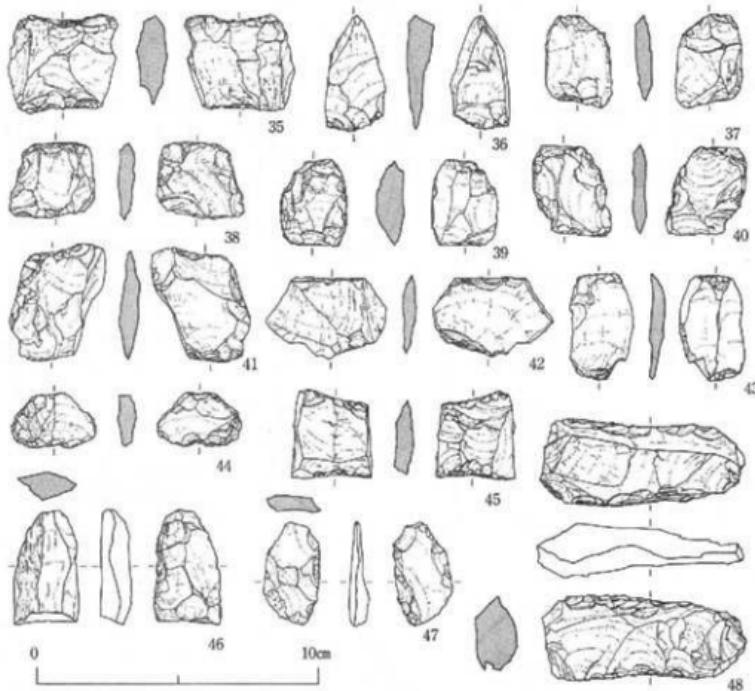
第43図 純文時代晩期石器（石鏃・石錐）実測図



第44図 繩文・弥生時代石器（石錐・石匙・打製尖頭器・打製石劍）実測図



第45図 繩文時代晚期石器（直刀削器他）実測図



第46図 縄文時代晩期石器（ピエス・エスキーエ他）実測図

石製品

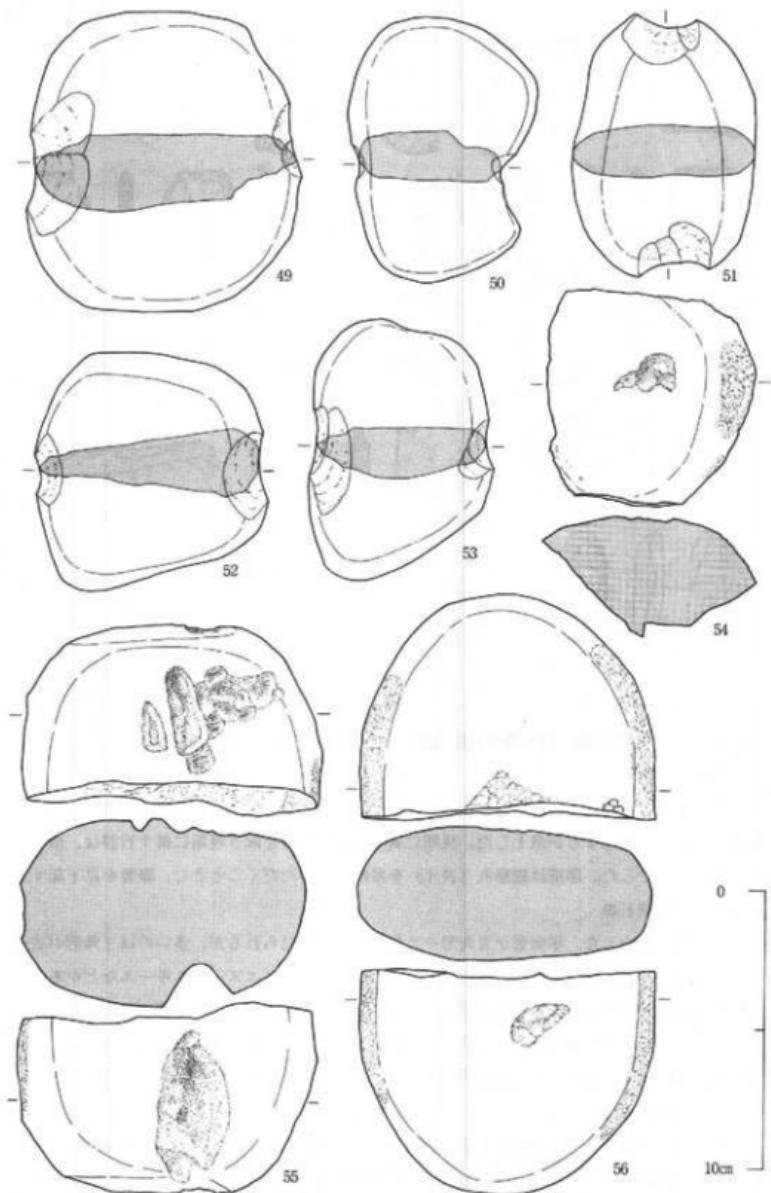
石錐・石錐・直刃削器・削器・尖頭器などのサヌカイト製石器と石錐・敲石・磨製石斧・打製石斧・石皿・磨石などが出土した。後期に属す少量のものを除き晩期に属す石器は、全て第Ⅱ調査区で出土した。詳細は観察表（表4）を参照していただくこととし、概要を以下記す。

サヌカイト製石器

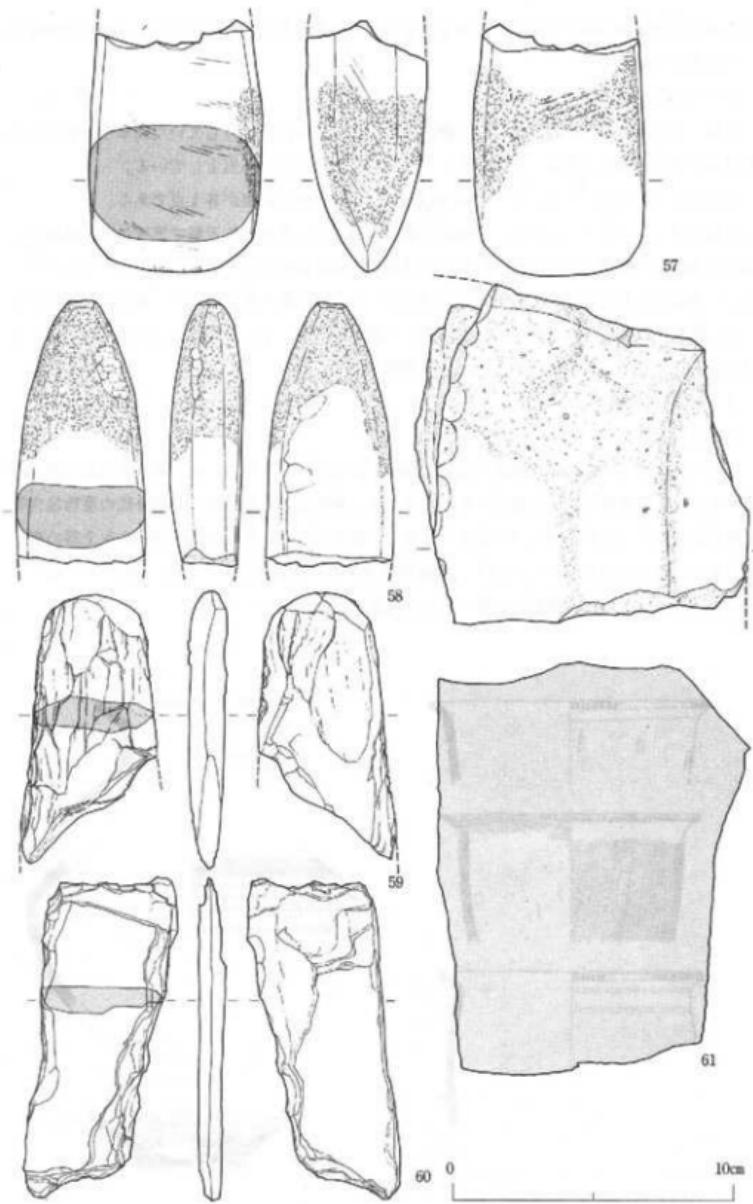
石錐 12点出土した。平面形が五角形や六角形のものも見られるが、多いのは三角形の底辺がやや凹むものである。石錐は、5点出土した。他に削器やピエス・エスキーエなどがある。

打製尖頭器 図16は、晩期の包含層を切って造られた方形周溝墓1の周溝内から出土した。所属時期は、縄文時代晩期と弥生時代中期のいずれかである。余り類例のない形態のため、いずれの時期か決しかねる。ここで説明したが、基部の形態などから図19のような弥生時代の尖頭器の一変形の可能性が高い。

黒灰色粘土・溝33・黒灰色砂質土層（縄文Ⅲ～Ⅱ）から出土したサヌカイト製品や剥片を、それぞれ約50点づつ計143点、無作為に抽出し石材産地の分析を依頼した。結果は時期により



第47図 縄文時代後・晚期石器（石錘・敲石）実測図



第48図 縄文時代後・晩期石器（磨製石斧・打製石斧・石皿）実測図

若干異なるが、香川県の金山産の石材が約3～8%含まれることが判明した。詳細は附編IV章—5を参照されたい。

サヌカイト製以外の石器

石錘 5点出土している。偏平な円錐の両端を縄を掛るために打ち欠いた簡単なものである。石材はいずれも砂岩である。黒灰色粘土・黒灰色砂質土などから出土している。

磨製石斧 2点出土している。変質輝緑岩製と変質斑れい岩製が各1点である。

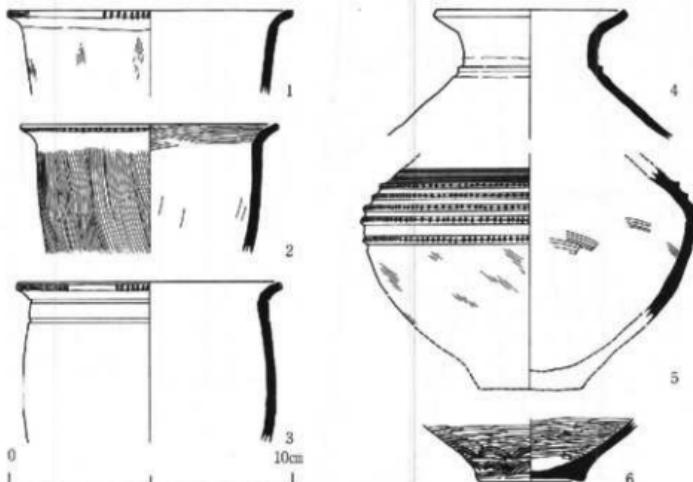
打製石斧 2点出土している。図59は刃部を欠失する。黒色千枚岩製で黒灰色粘土層出土。図60は角閃石片岩製で溝33出土。打製石斧は周辺の同時期の遺跡からは、ほとんど出土していない。本遺跡においても従前の出土品ではない。当時の生業を考えるうえで重要な資料である。

他に戴石 3点以上（砂岩製）石皿 2点以上（砂岩製）磨石などがある。この他、出土した石材について一覧表（表9）にまとめたので参考されたい。

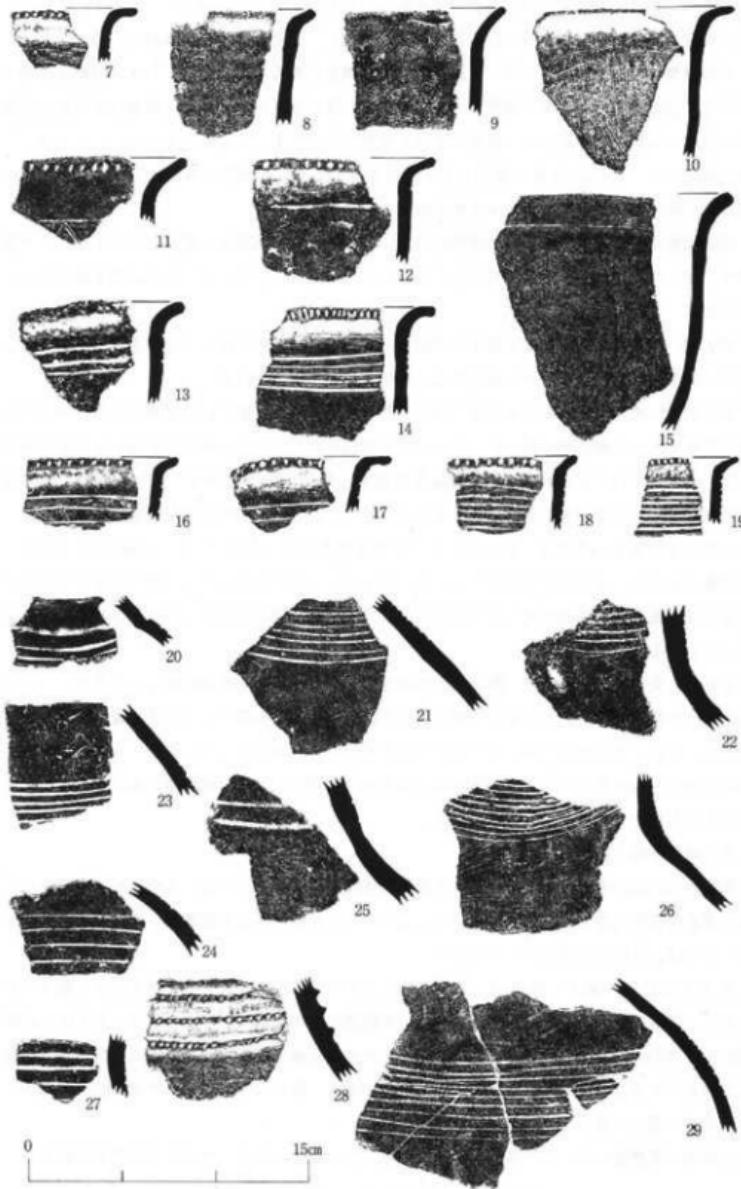
3. 弥生時代の遺物

弥生時代前期土器

今回の調査では、弥生時代前期の遺構を検出できなかったものの、第II調査区の暗黄褐色砂質土層が同期の遺物包含層に相当する。ここでは、本層出土遺物のほか古墳時代の遺物包含層や擾乱部分に混入した資料を含め記述してゆく。出土している資料は、同期の弥生土器の壺・壺がある。壺は口縁部が短く外反し、倒鐘形を呈する。壺は安定した平底の底部から大きく張った体部につづく。口縁部は、強く外反し端部に面をもつ。



第49図 弥生時代前期土器実測図



第50図 弥生時代前期土器拓影・断面図

土器の胎土は、肉眼で角閃石を多量に観察できるものと角閃石をほとんど含まず、チャート粒が多量に混じるものがある。数量的には前者が多く、後者の出土量は極めて少ない。

外面調整には、ナデ調整・ハケメ調整・ミガキ調整がある。ナデ調整・ハケメ調整は、壺・壺などに認められる。ミガキ調整は、壺・壺用蓋・鉢に施される。ハケメ調整は成形後、器体を平滑にする調整法で後のナデ調整やミガキ調整によって消される場合もある。ハケメは、全体に細かく6~7条/cm程度で体部上半で縦位から左上がりの斜位の方向に施す。また、壺の口縁部内面には、横方向のハケメ調整を加えるものがある。

内面調整は、外面調整と同様の調整法が用いられる。内面調整は、原則として丁寧にナデ調整するが、ハケメ調整後ナデ調整を加えるもの、ナデ調整の後さらにミガキ調整を加えるものがある。

器表面の調整終了後、文様を施すものがある。文様には、刻み目・ヘラ描沈線文・削り出し突帯・貼り付け突帯のほかヘラ描斜線文・円弧文などが認められる。

刻み目は、壺口縁部端面や壺の貼り付け突帯上に施される。壺の口縁部端面には、全周に刻み目を施すものと断続的に数ブロックに分けて刻むものとがある。刻み目を施す際の使用原体には、ヘラ状工具によるものとハケ原体を利用するものの2種類がある。壺口縁端部では、端面に対して幅狭に直交するように刻むものと端面の上方と下方の両方向から刻む場合がある。

ヘラ描沈線文は、壺頸部・壺頸部および体部最大径部分に認められる。沈線文は、3条以下の少条のものから4条以上の多条のものまで存在する。ヘラ描沈線文は、単独で施文する以外に壺では、他のヘラ描沈線文と壺では削り出し突帯や貼り付け突帯などと組み合わせて装飾することもある。

削り出し突帯は、壺の頸部・体部最大径部分に認められる。突帯は幅狭で高く突出し、突帯上面にヘラ描沈線を加えないもの、幅広で低く扁平なもので突帯上にヘラ描沈線を加えるものがある。なお、壺の中には、これらの文様をまったく施さないものもある。

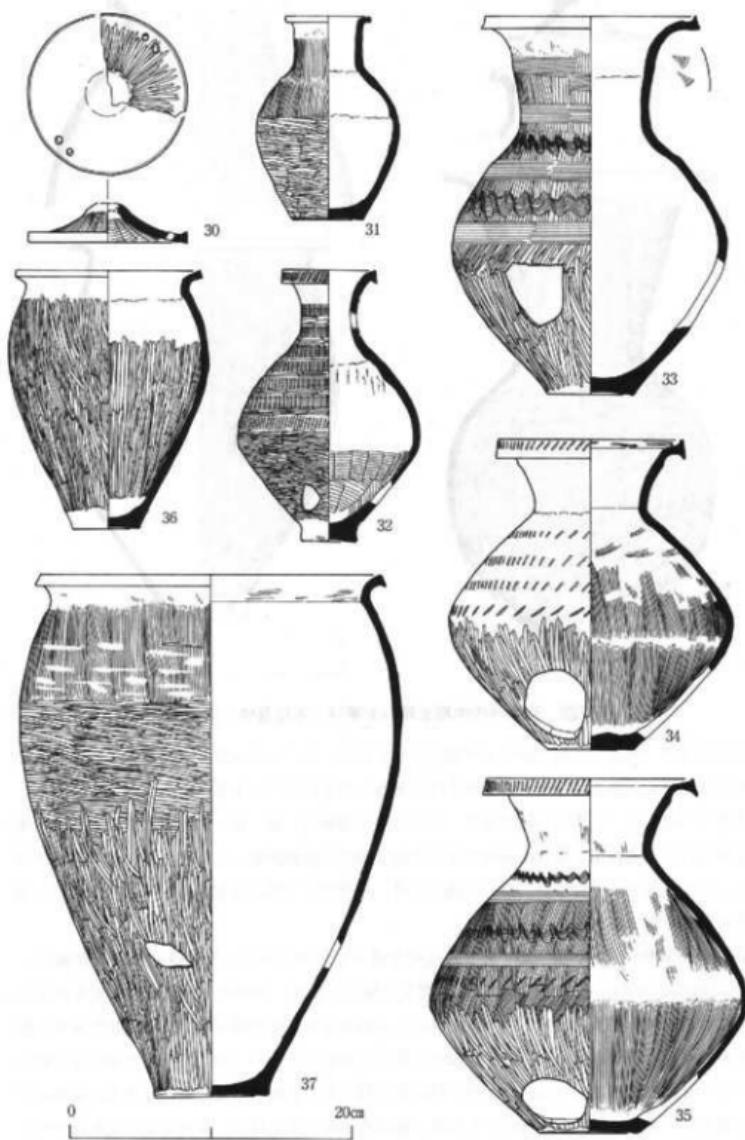
以上のような特徴からこれらの資料は、弥生時代前期の中頃から新段階にかけての時期にあたるものと推定できる。

弥生時代中期土器

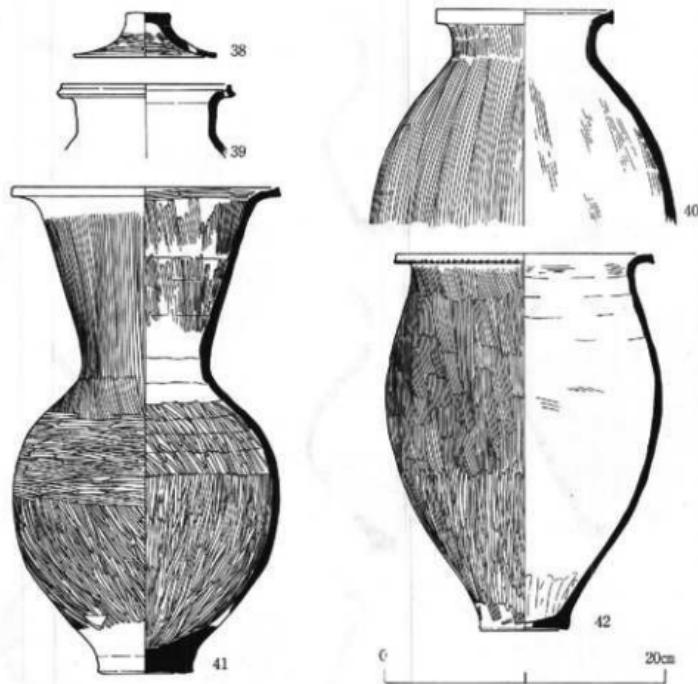
弥生時代中期の土器は、第I調査区土壤・第II調査区溝3・24・32、木棺墓などの遺構内や第I調査区自然流路1から出土している。このうち第II調査区方形周溝墓3南側周溝(溝20-3)からは、良好な資料が得られている。

出土土器には、壺A・B₁・B₂・C・D・E・F・G・H、壺A・B、鉢A・B、蓋A・B、高杯などの器種がある。所属時期は、第II~IV様式のものが認められる。土器の胎土は、肉眼的観察で角閃石を多量に含み茶褐色を呈するものと1mm前後の長石・チャートを含み淡乳白色の色調を呈するものがみられる。前者の出土量が多く、後者は方形周溝墓3南側周溝(溝20-3)出土の壺A・B₁・B₂などに認められる。

内外面の調整法には、ナデ調整・ハケメ調整・ヘラミガキ調整・ヘラケズリ調整がある。□



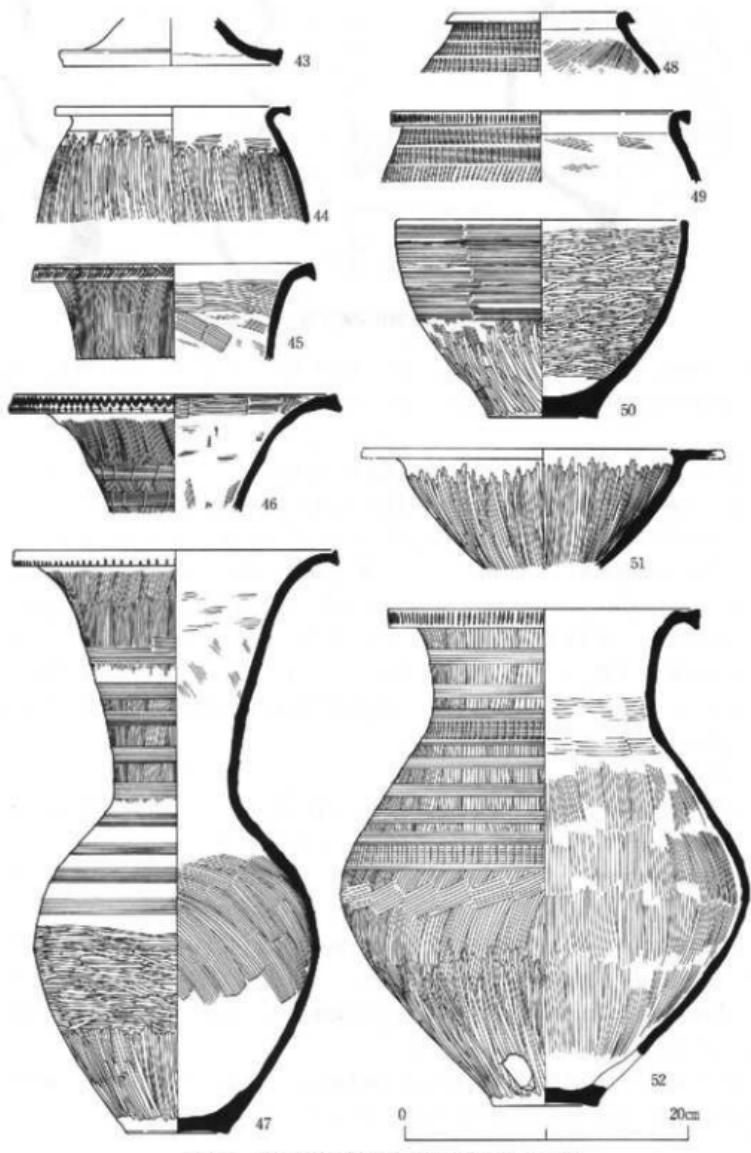
第51図 弥生時代中期土器（方形周溝墓 3 南側周溝）実測図



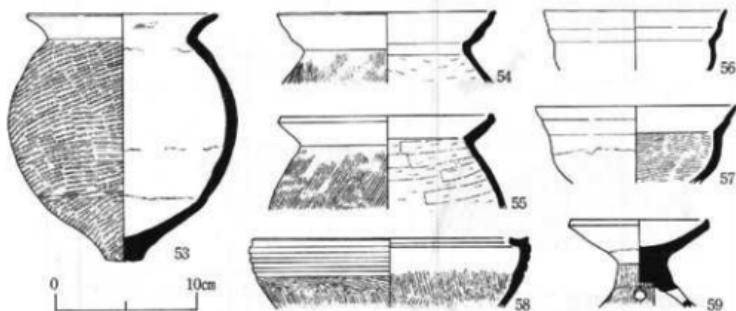
第52図 弥生時代中期土器（土壤14・木棺墓他）実測図

縁部内外面は、例外なく横方向のナデ調整で仕上げている。ハケメ調整は、単独で器面の最終調整として用いられる場合や別の調整手法と重複し消されることもある。ヘラケズリ調整は、壺Aなどの底面に一定方向に施される。ヘラミガキ調整は、壺・鉢・高杯などの貯蔵・供膳用の器種のほか、煮沸用の壺にも多用される手法で器面の最終調整として施され、他の調整手法によって消されることはない。壺Cや鉢Aでは、後述する文様の施文後、さらに文様間にヘラミガキ調整を加える例もある。

器表面の調整終了後、壺・壺・鉢には文様を巡らすものがある。角閃石を含まない壺B・B₁の口縁部端面にはハケ状工具による刺突文を施す。また、口縁部内面には扇形文を加える。さらに頸部から体部上半には、ハケ状工具による刺突文や櫛搔直線文と櫛搔波状文を交互に配するものが認められる。一方、簾状文はどの部位にも施されない。角閃石を胎土中に含む壺C・F・G・Hの口縁部端面には、ハケ状工具による刺突文、羽状列点文、櫛搔波状文、刻み目などを加える。また、頸部から体部上半には、簾状文とハケ状工具による刺突文を組み合わせる



第53図 弥生時代中期土器（自然流路他）実測図



第54図 弥生時代後期～古墳時代前期土器（自然流路他）実測図

もの、縦状文と櫛描直線文を組み合わせるもの、櫛描直線文のみを施すものなどがある。一方、この部位に櫛描波状文を施すものはない。なお、壺A・D・Eには文様をまったく施されない。

壺Aの口縁部端面には、刻み目を連続的に施すものがある。

鉢Aには、櫛描直線文を施す。鉢Bの文様構成は、壺Cと共に通する。

口径約15cmを測る壺Bの内面には、外周に沿って約2cmの幅で煤の付着が認められることから、口径13cm前後の壺にのせて使用したものと推定できる。壺Bは、体部全体に煤の付着が認められる。さらに底部周辺には、二次焼成痕がある。一方、壺Bは、底部周辺に二次焼成痕は認められず、体部上半から体部最大径付近にかけてベルト状に煤が付着する。

方形周溝墓3南側周溝（溝20—3）出土の壺B₁・B₂・C、壺Bは、焼成後の段階で体部下半の1～2ヶ所を打ち欠いている。また、土壤5出土の壺Aや搅乱部分から検出している壺Hには底面に焼成後の段階で穿孔を施している。

弥生時代後期土器

第I・II調査区の自然流路や搅乱などから少量の土器が出土している。第5次調査などで出土したとの同様である。破片が小さく今回は図示していない。

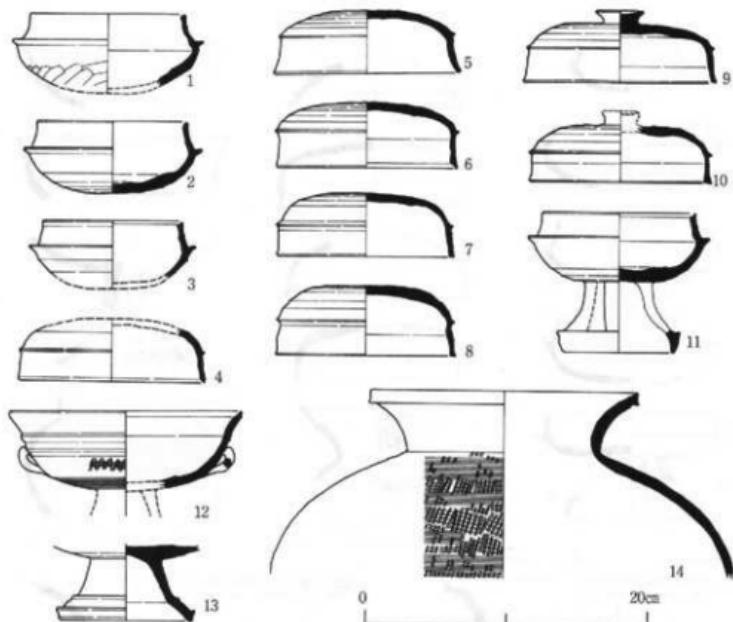
4. 古墳時代の遺物

古墳時代前期土器

古墳時代前期の土器は、両調査区の搅乱や自然流路内より出土している。出土量は少ないので、壺・小型丸底壺・小型浅鉢・小型器台などがある。

（図53）の壺は球形の体部に小さな平底を持つ在地産の土器である。（図54）と同じく庄内式に並行すると考える。

他に布留式でも早い時期に属す壺や小型丸底壺等が出土している。この種の土器は、前述した第7次調査において掘立柱建物等と共に出土している。



第55図 古墳時代中期土器（須恵器）実測図

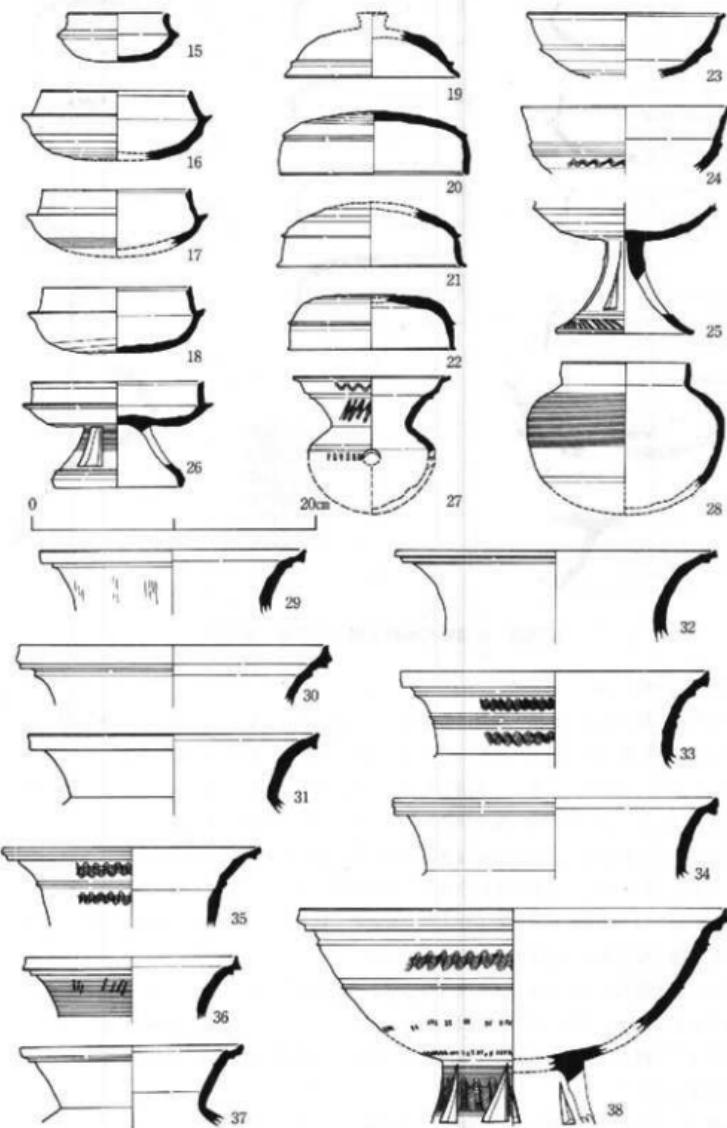
古墳時代中期土器

古墳時代中期の土器は、第Ⅰ調査区第5層・第Ⅱ調査区第3層をベースとする同時期の遺構をはじめ上部を覆う包含層から出土している須恵器・土師器・韓式系土器・陶質土器・製塩土器などがある。このうち、溝5・土壤4などからは、良好な資料が出土しているものの数量的に限定されており、以下では、包含層や擾乱層出土土器をも対象に検討する。

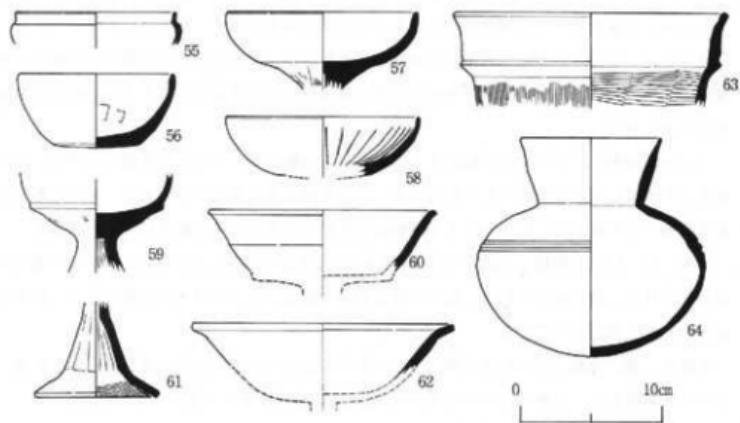
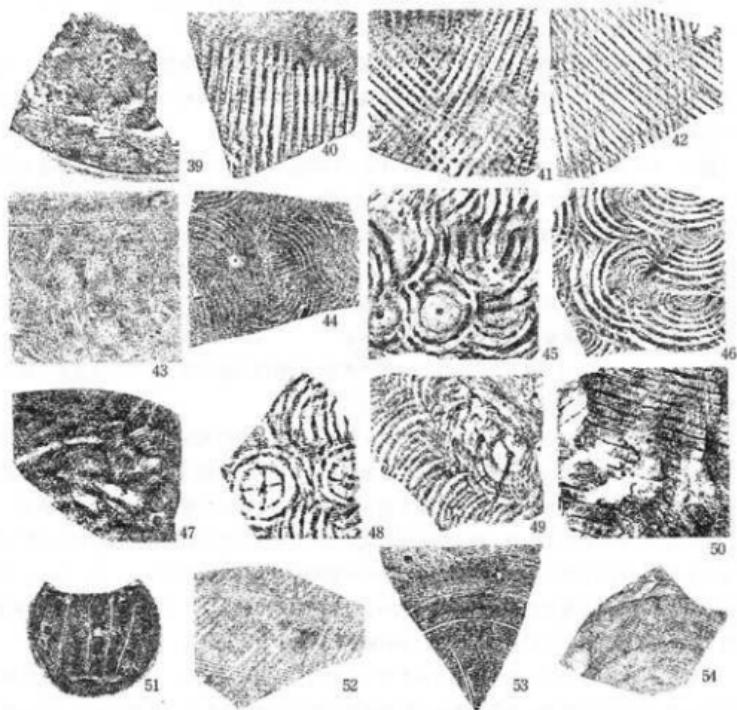
須恵器には、杯、蓋A・B、有蓋高杯、無蓋高杯、甕、器台、壺、甕が認められる。このうち杯と蓋A、有蓋高杯と蓋Bはそれぞれセットをなす。杯には、たちあがりがやや内傾し端部をまるくおさめ、体・底部をまるく仕上げたものと、たちあがりが内傾し端部に内傾する面を構成し、体・底部を丸くおさめる形態のものがある。

蓋Aは、天井部がやや扁平で天井部と口縁部との境界が短く突出し、口縁部が比較的高く、端部を水平な面やわずかに内方へ傾斜気味におさめるものと、天井部が丸みをもち天井部と口縁部を分ける稜が鈍く、口縁部が比較的の低く、端部を内傾気味に仕上げたものや段を構成するものに細分できる。

蓋Bは、天井部が丸みをもち、天井部と口縁部とを区画する稜は、大きく突出し鋭い稜をな



第56図 古墳時代中期土器（須恵器）実測図



第57図 古墳時代中期土器（須恵器）拓影、（土師器）実測図

す。口縁部は短く外方へのび端部を丸く仕上げる。天井部中央には、高い中凹みのつまみのつくるものと扁平な中凹みのつまみのつくものがある。

有蓋高杯は杯に短い脚をつけたもので、脚部には、断面三角形の突帯や透かしを施す。無蓋高杯は杯部が浅く、口縁部と杯底部を区切る稜は、鋭さを欠く。稜線の下位には、1対の飾りつまみをもつものがある。

甕は、短く外上方へひろがる口頭部を有する。口縁端部は、杯・蓋と同様に広い平端面をもつ。体部は、肩に稜をもつ。器台は浅い杯部に、短く外反する口縁部をもつ。口縁端部は、上方へ立ち上がりや複雑化している。細い脚部には、透かしが施される。

壺は、内傾気味に短く立ち上がる直口壺である。壺には大型と中型品があり、いずれも朝顔形に外反する口縁部に断面三角形の突帯や櫛描波状文などで装飾する。口縁端部は、四角くおさめるものや上下に拡張し複雑化したものがある。

これらの須恵器には大体の形をつくる成形の段階、器体内外面を整え仕上げる調整段階、調整終了後の文様の施文などで様々な技法が認められる。

タタキメは、叩き板と当て具を用いて器壁を叩きのばした際の痕跡で壺の口縁部や体部、無蓋高杯の脚部、器台などに認められる。叩き板は木製の原体を使用し、木目に対し平行に数条の溝を刻んだ平行タタキメと直交した溝を刻み、木目の浮き出した擬格子タタキメがある。

当て具は、わずかに突出する面に同心円の溝を加えたもので叩き板による外面からの打圧を受け止める。当て具痕は、後の調整の工程でナデ調整で消されるものが多い。当て具痕には、同心円状のほか第1輪の内側に十字形の刻み目を施すもの（車輪文）や直線状の刻みが第2輪以上にのびるもの、同心円状ではなく、平行線状のものも認められる。

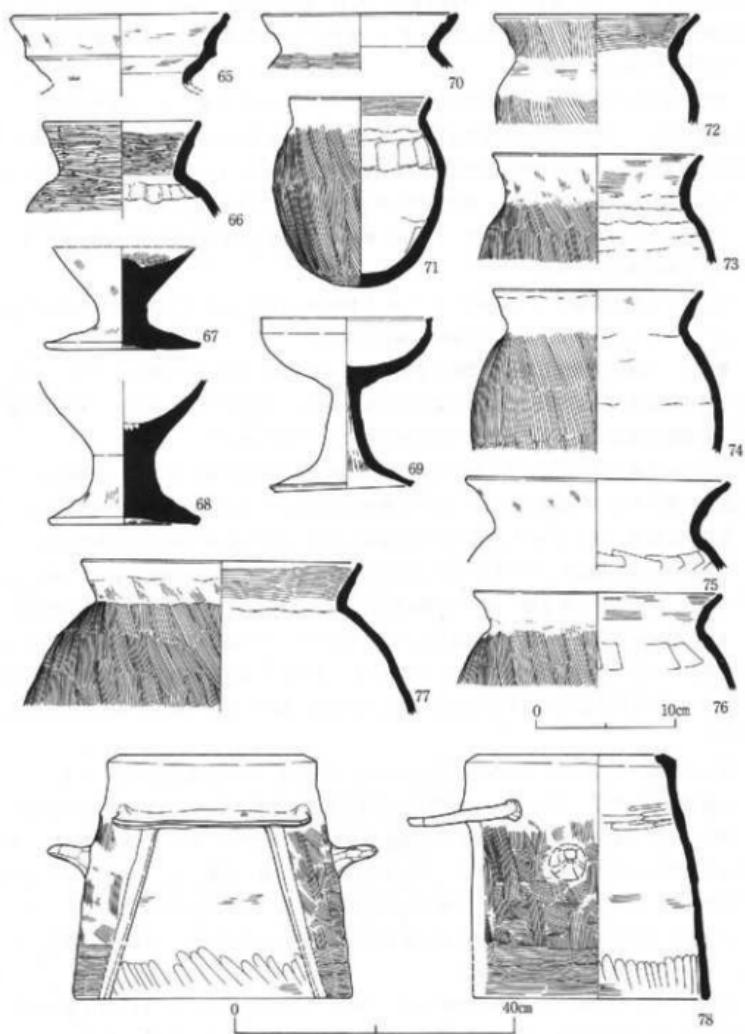
調整には、ヘラケズリ・カキメ・ヨコナデ・ナデなどの手法がある。ヘラケズリ調整は杯の底部、蓋A・Bの天井部、無蓋・有蓋高杯の杯底部などの外面の仕上げ段階で用いられ、調整後さらに別の手法によって調整を施すことはない。ヘラケズリ調整は、ロクロの回転を利用しているが、これを用いて調整する手持ちヘラケズリ調整も認められる。

カキメは、ロクロの回転を利用して杯底部や有蓋高杯、無蓋高杯、器台脚部、壺体部、壺口縁部・体部に施されるもので、タタキメの上に重複して加える場合やカキメ調整後文様を施文することもある。

ヨコナデ調整は、ロクロの回転によって施される調整法で、すべての器種の内外面に加えられる。ナデ手法はロクロの回転を利用せず、不定方向・非連続のナデである。杯の底部内面や蓋A・Bの天井部内面には、ヨコナデ調整後の工程で仕上げナデが施されるものがある。

文様には、回転を利用して波状文やこれを用いて施文した列点文がある。これらの文様は無蓋高杯の杯部、甕口縁部・体部、器台の杯部および脚部、壺A・Bの口縁部などに単独または組み合わせて施文されている。

突帯は、壺口縁部、器台杯部・脚部などの部位に認められる。低くつまみ出され、断面三角形を呈する突帯は、単独のもののほか2帯の突帯間に櫛描波状文を巡らすこともある。



第58図 古墳時代中期土器（土師器）実測図

有蓋高杯、無蓋高杯、器台の脚部に認められる透かし穴は、すべて1段透かしである。杯部に透かし穴を切り取る際の切り目が残存することから、透かし穴は、脚部と杯部の接合後の工程であけられている。透かし穴には長方形と三角形の形態がある。透かし穴の配置は、3方のほか4方に配置することを意図した製品もある。透かし穴の切り取り面には、面取りを施して丁寧に仕上げたものもある。

調整完了後、杯底部外面・壺底部外面・壺体部外面にヘラ記号を施すものが認められる。記号の種類は、1種類に限定されることなく、複数の種類が存在する。出土須恵器のなかには、焼け歪みが著しく本来の形態の崩れたものや器壁の叩き締めが不十分なため器壁が膨張したもの、他の須恵器と融着したもの、焼成温度が不十分な製品などが多数認められる。

土師器には、壺A・B、壺A・B・C・D、鍋A・B、甑、高杯A・B・C・D、瓶、土製支脚、移動式窯などがある。

壺には、2段に屈曲する二重口縁のもの(A)と偏球形の体部に外上方へ直線的にのびる口縁部のつくるもの(B)がある。壺の出土量は、極めて少ない。

壺には、口縁部が内傾し端部に肥厚する面をもち、布留式の系譜につながるもの(A)、小型で平底の底部をもつものの(B)、丸底の底部に外反する短い口縁部のつくるもの(C)、丸底の底部から長胴形の体部につづき、外反する口縁部をもつものの(D)がある。

鍋は外反する口縁部に肩の張る体部がつき、体部最大径が口径を凌ぐもの(A)、外反する口縁部から張りの小さい体部につづき、口径が体部最大径よりも大きいもの(B)が出土している。

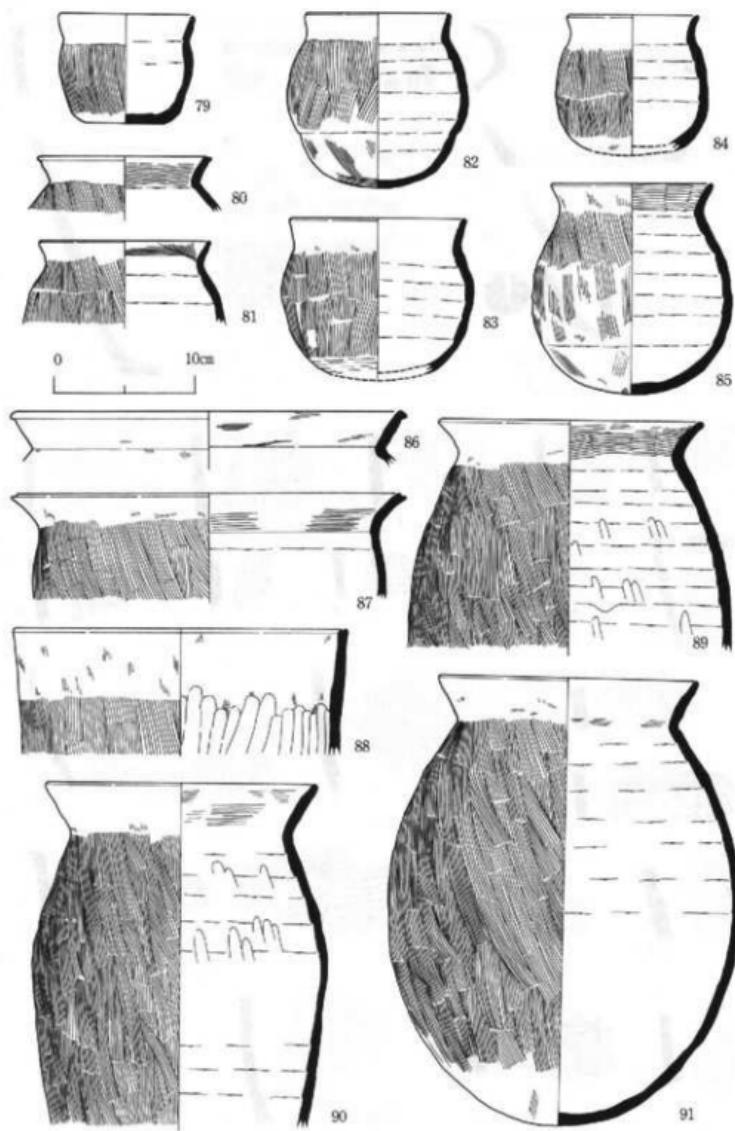
甑は、直線的に外上方へのびる体部から口縁部につづく形態で口縁端部に面を構成する。

高杯は、杯部が椀形を呈するもの(A)、杯底部に段をもち、口縁部が内傾気味にたちあがるもの(B)、段を有する杯底部に外上方へ直線的にのびる口縁部のつくるもの(C)、外上方へゆるくのびる杯底部から短く外折する口縁部につづくもの(D)の4形態に細分できる。これらのうち、最も出土量の多いものは高杯Aで、高杯B・C・Dの出土量はいずれもわずかである。高杯Aの口径・脚径・器高は、個体差が小さいことから同一規格によって製作されたものと推定できる。

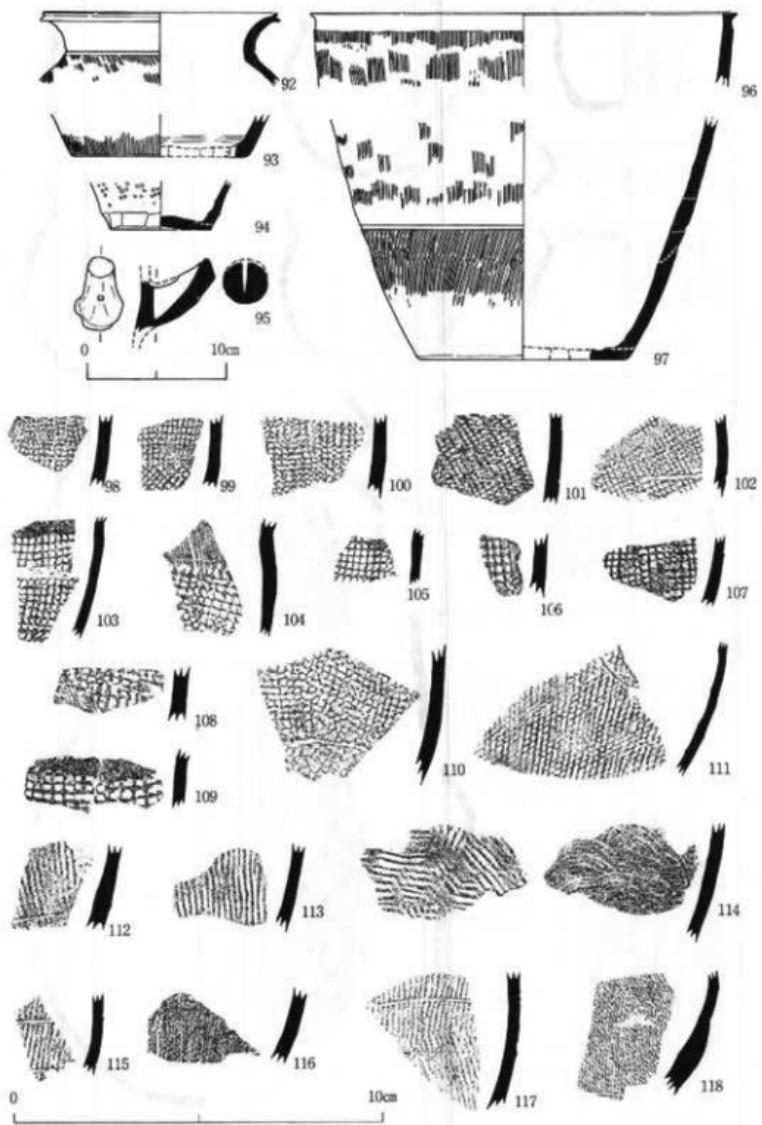
瓶は、底部から内傾気味にのびる体部につづき、口縁端部を尖り気味におさめている。

土師器の胎土には、肉眼的にみて角閃石・雲母を多量に含み、茶褐色の色調を呈するもの(I類)、砂粒の混入がほとんど目立たず赤褐色を呈するもの(II類)、チャート粒が混入し、角閃石を含まないもの(III類)などがある。煮炊き用の壺・鍋・甑・移動式窯・土製支脚の胎土は、I類とIII類のみである。出土量は、I類が圧倒的に多い。壺Aの胎土はI類に限られるのに対して、壺BはII類のみである。高杯では、最も出土量の多いAおよびB・DはB類に限定できる。高杯Cの胎土はすべてA類である。

出土している土師器には、器種や器形によって胎土に差異が認められる。胎土の特徴の差が製作地のちがいを反映しているとすれば、同期の土師器は、器種ごとに生産がおこなわれていた可能性のあることを示唆している。



第59図 古墳時代中期土器（土師器）実測図



第60図 古墳時代中期土器（韓式系土器）実測図、拓影・断面図

出土した土師器の調整法には、ハケメ調整・ヘラケズリ調整・ナデ調整・ヘラミガキ調整がある。

ハケメ調整は、壺A・高杯をはじめ煮炊き用の壺・鍋B・甑・移動式甕・土製支脚など多くの器種に施される。ハケメ調整は、後の工程で加えられたナデ調整・ヘラケズリ調整・ヘラミガキ調整によって消される場合もある。I類の胎土の甕の体部外面は、ハケメ調整で仕上げるのを基本とするのに対してIII類の胎土の甕や鍋Aの体部外面はハケメ調整を加えている。

ヘラケズリ調整は甕B、壺C・D、甑などの体部外面に施される。布留式土器の甕内面に普遍的に施されていたヘラケズリ調整は、口縁端部の形態に布留式の特徴を残す甕Aにも認められない。これにかわり、I類の胎土の甕の体部内面にはナデで調整するだけで体部上半に粘土紐の接合痕を残すものが多い。一方、III類の胎土のものには横方向にヘラケズリ調整を施すものが認められる。

ナデ調整は、すべての器種の内外面に用いられる。前述したようにI類の胎土の甕の体部内面の調整には、多用されている。ヘラミガキ調整は甕Bの口縁部内外面および体部外面に横方向に施されるほか、高杯Aの杯部内面に放射状に施し、略文風に仕上げるものもある。

土師器には共伴して出土した同期の須恵器の壺・甕などの口縁部外面にみられた波状文や列点文などの文様を加えるものはない。甕Bの体部最大径部分には、2条の沈線を施すものがある。これは、同期の須恵器の壺・甕に認められることからこれを模倣したものとも考えられる。

甕Dをはじめ小型の甕Cには体部外面に煤の付着する例や底部に二次焼成痕をもつものがある。煤は、体部最大径付近から底部を除く体部下半全体にベルト状に付着するものが認められる。土製支脚には、器体上部にわずかに煤が付着するものの二次焼成痕はない。

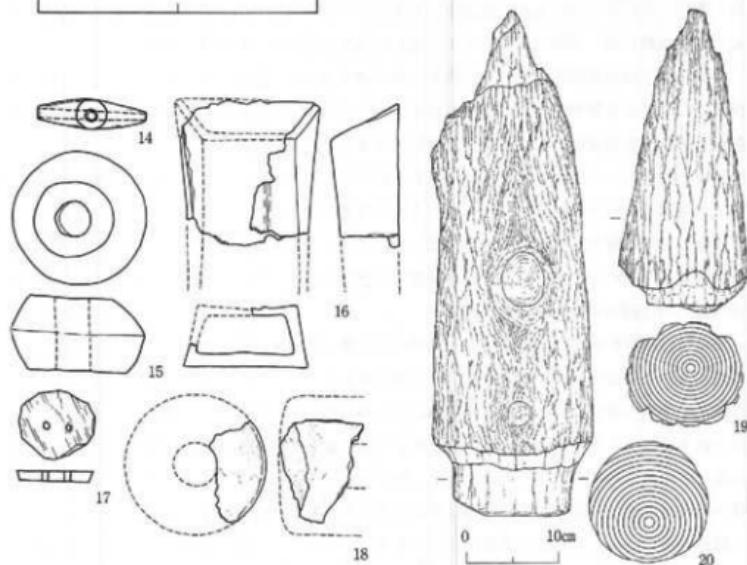
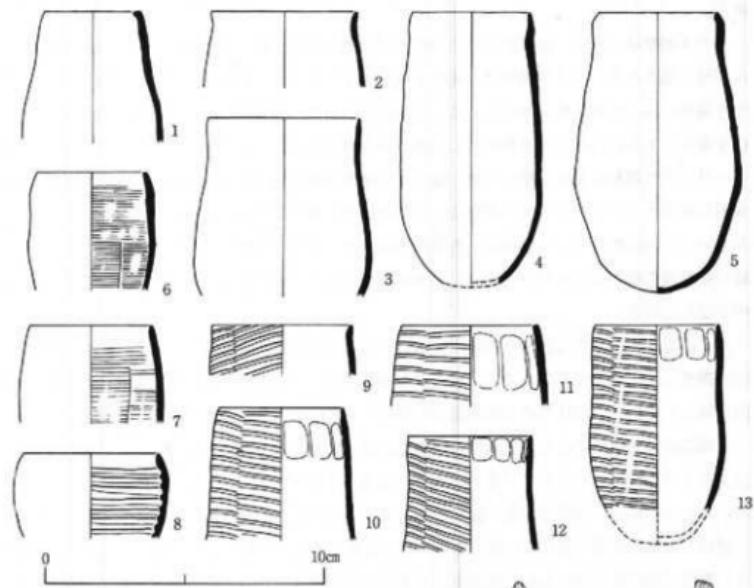
韓式系土器は古墳時代前期の布留式からの系譜ではなく、器表面にタタキメをとどめ酸化焰焼成された新たな器形によって構成される土器群である。今回の調査では、第I調査区溝5をはじめ第I・II調査区の古墳時代の遺物包含層より多數の破片が出土している。しかし、その全体量は須恵器・土師器の出土量に比べると極く限られた量にすぎない。また、韓式系土器が特定の遺構や一定の地区に集中するような状態は看取できない。

出土している韓式系土器には、甕・甑・牛角状把手などがある。韓式系土器の胎土は、肉眼的にみて角閃石の存在が目立ち、やや軟質で茶褐色を呈するものと角閃石は顕著でなく硬質で淡黄褐色の色調のものがある。

甕には口縁部が外反し端部に「M」字形の面を構成し、球形の体部から丸底の底部にいたるもの（A）と平底の底部から直線的にひろがる体部につづくもの（B）がある。

甑は、平底の底部から外上方へ直線的にひろがる体部につづく。口縁部は外反せず、端部に広い面をもつ。牛角状把手は、他の出土例から甑・鍋・移動式甕の体部に取り付く。把手上面には、平面柳葉形の深い切り込みがある。把手下面には棒状工具の刺突痕がのこる。把手の器体への貼付け法は、器体に穿孔を施しそこに把手を挿入する挿入法をとる。

器体外面に認められる製作手法には、タタキメ・ヘラケズリ調整・ハケメ調整・ナデ調整が



第61図 古墳時代中期遺物（製塙土器・鋳造鉄斧・紡錘車・轔羽口他）実測図

ある。タタキメには、平行タタキメ・格子タタキメ・斜格子タタキメが認められる。本調査で最も多く出土したのは、格子タタキメで以下、平行タタキメ、斜格子タタキメの順となる。平行タタキメは3条/cm程度のものが多く、5条/cm前後の細かいタタキメのものもある。格子タタキメには、2~2.5mm角の正方形を呈するものが多く、1.5mm角程度の正方形で細かいもの、3mm前後でやや長方形気味のものなどもある。

ヘラケズリ調整は、甕B・甌などの平底の底部をもつ器形の底部外面に認められる。

ハケメ調整は、甕Aの頸部に局部的に施されている。外面調整終了後、甌・鍋・甕・移動式竈の体部に圓線を単独または複数に巡らすものがある。把手をもつ器種では、圓線のある位置に把手を貼り付けており、把手挿入箇所の目安としている。

内面の調整には、ナデ調整を加えるものの須恵器と同様に器体を叩き締める際に使用した同心円状の当て具痕が残存するものもある。また、ハケメ調整を施すものも1点認められる。

陶質土器には、器種の判明するものはない。外面には平行タタキメのほか繩文タタキメが認められる。内面はナデ調整を施し、当て具痕を消している。外面の調整後には、韓式系土器と同様の圓線を巡らすものもある。

製塙土器は、遺構内および遺物包含層で細片化した状態で約1030g出土している。このうち第II調査区溝7からは、まとまって出土している。製塙土器は、完形に復元できるものは2点にとどまるが、丸底の底部からやや張りをもつ円筒形の体部にいたり、口縁部を尖り気味におさめる形態が最も多いほか、体部がややくびれる形態のものもある。いずれの形態も器壁は、薄手に仕上げる。製塙土器の口径には、3.4cmから6.2cm前後のものまで確認できるものの口径4.5cm前後のものが最も多い。

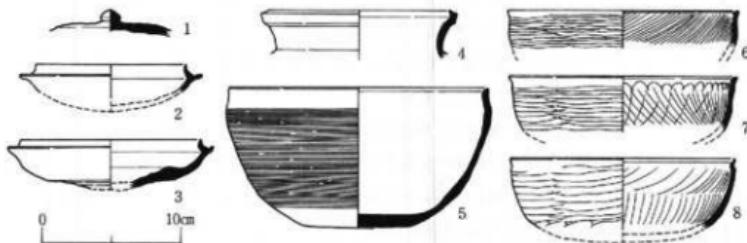
製塙土器は、器体の一部に粘土紐の継ぎ目を観察できる例のことから粘土紐を巻上げて成形したものと推定できる。製塙土器の外面にはタタキメとナデ調整がみられる。数量的には、ナデ調整を施したもののが圧倒的に多く約932gである。

タタキメは水平方向からやや左上がりないし、右上がりの平行タタキメに限られる。

内面調整は、ナデ調整・ハケメ調整・二枚貝の腹縁による貝殻調整に分けることができる。このうち、ナデ調整を施すものは972gあり、ハケメ調整や貝殻調整を加えるものは極く少量である。

外面をナデ調整するもののうち、内面をナデ調整するものは880.5g、ハケメ調整するものが31.2g、貝殻調整を施すもの20.7gである。また、外面にタタキメを残すもののうち、内面をナデ調整で仕上げるもののが91.7g、ハケメ調整を加えるものは2.6gあり、貝殻調整を施すものはない。

製塙土器の胎土には、肉眼で観察して砂粒をほとんど含まず、白色から淡褐色を呈しやや軟質のもの(I)、長石粒の混入が目立ち、黄褐色の色調を示す硬質の一一群(II)、黒色粒を多量に含み灰色系の色調を呈するやや軟質のもの(III)、くさり礫を多量に混入し、淡灰色から淡黄褐色を呈する硬質の一一群(IV)、雲母粒を含み、淡褐色を呈するやや硬質のもの(V)がある。なお、



第62図 飛鳥時代土器（須恵器・土師器）実測図

角閃石の目立つ茶褐色のものはない。

これらのうち、外面をナデ調整するものは、I～V群に認められる。また内面調整に貝殻調整を施すものは、I群に限られる。IV群・V群の外面には、タタキメが施されている。

その他の出土遺物

土製品

出土している土製品には、土錘・紡錘車・輪羽口がある。

土錘

近代以降の耕作用溝から1点出土している土錘は、全長3.8cm・最大幅1cm・内径4mm、重量4gを測る。胎土中には角閃石を含まない。外面はナデで調整する。

紡錘車

第II調査区、暗赤褐色砂質土層から出土している紡錘車は、直径4.7cm・厚さ2.6cm・内径2.3cm・重さ61.9gを測る算盤玉形の断面形を呈する。体部中央の後は鈍く、丸みをもつ。外面は、全体にナデ調整で仕上げている。焼成は土師質で赤褐色を呈する。胎土には、角閃石を含んでいない。類例は、大阪府陶邑深田遺跡・土師遺跡・八尾南遺跡などの初期須恵器や韓式系土器の出土している集落址や陶邑深田窯・香川県宮山窯などの初期須恵器窯からも出土している。また、朝鮮半島からも近似した資料が出土している。

輪羽口

第I調査区、暗茶褐色砂混り土から1点検出している。外径10.1cm・内径3.1cm前後に復元できる。胎土内に多量の角閃石を観察できる。端部周辺には、二次焼成痕が認められる。第8次調査では、鐵滓は出土していないが、同期の縄手遺跡では多量の輪羽口とともに椀形滓を検出していることから同期の集落では小鍛冶的な鐵製品の生産を実施していたものと推定できる。

石製品

双孔円板 双孔円板は、第II調査区、暗赤褐色砂質土層から1点検出している。直径2.6cm、厚さ3.8mmのはば円形を呈する滑石製品である。両面および側面には、斜方向の擦痕が明瞭に

残る。双孔円板は、本遺跡の周辺にある芝ヶ丘遺跡・下六万寺遺跡などからも出土している。

鉄製品

鋳造鉄斧 第I調査区溝6から少量の土器類とともに出土している。刃部を欠損しているため全形態は不明であるが、現状で長さ5.2cm・袋部末端部の幅4.5cm・袋部上面厚2mm・同下面厚4mm・側面厚4mmを測る。袋部の平面形は中央でややくびれる形態である。また断面形は台形を呈する。袋部上面には、縱方向に1条の突線が鋲出されている。鋳造鉄斧のはとんどが古墳の副葬品として検出されており、集落出土の本例は極めてまれである。

木製品

柱材 挖立柱建物1を構成する柱穴内より腐朽を免れた柱材が出土している。最も良好な遺存状態の(図20)は直径17.3cm、長さ54.5cmを測り基部は、直径13cmと他の部分に比して1段細く削りだしている。

5.飛鳥時代の遺物

包含層から出土している須恵器には、杯・蓋・横瓶などの器種が認められる。杯はたちあがりの退化が著しく、体部全体が浅い形態を呈する。体部外面のヘラケズリ調整は狭い範囲にとどまる。蓋は、天井部に宝珠つまみのつく小型のものがある。土壤3から出土している鉄鉢は、安定した丸底から深い体部につづくもので初源的な形態を呈する。

土師器杯は、口縁端部に平坦な面をもつものと口縁端部が内傾し段をなすものがある。両者とも胎土内に角閃石を含まない。

外面調整は、横方向のヘラケズリ調整後横方向のヘラミガキ調整を加えるものとナデ調整後横方向のヘラミガキ調整を施すものがある。内面には、ナデ調整後斜放射状暗文を加えるもの、斜放射状暗文と放射状暗文とを組み合わせるもの、斜放射状暗文と放射状暗文とともに連弧文を加えるものが認められる。

表2 繩文土器観察表

縄文土器（中期・後期）

| 器 形 | 番号 | 形 態 の 特 徴 | 技 法 の 特 徴 | 備 考 |
|----------|--|--|---|--|
| 縄文土器（中期） | 深鉢 | 8 ○直線的に外反する体部から、内寄り気味の口縁部。 9 ○端部は内側に屈曲し、肥厚する。 | ○口縁部には済み状の縦帶文を施している。 ○器文下に、押引きによる沈線を施している。 ○口縁部端面に縄文が施されている。 | ○在地産(8・9・10)。 ○I暗青灰色砂質土(8-9)、II黒灰色砂質粘土(10) |
| | | 11 ○直線的に外反する口縁部をもつ。 12 ○端部はそのまま面をもって終わる。 13 ○(12-13)は推定口径38cm。 | ○口縁部端面には竹管による割目を施すもの(11-15)と、ヘラによる削目(12-13-16)がある。 ○内外面にナデを施すもの(11-15)と、内面にナデ・外間に縄文と沈線を施すもの(12-13)と、外間に縄文を施すもの(16)がある。 | ○在地産(11-12-13-15-16)。 ○外面に彫刻が付着(11-12-13-15) ○I茶灰白色粘土(11-15-16)、II淡褐色粘土(12-13) |
| | 14 ○外方に開く体部から、内寄りする口縁部。 15 ○端部は屈曲して強く立ち上がる(14)。 16 ○外方に開く体部から、内折する口縁部(20)。 17 ○直立気味の体部から、内傾する口縁部。端部はそのまま面をもつ。 | ○口縁部外側に沈線、体部に半乾竹管による文様を施している(14)。 ○体部に円形竹管による文様を施している(20)。 ○内面はナデ調整を行っている。 | ○在地産(20)。 ○他地域産(14)。 ○I暗青灰色砂質土(14)、II淡褐色粘土(20) | |
| | | 18 ○直立気味の体部から、内傾する口縁部。端部はそのまま面をもつ。 | ○口縁部外側に工具による沈線。 ○口縁部端面と体部外側に縄文を施している(21)。 | ○他地域産(17-21)。 ○I黒灰色砂質粘土(17)、II茶灰白色粘土(21)。 |
| | | 22 ○傾き不明。 | ○外面に縄文を施し、内面はナデ調整を行っている。 | ○他地域産(22)。 ○I暗青灰色砂質土 |
| | 底盤 | 4 ○平らな底盤をもつ。 | ○外部に横方向のケズリ調整を施す。 ○内面はナデ調整を行っている。 | ○他地域産(4)。 ○I茶灰白色粘土 |
| | | 1 ○直線的に外反する体部から、やや屈曲して上方に向かう口縁部。 2 体部内面が肥厚し、面をもつ。口径27.9cm。 | ○口縁部内面および体部内面はヨコナデ調整を施している。 ○体部外側は縱方向に貝殻(二枚貝?)調整を施している。 | ○在地産(1)。 ○II暗青灰色粘土。 |
| 縄文土器（後期） | 深鉢 | 5 ○外反しながら外上方にのびる。 6 ○端部外面に面をもつ。口径17.2cm。 | ○口縁部端面と体部に羽状縄文を施している。 ○器外端部にはヘラによる沈線(?)を施している。 | ○他地域産(5)。 ○I灰泥。 |
| | | 7 ○内傾する体部に、屈曲してゆるやかに外方にひろがる口縁部。端部は外側肥厚(6-34-36)。 8 ○推定口径(34)は26cm、(36)は25cm。 | ○外表面に縄文を施し、底部にミガキ調整を行うもの(6-7-33-34-35)、板状工具による調整を行うもの(36)がある。 ○内面は貝殻条痕と板状工具による条痕(36)を施している。 | ○在地産(6-7-33-36)。 ○II暗青灰色粘土(6-7-33-34-35)、I青灰色シルト(36) ○外側に彫りが認められる(6-7-36) |
| | 31 ○やや外方に開く口縁部。端部はそのまま面をもつ。 | ○内外面にナデ調整を施している。 | ○在地産(31-32)。 ○I暗青灰色砂質土。 | |
| | | 32 ○外方に直線的に開く体部にそのままつづく口縁部。 | ○口縁部外側の端部および内面はヨコナデ調整。外側は横方向のケズリを施す(18)。 ○(23)は風化の為調整不明。 | ○在地産(18-23)。 ○I黒灰色砂質粘土(18)、II暗青灰色砂質土(23) |
| | 19 ○外方に開く体部から、屈曲して上方に直立気味の口縁部。 20 ○端部は丸味をもつ。 | ○外面に縄文を施し、内面はナデ調整を行っている。 | ○在地産(19)。 ○I淡褐色粘土。 | |
| | | 24 ○外反する口縁部。端部は内外に抵張する。 25 ○推定口径30cm。 | | ○在地産(24)。 ○II黒灰色粘土。 |

| 器 形 | | 番号 | 形 異 の 特 徴 | 技 法 の 特 徴 | 備 考 |
|------------|-----|----|------------------------------|---|---|
| 縄文 （後期） | 体 部 | 25 | ○傾き不明。 | ○外面に半裁竹管によるもの(25・26)と、棒状工具によるもの(29・30)で文様を描いている。 | ○在地産(25・26・29)。 ○Ⅰ 黒灰色砂質粘土(26)、Ⅱ 黑灰色粘土(29)、Ⅲ 墓青灰砂質土(30)、出土地不明(25)。 ○外面に煤が認められる(30)。 |
| | | 26 | | | |
| | | 29 | | | |
| | | 30 | | | |
| | | 27 | ○傾き不明。 | ○外面に縄文を施し、内面はナガ調整を行う。 | ○在地産(27・28)。 ○Ⅰ 黑色粘土。 |
| | | 28 | | | |
| | 端 部 | 2 | ○平らな底部をもつ。 ○概定口径13cm(37)。 | ○外面にケズリ調整を施すもの(2-37)、ナガ調整を行うもの(3)がある。 ○内面はナガ調整を行う。 | ○在地産(2-3-37)。 ○Ⅱ 黑灰色粘土(3・37)、Ⅲ 墓青灰砂質土(2)。 |
| | | 3 | | | |
| | | 37 | | | |

縄文IV (暗黄灰色粘土上面遺構)

| | | | | | |
|-----|-----|----|---|--|--|
| 深 部 | A | 38 | ○口縁部は、全体に弧を描くように外反し、上端ではすかに上方へ立ち上がり、通部外側に面をなすもの(38-41)と、全体にゆるやかに外反し、端部は面をもつもの(45-47)、下方で強く外反し、上方は直線的に外上方へのび、端部は丸味のある面を持つもの(39)がある。体部はゆるやかに内弯するが、あまり跡らみをもたない。肩部が張りだし、明瞭な棱をつくる。 | ○口縁部は内外ともヨコナガ調整およびナガ調整を施している。 ○体部外側は水平から左上がりの横方向のケズリ調整、内面はナガ調整で仕上げている。体部外側のケズリ調整は時計回りに施すものが一般的だが、逆時計回りに施すもの(47)が1例ある。 ○(47)は内面のナガ調整の間に口縁部および体部に横方向の板ナガ調整を行っている。 | ○在地産 6例(38-39-41-45-47)。 ○5例に煤が認められる。(38)は体部外側に、(41)は外側全体に煤が付着する。 ○土標34(38-39)、 土標30(41-45)、 土標43(47)。 |
| | | 39 | | | |
| | | 41 | | | |
| | | 45 | | | |
| | | 47 | | | |
| | B | 40 | ○口縁部は弧を描くように外反し、端部は面をもち刻み目をついている。 | ○口縁部は、端部および内面はヨコナガ調整、外側は横方向の二枚貝調整を施すもの(48)と、外側はヨコナガ調整、内面はナガ調整で仕上げるもの(40)がある。 | ○在地産 1例(48)、 他地域産 1例(40)。 |
| | | 48 | ○肩部を盛り出して縁をもち、体部は浅い瘤状や底部が丸底を呈するものの(40)がある。 ○(48)口径19.3cm、高さ18.1cm。 | ○体部は外側肩部付近を時計回りの横方向のケズリ調整、以下を下方向から上方に向かって縱方向に底部と体部中位の2部に分けてケズリ調整を施し、内面は横方向の板ナガ調整、底部内面をナガ調整で仕上げているものの(40)がある。 ○口縁端部の跡み目はヘラ状の痕跡による。 ○(40)は肩部外側にヘラ状の原体で幅の広い沈縮をめぐらせている。 ○(40)は内外間に粘土縫の細ぎ目痕が認められる。粘土縫の幅は1.5cmから3.5cmのものがあるが、3cm前後のものが多い。 | ○2例とも煤が認められる。(40)は外側全体に煤が付着しているが、底部は煤の付着が少ない。 ○落ち込み3(40)、 ピット58(48)。 |
| | | | | | |
| | F : | 49 | ○口縁部はほとんど跡らみをもたず直線的に上方へのびる。口縁端部は丸味をもつ。 | ○外面は横方向のケズリ調整、内面はナガ調整を施し、口縁端部にヨコナガ調整を加えている。 | ○在地産 2例(49-55)。 ○2例ともに煤が認められる。 |
| | | 55 | ○概定口径25cmから30cm。 | | ○土標35(55)、土標46(49)。 |
| 浅 部 | C z | 43 | ○体部から口縁部にかけてゆるやかに内弯しながら外上方へ大きく広がる。 ○口縁部はわずかに外反しており、端部は狭い面をなす。 ○口径20cm。 | ○内外面ともに横方向のミガキ調整を施しているが、外側は風化が激しい。 ○口縁部に直径約3mmの穿孔を焼成前に施している。 | ○在地産 1例(43)。 ○土標34。 |
| | | | | | |

縄文IV (暗黄灰色粘土上面遺構)

| 器 形 | 番号 | 形 態 の 特 質 | 技 法 の 特 徴 | 備 考 |
|-----|----------------|---|--|---|
| 浅鉢 | C ₁ | ○体部から口縁部にかけて弧を描くように内寄しており、口縁部は内傾している。口縁端部は丸味をもつ。 ○推定口径15cm。 | ○口縁端部はヨコナデ調整。以下を、外面は時計回りの横方向のケズリ調整、内面はナデ調整を行っている。外面のケズリ調整は粗く、器壁の厚みは一定しない。 | ○他地域産1例(60)。 ○内外面に墨が認められる。 ○ピット60。 |
| | E | ○腹部が大きく張り出す体部から「く」の字形に外反して上方にのびる口縁部をもつ。口縁部は上端で水平近く外反し、端部は屈曲して短く立ち上がる。 ○口径16cm。 | ○口縁部は内外面ともにヨコナデ調整。外面口縁部および体部上端と内面全体に横方向のケズリ調整を施した後、内外面ともに全体に横方向のミガキ調整を施している。 ○口縁端部が口縁部から立ち上がる部分では、内外面に波状の凹みをつけて屈曲を明瞭にしている。 ○肩部外面にヘラ状の原体で波状を施している。 ○突起をもつが、大半を欠損しているため形状は不明。 | ○在地産1例(42)。 ○外面全体と内面口縁部から体壁上部に赤色顔料を施している。 ○黒灰色粘土。 |

縄文IV (暗黄灰色粘土)

| | | | | | |
|----|----------------|----------------|---|---|---|
| 浅鉢 | A | 52 | ○口縁部は全体にゆるやかに外反するもの(52)と、直線的に外上方へのびるものがある。 | ○口縁部は内外面ともにヨコナデ調整を施している。 | ○在地産6例、他地域産1例(52)。 ○4例に墨が認められる。 |
| | B | 46 | ○口縁部は直線的に上方へのびるもの(46)と、ゆるやかに外反するものがある。口縁端部は面をもち、割み目をついている。 ○(10)は、推定口径30cm。 | ○口縁部は内外面ともにヨコナデ調整を施している。 ○割み目はヘラ状の原体による。(46)は内縁部に非常に浅い小O字形の割み目をついている。他に、小さく深いO字形のものと、浅い横長のO字形のものがある。 | ○在地産2例(46)、他地域産1例。 |
| | H | 56 61 | ○口縁部はわずかに外反し、端部は丸味をもつ。 ○外面口縁端部の直下に割み目のない突起をめぐらせていている。 ○(61)は液状口縁を呈する。 ○推定口径(56)は35cm、(61)は27cm。 | ○口縁部外面は横方向のミガキ調整で仕上げているが、内面は墨化の為不明。 ○突起は断面が三角形を呈する。 | ○在地産6例(56-61)。 ○4例に墨が認められる。 |
| | F ₁ | 50 53 54 | ○ほとんど割みをもたない体部から単純に口縁部が続く。 ○(54)は波状口縁を呈する。 ○推定口径21cmから29cm。 | ○口縁端部および内面全体はヨコナデ調整、外側は時計回りに横方向にケズリ調整しているもの(50-53-54)が4例、口縁端部はヨコナデ調整、以下を内外面ともに横方向のケズリ調整しているものが2例ある。 | ○在地産(50-53-54)。 |
| | I | 51 | ○体部が2段に屈曲する。口縁部は外反し、端部は面をもつ。上段部の屈曲は強く、後をなす。 ○推定口径40cm。 | ○口縁部内外面および体部外面はヨコナデ調整、体部内面はナデ調整で仕上げている。 | ○在地産1例(51)。 |
| | B | 63 64 | ○口縁部は強く外反し、端部内面が肥厚して段をなしており、その断面が三重形を呈するもの(64)と、台形を呈するもの(63)がある。端部内面は鋸く縫をなしている。 ○肩部は丸味をもち、強く張り出するもの(64)と、ほとんど張り出さないもの(63)がある。 ○推定口径(63)は25cm、(64)は37cm。 | ○内外面ともに横方向のミガキ調整を施している。(63)は体部内面をヨコナデ調整している。 ○(64)は黑色磨研土器。 ○(64)は突起(P-2)をもつ。 | ○在地産1例(63)、他地域産1例(64)。 ○(64)は外面に赤色顔料が残る。 |
| | C ₂ | 59 | ○体部から口縁部にかけてやや内寄気味だが、ほとんど割みをもたず。口は直上にのびる。口縁端部は器壁が薄くなり夫り気味になる。 ○推定口径30cm。 | ○外面に時計回りの横方向のケズリ調整を施した後、内外面ともに横方向のミガキ調整を加えている。 | ○他地域産1例(59)。 |

縄文III (暗黃灰色粘土)

| 器 形 | 番号 | 形 無 の 特 徴 | 技 法 の 特 徴 | 備 考 |
|-----|----|---|---|----------------------------------|
| 浅 鉢 | C: | 58 ○体部から口縁部にかけてほとんど膨らみをもたない。 ○口径10cm前後の小型のものと、30cm前後のものがある。 | ○口縁部内外面および体部内面にヨコナデ調整、体部外面に横方向のケズリ調整を施している。ケズリ調整の方向は、確認できないものを除けばすべて時計回りに行っている。 | ○在地産5例(58)。 ○3例には縁が認められる。 |
| | D | 62 65 ○内窓する体部から単純に口縁部が抜く。口縁部が外反気味になり外面にやや肥厚するもの(65)がある。 ○外面口縁部の直下に刻み目のない突唇をもつ。(65)は他のものより口縁部からやや離れた位置に突唇がついている。 ○推定口径(62)は16cm、(65)は26cm。 | ○内外面とともに横方向のミガキ調整で仕上げるもの(65)と、口縁部および内面はヨコナデ調整の後、横方向のミガキ調整を施し、外面は突唇などを横方向にケズリ調整しているもの(62)がある。 ○突唇は断面が三角形を呈する。 | ○在地産4例(62・65)。 ○4例ともに縁が認められる。 |
| | E | 57 ○口縁部は弧を描くように外反する。口縁部は面をもつ。 ○外面口縁部の直下に刻み目のある突唇をめぐらせている。 ○推定口径28cm。 | ○内外面とともに横方向のミガキ調整を施している。 ○黒色磨研土器。 ○突唇は断面が台形を呈する。 | ○在地産1例(57)。 |
| H | 66 | ○口縁部は直線的に外上方へのび、外端部は角張っている。 ○推定口径25cm。 | ○内面は横方向のミガキ調整を施している。 ○外側は風化の為不平。 ○口縁部内面に北緯をめぐらせている。 | ○在地産1例(66)。 |
| 底 部 | 44 | ○丸底を呈する。 | ○外面は下方から上方に向う横方向のケズリ調整、内面はナゲ調整を施している。 | ○在地産1例(44)。 |

縄文III (土壤2)

| | | | | | |
|-----|----|----------|--|--|---|
| 深 鉢 | A | 68 72 | ○口縁部は弧を描くように外反しているが外反の強いもの(72)と、外反のゆるやかなもの(68)がある。肩部は縁をなす。 ○体部はゆるやかに内窓しているがあまり膨らみをもたない。 | ○口縁部は内外面とともにヨコナデ調整を施すものが多い。内面を横方向に急曲調整しているもの(72)、横方向に板ナゲ調整した後、丁寧にナゲ調整をしているもの(68)がある。 ○体部は外面時計回りの横方向にケズリ調整を行い、内面は丁寧にナゲ調整を施しているもの(68)がある。 | ○在地産1例(68-72)。 ○6例に縁が認められる。(72)は外面部分的に縁が認められる。 |
| | B | 89 | ○口縁部はほぼ直立し、端部は面をもち、刻み目をつけている。 ○推定口径26cm。 | ○口縁部および内面はヨコナデ調整、外面は時計回りの横方向に軽いケズリ調整を施している。 ○刻み目は二枚貝の押し引きによるもので、逆時計回りに施している。 | ○在地産1例(89)。 ○外面に縁が認められる。 |
| | C | | ○直線的に上方へのびる口縁部の一部端部は器體が薄くなるが面をもち、刻み目をつけている。外面口縁部の直下に刻み目のある突唇をめぐらせている。 | ○内外面とともにヨコナデ調整を施している。 ○突唇は断面が三角形を呈する。刻み目はへタ状の原体により、口縁部が小D字形、突唇がD字形を呈するものと、口縁部、突唇とともに小O字形を呈するものがある。 | ○在地産1例。他地産1例。 |
| | F: | 70 95 | ○口縁部は内寄気味で端部は器體が薄くなる。(70)は口径28.0cm。 | ○口縁部をヨコナデ調整、以下を外面は横方向のケズリ調整、内面はナゲ調整を施している。(70)は内面のナゲ調整の前に横方向の板ナゲ調整を施している。 | ○在地産2例(70-95)。 ○外面に縁が付着する。 |
| 浅 鉢 | A | 98 | ○口縁部は短く外反する。口縁部内面は肥厚して段をもつ。肩部に接をもつ。 ○推定口径13cm。 | ○内外面とともに横方向のミガキ調整を施している。 ○口縁部に豆粒状の突起(p-8)をもつ。 | ○在地産(98)。 |

縄文III (土壤22)

| 器 形 | 番号 | 形 態 の 特 徴 | 技 法 の 特 徴 | 備 考 |
|-----|---------------|--|--|-----------------------------|
| 浅鉢 | B 87 97 | ○口縁部が短く外反するもの(87)と、外反せずに立ち上がるるもの(97)がある。口縁端内部は肥厚して段をもつ。 ○(87)は推定口径21cm。 | ○内外面とともに横方向のミガキ調整を施すもの(87)と、外面ヨコナゲ調整内横機方向のミガキ調整するもの(97)がある。 ○(87)は口縁部に突起(P-4)をもつ。 ○(97)は口縁端部にヘラ状の原体によるV字形の刻み目をついている。 | ○在地産1例(87)。 ○他地域産1例(97)。 |

縄文III (黒灰色粘土上面遺構 土壇21、土壤22)

| | | | | |
|----|----------------------|--|--|---|
| 浅鉢 | C ₁ 90 | ○体部から口縁部にかけて、ほとんど膨らみをもたず直線的に上方へのびる。 | ○口縁端部はヨコナゲ調整。以下を、外面横方向のケズリ調整、内横機方向のミガキ調整のもの(90)と、内外面ともにナゲ調整のものがある。 | ○在地産2例(90)。 ○1例には縁が認められる。 ○焼土塊周辺。 |
| | D 67 100 | ○内寄する体部から口縁部が単純に内寄しながら立ち上がるものの(100)と、直線的に上方へのびるもの(67)がある。 ○外面口縁端部の直下に刻みのない突部をめぐらせてある。 ○推定口径20cmから28cm。(67)は19.7cm。 | ○口縁端部はヨコナゲ調整。以下を、外面横方向のケズリ調整の後、内外面に横方向のミガキ調整を加えるもの(44)、外面突部以下に横方向のケズリ調整、内横機方向のケズリ調整の後、ナゲ調整を施すもの(43)がある。他に、外面はヨコナゲ調整、内面は横方向のミガキ調整のものが1例ある。 ○突部は断面が三角形を呈する。 | ○在地産5例(67-100)。 ○4例に縁が認められる。(67)は体部外面全体に縁が付着。 ○焼土塊周辺(100)、土壇22(67)。 |
| | E 99 | ○口縁部は外反し、端部は丸味をもつ。 ○外面口縁端部の直下に刻みのない突部をめぐらせてある。 ○推定口径28cm。 | ○内外面とともに横方向の丁寧なミガキ調整を施すもの(99)と、ナゲ調整で仕上げるものがある。 ○突部は断面が三角形を呈する。 | ○在地産2例(99)。 ○土壇21(99)。 |
| | F 93 | ○口縁部は直線的には直上へのびる口縁部の下端部が強く外反して内面では縫をもつため、体部は欠損しているが、口縁部と体部の区別が明確になると考えられる。 ○口径は計測できないが、かなり大きくなると思われる。 | ○内外面とともに横方向のミガキ調整を施している。 ○口縁端部の内外面に沈継をめぐらせてある。外面の沈継は半載竹管状の原体で、内面の沈継はヘラ状の原体で施している。 | ○他地域産1例(93)。 ○土壇21。 |
| 底部 | 94 | | ○外面ヘラによる沈継。 ○内面ヨコナゲ。 | ○在地産(94)。 ○焼土塊周辺。 |
| | 71 | ○丸底を呈し、体部に向かって大きく広がる。 ○浅鉢の底部と考えられる。 | ○外面は下方から上方に向かって削り上げてある。下面はケズリ調整の後ナゲ調整を施している。 | ○他地域産1例(71)。 ○外面に縁が付着し、外底面には使用時のものと思われる剥離が見られる。 ○土壇22。 |
| 蓋 | 69 | ○橜円形で中高の笠形を呈する。 ○対する2方に2孔1対の組孔をもつ。 ○口径は長軸8cm、短軸6cm。 | ○内外面にナゲ調整を施している。 ○組孔は焼成前に内外より穿孔を行っている。 | ○在地産1例(69)。 ○土壇22。 |

縄文III (黒灰色粘土上面遺構 溝35)

| | | | | |
|----|------------------------------------|--|---|---|
| 深鉢 | A 83 84 107 109 110 | ○口縁部が短く、外半のゆるやかなもの(107-110)と、口縁部が長く、やや強く外反するものの(83-84-109)がある。肩部は縫をなす。 ○体部は欠損しているものが多いが、(107)は体部が陶瓶状で、底盤が先より気味の丸底を呈する。 ○口径は11cmから15cmの小形のものと30cmを越えるものがある。(107)は11.3cm。(109)は14.4cm。 | ○口縁部は、内外面とともにヨコナゲ調整を施すものが17例、内外面とともにミガキ調整を施すものが10例がある。 ○体部外面は横方向にケズリ調整をするもの(110)、横方向のケズリ調整をした後に横方向のミガキ調整を加えるもの(109)がある。また、外面は横方向の、内面は横方向のミガキ調整で仕上げるもの(107)もある。 | ○在地産18例(83-84-107-109-110)、他地域産1例。 ○13例に縁が認められる。(110)は底盤を除く外面全体に縁が付着。 ○(110)は口径・傾きとともに地上復元。 |
| | | | | |
| | | | | |
| | | | | |
| | | | | |
| | | | | |

繩文III (黒灰色粘土上面遺構 溝35)

| 器 形 | 番号 | 形 独 の 特 訴 | 技 法 の 特 徴 | 備 考 |
|----------------|-----------------------------|--|--|--|
| 縄 鉢 | B 101 113 | ○口縁部が弧をくように外反するものの(113)と、ゆるやかに外反する部から直線的に外上方へ立ち上がり、腹部は内外に肥厚して面をなすもの(101)がある。 ○口縁部に割み目をもつ。 ○口径(101)は20.7cm、(113)は38.7cm。 | ○口縁部は、内外面ともにヨコナデ調整を施すものの(113)が4例、内外面ともに横方向のケズリ調整の後、ナデ調整で仕上げるもの(101)が1例ある。 ○体部外面は軽いケズリ調整、内面はナデ調整を施すもの(101)がある。 ○割み目はヘラ状の原体による。 ○(101)は口頭部の中ほどに半載竹管状の原体による割み目をつけている。 | ○在地産3例(113)、他地域産2例(101)。 ○盤の認められるもの、3例ある。 ○(101)は外面に著しく縦が付着。 |
| H | 86 | ○口縁部が直線的に上方へのびるもの(86)と、外反するものがある。口縁端部の直下に割み目ない突唇をめぐらしている。 ○(86)は波状口縁を呈する。 ○基定口径28cm。 | ○外面は横方向のミガキ調整、口縁端部および内面はナデ調整を施すものの(86)と、内外面ともにヨコナデ調整で仕上げるものがある。 ○突唇は断面が三角形を呈する。 | ○在地産1例(86)、他地域産1例。 ○1例には縦が認められる。 |
| D | 85 | ○口縁部は外反し、端部は面をもつ。 ○口縁端部に上端を沿わせて割み目のある突唇をめぐらしている。 ○基定口径40cm。 | ○外面はヨコナデ調整、口縁端部および内面には横方向のミガキ調整を施している。 ○突唇は断面が台形を呈し、二枚貝の押し引きによる割み目を施している。口縁端部内面に棒状の原体で沈窓をめぐらしている。 | ○在地産1例(85)。 |
| C | 73 / 81 105 108 | ○ゆるやかに外反する口縁部は、内相気味に上方へのびるもの(73-76-108)と、直上へのびるもの(5)がある。 ○口縁端部に割み目をつけ、外面口縁部の直下に割み目突唇をめぐらしている。 ○体部はあまり膨らみをもたず、肩部に明瞭な縦をなす。 ○口径は19cmから35cmのものがあるが30cm前後のものが多い。(105)は19.2cm、(108)は35.5cm。 | ○口縁部は内外面ともにヨコナデ調整を施すものが主体を占めるが、中には内面に横方向のケズリ調整を施すもの(73)、内面に横方向にケズリ調整した後、横方向のミガキ調整を加えるもの(75-81)。また、外面には横方向のケズリ調整を施すもの(80)がある。 ○体部外面は肩部付近に横方向のケズリ調整、以下を下方から上方に向かう縱方向のケズリ調整を施している。内面は横方向にケズリ調整するもの(108)と、ナデ調整で仕上げるもの(105)がある。 ○突唇は断面が台形を呈するものが6例、三角形を呈するものが6例ある。割み目はD字形を呈するものが多く、逆時計回りに施すものが一般的だが、口縁端部と突唇で施文方向が異なるもの(73)、また、口縁部の施文方向が途中で変わるもの(105)がある。割み目を時計回りに施すもの(74)も1例ある。 | ○在地産11例(73-81-108)、他地域産1例(5)。 ○6例に縦が認められる。(108)は体部外面に、(105)は外面全体に縦が付着し、内面にも縦が認められる。 |
| G ₁ | 102 | ○体部はゆるやかに内縮するが、あまり膨らみをもたない。口縁部の唇部は体部に比べてやや薄くなり、直立している。口縁端部は丸味をもち割み目をつけており、口縁端部の直下に割み目突唇をめぐらしている。 ○口径は25.4cm。 | ○口縁部内外面はヨコナデ調整を施している。 ○体部外面は横方向にケズリ調整しており、内面は横方向に板ナデ調整した後ナデ調整で仕上げている。 ○突唇は断面が台形を呈する。 ○割み目はヘラ状の原体によるものでD字形を呈する。 | ○在地産1例(102)。 ○外面全体に縦が付着している。 |
| その他 | 114 | ○口縁部は直線的に内上方へのびる。口縁端部は平坦な面をもつ。 ○口径は47cm。 | ○内外面ともに横方向のミガキ調整で仕上げている。内面に比べて外面の調整はやや粗い。 | ○在地産1例(114)。 |
| 縄 鉢 | B 112 | ○口縁部は近く外反し、口縁端部は内面が肥厚して段をもつ。 ○体部は張り出さず、ゆるやかに内縮して底部に絞く。 ○(112)は口径33.4cm。 | ○口縁部、体部とともに内外面とも横方向のミガキ調整を施すもの(112)が3例、ヨコナデ調整のものが1例ある。 ○突起(P-3)をもつものが1例ある。 | ○在地産4例(112)。 |

縄文III (黒灰色粘土上面遺構 溝35)

| 縄形 | 番号 | 形態の特徴 | 技法の特徴 | 備考 |
|----|----------------|--|--|---|
| 浅鉢 | C ₂ | ○部はゆるやかに内凹しながら外方に大きくなき、口縁部へ続く。口縁部は器壁が薄くなり丸味をもつ。 ○底部は丸底を呈する。 ○他の浅鉢Cに比べると、かなり浅く皿状を呈している。 ○口径25.5cm。 | ○内面は口縁部から体部にかけて横方向のミガキ調整、底部内面は丁寧なナダ調整を施している。外側は底部から口縁部に至るまで全面に横方向のミガキ調整を施している。 | ○在地産1例(100)。 |
| | C ₁ | 82 ○口縁部は、ゆるやかに内凹しながら外上方へのびるもの(91-92-96)と直線的に外上方へのびるもの(82-111)がある。口縁部は狭い面をもつ。 92 96 119 ○口径は13cmから34cm前後。 | ○口縁部および体部内面はヨコナダ調整を施している。部外側は、口縁部付近を横向に、以下を下方から上方に向かう縱方向にケズリ調整しているもの(111)、横方向のケズリ調整を施すもの(92-96)、ナダ調整で仕上げるもの(82-91)がある。 | ○在地産6例(82-91-92-96-119)。 ○6例とも焼が付着。 ○(111)は口径・傾きとともに四上復元。 |
| | D | ○口縁部は丸味をもち、口縁端部の直下に刻み目ない突帯をめぐらせている。 ○推定口径16cmのものと26cmのものがある。 | ○内外ともにヨコナダ調整を施しているが、突帯以下に横方向のミガキ調整を加えるものが1例ある。 ○突帯は断面が三角形を呈する。 | ○在地産2例。 ○1例には焼が認められる。 |
| | E | 88 ○口縁部は直線的に外上方へのび、縁部はシャープな面をなす。 ○外側口縁端部の直下に刻み目ない突帯をめぐらせている。 | ○内外ともに横方向のミガキ調整を施している。 ○黒色研磨土器。 ○突帯は断面が三角形を呈する。 ○口縁部内面にシボ模をめぐらせている。 | ○他地域産1例(88)。 |
| 底部 | 104 106 | ○尖り気味の丸底のもの(104)が1例、平底のもの(106)が2例ある。 ○(104)は扇形の体部をもつ深鉢の底部になると考えられる。(106)は平坦な底盤からはほぼ直角に体部が立ち上がっている。器壁は丸底のものより薄く、浅鉢の底部になると想われる。 ○(106)は底盤径7.5cm。 | ○丸底のもの(104)は外側を下方から上方に向かう縱方向のケズリ調整、内面はナダ調整を施している。 ○平底のもの(106)は内面ナダ調整、縁部はミガキ調整、底面はいくつかに分離して、ケズリ調整を施している。 ○(4)は断面に粘土柱の織目が確認できる。粘土柱の幅は1.7cmから3.3cm。 | ○在地産2例(104-106)他地域産1例。 ○(104)は外面部に沿って柱付着し、二次焼成痕が見られる。 |

縄文III (黒灰色粘土)

| | | | | | |
|----|---|---|---|--|--|
| 深鉢 | A | 133 136 137 139 142 144 | ○口縁部が長く、比較的強く外反し、肩部に明瞭な腰をもつものの(133-136)と、口縁部がゆるやかに外反し、口縁部と体部の境の屈曲も弱く、肩部の棱もあるものの(137-142)や、腰をもたずなだらかになるものの(139-142)がある。 ○口径は11cmから16cmの小型のもの、22cmから33cmのものがある。また40cm前後の大型のものもある。(133)は31.5cm。 | ○口縁部は内外ともにナダ調整およびヨコナダ調整で仕上げるものが主体を占める。また、口縁部外側はナダ調整で、内面は横方向にケズリ調整するものの(139-142)、内面のみヨコナダ調整するものがある。他に、外側は横方向の二枚貝調整で内面は指調整を施しており、指頭圧痕が明瞭に残るもの(144)がある。 ○体部外側は肩部付近を横方向にケズリ調整するものの(136-137-144)、また肩部付近を横方向に、以下を縱方向にケズリ調整するものの(133)がある。体部内面はナダ調整で仕上げるものが多いが、横方向の板ナダ調整を施しているもの(144)がある。 | ○在地産62例(133-136-137-142-144)、他地域産8例(139)。 ○31例に腰が認められるが、小片のため不明なもののが多い。 |
| | B | 116 119 130 135 138 138 141 | ○口縁部はゆるやかに外反する。 ○口縁部に刻み目をもつ。 ○推定口径18cmから28cm。 | ○内外ともにヨコナダ調整を施すもの(116-130-135-138-141)が5例、外側は二枚貝調整、内面はナダ調整のものの(116-135)が2例ある。 ○刻み目はヘラ状の原体によるものが一般的だが、半截竹管状の原体によるもの(119)が1例ある。D字形を呈するものが多い。 | ○在地産5例(116-119-130-135-138)、他地域産2例(141)。 ○3例に腰が認められる。 ○(116-119-130)は口径とともに四上復元。 |

縄文III（黒灰色粘土）

| 器 形 | 番号 | 形 照 の 特 徴 | 技 法 の 特 徴 | 備 考 |
|----------------|--|--|--|--|
| 深 鍋 | H | <p>○口縁部は、直線的に直上にのびるもの(124・140・143・147)と、外反して外方にひらくもの(140・151・152)がある。</p> <p>○外面口縁端部の直下に刻み目のない突唇をもつ。</p> <p>○肩部は棱をもたずなめらかに口縁部から体部に移行するものの(10・29)がある。</p> <p>○口径は22cmから40cmに近いものもあるが30cm前後のものが多い。</p> | <p>○口縁部は内外面ともにナガ調整を施し、縁部にヨコナデ調整を加えるもの()が多い。内面に横方向のケズリ調整を加えるもの()、内面に横方向のケズリ調整を施した後、内外面に横方向のミガキ調整を加えるもの()があるが、風化を受けており調整の不明なもの()も多い。</p> <p>○体部は外面上に横方向のケズリ調整、内面にヨコナデ調整を施しているもの(152)がある。</p> <p>○突唇は断面が低い三角形を呈するもの(124・152)と台形を呈するもの(143)があるが三角形を呈するものが多い。</p> | <p>○在地産10例(143・147・151・152)他地域産1例(124)。</p> <p>○7例に縁が認められる(124)は体部外間に薄く縁が付着している。</p> <p>○(124)は口径・幅とともに岡上復元。</p> |
| | D | <p>○口縁部は外反し、縁部はヘラ状のもので断続的に面取りを行っている。</p> <p>○外面口縁部の直下に刻み目のある突唇をめぐらせている。</p> <p>○推定口径35cm。</p> | <p>○内外面ともにナガ調整を施し、縁部にヨコナデ調整を加えている。</p> <p>○突唇は断面が台形を呈する。刻み目はヘラ状の原体によるもので○字形を呈する。</p> | <p>○他地域産1例(148)。</p> |
| C | 118 122 146 150 155 157 | <p>○口縁部はゆるやかに外反し、外上方にのびるもの(118・150)とんび上に立ち上がるもの(155・157)がある。口縁部と体部の境の屈曲はゆるやかであるが、明瞭な棱をもつ。</p> <p>○口縁端部に刻み目をつけ、外面口縁端部の直下に刻み目ない突唇をめぐらせている。</p> <p>○口径は18cmから36cm前後のものがある。(118)は25.3cm、(122)は36.0cm</p> | <p>○口縁部は内外面ともにヨコナデ調整を施しているもの(118・150)が主体を占める。他の口縁部内面に横方向の横ミガキ調整を加えるもの(122)、外面上に横方向のミガキ調整を加えるもの(146)が3例ある。また内面は横方向のケズリ調整で、外面上が横方向のミガキ調整のもの(157)例外横方向のケズリ調整で、外面上はヨコナデ調整のものが1例ある。</p> <p>○体部は肩部付近を外面横方向のケズリ調整、内面ナデ調整するもの(122)があるが、多くは体部を欠損しているため不明である。</p> <p>○突唇は断面が台形を呈するもの(122・150・157)と、三角形を呈するもの(118・146・155)がある。刻み目はすべてヘラ状の原体によるもので、D字形の物が多い。</p> | <p>○在地産29例(118・122・146・150・157)他地域産3例(64)。</p> <p>○17例に縁が認められるが、小片のため不明が多い。</p> <p>(118・122)は外面上に縁が付着。</p> |
| E | 126 | <p>○体部から口縁部にかけて内傾している。</p> <p>○口縁端部に刻み目をつけ、外面口縁端部の直下に刻み目のある突唇をめぐらせている。</p> <p>○推定口径は18.1cm。</p> | <p>○口縁部は内外面ともにヨコナデ調整を施している。</p> | <p>○在地産(126)。</p> |
| F ₁ | 127 | <p>○口縁部から体部にかけてゆるやかに内弯し、口縁部内面に埋するもの(127)と、直線的に直上にのびるもの、また、外上方にのびるものがある。縁端部は面をもつもの(127)、丸味をもつもの、器壁が厚くなり尖り気味になるものがある。</p> <p>○口径は20cmから30cmのものがある。(127)は28.7cm。</p> | <p>○外面上は横方向のケズリ調整、内面はナデ調整で、口縁端部にヨコナデ調整を施しているものが多いが、内外面ともに横方向のケズリ調整で仕上げてるものが1例ある。(127)は口縁部外側を横方向に、体部外側を下方から上方に向かう縱方向のケズリ調整を施し、内面はナデ調整で仕上げている。</p> | <p>○在地産10例(127)、他地産2例。</p> <p>○11例に縁が認められる。(127)は外面上に縁が付着。</p> |
| F ₂ | 145 158 | <p>○口縁部から体部にかけてゆるやかに内弯する。口縁端部は丸味をもつもの(158)と、面をなすもの(145)があり、刻み目を施している。</p> <p>○(145)は推定口径23cm。</p> | <p>○外面上は時計回りの横方向にケズリ調整、内面はナデ調整で、口縁端部にヨコナデ調整を施している。</p> <p>○刻み目はヘラ状の原体により、横長の○字形を呈する。</p> | <p>○在地産2例(145・158)。</p> <p>○2例とも縁が認められる。</p> |
| G ₁ | 156 | <p>○体部から口縁部にかけて直線的に上方へのびる。</p> <p>○外面口縁端部の直下に突唇をもつ。</p> <p>○推定口径(156)は38cm。他に29cmのものがある。</p> | <p>○口縁端部から内面にかけてヨコナデ調整、外面上は突唇以下を時計回りの横方向にケズリ調整を施している。</p> <p>○突唇は断面が三角形を呈する。</p> | <p>○在地産2例(156)。</p> <p>○2例とも縁が認められる。</p> |

繩文III（黒灰色粘土）

| 器 形 | 番号 | 形 態 の 特 徴 | 技 法 の 特 徴 | 備 考 |
|-------|----------------|---|--|--|
| 深 鍋 | G ₁ | <ul style="list-style-type: none"> ○体部から口縁部にかけて直線的に上方にのびるもの(165)と、やや内寄しながら上方にのび、端部が外反気味になるもの(149)がある。 ○外面口縁部の直下に割み目のある突帯をもつ。 ○推定口径(165)は18cm。 | <ul style="list-style-type: none"> ○口縁端部および突帯はヨコナデ調整、以下を外面は横方向にケズリ調整を施している。内面は横方向のミガキ調整のもの(165)と、ナデ調整のもの(149)がある。 ○突帯は断面が台形を呈し、ヘラ状の原体によるD字形の割み目を施している。 | <ul style="list-style-type: none"> ○在地産2例(149・165)。 2例とも焼が認められる。 |
| | G ₁ | <ul style="list-style-type: none"> ○体部から口縁部にかけて直線的に上方へのびる。口縁部は丸味をもつ。 ○口縁端部に割み目をもち、外面口縁部の直下に割み目ない突帯がめぐる。 ○推定口径32cm。 | <ul style="list-style-type: none"> ○口縁端部および突帯はヨコナデ調整。以下を外面は横方向のケズリ調整内面はヨコナデ調整を施している。 ○突帯は断面が三角形を呈する。割み目はヘラ状の原体によるものでO字形を呈する。 | <ul style="list-style-type: none"> ○在地産1例(154)。 |
| | G ₁ | <ul style="list-style-type: none"> ○体部から口縁部にかけて内寄するもの(171)と直線的に上方へのびるものがある。 ○口縁端部に割み目をつけ、外面口縁部の直下に割み目のある突帯をめぐらせている。 ○口径は13cmから23cmのものがある。(171)は推定口径13cm。 | <ul style="list-style-type: none"> ○口縁端部および突帯はヨコナデ調整、以下を外面は横方向のケズリ調整で、内面はナデ調整のもの(171)と、横方向のケズリ調整のものがある。 ○突帯は断面が台形を呈する。割み目はヘラ状の原体により、D字形を呈するものとO字形を呈するものがあるが、(171)は原体が棒状のものである可能性がある。 | <ul style="list-style-type: none"> ○在地産5例(171)。 ○5例とも焼が認められる。 |
| 体 T 部 | 161 | ○体部に2つの段をもつ。上下の段とも外面に棱をなす。 | ○外面は口縁部から下段部まで横方向のミガキ調整、下段部以下ではナデ調整を施していると思われるが、風化の為明瞭ではない。内面は全体に横方向のミガキ調整で仕上げている。 | <ul style="list-style-type: none"> ○在地産1例(161)。 ○外側に蟹が付着している。 |
| 体 部 | 168 | <ul style="list-style-type: none"> ○外方にひらく体部から内方へ屈曲し、上方へのびる。 ○肩部と思われる屈曲部に突帯のない割み目をめぐらせている。 | <ul style="list-style-type: none"> ○外側体部上方と内面はヨコナデ調整。 ○外側体部下方は横方向のケズリ調整を施している。 | <ul style="list-style-type: none"> ○在地産(168)。 |
| 浅 鍋 | A | <ul style="list-style-type: none"> ○口縁部は幅く外反し、縁部内面は肥厚する。頭部および肩部が屈曲して後をなす。 ○推定口径(134)は26.7cm。 | <ul style="list-style-type: none"> ○口縁部外面はヨコナデ調整、体部外面は横方向のケズリ調整を施し、内面は口縁部から体部にかけて横方向の巻貝調整を施しているもの(134)、口縁部外面はヨコナデ調整で内面に横方向のミガキ調整を加えるもの(174)、また内外面とともに横方向のミガキ調整で仕上げているものがある。 ○突起(P-1)をもつもの(134)がある。 | <ul style="list-style-type: none"> ○在地産3例(134・174)。 ○(134)は口径・総きともに図上復元。 |
| | B | <ul style="list-style-type: none"> ○口縁部は幅く外反し、縁部内面は肥厚しており段をもつ。また、口縁部が直上に立ち上がるものの(170)がある。 ○推定口径26cm。 | ○内外面ともに横方向のミガキ調整を施している。また、体部内面に横方向の2枚貝調整を施しているもの(170)が1例ある。 | <ul style="list-style-type: none"> ○在地産4例、他地産1例(170)。 |
| | C ₁ | ○直線的に上方へのびる口縁部。 | ○内外面ともに横方向のミガキ調整。 | ○在地産1例。 |

図文Ⅲ (黒灰色粘土)

| 器 形 | 番号 | 形 慎 の 特 徴 | 技 法 の 特 徴 | 備 考 |
|-----|--------------------------|--|--|--|
| 浅 筋 | C ₁ | 120 ○体部から口縁部にかけて、内弯しながら上方にのびるもの(169-167)、内弯しながら外上方にひらくもの(128)、直線的に外上方にひらくもの(121-123-125-153-166)、内頸気味になるもの(120)がある。(125)は内頸の器壁が薄くなり、頸部内面に内傾する面をもつ。 ○口径10cmから26cmのものがある。18cm前後のものが多い。(120)は10cm、(121)は15.5cm、(123)は14.7cm、(125)は19.3cm、(128)は17.8cm。 | ○口縁部はヨコナデ調整。以下は内外面ともにナデ調整するもの(120-123-128-153-166)が11例ある。また、外面は横方向のケズリ調整、内面はナデ調整するもの(167-169)が9例あり、そのうち外面に輕く横方向のミガキ調整を加えるものが2例ある。 また、外表面方向のケズリ調整、内面ナデ調整のもの(125)が1例、外面口縁部を横方向に、体部を縱方向にケズリ調整し、体部内面を横方向の板ナデ調整した後、一部にナデ調整を加えたもの(121)が1例、外面はナデ調整、内面が板ナデ調整のものが1例、外表面ナデ調整、内面横方向のミガキ調整のものが1例、内外面とともに軽いミガキ調整のものが1例、内外面とともに横方向のケズリ調整のものが1例である。 ○口縁部外面に沈線をめぐらせているもの(120)が1例、また、原体は不明だが平行線状の押しきを加えるもの(167)が1例ある。他に口縁部面に沈線を施しているもの(166)が1例ある。 | ○在地産27例 (120-121-123-125-128-153-166-167-169)。 他地域産1例。 ○16例に焼が認められる。 |
| | C ₁ | 115 173 ○体部から口縁部にかけて内弯しながら上方へのびる。 ○口縁部に割み目をもつ。 ○(115)は推定口徑21.6cm。(173)は6cm。 | ○口縁部はヨコナデ調整。以下を外面は口縁部付近を横方向にケズリ調整するもの(115)が2例あり、内面はナデ調整を施している。(115)は体部まで残っており、体部外面は横方向のケズリ調整を施している。また内外面ともにナデ調整で仕上げているもの(173)が1例ある。 ○割み目はヘラ状の原体による。 ○外面にはV字状のものによる彫刻をもつもの(173)がある。 ○(115)は内面に粘土紐の織ぎ目痕を残している。粘土紐の幅は1.3-1.8cm。 | ○在地産3例 (115-173)。 ○1例には焼が認められる。 ○(115)は口徑・精きともに同上復元。 |
| D | | ○口縁部はやや内弯気味で、頸部外面がやや肥厚するものがある。 ○外面口縁部の底面に割み目のない突帯をめぐらせている。 | ○内外面ともにヨコナデ調整を施している。○突帯は断面が三角形を呈する。 | ○在地産1例、他地域産1例。 |
| D | I59 | ○体部から口縁部にかけて直線的に外上方へひらく、頸部は面をもつ。 ○外面口縁部の底面に割み目のある突帯をめぐらせている。 ○推定口徑7cm。 | ○口縁部にヨコナデ調整を施し、外面は横方向のミガキ調整、内面はナデ調整で仕上げている。 ○突帯は断面が台形を呈し、ヘラ状の原体によるV字形の割み目を施している。 | ○在地産1例 (I59)。 |
| E | 160 162 172 175 | ○口縁部はゆるやかに外反する。 ○外面口縁部の底面に割み目のない突帯をめぐらせている。 | ○内外面ともに横方向のミガキ調整のもの(160-162-175)が12例、外面ともにヨコナデ調整のもの(45)が9例ある。他に、口縁部とよび突帯はヨコナデ調整、以下を外面は横方向のケズリ調整を施し、内面はヨコナデ調整をするものが1例、内面にミガキ調整を加えるものが1例ある。 ○黒色磨研工具が4例ある。 ○突起(P-7)をもつもの(172)が1例ある。 ○口縁部内面にも突帯を施しているものは4例あり、そのうち突起(P-6)をもつもの(160)が1例ある。 ○口縁部内面に沈線をめぐらせているもの(175)は3例ある。 | ○在地産20例 (160-162-172-175)。 他地域産3例。 ○6例には外面に焼が認められる。 |
| 深 筋 | その他 | 163 ○ゆるやかに外反する口縁部。底部は面をもつものが4例、丸味をもつものが1例ある。 ○口径27cmから30cm前後のものがある。(163)は推定口徑30cm。 | ○内外面ともに横方向のミガキ調整を施している。 ○黒色磨研工具が1例見られる。 ○口縁部内面に沈線をもつものが2例ある。 | ○在地産4例 (163)。 他地域産1例。 ○窓の認められるものが1例ある。 |

繩文III (黒灰色粘土)

| 器 形 | 番号 | 形 態 の 特 徴 | 技 法 の 特 徴 | 備 考 |
|-----|-------------------|---|---|--|
| 深鉢 | I 117 | ○口縁部は長くゆるやかに外反し、縁部は丸味をもつ。 ○口径は25.0cm。 | ○口縁部外縁は横方向のケズリ調整の後、横方向のミガキ調整を施し、内部は全体に横方向のミガキ調整で仕上げている。 ○黒色粘土器。 ○口縁部内面に沈線をめぐらせ、突起(P-5)をついている。 | ○在地産1例(117)。 |
| | H 164 | ○直立する口縁部。縁部は部分的に曲をもつ。体部と口縁部の境は屈曲し外面に曲をもつ。 ○推定口径11cm。 | ○口縁部外縁および体部外縁は横方向のミガキ調整、体部内面はナゲ調整を施している。 ○口縁部外縁に沈線をもつ。 | ○在地産1例(164)。 |
| 底部 | 129 131 132 | ○丸底を呈するもの(129)が5例、底を呈するもの(131・132)が3例ある。 ○凹底を呈するものには、丸底状の底面を凹ませたものの(132)と、丸底の底面に粘土紐を輪にして張りつけたもの(131)がある。 ○(129)は浅鉢の底部、(131・132)は浅鉢の底部になると考えられる。 | ○外縁は下方から上方に向かう緩方向のケズリ調整を施し、外底面および内面をナゲ調整しているもの(129・132)と、外縁面ともにミガキ調整で仕上げているもの(131)がある。 | ○在地産8例(129・131・132)。 ○(129・132)は底面を除く外縁全体に縁が付着している。 |

繩文III (黒灰色砂質下層)

| | | | | |
|----|--|---|---|---|
| 深鉢 | A 178 179 180 | ○口縁部は短く、直線的なものが多い。肩部の後がなくなり、なめらかに口縁部から底部へ移行するもの(180)がある。 ○推定口径15cmから28cm。 | ○口縁部は内外面ともにナゲ調整およびヨコナゲ調整を施している。体部まで残存するもの(180)は1例しかないが内外面ともに横方向のケズリ調整を施している。 | ○在地産16例(178・179・180)、他地域產1例。 ○4例に縁が認められる。 |
| B | 184 185 190 | ○口縁部はゆるやかに外反しながらほぼ直上へのびるものと、外上方へのびるもの(184・185・190)がある。 ○口縁部に刻み目をついている。 ○推定口径18cmから20cmのものがある。 | ○口縁部は底部にヨコナゲ調整、以下をナゲ調整するもの(184・185・190)が3例ある。また、口縁部および内面をヨコナゲ調整、外縁は横方向にケズリ調整した後、ナゲ調整を加えるものが1例ある。 ○刻み目はヘラ状の原体による。 | ○在地産3例(184・185・190)、他地域產1例。 ○1例には縁が認められる。 |
| H | 182 | ○口縁部は直線的に上方へのびる。 ○外縁口縁部の底に刻み目がない突帯をもつ。 ○推定口径28cm。 | ○口縁部は内外面ともにナゲ調整を施している。 ○突帯は断面が三角形を呈するが(182)は普に低い。 | ○在地産1例、他地域產1例(182)。 ○2例とも外縁に縁が認められる。 |
| D | 176 | ○口縁部はやや外反し、縁部は曲をもつ。 ○外縁口縁部の底に刻み目ない突帯をめぐらせていている。 | ○口縁部内外面ともにヨコナゲ調整を施している。 ○突帯は断面が三角形を呈し、ヘラ状の原体によるとD字形の刻み目をついている。 | ○在地産1例(176)。 |
| C | 177 181 183 187 192 193 197 198 199 297 | ○口縁部はゆるやかに外反するもの(177・183・187・199・297)と、直線的に上方へのびるもの(181・192・193・197・198)がある。 ○口縁部に刻み目をつけ、外縁口縁部の底に刻み目のある突帯をめぐらせている。 | ○内外面ともにヨコナゲ調整するものが一般的だが、内面を横方向にケズリ調整するもの(181・192・199)が3例ある。また、外縁は二枚貝調整、内面はナゲ調整を施すもの(297)が1例ある。 ○突帯は断面が三角形を呈するものと、台形を呈するものがほぼ同数見られる。刻み目はヘラ状の原体によるものがほとんどであるが、二枚貝によるもの(297)も3例見られる。突帯よりも口縁部の方が後く軽い刻み目を施す傾向がある。 | ○在地産43例(177・181・183・187・192・193・197・198・199・297)、他地域產1例。 ○16例に縁が認められるが、小片のため不明なものも多い。 ○東海系が1例見られる(297)。 |

経文Ⅲ（黒灰色砂質下層）

| 器 形 | 番 号 | 形 態 の 特 徴 | 技 法 の 特 徴 | 備 考 |
|-----|--|--|---|---|
| 圓 瓢 | E | <ul style="list-style-type: none"> ○体部から口縁部にかけて内傾しているもの (191-398) が 2 例、体部と口縁部の境が屈曲しているもの (191) が 1 例ある。 ○口縁部と体部の境に突帯をめぐらせており、刻み目をもつものが 2 例 (191-298)、刻み目のないものが 1 例 (196) ある。 | <ul style="list-style-type: none"> ○内外面ともにヨコナデ調整を施しているもの (191) と、外面は突帯より上にナゲ調整、突帯以下に横方向のケズリ調整、内面をナゲ調整するもの (191-398) が 2 例ある。 ○突帯は断面が台形を呈する。 ○刻み目はヘラ状の原体による D 字形を呈するもの (191) と、二枚貝の押し引きによるもの (398) がある。 | <ul style="list-style-type: none"> ○在地産 2 例 (191-196)、他地域産 1 例 (398)。 ○氣海系が 1 例見られる (398)。 |
| | F | <ul style="list-style-type: none"> ○体部から口縁部にかけてほとんど膨らみをもたず上方へのびる。 ○推定口径 14cm。 | ○外面は横方向のケズリ調整の後、ナゲ調整を施し、内面はナゲ調整を行なう口縁端部にヨコナデ調整を加えている。 | <ul style="list-style-type: none"> ○在地産 1 例 (189)。 ○外面に縛が認められる。 |
| G | 188 194 195 200 202 203 204 206 | <ul style="list-style-type: none"> ○口縁部は直線的なもの (191-195-200-203-204)、内寄するもの (188)、外反気味になるもの (202-206) がある。 ○口縁端部に刻み目をつき、外面口縁端部の直下に刻み目のある突帯をめぐらしている。 ○口径 18cm 前後から 40cm 近いものがある。 | <ul style="list-style-type: none"> ○突帯および口縁端部から体部内面にかけてヨコナデ調整、外面は突帯以下を水平から左上りがし横方向にケズリ調整している。 ○突帯は断面が三角形を呈するものと、台形を呈するものがある。 ○刻み目はヘラ状の原体によるもので、D 字形を呈するものが多い。 | <ul style="list-style-type: none"> ○在地産 7 例 (188-194-195-200-203-204-206) 他地域産 1 例 (200)。 ○6 例に縛が認められる。 |
| 浅 瓢 | A | <ul style="list-style-type: none"> ○口縁部が短く外反し、縁部内面が肥厚して端部は面をもつ。頭部と体部の境が屈曲し、外面は接をなす。 ○推定口径 24cm のものがある。 | ○内外面ともに横方向のミガキ調整で仕上げるもの (209-210-215) と、内外面にヨコナデ調整を施すもの (211) がある。 | <ul style="list-style-type: none"> ○在地産 4 例 (209-210-211-215)。 ○(211) は体部外側に縛が認められる。 |
| | C | <ul style="list-style-type: none"> ○内寄する体部から平純に続く口縁部が、ほぼ直上にのびるもの (208-216-223) と、外上方にのびるもの (205-207-214-218-220) がある。口縁端部は丸味をもつのが多いが、頭部の基盤が厚くなり尖り気味になるもの (214) もある。 ○推定口径 10cm から 30cm。 | <ul style="list-style-type: none"> ○口縁端部はヨコナデ調整、以下を内外面とともにナゲ調整を施しているもの (201-208-223-214) が 4 例。内外面ともに横方向のケズリ調整の後、横方向のミガキ調整を加えるもの (205-220) が 2 例、外面は横方向のケズリ調整、内面はナゲ調整で仕上げているものが 3 例ある。その他外面横方向のケズリ調整の後、高い横方向のミガキ調整、内面横方向のケズリ調整の後、ナゲ調整を施しているもの (216)。また、外面横方向のケズリ調整の後、内外面ともにナゲ調整で仕上げているもの (218) が各 1 例ずつある。 | <ul style="list-style-type: none"> ○在地産 12 例 (201-205-207-208-214-216-218-220-223)。 ○(211) に縛が認められる。 |
| C | 186 | <ul style="list-style-type: none"> ○ほぼ直上にのびる。 ○口縁部の端部に刻み目をついている。 | <ul style="list-style-type: none"> ○内外面ともにナゲ調整を施し、端部にヨコナデ調整を加えている。 ○刻み目はヘラ状の原体によるもので横長の O 字形を呈する。 | <ul style="list-style-type: none"> ○在地産 1 例 (186)。 |
| D | 217 219 222 224 225 226 230 234 | <ul style="list-style-type: none"> ○口縁部および内寄する体部から平純に続くもの (217-222-226-230-234) と、やや外反気味になるもの (219-224-225) がある。 ○口径 15cm 前後から 30cm 近いものがある。 | <ul style="list-style-type: none"> ○口縁端部および内面全体にヨコナデ調整、外面突帯以下に横方向のケズリ調整を行うもの (217-219-222-226) が 4 例、内外面とともにヨコナデ調整のもの (224-225-230) が 4 例、横方向のミガキ調整のもの (234) が 1 例ある。 ○突帯は断面が三角形を呈するものが多い。 | <ul style="list-style-type: none"> ○在地産 8 例 (222-234-225-219-217-210)、他地域産 1 例。 ○3 例に縛が見られる。 |

繩文III (黒灰色砂質下層)

| 巻形 | 番号 | 形態の特徴 | 技法の特徴 | 備考 |
|----|----|--|--|---|
| 浅鉢 | E | <ul style="list-style-type: none"> ○口縁部は外上方にのびるもの(213-229-232-233)ほぼ直上にのびるもの(212-221)がある。 ○口縁部の器體は口縁部全体よりやや薄くなるが、同程度の厚みであるのが一般的だが、外方に肥厚し他の部分より厚みをもつもの(221-213)がある。 ○外側口縁端部の直下に刻み目ない突唇をもつ。 | <ul style="list-style-type: none"> ○口縁部内外面ともに横方向のミガキ調整するもの(212-229-232-233)が5例、ヨコナデ調整するものが3例ある。他に、口縁端部および外面は横方向のミガキ調整、内面はナデ調整するもの(213)、また、外面はヨコナデ調整で、内面は横方向のミガキ調整を施すもの(221)がある。 ○突唇は断面が三角形を呈するものが多い。内面にも突唇をもつものの(233-232)が2例ある。 ○口縁端部内面に沈線をもつものの(229)が4例ある。 | <ul style="list-style-type: none"> ○在地産10例(212-229-231-213-233)、他の地域産3例(233)。 ○5例に器が認められる |
| | H | <ul style="list-style-type: none"> ○口縁部は外反し、端縁は面をもつ。 ○推定口径25cmのもの(228)がある。 | <ul style="list-style-type: none"> ○内外面ともに横方向のミガキ調整を施している。 ○口縁端部内面に沈線をめぐらせているもの(228-231)が3例、口縁端部の内外面に沈線を加えているものが1例ある。 | <ul style="list-style-type: none"> ○在地産1例(231)、他の地域産3例(228)。 |
| 直 | | <ul style="list-style-type: none"> ○円形で中高の笠形を呈する。端縁は丸味をもつ。 ○周縁に穿孔をもつ。2孔1対で相対する2方に認められるものがある。 ○口径7.8cmと6.7cmのものがある。 | <ul style="list-style-type: none"> ○内外面ともにナデ調整を施している。 ○穿孔は焼成前に内面より行っている。 | <ul style="list-style-type: none"> ○在地産2例。 |
| 垂 | B | <ul style="list-style-type: none"> ○口縁部はやや外反する。端縁は内傾する面をもつ。 ○外側口縁端部の直下に刻み目ない突唇をめぐらせていている。 ○推定口径10cm。 | <ul style="list-style-type: none"> ○内外面ともにヨコナデ調整を施した後、外面に横方向のミガキ調整を加えている。 ○突唇は断面が台形を呈する。 | <ul style="list-style-type: none"> ○在地産1例(227)。 |

繩文II (溝33)

| | | | | | |
|----|---|-----|--|--|---|
| 深鉢 | A | 240 | <ul style="list-style-type: none"> ○口縁部は短く直角で、直上にのびるものが多い。口縁端部は面をもつものの(240)が7例、丸味をもつものが8例ある。 ○口縁部と体部の境の削面はゆるやかになり、後もあるくなる。 ○推定口径10cmから30cm前後のものがある。(240)は口径15.5cm。 | <ul style="list-style-type: none"> ○口縁部は内外面ともにヨコナデ調整を施している。 ○(240)は口縁部内面に板状の工具痕が残る。 | <ul style="list-style-type: none"> ○在地産14例(240)、他の地域産1例。 ○12例に器が認められる(240)は外側全体に堆付着。 |
| | B | 244 | <ul style="list-style-type: none"> ○口縁部は短くゆるやかに外反する。端縁付近でやや粗面として上方に立ち上がるものが1例、端縁内面が肥厚するものが1例ある。 ○口縁端部は面をもつ刻み目をつけている。 ○口縁部と体部の境の削面はゆるやかになり、後もあるくなる。 ○(244)は口径16.0cm。他の推定口径22cmのものがある。 | <ul style="list-style-type: none"> ○口縁部は内外面ともにヨコナデ調整を施している。 ○刻み目はハラ状の原体によるもので、いずれも逆時計回りに施している。 | <ul style="list-style-type: none"> ○在地産3例(244)。 ○3例とも器が認められる。(244)は体部外面に堆が付着する。 ○(244)は小片のため堆は土上に復元。 |

縄文 II (溝33)

| 器形 | 番号 | 形態の特徴 | 技法の特徴 | 備考 |
|----|---|---|--|--|
| 深井 | H 235 237 269 | ○口縁部はゆるやかに外反し、縁部は面をもつもの(235・269)が2例、丸味をもつもの(235)が1例ある。 ○(235)は口径と都高がほぼ同じ位で口縁部を呈する。体部は半球形状を呈し、口縁部から体部へなだらかに移行し、肩部にわずかな棱をもつ。 ○外面口縁部の直下に刻み目ない突帯をめぐらせている。 ○口 径(235)は15.5cm、(237)は22.6cm、(269)は推定口徑32cm。 | ○口縁部は内外面ともに横方向のミガキ調整を施すもの(235)と、外面はヨコナゲ調整、内面はナゲ調整で仕上げるもの(237・269)がある。(237)は内面のナゲ調整の前に、横方向に二枚貝調整を行っている。 ○体部外面は底部から上方に向かって横方向にケズリ調整した後、体部に縱方向のミガキ調整を加えており、体部内面は横方向のミガキ調整を施し、底部内面もミガキ調整で仕上げているもの(235)がある。 ○突帯は断面が三角形を呈するもの(235・269)と、台形を呈するもの(237)がある。(237)は他のものより少し低い位置に突帯をつけている。 ○(235)は口縁部内面に沈線をめぐらしている。 | ○在地産3例(235・237・267)。 ○2例は係が認められる。 |
| | D 239 243 | ○ゆるやかに外反する縁部から、直線的に外上方へのびる口縁部をもつ。口縁部は面をもつもの(239)と丸味をもつもの(243)がある。 ○外面口縁部の直下に刻み目突帯をめぐらせている。 ○肩部の径は異なる。体部は丸味をもち口徑より腹径の方が大きい。 ○口 径(239)は25.3cm、(243)は32.9cm。 | ○口縁部は、外面に横方向の二枚貝調整、内面にナゲ調整を施すもの(239)と、外面に横方向のケズリ調整の後、横方向のミガキ調整を加え、内面は丁寧なナゲ調整で仕上げるもの(243)がある。 ○体部は外面横方向のケズリ調整のもの(239)と、横方向の二枚貝調整を施すもの(243)がある。体部内面はナゲ調整を施しているのが、肩部付近に二枚貝調査の残るもの(239)がある。 ○突帯は断面が三角形を呈する。刻み目はヘラ状の原体によるもので、D字形を呈する。 | ○在地産3例(239・243)。 |
| C | 246 247 249 250 255 259 260 261 262 263 264 265 266 267 268 273 274 | ○外反する縁部から口縁部が直線的に直上に立ち上がるものの(250・256・264・265)、直線的に外上方へのびるもの(246・249・261・266)、外反しながら外上方へのびるもの(247・259・260・262・263・273)、外反しながらほぼ直上へのびるもの(267・268・274)がある。 ○口縁部に刻み目をつけ、外面口縁部の直下に刻み目突帯をめぐらせている。 ○肩部の径が明顯なもの(249・250・256・268)と、径をもたずなだらかに体部から口縁部へ移行するもの(246・258・265)がある。 ○口 径は18cmから45.5cmのものがあるが、20cmから53cmのものが多い。(246)は19.8cm、(247)は23.5cm、(249)は45.5cm、(250)は45.0cm、(256)33.8cm、(273)は31.8cm、(274)は20.3cm。 | ○口縁部は、縁部にヨコナゲ調整を施し、内外面をナゲ調整するものが多いが、内外面とも丁寧なヨコナゲ調整を施すもの(250・256)、外面はナゲ調整で内面もミガキ調整を加えるもの(264)、外面は横方向の板ナゲで、内面はナゲ調整するもの(265)がある。また、外面に横方向の二枚貝調整を施しているものには、内面をナゲ調整あるいはヨコナゲ調整で仕上げるもの(246・261)と、横方向に卷貝調整を施し、上半部に横方向のナゲ調整を加えるもの(260)がある。 ○体部外面は肩部付近を横方向に以下を水平から左上がりの縦方向にケズリ調整するもの(249・250)と、外面全体を縱方向にケズリ調整するもの(274)がある。内面はナゲ調整で仕上げているもの(249・274)と、横方向の板ナゲ調整を施すもの(250)がある。 ○突帯は断面が三角形を呈するものと台形を呈するものがある。刻み目はヘラ状の原体によりD字形とO字形を呈するもの多い他に、二枚貝の押し引きによる刻み目を施すもの(260・265)もある。(273)は突帯の削目の施工方が粗雑で刻み目のついていない部分がある。 ○(256)は口縁部外面に山形の沈線を施している。 ○内面に粘土縫の織ぎ目痕の残るもの(247・249)がある。粘土縫の幅は1cm程度のものもあるが、1.5cm～2cmのものが多い。 | ○在地産48例(247・249・250・256・259～268・273)、他地城産5例(246・274)。 ○27例に係が認められる。 |

縄文 II (溝33)

| 器 形 | 番号 | 形 熟 の 特 徴 | 技 法 の 特 徴 | 備 考 |
|-----|----|--|--|---|
| 深 体 | E | <p>○口縁部はほとんど外反せず、ほぼ直上にのび、端部は面をもつ。</p> <p>○外面口縁端部の直下と、口縁部と体部の境に刻み目のある突唇をめぐらせている。</p> <p>○(236)は口径27.1cm。</p> | <p>○口縁部は外表面とともにナゲ調整を施している。</p> <p>○体部外表面は左上がりの斜方向のケズリ調整を施すもの(236)と、横方向のケズリ調整を施すもの(280)がある。体部内面はナゲ調整で仕上げているが、肩部付近に横方向の根ナゲ調整の残るもの(2)がある。</p> <p>○突唇は断面が三角形を呈する。刻み目はヘラ状の原体により、やや浅めのD字形を呈する。</p> <p>○(236)は内面に粘土絆の縦ぎ目痕が残る。粘土絆の幅は1.5~2cm。</p> | <p>○在地産2例(236・280)。</p> <p>○(236)は外面肩部の突唇以下に蟹が付着している。</p> |
| | F1 | <p>○体部から口縁部にかけてやや直線的に上方へのびる。口縁端部は丸味をもつ。</p> <p>○既定口径21cm。</p> | <p>○口縁端部にヨコナナゲ調整を施し、以下を外表面は時計回りの横方向にケズリ調整をしており、内面はナゲ調整で仕上げている。</p> | <p>○在地産1例(281)。</p> <p>○蟹が認められる。</p> |
| | G2 | <p>○口縁部は直線的で、口縁端部は面をもつ。</p> <p>○外面口縁端部の直下に刻み目ない突唇をめぐらせている。</p> <p>○既定口径26cm。</p> | <p>○口縁端部および内面はヨコナナゲ調整、外表面は横方向にケズリ調整を施している。</p> <p>○突唇は断面が三角形を呈する。</p> | <p>○他地域産1例。</p> <p>○外間に蟹が認められる。</p> |
| 浅 体 | G1 | <p>○口縁部はやや内湾している。</p> <p>○体部は泡彫形で、底部が丸底を呈するもの(248)がある。</p> <p>○口縁端部に刻み目をつけ、外面口縁端部の直下に刻み目突唇をめぐらせている。</p> <p>○口径は21cmから31cmのものがある。29cm前後のものが多い。(248)は31.2cm。</p> | <p>○口縁端部はヨコナナゲ調整、口縁部外表面は時計回りの横方向のケズリ調整を施し、口縁端部内面は二枚貝調整の後、ナゲ調整を加えているもの(248-271)が3例ある。</p> <p>○体部外表面は下方から上方に向う横方向のケズリ調整を施し、体部内面はナゲ調整で仕上げているもの(248)がある。</p> <p>○(248)の外表面調整は粘土絆束状の原体によるものである。</p> <p>○突唇は断面が三角形を呈するもの(271)と、台形を呈するもの(248)があるが台形を呈するものの方が多い。刻み目はヘラ状の原体で施しており、D字形を呈するものが多い。</p> <p>○(248)は内外面に粘土絆の縦ぎ目痕が残る。粘土絆の幅は1.0~2.5cmのものがあるが、1.5~2.0cmのものが多い。</p> | <p>○在地産6例(248・291)。</p> <p>○5例に蟹が認められる(248)は外面口縁部から体部中位にかけて蟹が付着するが、底部は蟹の付着が見られない。</p> |
| | C1 | <p>○体部から口縁部にかけてほとんど膨らみをもたず、直線的に上方へのびる。口縁端部は薄くつまみ出している。</p> <p>○口径9cm。</p> | <p>○口縁部外表面および体部内面は横方向のミガキ調整、体部外表面は縦方向のミガキ調整を施している。</p> <p>○口縁部外表面に体状の原体による1条の沈線をめぐらせている。</p> | <p>○他地域産1例(245)。</p> |
| | C1 | <p>○口縁部はゆるやかに内湾している。</p> <p>○口径は13cmから20cmのものがあり、18cm前後のものが多いが、40cm近くあるもの(275)もある。(238)は21.7cm。</p> | <p>○口縁部外表面および体部内面はナゲ調整を施し、体部外表面は横方向のケズリ調整で仕上げているもの(238)が多い。他に、内外面ともに横方向のケズリ調整を施しているもの(270)、外表面はナゲ調整を施し、内面は横方向の根ナゲ調整を施しているもの(275)、また、外表面を縦方向にケズリ調整しているものも1例ある。</p> | <p>○在地産18例(238・270-275)、他地域産1例。</p> <p>○14例に蟹が認められる小片のため不明なものも多い。</p> |
| | C2 | ○口縁部はゆるやかに内湾しており、端部に刻み目をもつ。 | <p>○内外面ともにナゲ調整を施し、口縁端部にナゲ調整を加えている。</p> <p>○刻み目はヘラ状の原体によるものでO字形を呈する。</p> | <p>○在地産1例。</p> <p>○蟹が認められる。</p> |

図文 II (満33)

| 器 形 | 番号 | 形 独 の 特 殊 | 技 法 の 特 徴 | 備 考 |
|-----|-----|---|---|---|
| 浅鉢 | D | <ul style="list-style-type: none"> ○内寄する体部から口縁部が構成に内寄しながら立ち上がるもの(272-276)と、縁部がわざかに外反するもの(278)がある。 ○口縁部は面をなすものが多く、外側口縁端部の直下に刻み目ない突唇をもつ。 ○推定口径(278)は11cm、(276)は30cm、(272)は34cm。 | <ul style="list-style-type: none"> ○口縁部は内外面ともにヨコナデ調整を施し、体部外面は横方向のケズリ調整、体部内面はナデ調整で仕上げるもの(276)が多い。 他に、内外面ともに横方向のミガキ調整を施すもの(278)、内外面ともに横方向のケズリ調整を施した後、ヨコナデ調整を加えるもの(272)がある。 ○突唇は断面が台形を呈するもの(272-276)と、三角形を呈するもの(278)がある。 | <ul style="list-style-type: none"> ○在地産8例(272-276-278)他地域産1例。 ○4例に縁が認められる。 ○(278)は外面に赤色顔料が残る。 |
| | E | <ul style="list-style-type: none"> ○口縁部は外反しながら上方にのび、外側口縁端部の直下に刻み目ない突唇をもぐる。 ○軸部は強く張り出して棲をなす。体部は内寄するもの(257)と、外反気味になるもの(258)がある。 ○口径は20cmから34cmのものがあり、30cm前後のものが多い。(257)は26.5cm、(258)は33.8cm。 | <ul style="list-style-type: none"> ○口縁部は内外面ともにナデ調整およびヨコナデ調整で仕上げるものが多い。また、外面ともに横方向のミガキ調整を加えるもの(257-258)が4例、外面のみミガキ調整を施すものが1例ある。 ○体部外面は横方向のケズリ調整、内面はナデ調整で仕上げている。 ○(257)は内面のミガキ調整およびナデ調整の前に、全面に横方向の巻貝調整を施している。 ○突唇は断面が台形を呈するものが多い。また、内面にも突唇をめぐらし突起(P-6)をつけ、挺く脈出した肩部に刻み目を施しているもの(258)がある。刻み目はヘラ状の原体によるものでD字形を呈する。 | <ul style="list-style-type: none"> ○在地産6例(257-258)他地域産4例。 ○4例に縁が認められる。(258)は体部の一部に縁が付着している。 ○(258)は内外面に赤色顔料が産出ししている。 |
| | | 277 | <ul style="list-style-type: none"> ○外表面は横方向のケズリ調整を施し、二枚貝による肩口がある。 ○内面は二枚貝による横方向のケズリ調整を施している。 | ○在地産。 |
| | | 279 | <ul style="list-style-type: none"> ○外表面は横方向のケズリ調整を施し、半截竹管による刻み目がある。 ○内面は横方向のナデ調整を施している。 | ○在地産。 |
| 盃 | A | <ul style="list-style-type: none"> ○口縁部は直線的に、やや内傾しながら上方にのびる。口縁端部の器型はやや薄くなり、尖り気味になる。 ○口径は11cm。 | ○内外面ともにヨコナデ調整を施している。 | ○在地産1例。 |
| | B | <ul style="list-style-type: none"> ○口縁部は外反する。通部は丸底をもつが、内縁部は角張っている。 ○口縁端部の直下に刻み目ない突唇をもつ。 ○口径は12.4cm。 | <ul style="list-style-type: none"> ○口縁部は内外面ともに横方向のミガキ調整で仕上げている。 ○突唇は断面が台形を呈する。 | ○在地産1例。 |
| 底 | 252 | ○平底を呈するもの(253)が1例、丸底を呈するもの(252-254-255)が3例ある。 | ○(253)は丸底の外底面に輪にした粘土紐を貼りつけて平底をつくり、内外面にナデ調整を施している。 | ○在地産3例(252-254-255)、他地域産1例(253)。 |
| | 253 | ○(253)は浅底の底器と考被される。 | | |
| | 254 | ○丸底のものは、弧を描くように丸くなるもの(254)と、やや尖り気味になるもの(252-255)がある。 | ○丸底のものは内外面ともにナデ調整を施しているもの(252-254)と、外表面に縱方向のケズリ調整、内面にはナデ調整を施しているもの(255)がある。 | ○(252-254-255)は外表面に縁が認められる。 |
| | 255 | | | |
| 蓋 | 251 | ○平底形を呈する器形をもつ。器壁は厚いが、口縁端部に向かって厚くなり縁部は尖り気味になる。 | ○内外面ともにナデ調整を施している。 | ○在地産1例。 |

絶文 II (黒灰色砂質土)

| 器 形 | 番 号 | 形 態 の 特 徴 | 技 法 の 特 徴 | 備 考 |
|------------------------|--|---|---|--|
| 窓 領 | A 284 287 310 311 312 | ○口縁部が強く外反が強くて、肩部の縁の明瞭なものと、口縁部が比較的短く外反がゆるやかで、肩部の縁もあまいもの(284-287-310-312)があるが、縁をもつものが主体を占める。 ○口径は12cm前後のものから38cm前後のものがある。25cm前後のものが多い。 | ○口縁部は内外面ともにヨコナデ調整およびヨコナデ調整を施している。中には内面に横方向のケズリ調整を施しているもののが1例。 ○内面口縁端部に横方向ミミキ調整を施すものが1例。外面上に横方向のケズリ調整を施すものが1例である。他に、口縁端部にヨコナデ調整、外縁横方向のミガキ調整、内面横方向のケズリ調整の後、租いミガキ調整を加えているものの(311)がある。 ○全体は外縁横方向のケズリ調整、内面ナデ調整するもの(284-310-312)が7例あり、内面に復ナデ調整を施すものが1例である。また、体部外面は横方向のケズリ調整の後、横方向のミガキ調整を加え、内面肩部付近に板ナデ調整を施すものも1例見られる。 他に、口縁部にヨコナデ調整の後横方向にミガキ調整を加え、体部外面は横方向にケズリ調整を施しているもの(287)が1例ある。 ○頭部外面にヘラ描き沈線を施すものがあり、1条のものと2条のもの(310)がある。また、肩部に半乾竹管状のもので押し引きを施しているものがある。 | ○在地産67例 (284-287-310-311)、他地域産8例 (312) ○30例に溝が認められるが、小片が多く不明なものも多々。 |
| | B 289 309 313 314 323 399 | ○口縁部が強く外反するもの(309-313)、ゆるやかに外反するもの(314)。ほとんど外反せず直線的に上方へのびるもの(289-323-399)がある。 ○口縁端部に割み目をもつ。 ○口径は15cmから33cm前後のものがある。 | ○口縁部内面ともにヨコナデ調整を施しているもの(313)が多い。中には二枚具調整のものがあり、内面に行うものの(289)と、外面上に施すものの(314-323-399)がある。内面は横方向のケズリ調整を施すもの(323)と、ナデ調整で仕上げるものの(314-399)がある。他に、(309)は外縁のナデ調整の前にケズリ調整を施している。 ○割み目はヘラ状の原体によるものが多いが、一枚具の押し引きによるもの(289-314-323-399)も4例ある。 | ○在地産9例 (289-313-323) 他地域産4例 (314-309-399) ○4例に溝が認められる。 ○東海系が1例見られる(399)。(323)も東海系と思われる。 ○(289)は口径・頬まとともに国上復元。 |
| H 285 315 316 | ○口縁部は外反するもの(34)と、直線的に外上方へのびるもの(285-315)がある。口縁端部は丸味をもつものが多い。 ○口縁端部の直下に割み目ない突密をめぐらせている。 ○口径25cmから36cm前後のものがある。30cm前後のものが多い。(285)は29.8cm。 | ○口縁部内外面にヨコナデ調整するもの(315)が一般的だが、内外面にミガキ調整を加えるもの(285)。外面上のみミガキ調整で仕上げるものがある。 ○突密は断面が台形を呈するものと、三角形を呈するものがある。 | ○在地産7例 (285-315-316)。 ○3例に溝が認められる。 | |
| D 320 326 | ○口縁端部は面をもつもの(320)と、丸味をもつもの(326)がある。 ○外縁口縁端部の直下に割み目のある突密をめぐらせている。 | ○内外面にヨコナデ調整を施している。 ○突密は断面が三角形のもの(326)と、台形のもの(320)があり、割み目はヘラ状の原体によるもの(326)と、二枚具の押し引きによるもの(320)がある。 ○口縁端部内外面に体状あるいはヘラ状のものによる沈線をめぐらせているもの(320)がある。 | ○在地産2例 (326)、他地域産1例 (320)。 ○(320)は馬見塚F地点に類似あり。 | |
| C | 318 | ○口縁部は直線的にのび、端部付近でやや外反し、外側する面をもつ。口縁端部に割み目をつけ、外縁口縁端部の直下に割み目がない突密をめぐらせている。 ○推定口径28cm。 | ○内外面ともにヨコナデ調整を施している。口縁端部内面にヘラ状のものが当たった痕跡が残る。 ○突密は断面が三角形を呈する。口縁端部の割み目はヘラ状の原体によるものでV字形を呈する。 | ○他地域産1例 (318)。 |
| 体 部 | 348 | | ○外面上は横方向のケズリ調整後、半乾竹管による割み目を施している。 ○内面は横方向のナデ調整を施している。 | ○他地域産 (348)。 |
| | 349 | | ○外面上は横方向のケズリ調整後、半乾竹管による割み目を施している。 ○内面は風化の為調整不明。 | ○在地産 (349)。 |

縦文Ⅱ (黒灰色砂質土)

| 器 形 | | 番号 | 形 态 の 特 徴 | 技 法 の 特 徴 | 備 考 |
|----------------|---|-----|--|---|---|
| 種類 | 体部 | 番号 | | | |
| C | 292 295 317 321 322 324 | 351 | <ul style="list-style-type: none"> ○口縁部はゆるやかに外反しながら上方にのびるもの、あるいは外上方にのびるもの(292-295-317)が一般的だが、強く外反して大きく外上方にひらきのもの、また、あまり外反しないものの内腹気味になるもの(321-324)がある。口縁部に割み目をつけ、外縫口縫端部の直下に割み目のある突審をめぐらせている。また、口縫端部の上端に突審を沿わせて施しているものもある。 ○口径15cmから42cmのものがあり、25cmから30cmのものが多い。(292)は24.6cm、(295)は23.2cm。 | <ul style="list-style-type: none"> ○外縁部は外外面とともにヨコナダ調整後、半乾竹管による割み目を施している。 ○内面は風化の為調整不明 | <ul style="list-style-type: none"> ○在地産(351)。 |
| E | 327 335 | | <ul style="list-style-type: none"> ○口縁部はゆるやかに外反しながらやや内傾気味に上方へのびる。外縫口縫端部の底と口縁部と体部の境に突審をめぐる。 ○確定口径(327)は31cm。 | <ul style="list-style-type: none"> ○口縁部内外面ヨコナダ調整、体部内外面に横方向のケズリ調整を施しているもの(327-335)がある。 | <ul style="list-style-type: none"> ○(327-335)は在地産。 ○(335)は肩部の突審以下に崖が付着している。 |
| F ₁ | 298 319 | | <ul style="list-style-type: none"> ○体部から口縁部にかけて弧を描くように内弯して、口縁部が内屈するもの(298)、ゆるやかに内弯しながらほぼ直上にのびるもの、はとんと彫りをもつたずに上方にのびるもの(319)がある。 ○口径15cmから30cm前後のものがあり、25cm前後のものが多い。(298)は29.5cm。 | <ul style="list-style-type: none"> ○口縫端部及び内面をナダ調整外面をケズリ調整するものが一般的である。外面のケズリ調整は、口縫部付近を横方向に以下を下方向から上方に縱方向に施すもの(319)が多い。また、口縫部より内面は横方向に、体部外面は縦方向にミガキ調整を加えているもの(298)もある他に、口縫部外縁のみ横方向に粗いミガキ調整を加えているものも1例見られる。 | <ul style="list-style-type: none"> ○在地産2例(319)、他の地産2例(298)。 ○16例に崖が認められる片が多く不明なものも多い。 (319)は外面全体と内面の一端に崖が付着している。 |
| F ₂ | 325 | | <ul style="list-style-type: none"> ○体部から口縁部にかけほとんど彫りをもたない。 ○口縫端部に割み目をもつ。 ○確定口径25cmのもの(325)がある。 | <ul style="list-style-type: none"> ○口縫端部はヨコナダ調整、以下を、外縁は横方向にケズリ調整を施しているもの(325)と、内外面にナダ調整を施しているものがある。 ○割み目はヘラ状の原体による。 | <ul style="list-style-type: none"> ○在地産3例(325)。 ○2例に崖が認められる。(325)は外面に崖が付着している。 |
| G ₁ | | | <ul style="list-style-type: none"> ○口縁部は直線的で、端部は面をもつものと丸味をもつものがある。 ○外縫口縫端部の底面に割み目をもつ。 ○確定口径37cmのものと20cmのものがある。 | <ul style="list-style-type: none"> ○口縫端部および内面にはヨコナダ調整、外面は突審下半より以下を横方向のケズリ調整を施している。 ○突審は断面が三角形を呈する。 | <ul style="list-style-type: none"> ○在地産2例。 ○1例に崖が認められる。 |
| G ₂ | | | <ul style="list-style-type: none"> ○口縁部は直線的で、端部は丸く仕上げている。 ○口縫端部に割み目をもち、外縫口縫端部の底面に割み目のない突審をめぐらせている。 ○確定口径22cm。 | <ul style="list-style-type: none"> ○外縫部とともにヨコナダ調整。 ○割み目はヘラ状の原体によりV字形を呈する。突審は断面が三角形を呈する。 | <ul style="list-style-type: none"> ○在地産1例。 |
| G ₃ | 329 330 | | <ul style="list-style-type: none"> ○口縁部が内弯気味のもの(329)と、直線的になるもの(330)がある。口縫端部は面をもつものと丸味をもつものがあるが、面をもつものの方が多い。 ○口縫端部に割み目をつけ、外縫口縫端部の底面に割み目のある突審をめぐらせている。 ○口径17cmから30cm前後のものがあり、20cm前後のものが多い。 | <ul style="list-style-type: none"> ○口縫端部および口縫部内面にヨコナダ調整、外縫は突審以下を横方向にケズリ調整するもの(330)が一般的である。また、内面を二枚貝調整するもの(329)もある。 ○割み目はヘラ状の原体による。 ○突審は断面が台形を呈するもの6例、三角形を呈するもの4例ある。 | <ul style="list-style-type: none"> ○在地産9例(329-330)他の地産1例。 ○7例に崖が認められる。 |
| A | 282 283 328 331 340 341 352 | | <ul style="list-style-type: none"> ○口縫部が強く外反し、端部内面が肥厚するもの(282-283-340-341-352)と口縫部が屈曲して上方に立ち上がり、端部がシャープな面をもつ(328)がある。直立する口縫部の内面が肥厚し、断面が四辺形を呈するもの(331)がある。端部は強く屈曲し内面に段をなす。肩部は強く張り出して複数をもつ。 ○口径18cmから36cm前後のものがある。(282)は25.6cm、(283)は28.0cm。 | <ul style="list-style-type: none"> ○外縫部とともに横方向のミガキ調整を施しているもの(282-283-331-340-341-352)が7例、外縫部とともにヨコナダ調整を行うもの(328)が1例ある。 ○黒色磨研土器(331)が1例見られる。 | <ul style="list-style-type: none"> ○在地産8例(282-283-328-331-340-341-352)。 ○外縫部に赤色顔料を塗布する(341)、口縫部内面の一部に赤色顔料が残る(331)、内面一部に朱の残る(331)が各1例見られる。 |

縄文II（黒灰色砂質土）

| 器形 | 番号 | 形態の特徴 | 技法の特徴 | 備考 |
|----|----|--|--|---|
| 浅鉢 | C | <p>○口縁部は傾く外反し、縁部内面が肥厚して段をもつ。頭部で「く」の字形に屈曲して丸座のある体部に移行するもの。(307・336・342)が基本的な形態だが、中には口縁端部内面が肥厚せず、端部が外傾する面をなすもの(338)がある。</p> <p>○口径28cmから34cm前後。</p> | <p>○内外面ともに横方向のミガキ調整を施すもの(336・338・342)が3例。口縁部外面および体部外面にヨコナナデ調整、口縁部内面に横方向のミガキ調整、体部内部にナナデ調整を施すもの(307)が1例ある。</p> <p>○突起(P-4)をもつものの(336・342)が2例ある。</p> | <p>○在地産2例(366・338)他地域産2例(307・342)。</p> <p>○(307)は口径・傾きとともに面上復元。</p> |
| | C+ | <p>○口縁部内面寄る体部から単純に続くもの(299)と、口縁部が若干外反するもの(291)がある。他に、外上方へ直線的にのびるものがある。口縁端部は面をもつ。</p> <p>○(291)は推定口径14.7cm、(299)は13.3cm。</p> | <p>○口縁部内面および体部外面に横方向のミガキ調整、体部内面にナナデ調整を施しているもの(291)と、内面はナナデ調整の後、横方向のミガキ調整、外面は底底のため方向は不明だが、ミガキ調整を施しているもの(299)がある。</p> <p>○口縁端部外面にヘラ状工具による沈線をもつもの(291)がある。</p> <p>○黒色磨研土器が1例ある。</p> <p>外而に、粘土紐の離ぎ目が残るものがある。粘土紐の幅は1.3cm。</p> | <p>○在地産2例(291・299)他地域産1例。</p> <p>○(291・299)は口径・傾きとともに面上復元。</p> |
| | C+ | <p>○口縁部が内寄する体部から単純に続くもの(288・290・333・339)と、直線的外上方へのびるもの(347)がある。</p> <p>○(339)は口径10cm前後から27cm前後のものがある。15~20cm前後のものが多い。</p> | <p>○口縁端部はヨコナナデ調整、以下を、外面横方向のケズリ調整、内面をナナデ調整するもの(288・339・347)が18例。内外面ともにナナデ調整を施すものが5例ある。他に、外面横方向のケズリ調整、内面横方向のミガキ調整のもの、内外面ともに横方向のケズリ調整後、ナナデ調整を施すもの、外芯横方向のミガキ調整、内面ナナデ調整のもの、外面横方向のケズリ調整、内面横方向のケズリ調整の後、横方向のミガキ調整のもの、外面口縁部を横方向に、以下を、縱方向にケズリ調整、内面ナナデ調整を施す口縁部に横方向のミガキ調整を加えるもの(288)がそれぞれ1例ずつ見られる。</p> <p>○突起(P-3)をもつもの(339)がある。</p> <p>○口縁端部外面に沈線をもつものが2例、端部内面に沈線をもつものが1例ある。</p> <p>○内面に粘土紐の離ぎ目が残るもの(290)がある。粘土紐の幅は1.2cm。</p> | <p>○在地産30例(288・290・333・339・347)他地域産3例。</p> <p>○24例に縫が認められる。(288・290)は外面に薄く縫が付着している。</p> |
| | C+ | <p>○口縁部が内寄する体部から単純に続くものと、直線的外上方へのびるものがある。</p> <p>○口縁端部に刻み目をもつ。</p> <p>○推定口径22cmのもの(322)がある。</p> | <p>○口縁部内面および体部内面ヨコナナデ調整、体部外面は横方向にケズリ調整するもの(332)と、口縁端部はヨコナナデ調整、以下を、内外面ともに横方向のケズリ調整を行うものがある。</p> <p>○好み目はヘラ状の原体による。O字形を呈するものと、不規則なものがある。</p> | <p>○在地産2例(332)。</p> <p>○1例には縫が見られる。</p> |
| | D | <p>○口縁部が内寄する体部から単純に続くもの(346・353)と、やや外反気味になるものがある。</p> <p>○外側口縁端部の直下に刻み日のない突唇をもつ。口縁端部に突唇の上端を沿わせてつけているものも1例ある。</p> <p>○口径8cm前後のものから30cm前後のものがある。</p> | <p>○口縁部内面をヨコナナデ調整、体部内面をナナデ調整するものが一般的だが、外側突唇以下を横方向にケズリ調整するもの、内面を横方向にミガキ調整するもの(346)がある。(353)は黒化の為不明。</p> <p>○突唇は断面が三角形を呈するもの(353)が9例、台形を呈するもの(346)が2例ある。</p> <p>○口縁端部内面および突唇上にヘラ状のものによる沈線を加えるもの(346)がある。</p> | <p>○在地産9例(346・353)。</p> <p>○外側に縫が認められる。</p> |
| | D | <p>○内寄する体部からやや外反気味に上方へのびる口縁部をもつ。</p> <p>○外側口縁端部の直下に刻み日のある突唇をもつ。</p> | <p>○口縁部内面はヨコナナデ調整、体部は内外面にナナデ調整を施している。</p> <p>○突唇は断面が三角形を呈する。突唇はヘラ状のものにより、小D字形を呈する。</p> | <p>○在地産1例。</p> <p>○外側に縫が認められる。</p> |

図文II (黒灰色砂質土)

| 器 形 | 番号 | 形 態 の 特 徴 | 技 法 の 特 徴 | 備 考 |
|-----|--|---|---|--|
| 後 鍤 | E | <p>296 ○外反する口縁部に肩の振り出す浅い体部がつく。口縁部が外上方にひらくもの(300・308・343・345)と、ほぼ直上にのびるもの(296・334・334・350)と、内横気味になるもの(306)がある。</p> <p>345 ○(334)は蓋になるかもしれない。</p> <p>350 ○外面口縁部の底下に突筋をもつ。</p> | <p>○口縁部内外面横方向のミガキ調整のもの(345)が10例ある。そのうち体部まで残存するものが4例あり、外表面横方向のケズリ調整、内面ナゲ調整するもの(300・308)が3例、内外面ともにナゲ調整するもの(296)が1例ある。また、口縁部内外面ともにヨコナゲ調整のもの(334)が7例、口縁部から内面にかけてヨコナゲ調整を施し、外面には横方向のミガキ調整を加えるもの9例ある。</p> <p>○突筋は断面が三角形を呈するもの31例、台形を呈するものが2例ある。(内面にも突筋をめぐらせているものが4例、内面に沈線を加えるものが3例ある。)</p> <p>○内外面に突筋をもつものには突起(P-6)をつけるもの(345)、突起(P-4)をつけるものが1例ずつある。内面に沈線をもつものには突起(P-1)をつくるもの(300)が1例ある。</p> | <p>○在地底28例(296・334・343・345・350)、他地域産(300・308)。</p> <p>○14例に蓋が認められる。小片のため不明なものも多い。(300)は外面に張り出しがしている。</p> |
| H | 297 337 344 | <p>○口縁部は長くゆるやかに外反する。口縁部は丸味をもつもの(297)、シャープな面をもつもの(344)がある。また、縁部が粗面して短く立ち上がり溝面に割み目をもつもの(337)が1例ある。</p> <p>○口径15cmから26cm前後のものがある。</p> | <p>○内外面ともに横方向のミガキ調整を施すもの(344)が3例、ヨコナゲ調整を施すもの(337)が2例、外面ヨコナゲ調整、内面横方向のミガキ調整を施すもの(297)が1例ある。</p> <p>○口縁部内面に沈線をめぐらせているもの(297・344)が4例ある。</p> <p>○(337)はヘラ状の原体によるもので小O字状を呈する割み目を施している。</p> | <p>○在地底5例(297・337・344)、他地域産2例。</p> |
| F | 286 | <p>○肩の張る体部に内横する口縁部をもつ。口縁部はやや外向して縁部は丸味をもつ。</p> <p>○口径16cm前後から22.4cm前後のものがある。</p> | <p>○外面口縁部はヨコナゲ調整、体部は横方向のケズリ調整、内面は口縁部から体部にかけて横方向のミガキ調整を施している。他に、口縁部では内外面ともにヨコナゲ調整のものがある。</p> <p>○口縁部外間に沈線をもつものがある。</p> | <p>○在地底2例(286)、他地域産1例。</p> |
| 蓋 | B | <p>293 ○口縁部はゆるやかに外反しながら上方へのびる。</p> <p>○割み目のない突筋を口縁部に上端を沿わせてめぐらせている。</p> <p>○口径9.8cm。</p> | <p>○内外面ともに横方向のミガキ調整を施している。</p> <p>○突筋は幅の広い扁平なものを作っている。</p> | <p>○在地底1例(293)。</p> |
| C | 294 | <p>○口縁部はゆるやかに外反し、蓋部は唇壁が薄くなり尖り気味になる。</p> <p>○外面口縁部の底下に割み目のある突筋をもつ。</p> <p>○口径14cm前後。</p> | <p>○口縁部から外間にかけてヨコナゲ調整、内面はナゲ調整をしている。</p> <p>○突筋は断面が三角形を呈する。ヘラ状の原体によるV字形の割み目をついている。</p> | <p>○在地底1例(294)。</p> |
| 底 鍤 | 301 302 303 304 305 306 | <p>○丸底を呈するもの(301・302・304)が6例、平底を呈するもの(303・305・306)が3例ある。</p> <p>○平底のものはやや上げ底風になるもの(305・306)が2例ある。</p> <p>○丸底のものは体部へのひらき方から(302)は深体のもの、(301・304)は浅体のものと考えられる。</p> <p>○平底のものは調整の仕方から、浅体のものと考えられる。</p> | <p>○丸底のものは、外表面横方向のケズリ調整、内面および外底面にナゲ調整を施しているもの(302・304)と、内外面にミガキ調整を施しているもの(301)がある。(301)のミガキ調整は、外側は、横方向に行なった後、外底面は一定方向に施し、内面は縦方向に行なった後、内底面は一定方向に施しており格子状を呈する。</p> <p>○平底のものは内外面ナゲ調整を施しているが、内面にミガキ調整を加えるもの(305)がある。</p> <p>○上げ底風のものはやや丸底気味の底部に断面が三角形を呈する粘土板を輪にして貼り付けているもの(306)と、粘土板を基盤として作り上げた底面の周囲に薄く輪にした粘土板を貼り付けているもの(306)がある。</p> | <p>○在地底7例(301・302・304・305・306)、他地域産(303)。</p> <p>○(304)は二次焼成と思われる痕跡がある。</p> |

縄文 I (黄灰色シルト)

| 器 形 | 番号 | 形 素 の 特 徴 | 技 法 の 特 徴 | 備 考 |
|----------------|--|--|---|---|
| 蓋 | | ○円形で中高の笠形を呈する。口縁端部は丸味をもつ。 ○口径5.8cm。 | ○内外面ともにナデ調整を施しているが、根縁に仕上げている。 | ○在地産1例。 |
| 深 体 | A 355 356 357 358 | ○口縁部はゆるやかに外反するもの(355・357)と、ほとんど外反しない直線的なもの(356・358)がある。 ○口径30cm前後のものが多いが13cm前後の小型のももある。 | ○口縁部内外面ともにヨコナダ調整を施している。内面にミガキ調整を加えているもの(357)が1例ある。 | ○在地産15例(355~358)。 ○2例に縫が認められる小片のため不明なものが多い。 |
| B | 354 | ○直線的では直立している口縁部の端部近くの破片。端部は面をもつ。 ○口縁溝部に刻み目を施している。 | ○調整は風化の為不明。ヨコナダ調整か? ○刻み目はヘラ状の原体により、V字形を呈している。 | ○在地産1例(354)。 |
| H | 360 364 365 | ○口縁部は外反して端部に面をもつもの(360・364)と、内傾して端部の脛部が薄くなり尖り気味になるもの(365)がある。 ○外面口縁溝部の直下に刻み目ない突帶をもつ。 ○口径25cm前後。 | ○内外面ともにヨコナダ調整を施している。 ○突帶は断面が三角形を呈している。 | ○在地産5例(360・364・365)。 ○(360)には縫が認められる。(365)は縫横に頗る。 |
| C | 367 368 | ○口縁部は外反し、端部は丸味をもつ口縁端部に刻み目をつけ、外面口縁溝部の直下に刻み目ない突帶をめぐらせていている。 ○確定口径23cmから33cm。 | ○内外面ともにヨコナダ調整を施している。 ○刻み目は二枚貝の押し引きによるもの(367)と、ヘラ状の原体によるもの(368)がある。 ○突帶は断面が三角形を呈するもの(367)と、台形を呈するもの(368)がある。 | ○在地産1例(367)、 他地域産1例(368)。 ○(368)には縫が認められる。 |
| C | 361 362 363 366 369 370 372 373 378 388 | ○口縁部はゆるやかに外反して外上方にのびるもの(361・363・373・386)と、直線的に上方にのびるもの(362・366・369・370)がある。 ○口縁部に刻み目を施し、外面口縁溝部の直下に刻み目のある突帶をめぐらせていている。 ○確定口径22cmから40cm。 | ○内外面ともにヨコナダ調整を施している。 ○突帶は断面が三角形を呈するものが6例、台形を呈するものが12例ある。 ○刻み目は二枚貝の押し引きによるもの(361)と、ヘラ状の原体によるもの(362)がある。 ○突帶はD字形が6例、O字形が3例、小D字形が1例、小O字形が5例、V字形が1例あり、突帶はD字形9例、O字形6例、小D字形1例、小O字形1例、V字形が1例あり、口縁溝部のほうが突帶より刻み目が浅く軽くなる傾向がある。 | ○在地産16例(361・362・363・366・370・372・373・386・388)、 他地域産2例(369)。 ○5例に縫が認められる。 |
| E | 385 389 | ○口縁部と体部の境に刻み目のある突帶をめぐらせていている。 | ○突帶および内面はヨコナダ調整を施し、外側突帶以下を横方向にケズリ調整している。 ○突帶は断面が台形を呈し、ヘラ状の原体でV字形の刻み目をついている。 | ○在地産1例(385)、 他地域産(389)。 |
| F ₁ | 379 | ○口縁部はやや内寄気味で、上方にのびる。端部は面をもつものと丸味をもつものがある。 ○口径34cm前後。 | ○外側は逆時計回りの横方向にケズリ調整、内面はヨコナダ調整を施している。 | ○在地産2例(379)。 ○2例とともに縫が認められる。 |
| F ₂ | 371 | ○体部から口縁部にかけて直線的に上方にのびる。端部は面をもつ。 ○口縁溝部に刻み目をつけている。 ○口径31cm前後。 | ○外側は時計回りの横方向のケズリ調整、内面はヨコナダ調整を施している。 ○刻み目はヘラ状の原体によるものでV字形を呈している。 | ○在地産1例(371)。 |
| G ₂ | 384 | ○口縁部は直線的に上方にのびる。 ○外面口縁溝部の直下に刻み目ない突帶をめぐらせていている。 ○口径24cm前後。 | ○口縁端部はヨコナダ調整、以下を外側横方向の粗いケズリ調整、内面はケズリ調整の後、ナデ調整を加えている。 ○突帶は断面が三角形を呈する。 ○口縁溝部内面にS波状の凹みをもつ。 | ○他地域産1例(384)。 |
| G ₃ | | ○口縁溝部近くの破片。 ○口縁溝部は脛部が厚くなる。 ○口縁溝部の直下に刻み目のある突帶をめぐらせていている。 | ○内外面ともにヨコナダ調整。 ○口縁溝部から内面にかけて風化が激しく端部の刻み目は不明瞭。断面が三角形を呈する突帶には、ヘラ状の原体によるD字形の刻み目をついている。 | ○在地産1例。 |

細文 I (黄灰色シルト)

| 器形 | 番号 | 形態の特徴 | 技法の特徴 | 備考 |
|----|--|---|--|--|
| 浅鉢 | A 378 | ○口縁部は近く外反して立ち上がり、端部内面は肥厚する。肩部は強く張り出して縁をもつ。内面は口縁部と体部の境に断面三角形の段をくり出している。 ○推定口径25cm。 | ○口縁部内外面はヨコナデ調整の後に外面に横方向のミガキ調整を加えている。体部外面は横方向にケズリ調査を施している。 | ○在地産1例(378)。 |
| | B | ○口縁部の一部。口縁端部内面が肥厚して段をなす。 | ○内外面ともにヨコナデ調整。 | ○他地域産1例。 |
| | C : 375 376 377 | ○体部から口縁部にかけて直線的に上方にのびる。 | ○内外面ともにヨコナデ調整のもの(375)、内外面横方向のケズリ調査の後、縁部から外面にかけてヨコナデ調整を加えるもの(376)、外面のみケズリ調査した後、内外面にヨコナデ調整を施すもの(377)がある。 | ○在地産4例(375・376・377)。 |
| | C : 374 | ○内寄する体部から単純に近く口縁部をもつ。 ○口縁端部に割み目をもつ。 ○推定口径22cm。 | ○口縁部は内外面ともにヨコナデ調整、体部は外側方向のケズリ調査、内面はナデ調整を施している。 ○割み目はヘラ状の原体によるものでD字形を呈する。 | ○在地産1例(374)。 |
| | D 359 381 382 383 | ○内寄する体部から単純に近く口縁部をもつ。 ○口縁部がやや外反気味になるもの(383)もある。 ○外面口縁端部の直下に割み日のない突帯をめぐらせている。 | ○内外面ともにヨコナデ調整するもの(382)と、口縁端部のみヨコナデ調整を施し、体部外表面は横方向のケズリ調査、体部内面はナデ調査を施しているもの(383)がある。 (359・381)は風化の為、調査は不明。 ○突帯は断面が三角形を呈する。 | ○在地産5例(359・381・382・383)。 |
| | E 380 390 391 393 394 395 | ○口縁部はあまり外反せず、直線的に上方あるいは外方にのびる。口縁端部にシャープな面をもつもの(391)がある。 ○外面口縁端部の直下に割み日のない突帯をもつ。また、内面にも突帯をもつもの(395)が1例ある。 | ○内外面ともにヨコナデ調整を施している。内面に横方向のミガキ調査を加えるもの(391)が1例ある。 ○突帯は断面が三角形を呈するもの(391・393・394・395)と、台形を呈するもの(380・390)がある。 ○口縁端部内面に沈線を施しているもの(380・391)が2例ある。 | ○在地産2例(390・393)、他地域産5例(380・390・391・394・395)。 |
| | 体部 II 392 | ○肩部推定径13cm。 | ○内面ナデ調整。一部に工具痕?がみられる。 ○外面上部はヨコナデ調査、下部にケズリ調査を施している。 | ○在地産(387)。 |
| 蓋 | 392 | ○体部から口縁部にかけて内寄する。口縁部は丸い。 ○口径5cm前後。 | ○内外面にナデ調整を施しているが、指頭圧痕が残る。 | ○在地産1例(392)。 |

搅乱

| 器形 | 番号 | 形態の特徴 | 技法の特徴 | 備考 |
|----|---------------------|---|---|---|
| 深鉢 | A 401 412 413 | ○近くゆるやかに外反しながら直上に立ち上がる口縁部に、やや崩の強る体部がつく。 ○口径(401)は27.5cm。 | ○口縁部は内外面ともにヨコナデ調査のもの(412)と、外面ヨコナデ調査、内面横方向のミガキ調整のもの(401・413)がある。 ○体部は外側横方向のケズリ調査で、内面ナデ調査のもの(413)と、二枚貝調査のもの(412)がある。また、外面は横方向のケズリ調査の後、横方向のミガキ調査、内面は全面に横方向のミガキ調査を施しているもの(401)がある。 | ○在地産(401・412・413)。 ○II中央搅乱(401)、I自然流路(412)、II渦17(413)。 |

搅乱

| 器 形 | 番号 | 形 態 の 特 徴 | 技 法 の 特 徴 | 備 考 |
|-----|----|--|--|--|
| 深 筒 | B | <p>○口縁部は長くゆるやかに外反している。 ○口縁部に刻み目をついている。 ○推定口径(408)は19cm、(410)は18cm、(411)は20cm。</p> | <p>○内外面ともにヨコナデ調整およびナデ調整しているもの(410)と、内面ナデ調整の面に横方向のケズリ調整をしているもの(408)がある。また、口縁部外面および、体部内面は板ナデ調整で、口縁部内面はナデ調整。体部外面はユビ調整を施しているもの(411)がある。</p> <p>○刻み目はヘラ状の原体により、D字形のもの(410)と、小O字形のもの(408)がある。また、(411)の刻み目は、外側の板ナデ調整を使用した原体と同じものと思われる。</p> <p>○二枚貝あるいは半裁竹管状のもので腹模に押し引き状の北緯文をついているものの(408)がある。</p> <p>○(410)は内面に地土縫の縦ぎり痕が残る。地土縫の幅は1.6~2cm。</p> | <p>○在地産 (408-410-411)。 ○(410-411)は外面に縫が認められる。 ○Ⅱ東壁断面(408)、 Ⅱ横7(410)、I 横乱(411)。</p> |
| | C | <p>○口縁部は全体に弧を描くようにゆるやかに外反するもの(420)、底部で外反し、直線的に上方へのびるもの(416)がある。口縁部は面をもつ。</p> <p>○口縁部に刻み目をつけ、外面口縁部の直下に刻み目のある突帯をめぐらしている。</p> <p>○口径(416)は22.6cm前後。</p> | <p>○(415)は口縁端部ヨコナデ調整、以下を内外面ともにナデ調整を施している。(420)は口縁端部から内面にかけてヨコナデ調整を施し、外側は二枚貝調整を行っている。</p> <p>○突帯は断面が三角形を呈している。刻み目はヘラ状の原体によるもの(416)は小O字形、(420)はD字形を呈する。</p> | <p>○在地産(416-420)。 ○(416)は肩部外面に縫が認められる。 ○Ⅱ横7(416-420)。</p> |
| | G | <p>○内弯する体部から単純に立ち上がる口縁部をもつ。</p> <p>○口縁端部に刻み目をつけ、外面口縁部の直下に刻み目のある突帯がめぐる。</p> <p>○口径17cm前後のもの(419)と、35cm前後のもの(409)がある。</p> | <p>○口縁端部にヨコナデ調整を施し、外面突帯以下を時計回りの横方向にケズリ調整し、内面はナデ調整を施している。(409)の外面調整は二枚貝。</p> <p>○突帯は断面が台形を呈する。刻み目は、口縁端部が小O字形、突帯がV字形のもの(418)と、口縁端部が小O字形、突帯がO字形のもの(409)と口縁端部・突帯とともにD字形のもの(419)がある。</p> | <p>○在地産 (409-418-419)。 ○(418)は体部外面に縫が付着している。 ○Ⅱ横17出土(418)、 Ⅱ上昇土(419)、 不明(409)。</p> |
| H | H | <p>○口縁部はやや外反気味に外上方へのび、底部は面をもつ。</p> <p>○外面口縁部の直下に刻み目のない突帯がめぐる。</p> <p>○推定口径(404)は42.4cm、(405)は20cm、(426)は30cm。</p> | <p>○外面は口縁端部および突帯をヨコナデ調整し、突帯以下を横方向のミガキ調整を施している。内面は横方向のミガキ調整と認められるが、二枚貝調整の可能性もあるものの(404)と、奇数調整を施しているもの(405)と、ナデ調整を施しているもの(426)がある。</p> <p>○突帯は断面が台形を呈するもの(404-405)と、三角形を呈するもの(426)がある。</p> <p>○口縁端部内面に沈線をめぐらしているもの(405)がある。</p> | <p>○在地産 (404-426)。 ○(426)は突帯以下に縫が認められる。 ○搅乱 I (405)、Ⅱ (404-426)。</p> |
| | E | <p>○口縁部と体部の境、刻み目突帯をもつ。</p> | <p>○外面は突帯より上をナデ調整、以下を横方向のケズリ調整、内面はナデ調整。</p> | <p>○在地産(415)。 ○Ⅰ自然流路黄褐色砂。</p> |
| | | 424 ○半裁竹管による刻み目をもつ。 | ○外面は横方向のケズリ調整を施している。 ○内面はナデ調整を施している。 | ○在地産(424)。 ○Ⅱ上昇土。 |

搅乱

| 器形 | 番号 | 形態の特徴 | 技法の特徴 | 備考 |
|--------------------------------------|-----------------|---|---|--|
| 浅鉢 | A 403 417 | ○口縁部は大きく外反し、縁部近くで屈曲して短く立ち上がるるもの(403)と、体部から屈曲して短く外反するもの(417)がある。 ○口縁部内面が肥厚して段をつくる。肩部は後をなす。 ○口径(403)は26cm、(417)は25cm前後。 | ○内外面ともに横方向のミガキ調整を施している。(403)は口縁部外面横方向のミガキ調整の前に横方向のケズリ調整を施している。(417)は突起(P=1)をつけている。(図では4方に復元している)(417)は突起(P=8)をついている。 | ○在地産(403)、他地域産(417)。 ○I上:土(403)、II土(417)。 |
| | C 400 | ○内寄する体部から単純に口縁部が続く。口縁部は面をもつ。 ○口径20.5cm。 | ○外表面は横方向のミガキ調整と思われるが、風化の為不明瞭。内面は口縁部ヨコナマ調整、体部ナマ調整を施している。 | ○在地産(400)。 ○I搅乱。 |
| D 402 | | ○ゆるやかに内寄する体部から単純に口縁部が続く。口縁部は丸味をもつ。 ○外表面口縁部の直下に刻み目ない突帯をめぐらせている。 ○口径27.0cm。 | ○外表面は突帯以下に時計回りの横方向にケズリ調整、内面は全体に横方向のミガキ調整を施している。 ○突帯は貼り付けにより新面が三角形を呈する。 | ○在地産(402)。 ○I搅乱。 |
| E 406 407 414 425 428 | | ○口縁部は直線的なもの(406・407・425・428)と、強く外反するもの(407)がある。 ○外表面口縁部の直下に突帯をもつ。 | ○内外面ともに横方向のミガキ調整のもの(406・407・414・425・428)。 ○外表面口縁部内面に沈線を施しているもの(406・414)と、内面にも突帯をめぐらせているもの(428)がある。また、外表面肩部にも突帯をめぐらし、口縁部と2つの突帯に刻み目を加えるもの(425)がある。刻み目はヘラ状の原体によるやや不規則なV字形のものをついている。 | ○在地産(406・407・414・425・428)。 ○不明(406・407・414・425)、II土(428)。 |
| H 422 | | ○流状口縁をなし、外反して外上方にのげる。 ○口縁部は内外に肥厚して丸味をもつ。 | ○内外面ともにナマ調整を施し、ミガキ調整を加えている。 ○内面に口縁部に沿って沈線を加えている。 | ○他地域産(422)。 ○II暗灰色シルト。 ○累層に崩れ、山の寺式後鉢I。 |
| H 421 | | ○内表面口縁部に棒状またはヘラ状工具による沈線をもつ。 ○標準口径24cm。 | ○外表面は横方向のナマ調整、内面は横方向のヘラミガキ調整を施している。 | ○在地産(421)。 ○II搅乱。 |
| F 427 | | ○内傾する口縁部の端部は外方に折り曲げて突帯をつくっている。 | ○内外面ともに横方向のミガキ調整を施している。 ○口縁部内面に沈線がめぐる。 | ○在地産(427)。 ○出土地不明。 |
| | 423 | ○外表面はヘラ状工具による刻み目をもつ。 ○標準口径13cm。 | ○内外面ともにヨコナマ調整を施している。 | ○在地産(423)。 ○II土(417)。 |

表3 土偶及び土製品観察表

土偶および土製品

| | | | | | |
|-----|-----|------------|-------------------------------|---|-----------------------|
| 土製品 | 並 | 429 430 | ○体部から口縁部にかけて内寄する。縁部は丸くおさめる。 | ○内外面共にナマ調整を施す。 | ○在地産。 ○II黑灰色砂質土下層。 |
| | 直 | 431 | ○平底。 ○直立気味の口縁部に、縁部は丸くおさめる。 | ○内外面共にナマ調整を施す。 | ○在地産。 ○II黑灰色砂質土。 |
| | 鉢 | 432 | ○やや半円形を呈する。 | ○手づくね。 | ○在地産。 ○II黑灰色砂質土。 |
| | 耳殻? | 433 | ○円柱状の棒を曲げたもの。 | ○ナマ調整を施す。 | ○在地産。 ○II黑褐色砂質土。 |
| 土偶 | | 434 435 | ○くびらえた頭に、振り出す脚部をもつ。 | ○沈線を体部中央に1条施すもの(434)、体部中央と脚部に施すもの(435)がある。 ○刺突文でズボン条の文様を作る(435)。 | ○在地産。 ○II黑灰色砂質土。 |

表4 石製品

| 番号 | 種類 | 石材 | 法 量 | | | | 備考 | 出土地 |
|----|--------|-------|--------|-------|------|-------|--------------------------|-------------|
| | | | 長さ | 幅(cm) | 厚さ | 重さ(g) | | |
| 1 | 石劍 | サヌカイト | (3.2) | (1.7) | 0.45 | 2.0 | 平基無茎式。先端と基部一部欠損。中央断面凸凹。 | II 土塚22 |
| 2 | 石劍 | サヌカイト | 2.2 | 1.8 | 0.4 | 1.4 | 凹基無茎式。基部一部欠損。中央断面凸凹。 | II 黒灰色砂質土 |
| 3 | 石劍 | サヌカイト | 1.5 | 1.3 | 0.4 | 0.8 | 平基無茎式。基部一部欠損。中央断面凸凹。 | II 土塚20 |
| 4 | 石劍 | サヌカイト | (2.4) | 1.6 | 0.4 | 1.2 | 平基無茎式。先端部欠損。中央断面凸凹。 | II 滝20-2 |
| 5 | 石劍 | サヌカイト | (2.0) | (1.8) | 0.3 | 1.0 | 凹基無茎式。先端部と基部一部欠損。中央断面凸凹。 | II 黒灰色砂質土下層 |
| 6 | 石劍 | サヌカイト | 1.7 | 1.2 | 0.2 | 0.4 | 凹基無茎式。先端部欠損。 | I 滝黄褐色粘土 |
| 7 | 石劍 | サヌカイト | (2.1) | (1.7) | 0.3 | 1.0 | 平基無茎式。先端部欠損。中央断面凸凹。 | II 黒灰色粘土 |
| 8 | 石劍 | サヌカイト | 2.7 | 1.8 | 0.4 | 1.8 | 平基無茎式。中央断面凸凹。金山座? | II 黒灰色砂質土下層 |
| 9 | 石劍 | サヌカイト | 2.3 | 1.5 | 0.4 | 1.0 | 平基無茎式。中央断面凸凹。 | II 黒灰色砂質土 |
| 10 | 石劍 | サヌカイト | (1.4) | 1.5 | 0.3 | 0.6 | 平基無茎式。先端部欠損。中央断面凸凹。 | II 黒灰色粘土 |
| 11 | 石劍 | サヌカイト | 2.3 | 1.5 | 0.4 | 1.0 | 平基無茎式。中央断面凸凹。金山座? | II 黒灰色砂質土 |
| 12 | 石劍 | サヌカイト | 2.8 | 1.4 | 0.3 | 1.2 | 凸基有茎式。 | II 黒灰色砂質土 |
| 13 | 石劍 | サヌカイト | (3.6) | 1.2 | 0.7 | 2.4 | 先端部欠損。全面に細部調整を施す。 | II 滝33 |
| 14 | 石劍 | サヌカイト | (3.3) | 1.25 | 0.4 | 2.0 | 先端部欠損。旧皮を残す。 | II 滝33 |
| 15 | 石劍 | サヌカイト | (2.4) | 1.6 | 0.35 | 1.4 | 先端部欠損。 | II 滝33 |
| 16 | 有舌尖頭器 | サヌカイト | 9.5 | 2.3 | 0.9 | 18.2 | 全縁に細部調整。 | II 滝17 |
| 17 | 石鎌 | サヌカイト | 5.3 | 2.15 | 0.75 | 7.4 | 一縁に細部調整。一部に表皮残存。 | I 滝黄褐色粘土 |
| 18 | 石鎌 | サヌカイト | 5.4 | 2.1 | 0.8 | 5.2 | 二縁に細部調整。一部に表皮残存。 | II 黒灰色シルト |
| 19 | 石鎌 | サヌカイト | (14.7) | 2.5 | 1.1 | 49.0 | 先端部欠損。基部に表皮残存。 | II 滝黄褐色砂質土 |
| 20 | 石鎌 | サヌカイト | (4.7) | 3.6 | 0.8 | 14.6 | 先端部欠損。一部に表皮残存。 | II 滝22 |
| 21 | 直刃削器 | サヌカイト | 5.5 | 4.5 | 1.4 | 27.4 | 二縁に片面細部調整。一部に表皮残存。 | II 滝35 |
| 22 | 直刃削器 | サヌカイト | 4.7 | 5.0 | 1.25 | 25.0 | 一縁に形彫細部調整。両無縁に折りとり面をもつ。 | II 黒灰色粘土 |
| 23 | 削器 | サヌカイト | 4.5 | 2.7 | 0.8 | 9.2 | やや凸刃。尖頭削器の可能性あり。 | II 滝35 |
| 24 | 直刃削器 | サヌカイト | 4.95 | 4.4 | 1.3 | 27.0 | 両側縁に歯跡をもつ。 | II 黒灰色粘土上面 |
| 25 | 直刃削器 | サヌカイト | 7.6 | 3.9 | 1.5 | 46.0 | 刃部につぶれ痕をもつ。一部に表皮残存。 | II 黒灰色粘土 |
| 26 | 横形削器 | サヌカイト | 6.8 | 4.0 | 1.3 | 28.0 | 一縁に細部調整。一部に表皮残存。 | II 黒灰色砂質土 |
| 27 | 直刃削器 | サヌカイト | 6.9 | 2.8 | 1.4 | 24.2 | 背縁に折りとり面・截断面をもつ。 | II 土塚22 |
| 28 | 彎形調整刀片 | サヌカイト | 5.1 | 4.4 | 1.5 | 22.8 | ビニス・エスキーエ様。一部に表皮残存。 | II 滝35 |
| 29 | 前芯 | サヌカイト | 5.0 | 4.5 | 1.1 | 17.8 | 全周縁に細部調整を施す。 | II 黒灰色粘土 |
| 30 | 小型削器 | サヌカイト | 3.5 | 2.1 | 0.5 | 3.8 | ほぼ全周縁に細部調整を施す。 | II 滝33 |
| 31 | 直刃削器 | サヌカイト | 5.8 | 4.1 | 1.5 | 17.6 | 一部に表皮残存。 | II 滝17 |

| 番号 | 種類 | 石 材 | 法 量 | | | | 考 | 出土地 |
|----|-----------|--------|------------|--------|------------|--------|------------------------------------|-------------|
| | | | 長さ [cm] | 幅 (cm) | 厚さ [cm] | 重さ (g) | | |
| 32 | 側片尖頭器 | サスカイト | 4.3 | 1.9 | 0.5 | 3.2 | 尖端部には使用痕、あるいは細部調整がみられる。 | II ピット87 |
| 33 | 尖頭器 | サスカイト | 3.7 | 2.5 | 1.1 | 6.4 | 尖端部には使用痕、あるいは細部調整がみられる。 | II 黄灰色 |
| 34 | 側片尖頭器 | サスカイト | 2.4 | 1.8 | 0.6 | 2.6 | 基部ノッチ状の剥離。旧皮を残す。 | I 淡黄褐色粘土 |
| 35 | 213-123-1 | サスカイト | 3.4 | 3.9 | 1.1 | 19.4 | 一縫刃底断面、使用時のものと思われる。 | II 黑灰色粘土 |
| 36 | 細部調整剝片 | サスカイト | 4.1 | 2.15 | 0.9 | 8.2 | ビエス・エスキーエ様。 | II 黑灰色砂質土下層 |
| 37 | 213-123-2 | サスカイト | 3.3 | 2.4 | 0.6 | 5.2 | 一縫刃底断面、使用時のものと思われる。 | II 黑灰色砂質土 |
| 38 | 213-123-3 | サスカイト | 2.6 | 3.0 | 0.6 | 7.0 | 四縫刃とも使用。 | I 淡黄褐色粘土 |
| 39 | 213-123-4 | サスカイト | 3.1 | 2.3 | 1.0 | 7.8 | 四縫刃とも使用。 | II 黑灰色砂質土 |
| 40 | 213-123-5 | サスカイト | 3.2 | 2.8 | 0.5 | 5.6 | 四縫刃とも使用。 | II 烧土層 |
| 41 | 213-123-6 | サスカイト | 4.1 | 3.4 | 0.7 | 11.8 | 一縫刃折りとり面。 | II 黑灰色粘土 |
| 42 | 細部調整剝片 | サスカイト | 3.4 | 4.4 | 0.5 | 8.0 | ビエス・エスキーエ様。 | II 滝33 |
| 43 | 細部調整剝片 | サスカイト | 4.8 | 2.3 | 0.5 | 5.6 | ビエス・エスキーエ様。 | II 黑灰色砂質土下層 |
| 44 | 細部調整剝片 | サスカイト | 1.9 | 3.0 | 0.6 | 4.8 | ビエス・エスキーエ様。 | II 黑灰色砂質土下層 |
| 45 | 213-213-1 | サスカイト | 3.2 | 2.8 | 0.6 | 11.8 | 一縫刃底断面、その対縫折りとり面。 | II 増赤褐色砂質土 |
| 46 | 細部調整剝片 | サスカイト | 4.1 | 2.2 | 1.1 | 12.6 | ノッチ状の使用痕。 | II 滝20-1 |
| 47 | 細部調整剝片 | サスカイト | 3.6 | 2.0 | 0.7 | 4.4 | ノッチ状の使用痕。 | II ピット87 |
| 48 | 機刀削器 | サスカイト | 7.3 | 3.0 | 1.9 | 40.6 | 刃端にぶれ痕をもつ。ビエス・エスキーエとの類似。 | II 滝35 |
| 49 | 石錐 | 砂岩 | 10.6 | 9.8 | 2.6 | 382.2 | 偏平な円錐の両端に縦掛け用の打ち欠き痕がみられる。 | II 黑灰色粘土 |
| 50 | 石錐 | 砂岩 | 9.4 | 6.7 | 2.1 | 160.6 | 偏平な円錐の両端に縦掛け用の打ち欠き痕がみられる。 | II 黑灰色砂質土 |
| 51 | 石錐 | 砂岩 | 9.35 | 6.5 | 2.0 | 180.2 | 偏平な円錐の両端に縦掛け用の打ち欠き痕がみられる。 | I 横丸 |
| 52 | 石錐 | 砂岩 | 8.5 | 8.2 | 1.9 | 199.4 | 偏平な円錐の両端に縦掛け用の打ち欠き痕がみられる。 | II 黑灰色粘土 |
| 53 | 石錐 | 砂岩 | 9.3 | 6.2 | 1.6 | 159.8 | 偏平な石の両端に縦掛け用の打ち欠き痕がみられる。 | II 黑灰色粘土 |
| 54 | 散石 | 砂岩 | (7.8) | (7.8) | (4.35) | 300.2 | 敲打痕がみられる。火を受けたためか、黒変している。 | II 暗黄灰色粘土 |
| 55 | 散石 | 砂岩 | (6.8) | 10.6 | 6.7 | | 敲打痕がみられるが、平滑な面では岩石として使用されていたと思われる。 | I 黑色粘土 |
| 56 | 散石 | 砂岩 | (8.1) | 10.5 | 4.8 | | 敲打痕がみられる。 | II 淡黄褐色粘土 |
| 57 | 磨製石斧 | 変質輝緑岩 | (8.9) | 6.1 | 4.2 | 348.4 | 両刃。若干の使用痕がみられる。基部欠損。 | I 黑色粘土 |
| 58 | 磨製石斧 | 変質斑れい岩 | (9.4) | 4.5 | 2.3 | 197.4 | 先端部の欠損は使用によるものか? 基部欠損。 | II 土塊22 |
| 59 | 打製石斧 | 黑色千枚岩 | (10.4) | 4.8 | 1.2 | 69.0 | 原礪面残存。片面一部使用痕? | II 黑灰色粘土 |
| 60 | 打製石斧 | 角閃石片岩 | (11.5) | 5.1 | 0.9 | 81.8 | 原礪面残存。 | II 滝33下部 |
| 61 | 石錐 | 砂岩 | (12.2) | (11.9) | 14.6 | | 一部に磨痕がみられる。 | II 土塊45 |

表5 弥生土器觀察表

弥生前期

| 器 形 | 番号 | 形 態 の 特 徴 | 技 法 の 特 徴 | 備 考 |
|---------|----|-----------------------------------|--|--|
| 弥 生 土 器 | 1 | ○ゆるやかに外反し、端部は丸くおさめる。 | ○外面はハケメ調整を施すもの(1・2・10・14・16)、丁寧にナデで仕上げたもの(3・8・11・13・18・19)がある。 | ○他地域産(19)。 ○Ⅱ暗青褐色砂質土(1・14・16)Ⅱ黒泥(2・3・13)、Ⅲ黄褐色砂綿(8・12)、Ⅱ耕作用溝内(10)、Ⅱ木棺墓(11)、赤褐色砂質土(18)、Ⅰ上げ土(19)。 |
| | 2 | | ○口縁部裏面に刻目を施す(1～3・11・12・14～19)。 | |
| | 3 | | ○網状上縁にヘラ描き沈線文を加える(3・11～19)。 | |
| | 8 | | | |
| | 10 | | | |
| | 11 | | | |
| | 14 | | | |
| | 16 | | | |
| | 18 | | | |
| | 19 | | | |
| 壺 体 部 | 9 | ○口縁部はなだらかに外折し、端部は丸くおさめる。 | ○外面はハケメ調整を施すもの(15)、ナデ調整を施すもの(9)がある。 | ○在地産。 ○Ⅱ上げ土(9)、Ⅲ床土(15)。 |
| | 15 | | | |
| | 7 | ○口縁部は外折し、端部は丸くおさめる。 | ○外面はハケメ調整を施し、内面はナデ調整する。 ○網状上縁にヘラ描き沈線文を加える。 | ○他地域産。 ○Ⅰ青褐色シルト |
| 底 部 | 4 | ○短く立ち上がる頸部に、なだらかに外反する口縁部。端部は面をもつ。 | ○頸部端境に削り出し突帯。 ○外外面にナデ調整を施す。 | ○他地域産。 ○Ⅰ青褐色シルト |
| | 5 | | | |
| | 20 | | | |
| | 1 | | | |
| 29 | | | ○内外面にハケメ調整を施すもの(24・25)、ハケメ調板を施すもの(22)、ヘラミガキ調整を施すもの(26・27)、ハケメ調整の後ナデを行なうもの(23)、内面をナデ調整・外面にハケメ調整を施すもの(20・21・29)がある。 ○外面にヘラ描き沈線文を加える(5・20～27・29)。 ○外面に削り出し突帯を加える(20)。 | ○他地域産(22・27)。 ○Ⅱ土壁・近畿以南(5)、Ⅰ黒褐色砂質土(20)、Ⅲ暗青褐色砂質土(21)、Ⅱ赤褐色砂(22)、Ⅱ黒20-1(23)、Ⅲ暗青褐色砂質土(24・25)、Ⅱビット87(25)、ビット11(27)、Ⅱ自然焼路(28)、Ⅱ暗茶褐色砂質土(29)。 |
| | 6 | ○やや上げ底底味の底部をもつ。 | ○内外面共にヘラミガキ調整を施す。 ○外面に3条一単位からなる重張文を加える。 | ○在地産。 ○Ⅲ黄褐色。 |

弥生中期

| | | | | |
|-----|----|---|---|--------------------|
| 壺 A | 30 | ○口縁部は大きく開き、端部で広い面をもつ。 ○縫合は2孔1対で、2ヶ所にある。 | ○外面はヘラミガキ調整を施す。 ○内面はハケメ調整で仕上げる。 | ○在地産。 ○Ⅲ底20-3。 |
| 壺 A | 31 | ○直立する頸部から、ほぼ水平に幅く外折する口縁部をもつ。 ○体部最大径は器体のやや上位にあり、安定した大きい平底の底部に続く。 | ○口縁部外面は縦方向のハケメ調整を施す。 ○体部外面は縦方向のハケメ調整後、最大径部以下に横方向のヘラミガキを加える。 ○内面はナデ調整で仕上げる。 ○底面は一定方向のヘラケズリ調整する。 | ○他地域産。 ○Ⅲ底20-3。 |
| 壺 C | 32 | ○網状の強る器体に、細くしまった頸部と開口状に廣く口縁部をもつ。 ○口縁部端部は下方に肥厚する。 ○底部は突出する小形の平底を呈する。 ○体部下半には後成後外側より穿った穿孔を2ヶ所もつ。 | ○底面は一定方向のヘラミガキ調整する。 ○口縁部端面には刺突文を施す。口縁部から体部上半部には6帶の輪状文を施し、さらに最下端に刺突文を1帶加える。 ○体部は細く密な横方向のヘラミガキ調整を施す。 ○器体内面は最大径部上半を丁寧にナデで仕上げ、下半部は横方向のハケメ調整を加える。 | ○在地産。 ○Ⅲ20-3。 |

弥生中期

| 器形 | 番号 | 形態の特徴 | 技法の特徴 | 備考 |
|------|-----------------|--|--|---|
| 苏生土器 | 壺B ₁ | ○やや張りをもつ長めの体部に、直立気味に肩くための口縁部をもつ。 ○口縁部は水平近く外反し、縁部で上方に肥厚する。 ○底部は安定した平底。 ○体部下半には焼成後外面より穿った穿孔を1ヶ所もつ。 | ○口縁部から体部上半外周には縱方向のハケメ、下半をヘラミガキ調整する。 ○内面は全面丁寧にナデて仕上げる。 ○口縁部から体部上半部には4帯のクシ捕直線文を施し、さらに体部上半の直線文間にクシ捕波状文を2帯加える。 ○口縁部内面には彫形文をもつ。 | ○他地域系。 ○体部下半に保付着。 ○Ⅱ構20-3。 |
| | 壺B ₂ | ○腹部の張る器体に、しまった瓶口縁部次にひがるが口縁部をもつ。 ○口縁部は上下両方に肥厚する。 ○底部は安定した平底を呈する。 ○体部下半には焼成後外面より穿った穿孔を1ヶ所もつ。 | ○口縁部には刺突文を加える。 ○体部上半には刺突文4段落らすもの(34)と、クシ捕波状文とクシ捕直線文を2帯づつ交差に施し、さらに綾下端に刺突文を加えるもの(35)がある。 ○体部上半は丁寧にナデて仕上げたもの(34)と、縱方向のハケメ調整を施すもの(35)がある。 ○体部下半は縱方向のヘラミガキ調整を加える。ヘラミガキは全体を5-7ブロックに分割して、逆時計回りに施す。 ○体部内面は縱方向のハケメ調整後、上半部を一部ナデ調整を加える。 | ○他地域系。 ○(34-35)とともに胎土・色調が類似している。 ○Ⅱ構20-3。 |
| 甕A | 36 | ○胴部はゆるやかに膨らみ、短く外反する口縁部をもつ。 ○口縁部は圓をもつ。 ○胴部の最大径は器体のやや上位に位置する。 ○底部は平底を呈する。 | ○体部は縱方向のハケメ調整後、体部全体を丁寧な縱方向のヘラミガキ調整を施す。 ○体部内面は横方向のハケメ調整後、縱方向のヘラミガキ調整で仕上げるもの。 | ○在地産。 ○体部最大径下半に保付着。 ○Ⅱ構20-3。 |
| 甕B | 37 | ○胴部がゆるやかに膨らみ、短く外反する口縁部はわずかに外反し、縁部で下方に折れ曲がる。 ○最大径は器体の上位に位置する。 ○底部は安定した平底を呈する。 ○胴部下半には焼成後外面より穿った穿孔を1ヶ所もつ。 | ○体部は縦方向のハケメ調整後胴部中位を横方向にヘラミガキ調整し、さらに胴部下位に縦方向にヘラミガキ調整を加えて仕上げる。 ○底面は一定方向のヘラミガキ調整する。 ○口縁部内面は横方向のハケメ調整後、ヨコナデ調整を加える。 ○体部内面は丁寧にナデて仕上げる。 | ○在地産。 ○体部中位に保付着。 ○Ⅱ構20-3。 |
| 甕C | 38 | ○口縁部は大きく開き、浦部は丸く納める。 ○紐孔は2孔1対で、2ヶ所にある。 | ○外側はヘラミガキ調整を施す。全体を6ブロック程度に分割して、逆時計回りの放射状に消す。 | ○在地産。 ○Ⅱ構30。 |
| 甕D | 39 40 | ○直立する胴部から、水平立ちく外反する口縁部をもつ。 ○口縁部は上方に立ち上がり2孔1組の紐孔をもつもの(39)、縁部が上下両方に肥厚し紐孔をもたないもの(40)がある。 ○体部は肩の張りが弱く、なで形の形態をとる。 | ○口縁部はヨコナデ調整で仕上げるもの(39)と、縦方向のハケメ調整長ヨコナデ調整を加えるもの(40)がある。 ○体部外側は縦方向の縦いハケメ調整する。 ○内面は縦方向のハケメ調整後ナデ調整を施す。 | ○(39)在地産、(40)他地域系。 ○Ⅱ構30。 |
| 甕E | 41 | ○胴部の張りの小さい球体の体部に、長く溜斗状に開く口縁部をもつ。 ○口縁部は水平に近く削削し、縁部で面をもつ。 ○底部はやや突出気味の平底を呈する。 ○胴部下半には焼成後外面より穿った穿孔を1ヶ所もつ。 | ○口縁部内面から胴部上位にかけては、粘土の崩ぎ目が明瞭に残る。 ○口縁部から胴部上位は縦方向のハケメ調整を施す。 ○胴部下位は左上がりのヘラミガキ調整を施し、その後胴部中位に横方向のヘラミガキ調整を加える。 ○口縁部内面は横方向のハケメ調整を施す。 ○口縁部内面から体部内面にはヘラミガキ調整を施す。 | ○在地産。 ○Ⅱ構17。 |

弥生中期

| 器 形 | 番号 | 形 態 の 特 徴 | 技 法 の 特 徴 | 備 考 |
|---------|----------|---|---|---|
| 弥 生 土 器 | 42 | ○胴部はゆるやかに膨らみ、短く外反する口縁部をもつ。 ○口縁端部は面をもつ。 ○胴部の最大径が器体のはば中位に位置する。 ○底部は若干突出する平底。 ○底部中央には焼成後外面より穿った穿孔を1ヶ所もつ。 | ○口縁端部に削目を施す。 ○体部は縱方向のハケメ調整後、体部下位のみに縱方向のヘラミガキを加える。 ○体部内面は横方向のハケメ調整後、ナデ調整を施す。 | ○在地産。 ○体部全体に算付着。 ○I土墳5。 |
| 甕A | 43 | ○笠形を呈する。 ○口縁端部は上方に若干肥厚する。 | ○内外面共ナデ調整で仕上げる。 | ○在地産。 ○口縁部外面から口縁部内面の幅約2cmにわたり帯状に算付着。 ○I自然流路黄褐色。 |
| 甕A | 44 | ○胴部はゆるやかに膨らみ、短く外反する口縁部をもつ。 ○口縁部は面をもつ。 | ○体部外面は縱方向のハケメ調整後、縱方向のヘラミガキ調整を施す。 ○内面は横方向のハケメ調整後、縱方向のヘラミガキ調整を加える。 | ○在地産。 ○I自然流路黄褐色。 |
| 甕F | 45 | ○外反気味に開く口縁部をもち、口縁端部で下方に肥厚する。 | ○口部外面は縱方向のハケメ調整を施す。 ○内面は横方向のハケメ調整後、ナデで仕上げる。 ○口縁端面には羽状列点文を施す。 ○口部内面には廉状文が認められる。 | ○在地産。 ○I黄褐色。 |
| 甕G | 52 | ○寸高の器体から明顯な頸部をつくらず、そのまま外反する口縁部をもつ。 ○口縁部は常に水平に折れ曲がり、端部は下方に肥厚する。 ○底部は安定した平底を呈する。 ○体部下位には焼成後外面より、穿った穿孔を1ヶ所もつ。 | ○口縁端面には刺突文を加える。 ○口部から体部上半には9帯のクシ彫直線文を施し、施文後口縁部開及び最終直線文間に廉状文2帯を加える。 ○口部から体部上半は縱方向のハケメ調整、体部下半は右上がりのハケメ調整を施す。さらに最大径部には最終的な右上がりのハケメを加える。 ○口部内面は横方向のハケメ調整後コナデ調整を加える。 ○体部内面には縦方向のハケメ調整を施す。 ○体部下半はやや左上がりの様なヘラミガキ調整を加える。 | ○在地産。 ○E自然流路。 |
| 甕H | 46 47 | ○球形にちかい器形に漏斗状に開く長い口縁部をもつ。 ○口縁端部は水平に近く折れ曲がり、端部は下方に肥厚する。 ○底部は安定した平底をもつ。 ○底部中央には、焼成後外面より穿った穿孔を1ヶ所もつ。 | ○口縁端面には波状文やキザミ文を施す。 ○口部から体部上半には9帯のクシ彫直線文を施すもの(47)、廉状文を施文するもの(46)がある。 ○口部は縱方向のハケメ調整を施す。 ○胴部上半は丁寧にナデで仕上げる。胴部下半は中位を横方向のヘラミガキ調整を施し、さらに下位を縦方向に全体を4ブロックに分割してヘラミガキ調整を加える。 ○口部内面はハケメ調整後ナデ調整を施す。 ○胴部内面上位は左上がりのハケメ調整を施す。 | ○在地産。 ○I自然流路黄褐色(46)、E混乱(47)。 |
| 鉢A | 50 | ○楕形の器体に直行の口縁部をもつ。 ○口縁端部は面をもち、やや内方へ肥厚気味である。 ○底部はやや突出気味の安定した平底を呈する。 | ○体部下半は縦方向のハケメ調整後、縦方向のヘラミガキ調整を施す。 ○体部上半には5帯のクシ彫直線文を施し、施文後文縞帶間に横方向のヘラミガキ調整を加える。 ○底面は一定方向のヘラミガキ調整を加える。 ○体部内面は横方向のヘラミガキ調整を加える。 | ○在地産。 ○I黒灰色沙質土。 |

弥生中期

| 器形 | 番号 | 形態の特徴 | 技法の特徴 | 備考 |
|---------|----|-------------------------------------|--|-------------------------|
| 弥生 体 | 48 | ○腰部に縦をもつ器体に、短く外反する口縁部をもつ。 | ○口縁部に刺突文をもつもの(49)がある。 | ○在地産。 I 自然流路 I 黄褐色砂。 |
| | 49 | ○口縁部は下方に肥厚する。 | ○体部には葉状文や刺突文を施す。 ○体部内面はハケメ調整後、ナデ調整を加える。 | |
| 土器 | 51 | ○水平に広がる口縁部をもつ。 ○水平に口縁の内側に突起を造らす。 | ○杯部外面は縱方向のヘラミガキ調整を施す。 ○口縁部内外面は丁寧なヨコナゲ調整で仕上げる。 | ○在地産? ○Ⅱ暗赤褐色砂質土。 |

弥生後期

| | | | | | |
|------------|-------|----------------|--|--|--|
| 弥生 (後期) | 臺 | 53 54 55 | ○平底から球体を呈する。屈曲して外方にひらく口縁部をもつ(53)。 ○外折する口縁部に、端部は屈曲して短く立ち上がる(55)。 | ○体部外面にタクミメを施し(53-55)、内面にヘラケズリ調整(54-55)を行っている。 | ○在地産。 ○Ⅲ暗青灰褐色シルト(54)、Ⅰ搅乱(53)、黄褐色(55)。 |
| | 小盤丸底臺 | 56 | ○S字状に近い口縁部を呈する。 | ○内外面共にヨコナゲ調整を施している。 | ○微燒成度 ○Ⅱ搅乱。 |
| | 浅臺 | 57 | ○口縁部に一条の段を呈する。 | ○口縁部内外面および体部外面はヨコナゲ調整を施している。 ○体部内面に横方向のハケメ調整を行っている。 | ○他地域産。 ○Ⅱ暗青灰褐色。 |
| | 器台 | 58 | ○朝顔型に聞く杯部を口縁部までつづく。端部は屈曲して短く立ち上がる。 | ○杯部内外面および脚部内面はナデ調整を行っている。 ○脚部外面は縱方向のヘラミガキ調整を施している。 | ○在地産。 ○Ⅰ自然流路 I 黄褐色砂。 |
| | 高杯 | 59 | ○外方に聞く体部に口縁部は内傾し、端部はさらに内折する。 | ○口縁部外面に4条の四線文を施している。 | ○在地産。 ○Ⅰ灰黑色砂。 |

表6 古墳時代遺物観察表

古墳時代須恵器

| | | | | | |
|-------------|-----|-----------------------|---|---|------------------------------------|
| 須 恵 器 | 杯A | 1 2 3 | ○立ちあがりはやや内傾し、口縁部は丸く削める。 ○底部がやや偏平面の(1・2)。 ○小ぶりな器体で、立ち上がりが内傾し、口縁部に段をもち、体部が丸味をもつもの(3)。 | ○ヘラケズリはロクロ回転を利用するもの(2-3)と、手持ちヘラケズリのもの(1)がある。 | ○Ⅱ土壌10(1)、Ⅱビット12(2)、Ⅱ溝28(3)。 |
| | 杯臺A | 4 5 6 7 8 | ○天井部は、やや偏平面の(5・6)と、全体に丸みをもつものの(7・8)がある。 ○天井部と口縁部を画する棱が突出して鋸いもの(4・7・8)がある。 ○口縁部はわずかに外へ開き、後縫部よりも口縁の方が大きい。直立気味に立つものの(6-7)、内傾するものの(4-8)がある。 ○口縁部は、水平な面をもつものの(7-8)、大きく内へ傾斜するものの(4-6)、角ばって終わるもの(5)がある。 | ○天井部のヘラケズリの幅が広く広範囲に及ぶものの(5-6)。ややケズリの幅が広く小範囲に限られるもの(7-8)がある。 ○ロクロ回転左廻りのもの(4-5-7)と、右廻りのもの(6)がある。 | ○Ⅱ溝8(4)、Ⅱ土壌10(5)、Ⅰ土壌4(6-7)、溝28(8)。 |
| | 臺B | 9 10 | ○平坦な天井部に中凹みのつまみをもつ。 ○天井部と口縁部との境界は突出した棱をなす。 ○口縁部は比較的高く直立気味である。口縁部は底面をもつ。 | ○天井部全体の3/4程度を丁寧にヘラケズリする。 ○ロクロ回転左廻り。 | ○Ⅰ土壌4。 |

古墳時代須恵器

| 器 形 | 番号 | 形 独 の 特 質 | 技 法 の 特 質 | 備 考 |
|------------------|----------------------|---|--|--|
| 有 蓋 高 杯 | 11 | ○小形の杯に脚をつけたもので、杯部の形態は(3)と類似し全体に鏡さを欠く。 ○脚部は短く、三角透しを三方にもつ。 | ○杯部のヘラケズリの範囲は、全体の1/3程度で狭い。 ○ロクロの回転右彫り。 ○器底は若干厚く、凹凸が目立つ。 ○杯部内面中央には、仕上げナデが認められる。 | ○I 様5。 |
| 無 蓋 高 杯 | 12 | ○杯部は浅く、口縁部は外反する。 ○口縁部は丸くおさまる、内側は浅い凹縁がめぐる。 ○口縁部と底部とを区切る段は、2段あり鏡さを欠く。 ○接縁の下にはクシ接波状文をめぐらし、小型のつまみが3対つく。 | ○脚部周囲の杯底部には、ハケメ調整を施す。 | ○I 土模4。 |
| 高 杯 | 13 | ○脚部は短く透かしを持たない。 ○脚部近くには突起を1段めぐらす。 ○脚端部は上方へ突出させている。 | | ○II 落ち込み。 |
| 壺 | 14 | ○口縁部は朝顔形に脛く外反、罐部は上下に鏡い縁を持つ。 ○口縁部には鏡さはまったく認められない。 ○体部は全形不規整であるが、肩が盛っている。 | ○体部外側は揚格子目タタキ成形後、部分的にカキ目調整する。 ○内面は当て共振を丁寧にナデで消している。 | ○I 土模4。 |
| 須 恵 器 | 15 16 17 18 | ○立ち上がりは直立気味で、口縁端部を丸く崩めるものの(15)、内瓶気味に立ち上がり口縁端部の内側するものの(16)、段を構成するものの(17-18)がある。 ○受け部は水平にのび、先端を丸く仕上げるもの(15)、上方へ直線的にのびるもの(16-17-18)がある。 ○体部は全体に鏡さを持っています。 ○小型・大型がある。 | ○体部のヘラケズリは回転を利用せず、手持ちヘラケズリするものの(15)、回転ヘラケズリするものの(16-18)、カキ目調整するものの(17)がある。 ○杯底部内面中央に仕上げナデを施すもの(18)がある。 ○ロクロの回転方向左彫りのもの(16-18)がある。 | ○II 横乱(15-17)。 ○暗赤褐色砂質土(16)、I 横乱(18)。 |
| 蓋 A | 20 21 22 | ○天井部はやや偏平なもの(20)、丸味を持つものの(21-22)がある。 ○天井部と口縁部を分ける梗が突出するものの(21-22)がある。 ○口縁端部は水平な面を持つものの(22)、わずかに内瓶気味の面を有するものの(20-21)がある。 | ○天井部は回転を利用したヘラケズリで、天井部全体の2/3程度に及ぶもの(86-87)、1/2程度の範囲に限られるもの(22)がある。 ○ロクロの回転方向左彫りのもの(20-22)、右彫りのもの(21)がある。 ○ヘラケズリの部分以外はすべてヨコナデ調整を施す。 | ○II 暗赤褐色砂質土。 |
| 蓋 B | 19 | ○丸味をもつ天井部から外方に開く口縁部。 ○口縁端部は丸くおさまる。 ○天井部と口縁部の間に梗がみられる。 | ○天井部はヘラケズリ後ヨコナデ調整を施し、他はヨコナデ調整を行う。 | ○I 武振第1ピット 黄褐色シルト(23-25)。 |
| 無 蓋 高 杯 | 23 24 25 | ○口縁部は内瓶気味に立ち上がるものの(23)、外上方へ直線的にのびるもの(24)がある。 ○口縁端部は内側に強削する広い面をもつものの(23)、丸くおさめるものの(24)がある。 ○口縁部と底部が明瞭な接縁が区分されるものの(23)、接縁が鏡さを欠き接縁下にクシ接波状文をめぐらすものの(24)がある。 ○脚部はやや長く脚部近くに低い段をもつ(25)。 | ○脚部の透かしが長い三角形透かしで、当初4方向からの装飾を予定していたが、その配列がきわめて不均等なので、3方向はいるものの、1方はヘラで穿って割みを加えるのである。 ○脚端部は単純に四角くおさまる、装飾はみられない。 ○底部は回転を利用したヘラケズリ調整している。 ○脚部には平行タタキメが残存している。 | ○I 黄褐色シルト(23-25)、II 横乱(24)。 |
| 有 蓋 高 杯 | 26 | ○立ち上がりは斜く直立し、底部に段をもつ。 ○受け部は水平にのび、先端は鏡さを欠く。 ○脚部は短く、たい幅の狭い長方形透かしを3方にもつ。 ○脚端部には段を持ち、抵張している。 | ○ヘラケズリは底部の1/3程度の範囲に限られる。ケズリの幅は広く、浅い。 ○脚部上方にはカキメ調整を施す。 | ○II 横乱。 |

古墳時代須恵器

| 器 形 | 番号 | 形 異 の 特 徴 | 技 法 の 特 徴 | 備 考 |
|-------------|----------------|--|--|----------------------------------|
| 瓶 | 27 | ○口縁部は一旦が外反したのち、段をつくって外上方へのびる。 ○口頭部にはそれぞれの雄なクシ模波状文をめぐらす。 ○体部には肩をつくり、肩部直下にクシ状原体による列点文を施す。 ○口縁端部は外方突出する広い面をもつ。 | | ○Ⅰ上げ土。 |
| 短 總 壺 | 28 | ○短い口縁がわずかに内凹気味に直立する。 ○口縁端部は丸くおきめる。 | ○体部上半はカキメ調整で仕上げられる。 ○体部下半はハラケツリ調整を施す。 | ○Ⅱ横乱。 |
| 須 恵 器 | 29 | ○口縁部は朝顔形に外反する。 | ○口頭部にタタキメを残すもの(29)がある。 | ○Ⅰ複乱(29-33)。 |
| | 30 | ○口縁端部は四角くおきめ、端部直下に断面三角形の突窓をめぐらすもの(32)、端部が上下に拡張気味で口縁近くに断面三角形の突窓をもつもの(29-30-33-34)。突窓を省略するもの(31)。 | | ○Ⅱ複乱(30-31-32-34)。 |
| | 31 | | | |
| | 32 | | | |
| | 33 | | | |
| | 34 | ○口頭部には低い断面三角形の突窓をもち、その上下に1帯のクシ模波状文を進らすもの(33)がある。 | | |
| 甕 | 35 36 37 | ○口縁部は朝顔形に外反する。 ○口縁端部は四角くおきめ、端部直下に断面三角形の突窓をめぐらす。頭部には断面三角形の突窓を持ち、その下に1帯のクシ模波状文をめぐらすもの(35)がある。 ○口縁端部が上方に立ち上がり、その下に突窓を有するもの(36-37)がある。 | ○口頭部にカキメ調整を施すもの(36)がある。 | ○Ⅰ排水用溝内(35)、Ⅰ黄灰色砂質土(36)、Ⅰ複乱(37)。 |
| 器 台 | 38 | ○杯部は全体に浅めで、2番の低い断面三角形の突窓をもつ。 ○脚部は細めで緩めで外反しながら広がり、ほぼ同大の三角形達かしを8方にもつ。 | ○杯部は平行タタキメ調整後、ヨコナダ調整で仕上げる。 ○脚部はカキメ調整を施す。 ○杯部は突窓と脚部には、1帯のクシ模波状文を施す。 | ○Ⅱ上げ土。 |

古墳時代土師器

| | | | | | |
|-------------|----|---|--|---|----------------------|
| 土 師 器 | 鉢 | 55 | ○丸味をもつ体部に、屈折して上方に直立する口縁部。 | ○口縁部内外面はヨコナダ調整を施す。 ○体部外面はナダ調整を施す。 | ○粗地域產。 ○Ⅱ暗赤褐色砂質土。 |
| | 椀 | 56 | ○口縁部は若干内寄し、端部はやや尖り氣味で肥厚する。 ○底部は安定した平底を呈する。 | ○口縁部内外面のみ、ヨコナダ調整を施す。 ○体部外面は未調整で、内面は一部板ナダ調整後ナダ。 | ○粗地域產。 ○Ⅱ暗赤褐色砂質土。 |
| 高 杯 A | 57 | ○楕形の杯部をもつ高杯。 | ○口縁部内外はヨコナダ調整で仕上げる。 | ○粗地域產。 | |
| | 58 | ○杯部がやや浅い形態で、口縁部が直立氣味に立ち上がり、端部を丸く仕上げるもの(57)。口縁部で若干内寄り味となり端部を丸く仕上げ。全体に済手もの(58)がある。 ○杯部内面には、放射状のやや太い暗文を持つものがある。 | ○杯部内外面ともにヨコナダ調整を施すもの(58)、杯底部に縱方向のハケメ調整を加えるもの(57)がある。 | ○Ⅱ暗赤褐色砂質土(57)、黄褐色シリト質粘土(58)。 | |
| 高 杯 B | 59 | ○杯部は外上方へ広がる杯底部に、段を構成し、口縁部に続く。 | ○口縁部はヨコナダ調整で仕上げる。 ○杯底部外側は縱方向のハケメ調整後ヨコナダを加える。 ○脚部内面にはシボリメが残存する。 | ○粗地域產。 ○Ⅰ黄褐色シリト。 | |
| | 60 | ○口縁部は内寄り味に上方へのびる。 ○脚部は細く「ハ」の字形に開く。 | | | |
| 高 杯 C | 61 | ○口縁部は外上方へ直線的に開き、先端で小さく外へ折れる。 ○口縁端部は丸く崩れめられている。 | ○口縁部内外面はヨコナダ調整を施す。 | ○在地產。 ○Ⅱ暗赤褐色砂質土。 | |
| | | | | | |
| 高 杯 | | ○脚部は6~7面のかるい面を構成し、「八」の字形にのび、裾部でさらに大きく開く。 ○脚部端部は面をもっている。 | ○外側はヨコナダ調整を施す。 ○脚部内面はシボリメを残し、裾部では横方向のハケメ調整を加える。 | ○粗地域產。 ○Ⅱ暗赤褐色砂質土。 | |

土器器

| 器 形 | 番号 | 形 独 の 特 徴 | 技 法 の 特 徴 | 備 考 |
|------------------|----------------|---|--|--|
| 高 杯 D | 62 | ○杯部は外上方へのび、先端でさらに大きく外反する。 ○口縁部は角張り、面をもつ。 | ○杯部の内外面はヨコナデ調整を施す。 | ○他地域產。 ○I 黄褐色砂質土。 |
| 重 A | 63 | ○二重口縁をもつ。 ○頭部直立気味にのび、上端でよく外反する。 ○口縁部は直立気味に立ち上がり、丸く仕上げる。 | ○口縁部外面はハケメ調整後、ヨコナデ調整を加える。 ○腹部外面はハケメ調整を施す。 | ○在地產。 ○II 混乱。 |
| 重 B | 64 | ○口縁部は短く外上方へのび、腹部は尖り氣味に仕上げる。 ○口頭部と体部の境は明瞭な棱をもつ。 ○体部は強く肩が張り、扁球形を呈する。底部丸底をなす。 ○体部最大径のやや上位に2条の沈線を施す。 ○須恵器の直口壺を模倣した形態である。 | ○口縁部外面はハケメ調整を施す。 ○体部外面は磨滅が著しいため調整は不明。 ○体部外面は最大径部分を横方向にヘラケズリ後、上半分を縱方向にヘラケズリ調整を加える。下半分は丁寧にナデで仕上げる。 | ○他地域產。 ○I 黄褐色シルト。 |
| 垂 A | 65 | ○二重口縁。 | ○口縁部外面はハケメ調整後、ヨコナデ調整で仕上げる。 | ○在地產 ○II 清25 |
| 垂 B | 66 | ○短い直口の口縁部をもつ。 | ○口頭部内面と外面は横方向のヘラミガキ調整する。 ○体部内面上部には粘土紐の継ぎ目を明瞭に残す。 | ○在地產？ ○I 清5。 |
| 土 製 支 脚 | 67 68 | ○幅広がりの安定した脚部に、大きく内寄気味に開く台状部をもつ。 | ○脚部外面は縱方向のハケメ後、ナデを加える。 ○脚部・台部共に内面は、ハケメ調整で仕上げる。 ○台状部と脚部の接合方法は貼り付けにより接合部の周間に粘土を補強している。 | ○在地產。 ○(70) 台状部先端の内外面に煤が付着。 ○I 清5。 |
| 土 器 器 | 69 | ○口縁部は内寄気味に開き、端部で内傾する広い面をもつ。 | ○体部外表面は横方向のハケメ調整を施す。 | ○他地域產。 ○II 清8。 |
| 垂 C | 71 | ○口縁部は短く直立気味に立つ。 ○最大径は体部のやや上位にもつ。 ○外面の凹凸はあまり目立たない。 ○底部は丸底である。 | ○外面調整は体部に左上がりのハケメ調整後、底部に横方向のハケメ調整を加えて仕上げる。 ○口縁部外面はヨコナデ、内面は横方向のハケメ調整後、ナデ調整する。 | ○在地產。 ○体部から口縁部にかけて深、二次焼成痕が認められるが底部中央の径7.5cmに墨は付着しない。 ○I 土壌5。 |
| | 72 | ○口縁部は外反し、端部で面をもつ。 ○体部は肩の張りが小さい。 | ○口縁部内外面はハケメ調整で仕上げる。 ○体部上半は横方向のハケメを部分的に加える。 ○体部の最大径部分には縦ハケメを施す。 | ○在地產。 ○体部最大径部分より上位に煤の付着有り。 ○I 清5。 |
| | 73 74 | ○口縁部はやや外反気味にのび、端部を丸くおさめる。 ○口縁部と体部との境はなだらかで棱を持たない。 | ○口縁部内外面ともハケメ調整し、その後外面のみナデ調整を加えるもの(75)と、内外面ともヨコナデ調整を加えるもの(76)がある。 ○体部内面は粘土紐の継ぎ目を明瞭に残している。 | ○在地產。 ○口縁部から体部上半にかけて深、二次焼成痕が認められる。 ○(73) II 土壌10(74) I 土壌5 |
| 垂 D | 75 76 77 | ○口縁部は強く外反し、端部を丸く納めるもの(75-76)と口縁部が外上方へ直線的にのび薄部に面をもつもの(77)がある。 ○口縁部と体部の境に棱を持つもの(77)と持たないもの(75-76)がある。 ○(76)ハケメ6条/cm、(77)ハケメ4条/cm。 | ○体部外表面は左上がりのハケメ調整をするもの(76-77)とナデ調整のみで仕上がるものの(75)がある。 ○口縁部は内外面共ハケメ調整後ヨコナデを加えるもの(76)と、外面のみヨコナデ、内面のハケメをそのまま残すもの(77)がある。 ○体部内面は縦方向のナデ調整を施すものの(77)と、ヘラケズリを加えるもの(75)がある。 | ○他地域產(75-76)、在地產(77)。 ○II 清27(75)、I 清5(76-77)。 |

土器

| 器形 | 番号 | 形態の特徴 | 技法の特徴 | 備考 |
|--------|----------------------------------|---|--|---|
| 移動式底 | 78 | ○「ハ」の字形の体部に、円柱状の把手と、長方形の脚が付く。 | ○体部外面は縦・横方向、底部は横方向のハケメ調整を施している。 ○体部内面は縦方向のハケメ調整後、ナデ調整を施している。脚部は縦方向のユビナデ調整を施している。 | ○在地産。 ○I傳5。 |
| | 69 | ○楕円形の深い杯部に、常に大きく開く脚部をもつ。 ○口縁部は直立気味に立ち上がり、端部で内側へ傾斜する面をもつ。 ○脚端部は面を持って仕上げる。 | ○口縁部内外面はヨコナデ調整する。 ○脚部内面にはシザーリ目を明顯に残し、棒状工具による突きさしが杯底部にまでおよぶ。 | ○他地域産。 ○I土著5。 |
| | 79 | ○口縁部は短く直立し、縫部を尖り気味におさめる。 ○体部は張りが少なく、底部は安定した平底である。 | ○口縁部内外面はヨコナデ調整で仕上げる。 ○体部外面は縦方向のハケメ調整を施す。 ○内面にはナデ調整を施すが、一部に粘土繊維目が認められる。 ○底面は一部横方向のハケメ調整を施す。 | ○在地産。 ○口縁部から体部にかけて二次焼成痕及び、運び書きあり。 ○日暮赤褐色砂質土。 |
| 土 器 | 80 81 82 83 84 85 | ○口縁部は短く外反するもの(80-81・83-85)、直立気味に立つもの(82-84)がある。 ○口縁端部は面をもつものの(80)、丸く納めているものの(81-83-85)がある。 ○口縁部と体部との境界は比較的明瞭な棱をもつものの(80)、明瞭な棱をもたずなだらかに移行するものの(81-85)がある。 ○体部は全体に凹凸が激しく粗緻な感がある。 ○体部下半には成形の単位を示す段が明瞭に認められる(82-84-85)。 ○底部は丸底のもの(82-85)、安定した丸底のもの(84)がある。 | ○口縁部外面はヨコナデ調整し、内面はハケメ調整するもの(80-85)、ハケメ調整後ヨコナデを加えるもの(81-82)がある。 ○体部外面は左上がりのハケメ調整を施すものの(80-84)、全面に部分的にハケメ調整するものの(81-82-83)がある。 ○体部内面には粘土繊維目が明顯に見られる。 ○体部内面はナデ調整で仕上げる。 ○底部は横方向のハケメ調整するもの(82-84)がある。 | ○他地域産(80)、在地産(81-85)。 ○I黄褐色シルト(80)、II暗赤褐色砂質土(82-83-85)、I黄褐色シルト質粘土(84)。 ○体部全体に凹凸の付するもの(80-83-84)、表面全体に強い二次焼成痕が認められるものの(80)、底部周辺に2次焼成痕の認められるものの(85)がある。 |
| | 86 | ○口縁部は短く外反し、縫部は外方へ肥厚気味におさめる。 ○口縁部と体部との境は明瞭な棱をもつ。 ○体部は肩が強くなる形態をとるものと思われる。 | ○口縁部内外面はハケメ後、ヨコナデ調整を加える。 ○体部外面は部分的にハケメ調整を施す。 ○体部内面はナデ調整する。 | ○他地域産。 ○I黄褐色シルト。 |
| | 87 | ○口縁部はなだらかに外反し、縫部に凹面をつくる。 ○口縁部から体部にはなだらかに移行する。 ○体部は口径より小さく、直立気味である。 | ○口縁部内外面はハケメ調整後、ヨコナデを施す。 ○体部外面は左上がりのハケメ調整で仕上げる。ハケメは8条/cm程度で細かい。 ○体部内面は丁寧なナデ調整を行う。 | ○他地域産。 ○II暗赤褐色砂質土。 |
| | 88 | ○体部は直立気味に立つ。 ○口縁端部は内傾する面をもつ。 | ○体部は縦方向のハケメ調整する。 ○口縁部内外面はハケメ調整後、ヨコナデ調整する。 ○体部内面は板方向のハラケズリ調整する。 | ○在地産。 ○I試掘。 |
| 甌 | 89 90 91 | ○口縁部は外反気味にのび、口縁部で角張るもの(89)、小さな面を持つもの(90)、丸く納めるもの(91)がある。 ○口縁部と体部との境には、明瞭な棱をもたない。 ○体部は最大径の位置が低く、下ぶくれの形態を呈するもの(89)、体部の張りが小さいもの(90)がある。 | ○口縁部外面はハケメ調整後、ナデ調整を加えるもの(89-91)、ナデ調整のもの(90)がある。 ○口縁部内面はハケメ調整後、丁寧なヨコナデ調整で仕上げるもの(90-91)、ハケメ調整のみのもの(89)がある。 ○体部内面はナデ調整を施すが、粘土繊維目を明显に残す。 | ○在地産。 ○I黄褐色シルト(89-90)、II暗赤褐色砂質土(91)。 |

| 器 形 | 番号 | 形 態 の 特 徴 | 技 法 の 特 徴 | 備 考 |
|-------|------------------|--------------------------------------|--|-------------------------------|
| 律式系土器 | 夷 92 94 | ○なだらかに外反する口縁部(92)。 ○平底(94)。 | ○口縁端部に一条の凹線を施す。 ○外面に平行タタキメ(92)、格子タタキメ(94)を施す。 ○内面はナデ調整。 | ○I 黄褐色シルト(94)、I 試掘黄褐色シルト(92)。 |
| | 概 93 96 97 | ○直立する口縁部、底部は面をもつ(96)。 ○平底(93-97)。 | ○外面に平行タタキメを施す。 体部下方に一条の沈線を加える(97)。 | ○II 墓赤褐色砂質土(93-96)、I 墓5(97)。 |
| | 把 手 96 | ○断面円柱状。 | ○上部に深い凹み、下部に刺突を施す。 | ○II 混乱。 |
| 不明 | 98 118 | | ○格子タタキメ(98~100-102-103~110)。 ○格子タタキメと沈線(101)。 ○平行タタキメ(111~113)。 ○平行タタキメと沈線(114~117)。 ○塊文(115-116-118)。 | |

| | | | | |
|-----|---------------------|-------------|-------------------------------|---|
| 土器 | 織機上器 6 7 8 | 1 1 5 | | ○内外面にナデ調整を施す。 |
| | | | | ○外面ナデ調整。 ○内面板状工具によるナデ(6-7)、貝殻によるナデ(8)。 |
| | | | | ○内面にナデ調整を施す。 ○外面をタタキ調整する。 |
| 土製品 | 土 磚 14 | | ○全面に丁寧なナデ調整を施す。 | ○長さ3.9cm 幅1.0cm 厚さ1.1cm 重さ4.0g ○色調 淡茶褐色 ○在地産。 ○E耕作用磚。 |
| | 軽便車 15 | | ○算盤珠の形をもつ。 ○全面に丁寧なナデ調整を施す。 | ○長さ4.75cm 幅4.8cm 厚さ2.7cm 重さ61.9g ○色調 淡乳褐色 ○他地域産。 ○II 墓赤褐色砂質土。 |
| 鐵製品 | 鍛造鉄斧 16 | | ○背面空洞。 | ○長さ(5.3)cm 幅(5.0)cm 厚さ2.2cm。(0.5) cm ○I 墓6。 |
| 石製品 | 滑石製 及孔円板 17 | | ○側縁を粗く打ち欠く。 | ○長さ2.45cm 幅2.75cm 厚さ0.35cm 重さ4.2g ○II 墓赤褐色砂質土。 |
| 土製品 | 輪羽口 18 | | | ○推定外径10.0cm 内径3.2cm 重さ149.8g ○在地産。 ○I 墓系間色砂混り。 |
| 木製品 | 柱 枝 19 20 | | ○著しい風化の為、直存状態不良。 | ○(19)長さ54.5cm 幅17.4cm 厚さ13.0cm (20)長さ32.6cm 幅14.0cm 厚さ11.2cm ○II ピット33。 |

表7 飛鳥時代土器観察表

| 器形 | 番号 | 形態の特徴 | 技法の特徴 | 備考 |
|----|-------------|---|--|---------------------------------|
| 皿 | 1 | ○宝珠つまみを有する。 ○ツマミは比較的高く乳頭状を呈する。 | ○天井部外面はヘラケズリ後、ナデ調整を加える。 ○内面がヨコナデ調整後、中央部を仕上げナデを加える。 | ○I 排水溝内。 |
| | 2 3 | ○立ち上がりは短くのび、口縁部は尖り気味におさめる。 ○受け部は外上方に直線的にのびるもの(2)、上方に立ち上がるもの(3)があり、頭部は丸い。 ○体部は浅く若干尖り気味におさめる。 | ○体部のヘラケズリの範囲は全体の1/4程度である。 ○他のヨコナデ調整で仕上げる。 | ○I 黄褐色砂質土(2)、I 横瓦(3)。 |
| 碗 | 4 | ○口縁部は短く外反気味にたちあがり、端部で凹縫をもつ。 | ○口縁部は内外面はヨコナデ調整する。 | ○I 青灰色砂礫。 |
| | 5 | ○口縁部は若干内傾し、溝部で内側へ傾斜する面をもつ。 ○体部は深く底部が安定した平底を呈する。 | ○口縁部は内外面ともヨコナデ調整する。 ○底部外面は未調整、内面は丁寧にナデで仕上げる。 | ○I 土塼3。 |
| 土器 | 6 7 8 | ○口縁部の内側には段を構成する。 ○体部はやや深い形態を呈する。 | ○底部は横方向のヘラケズリを施す。 ○口縁部は内外面ともヨコナデ調整後、外面は密な横方向のヘラミガキ調整する。 ○内面は右上がりと左上がりの斜放射状略文を施すもの(7)、2段放射状略文を施すもの(8)、右上がりの斜放射状略文を施すもの(6)がある。 | ○他地域窯。 ○I 灰褐色砂質土(8)、試掘(6-7)。 |
| | | | | |

| 地質 | 深A | 深B | 深C | 深D | 深E | 深F | 深G | 深H | 深I | 成A | 成B | 成C | 成D | 成E | 成F | 成G | 成H | 成I | 成J | 成K | 成L | 計 | | |
|----------|-----|----|-----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|-----|----|----|-----|----|----|----|----|----|----|-------|--------|
| 暗黄灰色粘土 | 8 | 2 | 0 | | 5 | 0 | | 1 | 1 | 3 | 6 | 1 | 5 | 1 | | | | | | | | 33 | | |
| ピット・土壤 | 5 | | | | 2 | | | 1 | | 1 | 1 | 1 | | | | 1 | | | | | | | 11 | |
| 黒灰色粘土 | 70 | 6 | 32 | 1 | 14 | 7 | 2 | 21 | | 3 | 4 | 30 | 1 | 2 | 23 | | 2 | 4 | 1 | | | | 1 215 | |
| 黒灰色砂土上面 | 9 | 1 | 11 | | 1 | 8 | 2 | 7 | | 2 | 9 | 3 | 5 | | | 2 | 2 | | | | | | 62 | |
| sond35 | 19 | 5 | 12 | 1 | | 1 | | 1 | 1 | 4 | 6 | 1 | 2 | 2 | | | | | | | | | 55 | |
| 土壌22 | 11 | 1 | 2 | | 2 | | | | | 1 | 2 | 2 | 5 | 1 | | | | | | | | | 1 28 | |
| 黒灰色砂質土下面 | 17 | 4 | 43 | 2 | 1 | 8 | 1 | 4 | | 3 | 1 | 14 | 4 | 16 | | 4 | 2 | | 1 | | | | 1 126 | |
| 黒灰色砂質土 | 75 | 13 | 55 | 3 | 29 | 9 | 3 | 9 | 1 | 7 | 6 | 45 | 2 | 14 | 32 | 3 | 1 | 6 | 3 | | | | 317 | |
| sond33 | 15 | 3 | 53 | 3 | 1 | 1 | 6 | 1 | 3 | | 20 | 1 | 9 | 10 | | | | | 1 | 1 | 1 | | 130 | |
| 黒灰色シルト | 14 | 1 | 20 | | 4 | 1 | 1 | 4 | | 1 | 1 | 4 | 5 | 7 | | 1 | 1 | | | | | | 1 66 | |
| 混乱 | 2 | 4 | 10 | 1 | | 4 | | 2 | 1 | 2 | | 1 | | 1 | 4 | | 1 | 2 | | | | | | 35 |
| | 245 | 40 | 238 | 11 | 1 | 59 | 44 | 10 | 43 | 4 | 17 | 23 | 138 | 7 | 50 | 101 | 3 | 3 | 18 | 11 | 2 | 3 | 1 | 5 1077 |

表8 各遺構・層出土の縄文土器、器種別点数（口縁部）

| 岩石名 | | 数 |
|------|----------------------------|-----|
| 火成岩 | 花崗閃綠岩（黒雲母一角閃石花崗閃綠岩） | 1 |
| | 閃綠岩（細粒閃綠岩） | 2 |
| | 斑れい岩（細粒斑れい岩、変質斑れい岩） | 1 |
| 半火成岩 | 石英斑岩 | |
| | ひん岩 | 1 |
| | 輝綠岩（変質輝綠岩） | 6 |
| 岩岩 | アブライト | |
| | 流紋岩 | 8 |
| | 安山岩 | |
| 堆積岩 | 軽石 | 2 |
| | 砂岩（珪質～石英質砂岩、凝灰質砂岩） | 6 2 |
| | 頁岩～粘板岩（凝灰頁岩） | 3 |
| | シルト岩 | |
| | チャート（結晶） | 3 |
| | 凝灰岩 | 4 |
| | 凝灰角輝岩 | 1 |
| 変成岩 | 輝綠凝灰岩 | |
| | 黑色千枚岩 | 6 |
| | 緑色片岩 | |
| | 緑青片岩 | 2 |
| | 角閃片岩 | 1 |
| | 石英片岩（緑簾石～石英片岩、ざくろ石～石英片岩） | 2 |
| | 絆雲母～石英片岩 | 4 |
| 岩 | 黒雲母～石英片岩（白雲母～黒雲母～石英片岩） | 1 |
| | 白雲母～石英片岩 | 4 |
| | 角閃石～白雲母～石英片岩（白雲母～角閃石～石英片岩） | 4 |
| | 角閃石～石英片岩 | 3 |
| | 紅簾石～白雲母～石英片岩 | 5 |
| | ゾイサイト片岩 | |
| | ホルンフェルス | |
| その他 | 滑石 | |
| | 角輝岩 | |
| | 集塊岩 | 1 |

表9 縄文時代各遺構・層出土の石材一覧

VI 附 編

1. 東大阪市鬼塚遺跡試料 花粉及び植物計酸体分析報告

このたび東大阪市文化財協会殿より、東大阪市鬼塚遺跡試料の花粉分析及び植物計酸体（プラントオパール）分析の御依頼をうけ、分析完了いたしましたので御報申し上げます。

I. 花粉分析

1. 試料

試料は、計15点で下記表-10に土質及び花粉・胞子化石産出傾向等についてまとめた。

表-10 鬼塚遺跡試料表

| 試料番号 | 地 点 | 土 質 | 花粉・胞子化石産出傾向 ¹⁾ |
|------|-----|----------|---------------------------|
| 1 | O | 黒色シルト質粘土 | R R |
| 2 | | 黒灰色砂質土 | R R |
| 3 | | 暗黄灰砂質粘土 | R R |
| 4 | | 黒灰色砂質粘土 | R R |
| 5 | I | 黒灰色砂礫 | R R |
| 6 | | 暗青灰色砂質土 | R R |
| 7 | | 暗茶灰色粘土 | R R |
| 8 | | 黄灰色粘土 | R R |
| 9 | O | 暗赤褐色砂質土 | R R |
| 10 | | 暗黃褐色砂質土 | R R |
| 11 | | 黄灰色シルト | R R |
| 12 | | 黒灰色砂質土 | R R |
| 13 | II | 暗褐色砂質土 | R R |
| 14 | | 黒灰色粘土 | R R |
| 15 | | 暗灰色粘土 | R R |

1) 花粉・胞子化石産出傾向は、R：少い、R R：極めて少い、である。

2. 分析方法

2) 花粉・胞子化石の抽出は、試料20g（湿重）を秤量し、HCl → 48%HF → 重液分離（ZnBr）→ アセトトリス処理 → 10%KOH の順に物理・化学処理を行った。残渣をグリセリンゼリーで封入し検鏡に供した。

表11 鬼塚遺跡試料花粉分析結果

| Sample | OZ—I | | | | | | | | OZ—II | | | | | | |
|--------------------------------|------|------|------|------|------|------|------|------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
| | No 1 | No 2 | No 3 | No 4 | No 5 | No 6 | No 7 | No 8 | No 9 | No 10 | No 11 | No 12 | No 13 | No 14 | No 15 |
| Pollen & Spores | | | | | | | | | | | | | | | |
| Pinus | | 2 | | | | | | | 1 | | | | | | |
| Podocarpus | | | | | | | | | 1 | | | | | | |
| T.C.T | | 1 | | | | | | | | | | | | 1 | |
| AP—1 | 0 | 3 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 2 | 0 | 0 | 0 | 1 | 0 | 0 |
| Alnus | | | | | | | | | | 1 | | | | | |
| Celtis—Aphananthe | | | | | | | | | | | 1 | | | | |
| Ulmus—Zelkova | | 1 | | | | | | | 1 | | | | | | |
| Araliaceae | | | | | | | | | 1 | | | | | | |
| AP—2 | 0 | 1 | 0 | 0 | 1 | 0 | 1 | 1 | 0 | 2 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| AP | 0 | 4 | 0 | 0 | 1 | 0 | 1 | 1 | 2 | 2 | 0 | 0 | 1 | 0 | 0 |
| Moraceae | | | | | | | | | | 2 | | | | | |
| Polygonum sect. Persicaria | | | | | | | | | | 1 | | | | | |
| Caryophyllaceae | | | | | | | | | | | 1 | | | | |
| Chenopodiaceae | 1 | 3 | | | | | | | | 2 | 1 | 1 | 3 | | |
| Cruciferae | | | | | | | | | | | 1 | | | | |
| Artemisia | 1 | 3 | 5 | 7 | 2 | 4 | 4 | 7 | 1 | 43 | 11 | 11 | 18 | 30 | 12 |
| Carduoideae (except Artemisia) | | | | | | | | | 1 | 1 | 1 | | | 1 | |
| Cichorioideae | | 1 | 2 | 2 | | 2 | | 2 | | 1 | | | 2 | 4 | 3 |
| Gramineae | 1 | 6 | | | | 1 | | | 2 | 8 | 1 | 3 | 1 | | |
| NAP | 3 | 13 | 7 | 9 | 2 | 7 | 4 | 10 | 3 | 59 | 13 | 16 | 21 | 36 | 18 |
| Trizonoporate pollen | | | | | | 1 | | | | | | | | | |
| Trizonocolporate pollen | 2 | | 3 | 1 | | | | | 4 | 1 | 1 | | 2 | 1 | 2 |
| FP | 2 | 0 | 3 | 1 | 1 | 0 | 0 | 4 | 1 | 1 | 0 | 0 | 2 | 1 | 2 |
| Lycopodium | | | | | 1 | 1 | | | | | 1 | | | | |
| Pteris | | 1 | | 3 | 1 | 1 | | | | | 4 | 1 | | | 1 |
| Polypodiaceae | 1 | | | | | | | | | 1 | | | | | |
| Monolete spore | 5 | 10 | 4 | 4 | 6 | 5 | 45 | 12 | 8 | 31 | 8 | 1 | 5 | 3 | 22 |
| Trilete spore | 1 | 14 | 1 | | | | | | 1 | 2 | | | | | |
| FS | 7 | 25 | 5 | 8 | 8 | 6 | 45 | 13 | 9 | 38 | 7 | 1 | 5 | 3 | 23 |
| Total Number | 12 | 42 | 15 | 18 | 12 | 13 | 50 | 28 | 15 | 100 | 20 | 17 | 29 | 40 | 43 |

3. 分析結果

分析結果は、個体数で表示しました(表11)。主要花粉・胞子化石と試料内容の状況をPLATE—I—1～1—3として添付したので参考されたい。

今回の試料中より次の化石が検出された。

《AP—1 (針葉樹花粉)》

Pinus (マツ属), Podocarpus (マキ属), T.C.T. (Taxaceae・イチイ科, Cupressaceae・ヒノキ科, Taxodiaceae・スギ科, この3科の中の何れかであるが判別が困難なもの)

《AP—2 (広葉樹花粉)》

Alnus (ハンノキ属), Celtis (エノキ属), Aphananthe (ムクノキ属), Ulmus (ニレ属), Zelkova (ケヤキ属), Araliaceae (ウコギ科),

《NAP (草本花粉)》

Moraceac (クワ科), Polygonum (タデ属), Persicaria (サナエタデ属), Caryophyllaceae (ナデシコ科), Chenopodiaceae (アカザ科), Cruciferae (アブラナ科), Artemisia (ヨモギ属), Carduoideae (キク亜科), Cichorioideae (タンポポ亜科), Gramineae (イネ科),

《FP (形態分類花粉)》

Trizonoporate pollen (三孔型花粉)。

Trizonocolporate pollen (三溝孔型花粉)。

《FS (羊齒類胞子)》

Lycopodium (ヒカゲノカズラ属), Pteris (イノモトソウ属), Polypodiaceae (ウラボシ科),

Monolete spore (单条溝型胞子),

Trilete spore (三条溝型胞子),

以下分析結果について述べる。

OZ—I・OZ—IIともに検出個体数が少なく、OZ—IのNo10で100個体検出されるが他の試料では50個体以下と極めて少ない。全試料でヨモギ属、单条溝型胞子が検出され、それらが少ない検出個体数の中では比較的多く検出される。樹木花粉はほとんど検出されなかった。

OZ—I 地区では縄文晩期のNo 2 試料において針葉樹マツ属と T.C.T. (イチイ科、ヒノキ科、スギ科の中の何かかではあるが判別困難) が検出された他はイネ科が6個、单条溝型胞子10個、三条溝型胞子14個等極めて少ない。

No 3、No 4、No 8 試料では、樹木花粉は検出されず僅かに草本のヨモギ属、キク亜科がみられるのみである。

OZ—II 地区では、No10にはやや多くの花粉化石が認められ、広葉樹のハンノキ属、エノキ属—ムクノキ属の他草本のヨモギ属が著しく多く、他にアカザ、イネ科などが若干みられる。

その他の試料No14、No15等もこれらの花粉構成は大きな差異はない。

従って、草本の生育した環境がこれら分析結果から推定できる。

なお、PLATE—1—1のNo 5 以下およびPLATE—1—2、1—3 に示したように分析結果の残渣中には花粉・胞子化石は極めて少なく黒色の植物組織が存在している。

II. 植物珪酸体 (プラントオバール) 分析

1. 試料

分析試料は、OZ—IのNo. 11～No14までの4点である。表12はこれらの試料表である。

2. 分析方法

試料の秤量 (湿重10g) → H₂O₂処理 → 遠心分離法により水洗 → 重液分離 → 封入 (キシロールバルサム) → 検鏡 (×400)。

表12 試 料 表

| 試料番号 | | 土質 | プラントオバール産出傾向 ¹⁾ |
|------|-------|-------------------|----------------------------|
| OZ | No.11 | | C |
| | 12 | 土質については、花粉分析の | C |
| | 13 | 試料表（表-10）を参照されたい。 | C |
| | 14 | | C |

1) 産出傾向 C:普通

3. 分析結果

各試料から検出されたプラントオバール（以下同一表現）は、佐瀬・近藤（1974）の分類基準に従い、大型（ファン型、棒状型、ポイント型）、小型（ササ型、ヒゲシバ型、キビ型、ウシノケグサ型、その他）、ヘア、樹木（はめ縫パズル状、平板状、ブレイド状）、起源不明等の形態に分けてその検出個体数を表13に記した。このなかで産出頻度の高い種については合計を基数とする比率のダイアグラムを作成し図63に表示した。さらに写真図版PLATE-2-1を作成したので参照されたい。

図63でも明らかなとおり4試料とも大型珪酸体の占める割合が86%以上と非常に高かった。このうち、ファン型と棒状型が高率で出現し、ポイント型は10%前後であった。

小型珪酸体は、ササ型とキビ型が低率ながら連続して検出された。佐瀬（1980）によれば植物分類グループと密接な関係がみとめられるのは小型珪酸体であり大型珪酸体はあまりみとめられないとされている。

ササ型の給源植物はタケア科にみとめられ、とくにササ類に多いとされている。キビ型は、キビア科に特徴的でありダンチクア科、スズメガヤア科等にもみとめられる。

今回多産したファン型は、イネ科の機動細胞起源のものであり、棒状型は長細胞起源のものである。これらの大型珪酸体はイネ科にすべて含まれており、特定の植物には限定されない。

従って、今回の分析では小型珪酸体が低率であったので植物分類グループとの対応は不明であった。

引用文献

- 佐瀬・近藤 (1974) 北海道の埋没火山灰土腐植層中の植物珪酸体について
帯広畜産大学学術研究報告、第1部 8、P.465-483
- 佐瀬 隆 (1980) 南部浮石層直下の埋没土壤の植物珪酸体分析
第四紀研究 vol.19、No.2、P.117-124

第63図 鬼塚遺跡試料主要プラントオバールダイアグラム

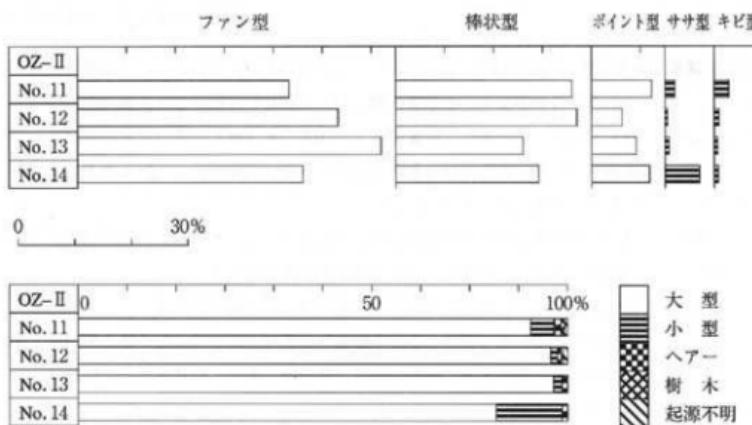


表13 鬼塚遺跡試料プラントオバール分析結果

| 試 料 プラントオバール | OZ-II | | | | |
|-----------------|---------|-------|-------|-------|-----|
| | No.11 | No.12 | No.13 | No.14 | |
| 大 型 | ファン型 | 116 | 200 | 227 | 154 |
| | 棒状型 | 97 | 141 | 97 | 100 |
| | ポイント型 | 33 | 24 | 34 | 40 |
| | | 246 | 365 | 358 | 294 |
| 小 型 | ササ型 | 6 | 1 | 3 | 23 |
| | ヒゲシバ型 | 1 | | | 1 |
| | キビ型 | 8 | 4 | 3 | 3 |
| | その他 | | | | 14 |
| | | 15 | 5 | 6 | 41 |
| ヘ アー | マクロヘアー | 2 | 2 | 3 | 1 |
| | ミクロヘアー | 1 | | | |
| | | 3 | 2 | 3 | 1 |
| 樹 木 | はめ絵パズル状 | | 1 | | |
| | 平板状 | 2 | | | 1 |
| | | 2 | 1 | 0 | 1 |
| 起源不明 | | 1 | 4 | 1 | 1 |
| プラントオバール | 267 | 377 | 368 | 338 | |
| 珪藻 | | | | + | |
| 海綿骨針 | | | | + | |

2. 鬼塚遺跡出土人骨について

長野県看護大学 多賀谷昭

OZ I 土壙墓 1 出土人骨 複数個体の人骨が出土している。骨は風化が著しいので確実な同定ができるないが、四肢骨の骨体多数と、下顎骨 8 個、およびそれに釘植する永久歯 29 本と乳歯 4 本の計 33 本が残存しており、この他に、遊離歯として 56 本の永久歯と 2 本の乳歯が検出されている。四肢骨と遊離歯の一部に火を受けた形跡が認められる。四肢骨の多くは土壙内の北西部から出土し、ほぼ北西—南東方向に向いている。

- 下顎骨 1：成人の下顎体から右下顎枝にかけての部分で、右の大歯から第 2 小臼歯までの 3 本、左の大歯から第 3 大臼歯までの 6 本の計 9 本の歯が釘植する。
- 下顎骨 2：成人の下顎体で、右第 1・第 2 小臼歯の計 2 本の歯が釘植する。
- 下顎骨 3：下顎体のうち、左下顎角から右の頬孔付近までの部分で、左の第 1 小臼歯と第 3 大臼歯の計 2 本の歯が釘植する。歯冠が小さく女性的である。咬耗度から、年齢は 20 代の可能性が大きい。
- 下顎骨 4：成人の左下顎体の一部で、第 2 小臼歯と第 1 大臼歯の計 2 本が釘植する。第 2 小臼歯は咬頭が平坦になるまで摩耗している。
- 下顎骨 5：成人の右の下顎体と下顎枝の大部分で、右の大臼歯 3 本が釘植する。第 3 大臼歯には、歯冠の頬側に齶食がみられる。
- 下顎骨 6：小児の下顎骨で、左右の乳臼歯計 4 本と、左右の切歯と犬歯および第 1 大臼歯の計 8 本が釘植する。このうち、切歯と犬歯はいずれも萌出の途中であり、左右とも第 1 小臼歯は萌出前で埋伏している。これらの状態から、年齢は 7 から 9 歳と推定できる。
- 下顎骨 7：成人の下顎体で、比較的小さく、女性と推定される。左右の第 2 大臼歯が釘植し、その咬耗度から、年齢は 30 代以降と推定される。
- 下顎骨 8：下顎体の一部であるが、歯は釘植していない。

以上のことから、この土壙には少なくとも成人 6 個体と小児 1 個体をふくむ 8 個体以上が埋葬されていたことになる。残存部位が四肢骨と下顎骨に偏っていることと骨の配置とから、再葬墓と考えられる。

OZ I 土壙墓 2 出土人骨 四肢骨と頭蓋骨および歯が残存するが、骨は風化が進んでおり、部位の正確な同定はできない。四肢骨の多くは、大きさの近いものが数本ずつまとめられた形で出土している。歯では釘植した状態で出土した永久歯 18 本と乳歯 9 本のほか、遊離した永久歯 23 本が検出された。一部の四肢骨に火を受けた形跡が見られる。

頭蓋骨は、南東の隅近くから一個と中央からやや北西に寄った位置から他の一個が出土している。前者は後頭骨と左の頭頂骨、側頭骨、およびこれと関節する左の下顎枝の一部からなる。後者は頭頂骨と思われる骨片と下顎骨で、下顎体の前半は失われて左右に分離しており、右の第 1 から第 3 大臼歯と左の第 2・第 3 大臼歯の計 5 本が釘植している。後者の上顎骨は残って

いるが、右上顎の第2・第3臼歯が下顎歯と咬合した状態で出土し、また、下顎骨の前部に相当する位置から、この個体の小白歯と推定される歯が一本検出されている。大臼歯には咬耗による象牙質の露出が認められ、年齢は30代以上と推定される。

これらの頭蓋骨とは別に、中央やや南よりの位置から歯が20本出土している。上・下顎とも骨は風化して土塊となっているが、これらの歯は骨に釘植した位置関係を保って出土しており、一個体分と判断できる。このうち、9本は乳歯で、全部の乳臼歯と左の下顎乳犬歯からなり、残り11本の永久歯は、上顎の右第1大臼歯、右中切歯、左犬歯、下顎の左右の切歯と犬歯および左第1大臼歯からなる。歯冠の形成状態から、5から6歳の小児と推定される。

以上のことから、この土壤には少なくとも2個体の成人と1個体の小児がふくまれている。骨の配置からみて、四肢骨は分離し、頭蓋は下顎骨が開節した状態で埋葬されたものと推定される。再葬墓であるか、あるいは災害等により半ば白骨化した遺体を葬ったものと考えられる。OZⅡ自然流路3出土人骨 下顎骨を伴わない頭蓋骨1個が出土している。焼けた骨はふくまれていない。頭蓋骨は、成人のものと推定される頭蓋冠で、後頭骨から左右の側頭骨および右上顎骨の齒槽突起付近が残存し、頭蓋底を上に向いている。右上顎骨には第1または第2大臼歯が釘植する。このほかに、右の下顎第1・第2小白歯と第1大臼歯と推定される計3本の遊離歯が検出されている。

OZⅡ木棺墓1人骨 出土状態：全体として各骨はほぼ埋葬時の位置にあるものと思われ、？を頭位とした仰臥位で埋葬されている。頭部は顔面を右に向いている。下顎骨の関節突起は左でやや後方にずれているが、ほぼ側頭骨と関節した状態である。体幹は前面を上に向いている。上肢は左右上腕を体幹にはば平行させ、肘関節は左では直角に、また右では完全に屈曲している。手は左右とも手掌を下に向かう、右手は頸部付近、左手は手背を上腹部付近に位置している。下肢は、左右とも膝関節を半ば屈曲し、股関節をやや屈曲かつ外転し、膝が木棺の側板に寄りかかった状態である。

保存状態：ほぼ全身にわたる骨と9本の歯が残存しているが、骨はかなり風化している。頭蓋では大部分が残存するが、左右の側頭鱗と左下顎体を欠いており、残存部位も風化と変形が著しいため、計測はできない。歯は、右上顎の第1小白歯から第2大臼歯までの4本と右下顎の第1小白歯から第3大臼歯までの5本の計9本が残存している。体幹では、椎骨はほとんど原型をとどめず、肋骨では中位助骨と思われる左右各数本が残存する。上肢では、左右の上腕骨、桡骨、尺骨の何れも骨体のみが残存し、さらに右の基節骨と思われる骨が3個残存する。下肢骨では、左右の寛骨の脛骨から坐骨にかけて残存し、右大腿骨の骨体と左大腿骨の骨体上部1/3、右の脛骨および腓骨、左腓骨の骨体の一部が残存する。このほかに、左右の足根骨と思われる骨が残存するが風化が著しく同定できない。

年齢・性別：歯の萌出状態と骨の大きさから成人と推定される。さらに、大臼歯の咬耗はほぼエナメル質内に留まっており、20代後半から30代の可能性が大きい。寛骨の坐骨切痕部は、やや変形があるので断定はできないが、女性的である。

3. 鬼塚遺跡出土歯牙について

金 広美

OZ-I 土壌墓1 (顎)

- 1-1 左下及び5までの顎。成人。5 4 3|3 4 5 6 7 8の歯牙残存。
5 4 3の咬耗が特に大きい。
- 1-2 前歯部分を除いた成人顎。歯根部分が、土と共に形を残している。
1|、5 4の歯牙残存。
- 1-3 前歯部分を含む成人の左下顎。3の歯根形跡有。オトガイ孔が明確に判る。
4 8の歯牙残存。咬耗の度合より年齢は25~30?
歯冠が小さく、形態にまるみがあるので♀?
- 1-4 成人左下顎の5 6の部分のみ。5の歯牙、6の歯根が残存。
5は、平らな程に咬耗している。
- 1-5 成人右下顎、関節突起、筋突起に至る形態をある程度残している。
8 7 6の歯牙残存。8の歯冠頬側にカリエス?
- 1-6 _____
- 1-7 ★成人下顎、想定される歯列弓は、小さくまるみがあると思われるでの♀?
7|7の歯牙残存。咬耗の度合から、年齢30代半ば過ぎ~
★小児下顎、永久歯萌出途中の歯が多く、混合歯の状態。
前歯が、そろって萌出途中で、小白歯4|4の埋伏状態が見られる。
6は、萌出完了。6と顎についた状態の4 3 2 1|1 2 3 4、e d|d eの歯牙残存。
年齢は7~9才?
- 1-8 _____

TOTAL

①

| | | | |
|------------------|--|-----------------|----------------|
| 8 7 6 5 4 3 2 1 | | 1 2 3 4 5 6 7 8 | |
| 8 7 6 5 4 3 2 1 | | 1 2 3 4 5 6 7 8 | <u>e d d e</u> |
| ①②①②③②①①①①②③②②②② | | | ④本 |

総数 永久歯……29本+乳歯……4本=33本

顎 | 成人……6
 | 小児……1

OZ—I 土壌墓1（歯群）

| | | | |
|---|---|-----------|-----------------------------|
| ① | ② | ①①②③②①③①② | |
| 8 | 7 | 6 | 5 4 3 2 1 1 2 3 4 5 6 7 8 |
| 8 | 7 | 6 | 5 4 3 2 1 1 2 3 4 5 6 7 8 |
| 7 | 7 | 4 | 3 ① ② ① ① ① ② ④ ② ① |

e), le.....②本

永久歯 部位鑑別注記済、上記表の歯数.....55本
 土壌墓1 東側より7（表以外）.....1本

56本

接合不完全により部位鑑別困難の歯
 土壌墓1—20.....2本
 土壌墓1—34.....2本

切歯.....12本
 小臼歯.....3本 およその数
 大臼歯.....1本

20本

※全永久歯の数は、およそ56+20=76+乳歯②本=78本

顎に残る歯と合わせて、78+33=111本

OZ—I 土壌墓1で、歯、歯片が出土したケースNo

I—47 歯片採取

| | |
|------|-------|
| I—10 | 焼歯片採取 |
| I—45 | 焼歯片採取 |
| I—75 | 焼歯片採取 |

OZ—I 土壌墓1 固体別に分類の結果

| | | | |
|----------|---|--|---|
| (1) ② | 4 | | (1)(1)(1) 2 3 4 4 (1) |
| | | | [2.3]の歯冠がほぼ完成に至り、4/4も歯冠形成途中であることから5才前後？ |

| | | | |
|----------|---|--|---|
| (2) ② | 5 | | (1) 3 6 5 (2)① (1) |
| | | | 5/5の歯根が未完成である。②の個体は、年齢的に似かよっており、判別が困難である。 |

| | | | |
|----------|---|--|--|
| (1) ② | 1 | | (1)(3)(2)① 3 4 5 3 (1) (1) |
| | | | 歯冠の咬耗状態より、20代～の成人？上下犬歯は抜歯されていない。 |

| | | | |
|----------|---|--|------------------------|
| (2) ② | 4 | | |
| | | | 咬耗が大きいので、30代後半～40代の成人？ |

| | | | |
|---|-----|--|-------------|
| ④ | 7 6 | | |
| | | | 咬耗が特に激しく老年？ |

| | | | |
|---|---|--|---------------------|
| ④ | 6 | | 6 |
| | | | 咬耗が大きいので④の個体ぐらいの年齢？ |

その他

- ・土壌墓1—5と同個体と思われる歯……I 3|1、I 4|3
- ・土壌墓1—7（子供）と同個体と思われる歯……I 6|6

OZ—I 土壌墓2 №ハ群

乳歯 ②① c b a | a b c ②②
②① c ⑤ a | a b ②③③

○……№ハ群より

●……№ハ群の土壌に残る

■……水洗の歯群より

| | | |
|-----|--|---|
| 永久歯 | $\begin{array}{c} 8 \ 7 \ ⑥ \ 5 \ 4 \ 3 \ 2 \ 1 \\ \hline 8 \ 7 \ 6 \ 5 \ 4 \ ③ \ ② \end{array}$ | $\begin{array}{c} 1 \ 2 \ ③ \ 4 \ 5 \ 6 \ 7 \ 8 \\ \bullet \bullet \bullet \bullet \ 4 \ 5 \ ⑥ \ 7 \ 8 \end{array}$ |
|-----|--|---|

Noハ群より、21本の歯を採取。内20本（上記の○●の歯）は、混合歯の状態の同一個体と推測される。永久歯の中には、歯冠未完成のものもあり、年齢5～6才ぐらいの小児と推定され、また、[d e]、[1|1 2 3]の位置関係より、植立、萌出状態が明らかである。

OZ—I 土壌墓2（類）

- 2—1 成人下顎（左） [7 8]の歯牙残存。咬耗のため、咬頭はエナメル質に穴があいている。
 2—1 成人下顎（右） 関節突起、筋突起に至る形態を残す。上顎は全く残っていないが、[8 7]は、咬合状態を残しているようである。 $\frac{8 \ 7}{8 \ 7 \ 6}$ の歯牙残存。
 2—15 全体に顎と判別できない土塊に、下顎の臼歯と思われる歯牙が一本残っている。

計 8本

OZ—I 土壌墓2 固体別に分類の結果

① ①

| | |
|--|------------------------------------|
| $\begin{array}{c} 7 \\ \hline 5 \ 5 \ 7 \end{array}$ | ハ群の小児と同年ぐらいで、別個体のものと思われる。 |
| ①①① | 同一個体とするならば、①の歯は、ハ群のそれと比べて小さいようである。 |

② ①②

| | |
|--|--|
| $\begin{array}{c} 8 \ 6 \\ \hline 5 \end{array}$ | 智歯の歯冠完成と咬耗も小さく、接触点（コンタクト）も不面覧なので、12・13～10代の成人？ |
| ③ | |

③ ② ②

| | |
|--|---|
| $\begin{array}{c} 7 \ 1 \\ \hline 5 \end{array}$ | 同一個体の歯と推測できる要因にかなり激しい咬耗があげられる。老年？顎2—1と同一個体？ |
| ② | |

②

— + —
4 5
②④

頬側咬頭の咬耗の大きさより、年令 30代～？の成人。

OZ—I 土壌墓2 TOTAL

土壌墓2の部位鑑別注記済全永久歯 (Noハ群を含む)

| | | | |
|-----|-----|------|-----------|
| ①②② | ② | ①① | ① |
| 8 | 7 | 6 | 5 4 3 2 1 |
| 8 | 7 | 6 | 5 4 3 2 1 |
| ①①③ | ①①① | ②①①① | ②④①① |

31本

乳歯は、Noハ群の11本

| | |
|-----|------|
| 永久歯 | ……31 |
| 乳歯 | ……11 |
| 42本 | |

顎に残る歯と合わせて42+8=50 50本

II 1|2 ……土壌墓2—7より採取

II 4|1 ……土壌墓2—10～13より採取

OZ—I 土壌墓2で歯片

土壌墓2—7より大臼歯片

土壌墓2—8より大臼歯片

土壌墓2—10～13より2本 (6と?)

OZ—I 自然流路3出土人骨

6 5 4の歯冠残存。

6 ……頬側の歯冠1/2、咬合面の咬耗大。

5 4 ……完全な歯冠の形態を残す。6ほど咬耗していない。

以上、3本の永久歯は一個体分のものと推定される。

土壤墓1、2 烧骨の分布状況

OZ—I 土壤墓1

No1, 10, 11, 12, 15, 20, 21, 22, 23, 32, 34, 36, 39, 42, 45, 46, 47, 49, 50, 60, 69, 70, 80, 81, 82, 83, 84

OZ—I、土壤墓2

No6 (only) 820730及び820731の水洗の骨の中に焼骨が多く見られる。

OZ—II 木棺墓1

| | | | | |
|------|---|---|---|---|
| No39 | 7 | 6 | 5 | 4 |
| No37 | 8 | 7 | 6 | 5 |

No38 1……切縁磨耗大、歯冠に穴があいている。

| | | |
|---|---|-----------------------------------|
| ③ | 2 | 2.....磨耗によって1と同様に歯冠に穴があいている。 |
| 3 | 2 | 1.....遠心の切縁のみの磨耗は、歯軸が近心に傾斜していたため？ |

3……尖頭が平らに磨耗している。

2……犬歯化の傾向。 3……近心舌側面、歯頸部欠損。

3……部位も、鑑別困難で、これのみ別個体の歯と思われる。

OZ—II 木棺墓1のまとめ

以上、3を除く6本の前歯について3 2 1、1 2は、それぞれ同一個体のものと推定され（これらの、磨耗状態、歯の形態による）3を含めて、左側の咬合関係を考察すると、左側にこのような著明な磨耗（歯冠エナメル質に穴があくほど……）が認められるのは、何か歯による作業をしていたのではなかろうか。

No37下顎の咬耗状態からも、小白歯部は、それほどの咬耗がみられないのに大臼歯部にあっては、8に至るまで咬耗の度合が大きいようである。

もちろん、対合歯にあるNo39上顎についても同じである。

年令20代後半～30代の辛とするならば、前歯部（この場合は左側のみ）は、歯を酷使する作業のための磨耗、大臼歯部は、食物の咀しゃくによる咬耗と推測してよいであろうか。

4. 鬼塚遺跡出土の縄文時代晩期の数種の土器片に塗布された赤色顔料物質の化学分析

武庫川女子大学薬学部

安田博幸 井村由美

標記の赤色顔料物質について、筆者らの常法とする、ろ紙クロマトグラフ法と検出試薬による微量化学分析を行った結果、赤色顔料物質の成分を確認したので報告する。

試料の外観および分析用試料の採取

- 試料 No1 鬼塚遺跡出土の縄文時代晩期（滋賀里Ⅲb式）の浅鉢の内外面に塗布された赤色顔料物質。その内面のかなり広範囲に塗られたなかの1箇所から、鋼針で注意深く掻き取るようにして約2mgを採取し、分析用試料とする。
- 試料 No86 鬼塚遺跡出土の縄文時代晩期（滋賀里Ⅳ式）浅鉢の口縁部小破片の内面に僅に残る赤色顔料物質。その小部分より、鋼針で注意深く掻き取るようにして約1mgを採取し、分析用試料とする。
- 試料 No03 鬼塚遺跡出土の縄文時代晩期（滋賀里Ⅳ式）の土製品小破片の外面に薄く残る赤色顔料物質。その1箇所より、鋼針で注意深く掻き取るようにして約1mgを採取し、分析用試料とする。
- 試料 No74 鬼塚遺跡出土の縄文時代晩期（滋賀里Ⅳ～V式）の浅鉢の極めて小さい破片の口縁端部に塗布された赤色顔料物質。その鮮明に残る部分1箇所より、鋼針で注意深く掻き取るようにして約1mgを採取し、分析用試料とする。

実験の部

試料検液の作製

上記の採取試料No1、No86、No03、No74をそれぞれガラス尖形管に移し、濃硝酸1滴と濃塩酸3滴を加え、加温し、酸可溶性成分を溶解させたのち、適量の蒸留水を加えて遠心分離機にかけ、酸不溶性成分と分離した上澄液を加熱、濃縮して、ろ紙クロマトグラフ用試料検液とする。試料検液の番号は掻く試料番号に対応させる。

ろ紙クロマトグラフ法と検出試薬による呈色反応からの赤色顔料成分の確認

東洋ろ紙No53（2cm×40cm）を使用し、ブタノール硝塩酸を展開溶媒として、試料検液と对照の鉄イオン（ Fe^{3+} ）と水銀イオン（ Hg^{2+} ）の標準液を同条件下で展開した。

展開の終わったろ紙を風乾してから紙に二分し、その一方は検出試薬として1%ジフェニルカルバジドのアルコール溶液を噴霧してからアンモニア蒸気に曝し、もう一方には検出試薬として0.05%ジチゾンのクロロホルム溶液を噴霧して、それらの際、ろ紙上に発現するそれぞれの呈色スポットの位置（RF値で表現する）と色調を検した。

上記試料検液並びに対照イオンの標準液について得られたろ紙上のスポットRF値と色調は、

下記の表14、表15のとおりである。

- (1) ジフェニルカルバジド、アンモニアによる検出： (Hg^{2+} は紫色、 Fe^{3+} は紫褐色スポットとして検出される。)

表14 ジフェニルカルバジドによる呈色スポットの Rf 値と色調

| | | Rf 値 (色 調) |
|---------------|------|------------|
| 試料検液 | No 1 | 0.13 (紫褐色) |
| タ | No86 | 0.11 (タ) |
| タ | No03 | 0.11 (タ) |
| タ | No74 | 0.11 (タ) |
| Fe^{3+} 標準液 | | 0.17 (タ) |
| Hg^{2+} 標準液 | | 0.91 (紫 色) |

- (2) ジチゾンによる検出： (Hg^{2+}) は橙色スポットとして検出され、 Fe^{3+} は反応陰性のため呈色せず。)

表15 ジチゾンによる呈色スポットの Rf 値と色調

| | | Rf 値 (色 調) |
|---------------|------|------------|
| 試料検液 | No 1 | 呈色スポット発現せず |
| タ | No86 | タ |
| タ | No03 | タ |
| タ | No74 | タ |
| Fe^{3+} 標準液 | | タ |
| Hg^{2+} 標準液 | | 0.82 (橙 色) |

判 定

以上の結果より、試料検液No 1、No86、No03、No74からは、いずれも Fe^{3+} のみが検出され、 Hg^{2+} はまったく検出されなかった。このことから鬼塚遺跡出土の縄文時代晩期の浅鉢など数種土器片に塗布された赤色顔料物質は、すべてベンガラ (Fe_2O_3) であって、水銀朱 (HgS) は使用されていないと判定する。

(1986年12月分析)

〔註〕

- 1) 安田博幸 鶴崎暁子：「尼崎市田能遺跡16号棺の人骨に付着の朱赤色物質の成分について」『古代学研究』第49号 p.9 (1967)
- 安田博幸 鶴崎暁子：「尼崎市田能遺跡17号棺からの水銀朱の検出」『古代学研究』第53号 p.27 (1968)
- 安田博幸：「埋蔵文化財の分析化学」『考古学と自然科学』第4号 p.33 (1971)

5. 鬼塚遺跡出土のサヌカイト製石器、剥片の石材産地分析

薦科 哲男、東村 武信
(京都大学原子炉実験所)

はじめに

自然科学的な手法を用いて、石器石材の産地を客観的に、かつ定量的に推定し、古代の交流、交易および文化圏、交易圈を探ると言う目的で15年前から、蛍光X線分析法により研究を始めた。当初は手近に入手できるサヌカイトを中心に、分析方法と定量的な産地の判定法との確立を目標として研究したが、サヌカイトで一応の成果を得た後に、同じ方法を黒曜石にも拡張し、本格的に産地推定を行なっている^{1,2,3}。

黒曜石、サヌカイトなどの主成分組成は、原産地ごとに大きな差はみられないが、不純物として含有される微量元素組成には異同があると考えられるため、微量元素を中心に元素分析を行ない、これを産地を特定する指標とした。

蛍光X線分析法は試料を破壊せずに分析することができて、かつ、試料調整が単純、測定の操作も簡単である。石器のような古代人の日用品で多数の試料を分析しなければ遺跡の正しい性格が分からぬという場合にはことさら有利な分析法である。分類の指標とする元素組成を遺物について求め、あらかじめ、各原産地ごとに数十個の原石を分析して求めておいた各原石群の元素組成の平均値、分散などと、遺物のそれを対比して産地を推定する。この際多変量解析の手法を用いて、各産地に帰属される確率を求めて産地を同定する。

鬼塚遺跡から出土した143点のサヌカイト遺物の産地分析の結果が得られたので報告する。

サヌカイト原石の分析

サヌカイト両原石の風化面を打ち欠き、新鮮面を出し、塊状の試料を作り、励起用の⁵⁷Fe、¹⁰⁹Cdの放射性同位元素とSi(Li)半導体検出器を組み合わせたエネルギー分散型蛍光X線分析装置によって元素分析を行なう。⁵⁷Fe線源で励起したとき、K、Ca、Tiが、¹⁰⁹Cd線源で励起したとき、Mn、Fe、Rb、Sr、V、Zr、Nbの元素がそれぞれ分析される。

塊試料の形状差による分析値への影響を打ち消すために元素量の比を取り、それでもって産地を特定する指標とした。サヌカイトでは、K/Ca、Ti/Ca、Fe/Sr、Rb/Sr、Zr/Sr、Nb/Srをそれぞれ用いる。

サヌカイトの原産地は、西日本に集中してみられ、石材として良質な原石の産地および質は良くないが考古学者の間で使用されたのではないかと話題に上る産地など、合わせて23ヶ所の調査を終えている。図64にそれらの地点を示す。このうち、金山・五色台地域では、その中の多くの地点からは良質のサヌカイトおよびガラス質安山岩が多量に産出し、かつそれらは数ヶの群に分かれる。図65にこの地域の調査した地点を示した。

これらの原石を良質の原石を産する産地を中心に元素組成で分類すると31の原石群に分類できる。その結果を表16に示した。金山・五色台地域のサヌカイト原石を分類すると、金山西

群、金山東群、国分寺群、蓮光寺群、白峰群、法印谷群の6ヶの群に、ガラス質安山岩は五色台群の単群に分類された。

金山・五色台地域産のサヌカイト原石の諸群にはほとんど一致する元素組成を示すサヌカイト原石が淡路島の岩屋原産地の堆積層から円錐状で採取される。これら岩屋のものを分類すると、全体の約2/3が表17に示す割合で金山・五色台地域の諸群に一致し、これらが金山・五色台地域から流れ着いたことがわかる。淡路島中部地域の原産地である西路山地区および大崩地区からは、岩屋第一群に一致する原石がそれぞれ92%および88%と群を作らない数個の原石とがみられ、金山・五色台地域の諸群に一致するものはみられなかった。表18に示す、和泉・岸和田原産地からも全体の約1%であるが金山東群に一致する原石が採取される。表19に示す和歌山市梅原原産地からは、金山原産地の原石に一致する原石はみられない。仮に、遺物が岩屋、和泉・岸和田原産地などの原石で作られている場合には、産地分析の手続きは複雑になる。その遺跡から10個以上の遺物を分析し、表17、18のそれぞれの群に帰属される頻度分布を求め、確率論による期待値と比較して確認しなければならない、二上山群を作った原石は奈良県北葛城郡当麻町に位置する二上山を中心とした広い地域から採取された。この二上山群と組成の類似する原石は和泉・岸和田の原産地から6%の割合で採取されることから、一遺跡10個以上の遺物を分析し、表18のそれぞれの群に帰属される頻度分布をもとめて、和泉・岸和田原産地の原石が使用されたかどうか判断しなければならない。

結果と考察

遺跡から出土した石器、石片は、風化のためサヌカイト製は表面が白っぽく変色し、新鮮な部分と異なった元素組成になっている可能性が考えられる。このため遺物の測定面の風化した部分に、圧縮空気によってアルミナ粉末を吹きつけ風化層を取り除き新鮮面を出して測定を行なった。一方黒曜石製のものは風化に対して安定で、表面に薄い水和層が形成されているにすぎないため、表面の泥を水洗するだけで完全な非破壊分析が可能であると考えられる。

今回分析した遺物の結果を表20に示した。

石器の分析結果から石材産地を同定するためには数理統計の手法を用いて原石群との比較をする。説明を簡単にするためK/Caの一変量だけを考えると、表20の試料番号17316番の遺物ではK/Caの値は0.254で、二上山群の【平均値】±【標準偏差値】は、0.243±0.009である。遺物と原石群の差を標準偏差値(σ)を基準にして考えると遺物は原石群から 1.2σ 離れている。ところで二上山原産地から100ヶの原石を探ってきて分析すると、平均値から 1.2σ のずれより大きいものが23ヶある。すなわち、この遺物が、二上山群の原石から作られていたと仮定しても、 1.2σ 以上離れる確率は23%であると言える。だから、二上山群の平均値から 1.2σ しか離れていないときには、この遺物が二上山群の原石から作られたものではないとは、到底言い切れない。ところがこの遺物を金山東群に比較すると、金山東群の平均値からの隔たりは、約 12σ である。これを確率の言葉で表現すると、金山東群の原石を探ってきて分析したとき、平均値から 12σ 以上離れている確率は、一兆分の一であると言える。このように、一兆個に一個

しかないような原石をたまたま採取して、この遺物が作られたとは考えられないから、この遺物は、金山東群の原石から作られたものではないと断定できる。これらのことと簡単にまとめてしまうと、「この遺物は二上山群に23%、金山東群に百億分の1%の確率でそれぞれ帰属される」。各遺跡の遺物について、この判断を表16のすべての原石群について行ない、低い確率で帰属された原産地を消していくと残るのは、二上山群の原産地だけとなり、二上山産地または和泉・岸和田原産地の石材が使用されていると判定される。実際はK/Caといった唯1ヶの変量だけでなく、前述した7ヶの変量を取り扱うので変量間の相間を考慮しなければならない。例えばA原産地のA群で、Ca元素とRb元素との間に相関があり、Caの量を計ればRbの量は分析しなくとも分かるようなときは、A群の石材で作られた遺物であれば、A群と比較したとき、Ca量が一致すれば当然Rb量も一致するはずである。したがって、もしRb量だけが少しずれている場合には、この試料はA群に属していないと言わなければならない。このことを数量的に導き出せるようにしたのが相間を考慮した多変量統計的手法であるマハラノビスの距離を求めて行なうホテリングの T^2 検定である。これによって、それぞれの群に帰属する確率を求めて、産地を同定する¹³⁾。鬼塚遺跡より出土した遺物の産地推定の結果を表21に示す。原産地は確率の高い産地のものだけを選んで記した。原石群を作った原石試料は直径3cm以上であるが、小さな遺物試料、例えは0.6cmとすると、原石試料との面積比は1/25になる。このため原石試料と同じ測定精度で、遺物から元素含有量を求めるには、測定時間を長時間掛けなければならない。しかし、多数の試料を処理するために、1個の遺物に多くの時間をかけられない事情があり、短時間で測定を打ち切る。このため、得られた遺物の測定値には、大きな誤差範囲が含まれ、ときには、原石群の元素組成のバラツキの範囲を越えて大きくなる。したがって、小さな遺物の産地推定を行なったときに、判定の信頼限界としている0.1%に達しない確率を示す場合が比較的多くみられる。

原石産地（確率）の欄にマハラノビスの距離 D^2 の値で記した遺物については、判定の信頼限界としている0.1%の確率に達しなかった遺物でこの D^2 の値が原石群の中で最も小さな D^2 値である。この値が小さい程、遺物の元素組成はその原石群の組成と似ているといえるため、推定確率は低いが、その原石産地と考えてはほ間違ないと判断されたものである。

鬼塚遺跡出土の143点の绳文時代晚期の遺物の中で信頼限界の0.1%に達した遺物は131点で、10点はマハラノビス距離 D^2 の値によって石材の原石産地は判定され、これらの方法でも判定できなかったサヌカイト遺物2点にすぎなかった。この結果、原石産地の明らかになった141点の遺物の中で134点に二上山産原石、7点には金山東群の原石が使用されていることが明らかになった。しかし、金山東群に属する原石が用いられているからといって、それぞれ、金山に産出するサヌカイト原石を用いていると結論するのは早計である。というのは、淡路の岩屋原産地および和泉・岸和田原産地からも、金山・五色台地域の白峰、法印谷、国分寺、遼光寺、金山東、金山西の諸群のいくつかの原石と極めてよく似た原石を産出しているからである。したがって、今のように金山東群に帰属される原材から作られた遺物が得られた場合、この遺

物の石材産地は帰属された原石群の金山原産地の他に岩屋原産地および和泉・岸和田原産地からの原材である可能性をも考慮しなければならない。これら三地域の原産地のうちのどちらの産地の原石を使用したかの判定は、一つの遺跡より出土した多数の遺物を分析して遺物が岩屋原産地および和泉・岸和田原産地に帰属される頻度を求めて、この頻度分布と表17、18に示した岩屋原産地および和泉・岸和田原産地のサヌカイト原石の分類結果の頻度分布とを比較して行なう。すなわち、これらの遺物が、もし岩屋原産地および和泉・岸和田原産地から原材を採取して作られたものならば、分析の結果は、表17、18に近い頻度分布で、各原石群が現われるはずである。鬼塚遺跡の産地分析の結果を見ると、二上山群に帰属された遺物は134点で、金山東群に帰属された遺物が7点で、本遺跡から、二上山、金山東の両群を除くと岩屋原産地および和泉・岸和田原産地を構成する組成の遺物が見られないばかりか、両原産地に多数みられる岩屋第一群とか和泉群の組成の遺物が一点もみられない。このことは、鬼塚遺跡の遺物が岩屋原産地および和泉・岸和田原産地から供給された可能性が考えられないと言うことを示している。したがって、鬼塚遺跡出土の二上山群の原材は二上山原産地よりの原石で、金山東群の原石は金山原産地より伝播した原石であると判定される。金山産原石の伝播は本遺跡が金山原産地地方の情報を得ていたという傍証になる結果で、この使用頻度が高いほど、金山産原石を使用する地域との交流が活発であると言えるであろう。本遺跡の縄文時代晩期の各時期における二上山産原石と金山産原石の使用頻度をみると、滋賀里IV式土器と併行する時期では、二上山産原石の使用頻度は約92%で、金山産原石の使用頻度は約8%である。滋賀里V式土器併行期では、二上山産は約98%、金山産は約3%の使用頻度を示す。また、滋賀里IV～V式土器の期間の遺物では、二上山産は96%で金山産が4%の使用頻度を示し、この結果は滋賀里IVとVの時期の結果の間にに入る。このことは、滋賀里IVおよびV式で得られた結果が遺跡の性格を比較的正確に反映していると言えるのではないか。本遺跡において滋賀里IVの時期の方が滋賀里Vの時期より金山産原石の使用頻度は高くなっているがその差は僅かである。今後、多くの遺跡について、本遺跡で行われた様に無作意に選択された多数の試料から、各原産地の原石使用頻度を定量的にもとめることは、交易とか交流を定量的に考察する際の貴重な資料を考古学の分野に与えるであろう。

参考文献

- 1) 薫科哲男・東村武信 (1975)、蛍光X線分析法によるサヌカイト石器の原産地推定 (II)。考古学と自然科学、8:61-69
- 2) 薫科哲男・東村武信・鎌木義昌 (1977) (1978)、蛍光X線分析法によるサヌカイト石器の原産地推定 (III)。(IV)。考古学と自然科学、10, 11:53-81;33-47
- 3) 薫科哲男・東村武信 (1983)、石器原材の産地分析。考古学と自然科学、16:59-89
- 4) 東村武信 (1976)、産地推定における統計的手法。考古学と自然科学、9:77-90
- 5) 東村武信 (1980)、考古学と物理化学。学生社



- 1. 下呂地域 2. 二上山地域 3. 岩屋地域 4. 淡路島中部地域
- 5. 金山・五色台地域 6. 冠山地域 7. 多久地域 8. 老松山・寺山地域
- 9. 福井地域 10. 牟田地域 11. 大串地域 12. 亀岳地域 13. 甲山
- 14. 馬ノ山 15. 豊島 16. 小豆島 17. 屋島 18. 紫雲山
- 19. 皿ヶ峰地域 20. 阿蘇 21. 西有田 22. 川棚 23. 崎針尾
- 24. 和泉・岸和田 25. 梅原

●：は石器原料として良質と考えられる産地

▲：はあまり良質と考えられない産地

第64図 サヌカイトの原产地



- 法印谷群
- ★ 白峰群
- ▲ 国分寺群
- △ 蓮光寺群
- 金山西群
- 金山東群
- 五色台群 (ガラス質安山岩)

第65図 金山・五色台地域のサヌカイト、ガラス質安山岩の原産地

表16 各サヌカイトの原産地における原石群の元素比の平均値と標準偏差値

| 原产地 原石群名 | 分析 個数 | K/Ca $\bar{X} \pm \sigma$ | Tl/Ca $\bar{X} \pm \sigma$ | Fe/Sr $\bar{X} \pm \sigma$ | Rb/Sr $\bar{X} \pm \sigma$ | Y/Sr $\bar{X} \pm \sigma$ | Zr/Sr $\bar{X} \pm \sigma$ | Nb/Sr $\bar{X} \pm \sigma$ |
|----------------|---|------------------------------|-------------------------------|--|--|--|--|--|
| 岐阜県 下呂 | 56 | 1.475±0.041 | 0.248±0.010 | 0.745±0.011 | 0.283±0.005 | 0.029±0.005 | 0.442±0.010 | 0.040±0.008 |
| 奈良県 二上山 | 57 | 0.243±0.009 | 0.227±0.010 | 4.389±0.145 | 0.212±0.008 | 0.055±0.010 | 0.582±0.016 | 0.180±0.010 |
| 大阪府 和泉 | 15 | 0.433±0.011 | 0.337±0.011 | 3.741±0.074 | 0.299±0.007 | 0.075±0.010 | 0.659±0.007 | |
| 兵庫県 岩屋第一 第二 | 17 19 | 0.576±0.018 0.482±0.017 | 0.249±0.009 0.269±0.007 | 3.559±0.096 3.399±0.070 | 0.369±0.006 0.337±0.007 | 0.056±0.010 0.044±0.008 | 0.800±0.023 1.038±0.023 | |
| 香川県 | 五色台 白色 白色 白色 白色 金山 金山 | 国分寺 蓮光寺 白峰 印谷 | 32 20 57 34 | 0.408±0.016 0.418±0.013 0.486±0.015 0.349±0.013 | 0.259±0.008 0.255±0.009 0.267±0.007 0.244±0.009 | 3.558±0.061 3.541±0.060 3.349±0.070 4.590±0.121 | 0.304±0.009 0.303±0.007 0.339±0.009 0.283±0.011 | 0.040±0.011 0.043±0.013 0.041±0.012 0.066±0.013 |
| | 金山 | 西 | 34 | 0.367±0.014 | 0.223±0.009 | 4.691±0.124 | 0.291±0.010 | 0.064±0.008 |
| | 金山 | 東 | 37 | 0.437±0.016 | 0.230±0.006 | 4.496±0.050 | 0.320±0.012 | 0.064±0.009 |
| | *五色台 | | 57 | 0.785±0.031 | 0.129±0.008 | 2.015±0.052 | 0.495±0.014 | |
| | 広島県 冠山 | 高 冠 山 | 58 38 34 | 0.564±0.023 0.266±0.016 1.067±0.114 | 0.534±0.020 0.385±0.033 0.523±0.034 | 2.940±0.068 1.497±0.043 2.018±0.066 | 0.188±0.006 0.047±0.005 0.259±0.007 | 0.025±0.010 0.004±0.007 0.019±0.007 |
| | 佐賀県 多久 | 第一 第二 第三 | 53 23 8 | 0.734±0.045 0.726±0.051 0.811±0.040 | 0.417±0.011 0.420±0.018 0.369±0.013 | 4.696±0.194 5.235±0.372 5.270±0.200 | 0.503±0.026 0.531±0.045 0.635±0.016 | 0.051±0.010 0.061±0.017 0.069±0.015 |
| | 佐賀県 老松 | 山 寺 山 有田 | 26 22 17 | 0.624±0.029 0.546±0.022 0.387±0.017 | 0.320±0.011 0.319±0.008 0.352±0.006 | 5.255±0.137 5.525±0.101 6.728±0.154 | 0.538±0.027 0.484±0.014 0.306±0.014 | 0.051±0.010 0.051±0.012 0.172±0.384 |
| 長崎県 | 大龟 牟田 | 串 番 第一 第二 | 13 17 29 13 | 0.943±0.034 0.976±0.038 0.697±0.086 0.531±0.044 | 0.142±0.006 0.157±0.007 0.375±0.017 0.354±0.018 | 1.674±0.014 1.675±0.017 4.617±0.151 7.530±0.387 | 0.246±0.004 0.244±0.004 0.824±0.119 1.068±0.091 | 0.023±0.006 0.017±0.006 0.215±0.028 0.334±0.034 |
| | 川福井 | 第一 第二 | 38 15 25 | 0.436±0.017 0.563±0.013 0.460±0.010 | 0.310±0.006 0.344±0.009 0.334±0.008 | 4.190±0.089 7.578±0.141 7.106±0.100 | 0.219±0.007 1.163±0.032 0.916±0.018 | 0.061±0.007 0.356±0.013 0.286±0.010 |
| | 崎針尾 | 第一 第二 | 45 12 | 0.337±0.026 0.553±0.110 | 0.255±0.009 0.407±0.028 | 4.037±0.123 5.299±0.672 | 0.171±0.012 0.340±0.040 | 0.053±0.007 0.079±0.010 |
| | 熊本県 阿賀 | | 9 | 0.889±0.070 | 0.559±0.031 | 2.693±0.164 | 0.294±0.013 | 0.093±0.008 |
| | | | | | | | | 0.996±0.038 |
| | | | | | | | | |
| | | | | | | | | |

*: ガラス質安山岩

 \bar{X} : 平均値 σ : 標準偏差値

表17 岩屋原産地からのサヌカイト原石66個の分類結果

| 群名 | 個数 | 百分率 | 岩屋原産地に関する他群名 |
|-------|-----|-----|------------------|
| 岩屋第一群 | 20個 | 30% | 淡路島、岸和田、和歌山に出現 |
| 第二群 | 22 | 33 | 白峰群に一致 |
| 第三群 | 6 | 9 | 法印谷群に一致 |
| タ | 5 | 8 | 国分寺群に一致 |
| タ | 4 | 6 | 蓮光寺群に一致 |
| タ | 3 | 5 | 金山東群に一致 |
| タ | 2 | 3 | 和泉群に一致 |
| タ | 4 | 6 | 不明（どこの原石群にも属さない） |

表18 和泉・岸和田原産地からのサヌカイト原石72個の分類結果

| 群名 | 個数 | 百分率 | 岩屋原産地に関する他群名 |
|-------|-----|-----|------------------|
| 岩屋第一群 | 12個 | 17% | 淡路島、岸和田、和歌山に出現 |
| 和 泉 群 | 9 | 13 | タ タ タ |
| 岩屋第二群 | 6 | 8 | 白峰群に一致 |
| | 4 | 6 | 二上山群に一致 |
| | 1 | 1 | 法印谷群に一致 |
| | 1 | 1 | 金山東群に一致 |
| | 40 | 56 | 不明（どこの原石群にも属さない） |

表19 和歌山市梅原原産地からのサヌカイト原石21個の分類結果

| 群名 | 個数 | 百分率 | 岩屋原産地に関する他群名 |
|-------|-----|-----|------------------|
| 和 泉 群 | 10個 | 48% | 淡路島、岸和田、和歌山に出現 |
| 岩屋第一群 | 1 | 5 | タ タ タ |
| | 10 | 48 | 不明（どこの原石群にも属さない） |

表20-1 鬼塚遺跡出土のサヌカイト製石器、石片分析結果

| 試料番号 | 元素分析結果 | | | | | | | |
|-------|--------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
| | K/Ca | Ti/Ca | Rb/Sr | Zr/Sr | Fe/Sr | Y/Sr | Mn/Sr | Nb/Sr |
| 17316 | 0.254 | 0.215 | 0.217 | 0.565 | 4.398 | 0.071 | 0.051 | 0.190 |
| 17317 | 0.246 | 0.218 | 0.211 | 0.576 | 4.488 | 0.084 | 0.051 | 0.026 |
| 17318 | 0.243 | 0.217 | 0.213 | 0.614 | 4.562 | 0.073 | 0.078 | 0.052 |
| 17319 | 0.241 | 0.219 | 0.207 | 0.553 | 4.559 | 0.110 | 0.059 | 0.019 |
| 17320 | 0.235 | 0.219 | 0.225 | 0.561 | 4.250 | 0.079 | 0.061 | 0.014 |
| 17321 | 0.246 | 0.218 | 0.218 | 0.598 | 4.489 | 0.072 | 0.062 | 0.012 |
| 17322 | 0.236 | 0.214 | 0.223 | 0.586 | 4.499 | 0.072 | 0.063 | 0.000 |
| 17323 | 0.245 | 0.214 | 0.210 | 0.580 | 4.587 | 0.073 | 0.066 | 0.097 |
| 17324 | 0.239 | 0.220 | 0.202 | 0.570 | 4.528 | 0.078 | 0.061 | 0.038 |
| 17325 | 0.238 | 0.212 | 0.222 | 0.572 | 4.396 | 0.094 | 0.056 | 0.032 |
| 17326 | 0.243 | 0.209 | 0.217 | 0.610 | 4.656 | 0.078 | 0.058 | 0.015 |
| 17327 | 0.241 | 0.218 | 0.224 | 0.613 | 4.575 | 0.071 | 0.060 | 0.025 |
| 17328 | 0.239 | 0.208 | 0.205 | 0.580 | 4.847 | 0.074 | 0.075 | 0.079 |
| 17329 | 0.240 | 0.219 | 0.206 | 0.582 | 4.422 | 0.063 | 0.053 | 0.026 |
| 17330 | 0.242 | 0.213 | 0.206 | 0.558 | 4.735 | 0.086 | 0.074 | 0.006 |
| 17331 | 0.240 | 0.211 | 0.242 | 0.552 | 4.516 | 0.051 | 0.068 | 0.042 |
| 17332 | 0.240 | 0.212 | 0.196 | 0.535 | 4.441 | 0.070 | 0.061 | 0.000 |
| 17333 | 0.239 | 0.214 | 0.198 | 0.596 | 4.617 | 0.055 | 0.067 | 0.000 |
| 17334 | 0.404 | 0.215 | 0.322 | 1.112 | 4.733 | 0.095 | 0.068 | 0.034 |
| 17335 | 0.241 | 0.214 | 0.212 | 0.542 | 4.412 | 0.077 | 0.055 | 0.006 |
| 17336 | 0.324 | 0.216 | 0.209 | 0.553 | 4.749 | 0.065 | 0.058 | 0.016 |
| 17337 | 0.240 | 0.221 | 0.212 | 0.578 | 4.470 | 0.075 | 0.058 | 0.033 |
| 17338 | 0.240 | 0.217 | 0.199 | 0.559 | 4.481 | 0.069 | 0.052 | 0.010 |
| 17339 | 0.242 | 0.217 | 0.217 | 0.600 | 4.487 | 0.072 | 0.053 | 0.026 |
| 17340 | 0.335 | 0.213 | 0.237 | 0.588 | 4.537 | 0.067 | 0.067 | 0.010 |
| 17341 | 0.241 | 0.214 | 0.227 | 0.570 | 4.772 | 0.087 | 0.069 | 0.017 |
| 17342 | 0.237 | 0.217 | 0.218 | 0.592 | 4.826 | 0.083 | 0.066 | 0.034 |
| 17343 | 0.250 | 0.211 | 0.212 | 0.534 | 4.494 | 0.072 | 0.067 | 0.000 |
| 17344 | 0.241 | 0.216 | 0.233 | 0.577 | 4.630 | 0.080 | 0.058 | 0.071 |
| 17345 | 0.241 | 0.217 | 0.217 | 0.580 | 4.353 | 0.049 | 0.054 | 0.004 |
| 17346 | 0.237 | 0.220 | 0.209 | 0.590 | 4.524 | 0.079 | 0.058 | 0.206 |
| 17347 | 0.245 | 0.216 | 0.213 | 0.571 | 4.418 | 0.087 | 0.050 | 0.021 |
| 17348 | 0.240 | 0.218 | 0.212 | 0.561 | 4.379 | 0.065 | 0.045 | 0.027 |
| 17349 | 0.247 | 0.216 | 0.215 | 0.583 | 4.425 | 0.068 | 0.055 | 0.019 |
| 17350 | 0.247 | 0.217 | 0.215 | 0.568 | 4.483 | 0.084 | 0.056 | 0.000 |
| 17351 | 0.242 | 0.219 | 0.206 | 0.568 | 4.453 | 0.072 | 0.048 | 0.000 |
| 17352 | 0.266 | 0.217 | 0.195 | 0.565 | 4.321 | 0.077 | 0.039 | 0.016 |
| 17353 | 0.239 | 0.215 | 0.211 | 0.574 | 4.409 | 0.052 | 0.051 | 0.028 |
| 17354 | 0.240 | 0.216 | 0.213 | 0.575 | 4.355 | 0.094 | 0.048 | 0.000 |
| 17355 | 0.238 | 0.212 | 0.201 | 0.588 | 4.473 | 0.105 | 0.055 | 0.070 |
| 17356 | 0.245 | 0.212 | 0.204 | 0.570 | 4.408 | 0.078 | 0.051 | 0.013 |
| 17357 | 0.243 | 0.215 | 0.181 | 0.595 | 4.219 | 0.069 | 0.052 | 0.021 |
| 17358 | 0.244 | 0.212 | 0.220 | 0.571 | 4.432 | 0.068 | 0.062 | 0.017 |
| 17359 | 0.239 | 0.216 | 0.211 | 0.595 | 4.488 | 0.060 | 0.064 | 0.025 |
| 17360 | 0.244 | 0.217 | 0.217 | 0.536 | 4.337 | 0.061 | 0.064 | 0.024 |
| 17361 | 0.437 | 0.216 | 0.303 | 1.120 | 4.458 | 0.087 | 0.071 | 0.079 |
| 17362 | 0.281 | 0.220 | 0.214 | 0.576 | 4.417 | 0.080 | 0.049 | 0.030 |
| 17363 | 0.247 | 0.217 | 0.229 | 0.587 | 4.638 | 0.105 | 0.070 | 0.000 |
| 17364 | 0.243 | 0.210 | 0.199 | 0.549 | 4.402 | 0.056 | 0.066 | 0.177 |
| 17365 | 0.245 | 0.214 | 0.202 | 0.563 | 4.584 | 0.077 | 0.055 | 0.000 |
| 17366 | 0.248 | 0.213 | 0.254 | 0.566 | 4.652 | 0.054 | 0.070 | 0.016 |
| 17367 | 0.240 | 0.222 | 0.201 | 0.568 | 4.355 | 0.067 | 0.047 | 0.004 |
| 17368 | 0.230 | 0.213 | 0.208 | 0.588 | 4.591 | 0.055 | 0.055 | 0.025 |
| 17369 | 0.246 | 0.217 | 0.213 | 0.566 | 4.344 | 0.075 | 0.048 | 0.008 |
| 17370 | 0.244 | 0.216 | 0.206 | 0.605 | 4.501 | 0.079 | 0.061 | 0.033 |
| 17371 | 0.397 | 0.214 | 0.311 | 1.132 | 4.628 | 0.074 | 0.055 | 0.069 |
| 17372 | 0.245 | 0.215 | 0.207 | 0.568 | 4.390 | 0.073 | 0.049 | 0.040 |

表20-2 鬼塚遺跡出土のサヌカイト製石器、石片分析結果

| 試料番号 | 元素比 | | | | | | | |
|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
| | K/Ca | Ti/Ca | Rb/Sr | Zr/Sr | Fe/Sr | Y/Sr | Mn/Sr | Nb/Sr |
| 17373 | 0.245 | 0.213 | 0.218 | 0.575 | 4.369 | 0.087 | 0.051 | 0.035 |
| 17374 | 0.241 | 0.213 | 0.200 | 0.574 | 4.278 | 0.068 | 0.051 | 0.026 |
| 17375 | 0.242 | 0.219 | 0.205 | 0.582 | 4.360 | 0.066 | 0.044 | 0.016 |
| 17376 | 0.240 | 0.219 | 0.193 | 0.572 | 4.330 | 0.090 | 0.057 | 0.048 |
| 17377 | 0.240 | 0.221 | 0.202 | 0.575 | 4.416 | 0.078 | 0.042 | 0.024 |
| 17378 | 0.406 | 0.220 | 0.316 | 1.130 | 4.527 | 0.100 | 0.063 | 0.021 |
| 17379 | 0.240 | 0.218 | 0.211 | 0.567 | 4.396 | 0.074 | 0.054 | 0.012 |
| 17380 | 0.256 | 0.220 | 0.210 | 0.600 | 4.432 | 0.068 | 0.056 | 0.021 |
| 17381 | 0.236 | 0.213 | 0.219 | 0.573 | 4.301 | 0.073 | 0.065 | 0.019 |
| 17382 | 0.241 | 0.218 | 0.221 | 0.594 | 4.507 | 0.051 | 0.057 | 0.018 |
| 17383 | 0.247 | 0.220 | 0.228 | 0.598 | 4.535 | 0.067 | 0.065 | 0.000 |
| 17384 | 0.245 | 0.219 | 0.219 | 0.591 | 4.521 | 0.064 | 0.051 | 0.014 |
| 17385 | 0.238 | 0.214 | 0.233 | 0.593 | 4.504 | 0.066 | 0.060 | 0.013 |
| 17386 | 0.246 | 0.219 | 0.222 | 0.576 | 4.665 | 0.070 | 0.066 | 0.032 |
| 17387 | 0.242 | 0.211 | 0.219 | 0.562 | 4.855 | 0.055 | 0.073 | 0.018 |
| 17388 | 0.242 | 0.221 | 0.208 | 0.545 | 4.671 | 0.092 | 0.063 | 0.000 |
| 17389 | 0.245 | 0.215 | 0.211 | 0.546 | 4.702 | 0.083 | 0.075 | 0.010 |
| 17390 | 0.232 | 0.221 | 0.199 | 0.597 | 4.284 | 0.071 | 0.062 | 0.021 |
| 17391 | 0.236 | 0.219 | 0.217 | 0.576 | 4.445 | 0.071 | 0.064 | 0.015 |
| 17392 | 0.242 | 0.218 | 0.214 | 0.587 | 4.492 | 0.061 | 0.060 | 0.010 |
| 17393 | 0.263 | 0.216 | 0.216 | 0.604 | 4.507 | 0.072 | 0.068 | 0.015 |
| 17394 | 0.377 | 0.225 | 0.226 | 0.588 | 4.343 | 0.067 | 0.053 | 0.084 |
| 17395 | 0.245 | 0.219 | 0.217 | 0.572 | 4.457 | 0.105 | 0.060 | 0.025 |
| 17396 | 0.245 | 0.217 | 0.220 | 0.572 | 4.473 | 0.051 | 0.044 | 0.044 |
| 17397 | 0.243 | 0.219 | 0.214 | 0.569 | 4.432 | 0.077 | 0.064 | 0.010 |
| 17398 | 0.295 | 0.215 | 0.224 | 0.562 | 4.593 | 0.070 | 0.058 | 0.035 |
| 17399 | 0.239 | 0.218 | 0.210 | 0.561 | 4.451 | 0.084 | 0.074 | 0.033 |
| 17400 | 0.247 | 0.211 | 0.203 | 0.576 | 4.669 | 0.066 | 0.060 | 0.016 |
| 17401 | 0.252 | 0.217 | 0.214 | 0.579 | 4.571 | 0.072 | 0.069 | 0.074 |
| 17402 | 0.240 | 0.217 | 0.197 | 0.592 | 4.466 | 0.075 | 0.063 | 0.014 |
| 17403 | 0.238 | 0.221 | 0.206 | 0.581 | 4.348 | 0.079 | 0.058 | 0.016 |
| 17404 | 0.243 | 0.216 | 0.204 | 0.592 | 4.379 | 0.080 | 0.060 | 0.014 |
| 17405 | 0.239 | 0.220 | 0.206 | 0.592 | 4.298 | 0.074 | 0.061 | 0.070 |
| 17406 | 0.241 | 0.222 | 0.203 | 0.589 | 4.325 | 0.068 | 0.061 | 0.011 |
| 17407 | 0.407 | 0.218 | 0.316 | 1.138 | 4.498 | 0.082 | 0.071 | 0.000 |
| 17408 | 0.239 | 0.221 | 0.203 | 0.587 | 4.188 | 0.064 | 0.035 | 0.023 |
| 17409 | 0.246 | 0.212 | 0.204 | 0.582 | 4.454 | 0.082 | 0.054 | 0.018 |
| 17410 | 0.242 | 0.218 | 0.214 | 0.606 | 4.363 | 0.073 | 0.054 | 0.017 |
| 17411 | 0.240 | 0.214 | 0.215 | 0.588 | 4.502 | 0.063 | 0.062 | 0.016 |
| 17412 | 0.239 | 0.217 | 0.204 | 0.569 | 4.355 | 0.064 | 0.062 | 0.030 |
| 17413 | 0.270 | 0.220 | 0.219 | 0.584 | 4.363 | 0.055 | 0.061 | 0.000 |
| 17414 | 0.405 | 0.218 | 0.304 | 1.117 | 4.494 | 0.079 | 0.074 | 0.000 |
| 17415 | 0.352 | 0.217 | 0.220 | 0.577 | 4.476 | 0.074 | 0.063 | 0.050 |
| 17416 | 0.263 | 0.213 | 0.223 | 0.596 | 4.435 | 0.078 | 0.042 | 0.202 |
| 17417 | 0.242 | 0.214 | 0.205 | 0.563 | 4.525 | 0.086 | 0.059 | 0.007 |
| 17418 | 0.242 | 0.215 | 0.205 | 0.575 | 4.361 | 0.079 | 0.060 | 0.335 |
| 17419 | 0.242 | 0.218 | 0.216 | 0.589 | 4.443 | 0.069 | 0.066 | 0.098 |
| 17420 | 0.243 | 0.218 | 0.201 | 0.566 | 4.450 | 0.096 | 0.062 | 0.005 |
| 17421 | 0.244 | 0.220 | 0.263 | 0.550 | 4.575 | 0.072 | 0.067 | 0.017 |
| 17422 | 0.246 | 0.218 | 0.197 | 0.567 | 4.512 | 0.078 | 0.059 | 0.043 |
| 17423 | 0.253 | 0.217 | 0.222 | 0.579 | 4.464 | 0.082 | 0.069 | 0.010 |
| 17424 | 0.241 | 0.216 | 0.217 | 0.570 | 4.534 | 0.064 | 0.053 | 0.025 |
| 17425 | 0.245 | 0.218 | 0.227 | 0.594 | 4.535 | 0.074 | 0.060 | 0.000 |
| 17426 | 0.243 | 0.217 | 0.207 | 0.561 | 4.362 | 0.119 | 0.052 | 0.019 |
| 17427 | 0.412 | 0.219 | 0.320 | 1.148 | 4.677 | 0.082 | 0.070 | 0.038 |
| 17428 | 0.242 | 0.215 | 0.206 | 0.592 | 4.519 | 0.066 | 0.067 | 0.005 |
| 17429 | 0.239 | 0.220 | 0.208 | 0.592 | 4.419 | 0.092 | 0.059 | 0.025 |

表20-3 鬼塚遺跡出土のサヌカイト製石器、石片分析結果

| 試料番号 | 元素比 | | | | | | | |
|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
| | K/Ca | Ti/Ca | Rb/Sr | Zr/Sr | Fe/Sr | Y/Sr | Mn/Sr | Nb/Sr |
| 17430 | 0.243 | 0.217 | 0.204 | 0.568 | 4.346 | 0.064 | 0.054 | 0.018 |
| 17431 | 0.260 | 0.215 | 0.212 | 0.594 | 4.371 | 0.065 | 0.055 | 0.008 |
| 17432 | 0.245 | 0.222 | 0.213 | 0.568 | 4.413 | 0.063 | 0.071 | 0.017 |
| 17433 | 0.241 | 0.218 | 0.213 | 0.587 | 4.525 | 0.062 | 0.040 | 0.019 |
| 17434 | 0.237 | 0.220 | 0.195 | 0.563 | 4.389 | 0.073 | 0.056 | 0.022 |
| 17435 | 0.238 | 0.214 | 0.212 | 0.564 | 4.369 | 0.060 | 0.064 | 0.089 |
| 17436 | 0.243 | 0.217 | 0.195 | 0.566 | 4.328 | 0.072 | 0.051 | 0.070 |
| 17437 | 0.272 | 0.192 | 0.231 | 0.589 | 4.819 | 0.061 | 0.048 | 0.024 |
| 17438 | 0.244 | 0.226 | 0.205 | 0.566 | 4.511 | 0.075 | 0.066 | 0.026 |
| 17439 | 0.245 | 0.213 | 0.221 | 0.578 | 4.673 | 0.098 | 0.057 | 0.017 |
| 17440 | 0.237 | 0.218 | 0.222 | 0.562 | 4.471 | 0.093 | 0.063 | 0.005 |
| 17441 | 0.243 | 0.225 | 0.207 | 0.558 | 4.285 | 0.082 | 0.054 | 0.030 |
| 17442 | 0.242 | 0.219 | 0.211 | 0.561 | 4.489 | 0.090 | 0.063 | 0.042 |
| 17443 | 0.239 | 0.218 | 0.206 | 0.571 | 4.527 | 0.089 | 0.065 | 0.007 |
| 17444 | 0.248 | 0.212 | 0.206 | 0.553 | 4.584 | 0.064 | 0.066 | 0.000 |
| 17445 | 0.307 | 0.220 | 0.203 | 0.575 | 4.457 | 0.079 | 0.058 | 0.010 |
| 17446 | 0.241 | 0.214 | 0.199 | 0.572 | 4.536 | 0.059 | 0.060 | 0.160 |
| 17447 | 0.239 | 0.220 | 0.224 | 0.580 | 4.587 | 0.068 | 0.073 | 0.000 |
| 17448 | 0.241 | 0.218 | 0.216 | 0.549 | 4.564 | 0.045 | 0.045 | 0.000 |
| 17449 | 0.240 | 0.216 | 0.212 | 0.560 | 4.603 | 0.075 | 0.060 | 0.011 |
| 17450 | 0.242 | 0.216 | 0.222 | 0.577 | 4.589 | 0.066 | 0.071 | 0.020 |
| 17451 | 0.240 | 0.220 | 0.202 | 0.592 | 4.360 | 0.050 | 0.053 | 0.050 |
| 17452 | 0.239 | 0.222 | 0.206 | 0.585 | 4.321 | 0.090 | 0.059 | 0.000 |
| 17453 | 0.244 | 0.214 | 0.206 | 0.570 | 4.494 | 0.060 | 0.058 | 0.025 |
| 17454 | 0.243 | 0.220 | 0.206 | 0.605 | 4.412 | 0.066 | 0.061 | 0.138 |
| 17455 | 0.251 | 0.216 | 0.211 | 0.571 | 4.658 | 0.073 | 0.060 | 0.013 |
| 17456 | 0.242 | 0.223 | 0.214 | 0.587 | 4.573 | 0.087 | 0.060 | 0.115 |
| 17457 | 0.242 | 0.220 | 0.204 | 0.590 | 4.648 | 0.092 | 0.057 | 0.094 |
| 17458 | 0.244 | 0.219 | 0.211 | 0.583 | 4.565 | 0.066 | 0.063 | 0.147 |

表21-1 鬼塚遺跡出土の黒曜石、サヌカイト製石器、石片の原産地推定結果

| 試料番号 | 名稱・位置・層位 | 時 代(伴出土器) | 原 石 産 地(確 率) | 判 定 | 遺物品名 | 備 考 |
|-------|-------------------------|--------------|-------------------------|-----|--------------------|-----|
| 17316 | No 1-OZ-2-溝33-下部 | 縄文時代晚期(滋賀里Ⅳ) | 二上山(43%) | 二上山 | 剝 片 | |
| 17317 | 2- * - * | * | * (18%) | * | * | |
| 17318 | 3- * - * | * | * (10%) | * | * | |
| 17319 | 4- * - 溝33 | * | * (D ² =39) | * | * | |
| 17320 | 5- * - * | * | * (1%) | * | * | |
| 17321 | 6- * - * | * | * (38%) | * | * | |
| 17322 | 7- * - 溝33-下部 | * | * (16%) | * | * | |
| 17323 | 8- * - 溝33 | * | * (39%) | * | * | |
| 17324 | 9- * - * | * | * (22%) | * | * | |
| 17325 | 10- * - 溝33-下部 | * | * (0.4%) | * | * | |
| 17326 | 11- * - 溝33 | * | * (2%) | * | * | |
| 17327 | 12- * - * | * | * (7%) | * | * | |
| 17328 | 13- * - * | * | * (1%) | * | * | |
| 17329 | 14- * - 溝33-下部 | * | * (94%) | * | * | |
| 17330 | 15- * - * | * | * (1%) | * | * | |
| 17331 | 16- * - 溝33 | * | * (1%) | * | * | |
| 17332 | 17- * - * | * | * (3%) | * | * | |
| 17333 | 18- * - 溝33-下部 | * | * (20%) | * | * | |
| 17334 | 19- * - 溝33 | * | 金山東(0.1%) | 金 山 | * | |
| 17335 | 20- * - * | * | 二上山(6%) | 二上山 | * | |
| 17336 | 21- * - * | * | * (D ² =114) | * | * | |
| 17337 | 22- * - 溝33-下部 | * | * (58%) | * | * | |
| 17338 | 23- * - * | * | * (34%) | * | * | |
| 17339 | 24- * - * | * | * (34%) | * | * | |
| 17340 | 25- * - 溝33 | * | * (D ² =130) | * | * | |
| 17341 | 26- * - * | * | * (0.2%) | * | * | |
| 17342 | 27- * - * | * | * (0.4%) | * | * | |
| 17343 | 28- * - 溝33-下部 | * | * (8%) | * | * | |
| 17344 | 30- * - * | * | * (1%) | * | * | |
| 17345 | 31- * - * | * | * (83%) | * | ビニール袋等 に詰められた標本 | |
| 17346 | 32- * - 溝33 | * | * (26%) | * | * | |
| 17347 | 33- * - * | * | * (10%) | * | * | |
| 17348 | 34- * - 黒灰色粘土層 シルト層 | * | * (67%) | * | * | |
| 17349 | 35- * - 溝33-下部 | * | * (78%) | * | * | |
| 17350 | 36- * - 溝33 | * | * (14%) | * | * | |
| 17351 | 37- * - * | * | * (64%) | * | * | |
| 17352 | 38- * - 溝33-下部 | * | * (2%) | * | * | |
| 17353 | 39- * - 溝33 | * | * (91%) | * | * | |
| 17354 | 40- * - 溝33-下部 | * | * (2%) | * | * | |
| 17355 | 41- * - 溝33 | * | * (0.1%) | * | * | |
| 17356 | 42- * - 黒灰色粘土 (滋賀里Ⅳ) | * | * (27%) | * | 剝片・碎片など | |
| 17357 | 43- * - * | * | * (1%) | * | * | |
| 17358 | 44- * - * | * | * (43%) | * | * | |
| 17359 | 45- * - * | * | * (81%) | * | * | |
| 17360 | 46- * - * | * | * (12%) | * | * | |
| 17361 | 47- * - * | * | 金山東(13%)、金山西(0.1%) | 金 山 | * | |
| 17362 | 48- * - * | * | 二上山(0.2%) | 二上山 | * | |
| 17363 | 50- * - * | * | * (D ² =40) | * | * | |
| 17364 | 52- * - * | * | * (27%) | * | * | |
| 17365 | 54- * - * | * | * (14%) | * | * | |
| 17366 | 55- * - * | * | * (D ² =34) | * | * | |
| 17367 | 56- * - * | * | * (70%) | * | * | |
| 17368 | 57- * - * | * | * (47%) | * | * | |
| 17369 | 59- * - * | * | * (42%) | * | 別と分類・既剖面の ある調査坑 | |

表21-2 鬼塚遺跡出土の黒曜石、サヌカイト製石器、石片の原産地推定結果

| 試料番号 | 名称・位置・層位 | 時代(伴出土器) | 原石産地(確率) | 判定 | 遺物品名 | 備考 |
|-------|--------------------------|---------------|-----------------------|-------|-----------------------|----|
| 17370 | No60-OZ-2・黒灰色粘土 | 绳文時代後期(滋賀里IV) | 二上山(12%) | 二上山 | 折り曲げ・高周波の 加工痕跡を有する | |
| 17371 | 61・タ・タ | * | 金山東(7%)、金山西(1%) | 金山 | タ | |
| 17372 | 63・タ・タ | * | 二上山(56%) | 二上山 | | |
| 17373 | 64・タ・タ | タ | タ(5%) | タ | タ | |
| 17374 | 66・タ・タ | タ | タ(43%) | タ | ビーストスクエア 上から鉛錠跡を有す | |
| 17375 | 67・タ・タ | タ | タ(90%) | タ | タ | |
| 17376 | 70・タ・タ | タ | タ(3%) | タ | タ | |
| 17377 | 71・タ・タ | タ | タ(38%) | タ | タ | |
| 17378 | 73・タ・タ | タ | 金山東(3%) | 金山 | 削面で使用された を有す | |
| 17379 | 73・タ・タ | タ | 二上山(50%) | 二上山 | タ | |
| 17380 | 74・タ・タ | タ | タ(40%) | タ | タ | |
| 17381 | 74・タ・タ | タ | タ(13%) | タ | タ | |
| 17382 | 77・タ・タ | タ | タ(72%) | タ | 細部調整剥片 | |
| 17383 | 78・タ・タ | タ | タ(22%) | タ | タ | |
| 17384 | 79・タ・黒灰色砂質土 | タ | タ(73%) | タ | | |
| 17385 | 82・タ・黒灰色粘土 | タ | タ(4%) | タ | 小型の削器 | |
| 17386 | 83・タ・タ | タ | タ(25%) | タ | タ | |
| 17387 | 90・タ・タ | タ | タ(14%) | タ | 剝片 | |
| 17388 | 91・タ・タ | タ | タ(0.2%) | タ | タ | |
| 17389 | 92・タ・タ | タ | タ(2%) | タ | タ | |
| 17390 | 94・タ・タ | タ | タ(38%) | タ | タ | |
| 17391 | 96・タ・タ | タ | タ(50%) | タ | タ | |
| 17392 | 99・タ・タ | タ | タ(93%) | タ | タ | |
| 17393 | 100・タ・タ | タ | タ(6%) | タ | タ | |
| 17394 | 101・タ・タ | タ | | 不明 | タ | |
| 17395 | 102・タ・タ | タ | 二上山(0.1%) | 二上山 | タ | |
| 17396 | 103・タ・タ | タ | タ(93%) | タ | タ | |
| 17397 | 104・タ・タ | タ | タ(39%) | タ | タ | |
| 17398 | 105・タ・タ | タ | タ(D ² =42) | タ | タ | |
| 17399 | 106・タ・タ | タ | タ(10%) | タ | タ | |
| 17400 | 107・タ・タ | タ | タ(22%) | タ | タ | |
| 17401 | 108・タ・タ | タ | タ(41%) | タ | タ | |
| 17402 | 109・タ・タ | タ | タ(23%) | タ | タ | |
| 17403 | 110・タ・タ | タ | タ(43%) | タ | タ | |
| 17404 | 111・タ・タ | タ | タ(27%) | タ | タ | |
| 17405 | 160・タ・タ | タ | タ(58%) | タ | タ | |
| 17406 | 161・タ・タ | タ | タ(84%) | タ | タ | |
| 17407 | 162・タ・タ | タ | 金山東(23%)、金山西(0.1%) | 金山 | タ | |
| 17408 | 163・タ・黒灰色砂質土 (滋賀里V~V) | 二上山(65%) | 二上山 | 剥離面あり | | |
| 17409 | 164・タ・タ | タ | タ(16%) | タ | タ | |
| 17410 | 165・タ・タ | タ | タ(35%) | タ | 剝片・碎片など | |
| 17411 | 166・タ・タ | タ | タ(75%) | タ | タ | |
| 17412 | 167・タ・タ | タ | タ(76%) | タ | タ | |
| 17413 | 168・タ・タ | タ | タ(16%) | タ | 削器・搔器 | |
| 17414 | 169・タ・タ | タ | 金山東(42%)、金山西(1%) | 金山 | タ | |
| 17415 | 170・タ・タ | タ | | 不明 | 小形剝片・砂質粘土 混入 | |
| 17416 | 171・タ・タ | タ | 二上山(3%) | 二上山 | タ | |
| 17417 | 172・タ・タ | タ | タ(6%) | タ | 剝片 | |
| 17418 | 173・タ・タ | タ | タ(33%) | タ | タ | |
| 17419 | 174・タ・タ | タ | タ(73%) | タ | タ | |
| 17420 | 175・タ・タ | タ | タ(1%) | タ | タ | |
| 17421 | 176・タ・タ | タ | タ(D ² =60) | タ | タ | |
| 17422 | 178・タ・タ | タ | タ(13%) | タ | タ | |
| 17423 | 180・タ・タ | タ | タ(10%) | タ | タ | |

表21-3 鬼塚遺跡出土の黒曜石、サヌカイト製石器、石片の原産地推定結果

| 試料番号 | 名稱・位置・層位 | 時 代 (伴出土器) | 原 石 産 地 (確 率) | 判 定 | 遺 物 品 名 | 備 考 |
|-------|------------------|----------------|---------------|---------------------|----------------------|-----|
| 17424 | No.8-OZ-2-黒灰色砂質土 | 縄文時代後期(滋賀県Ⅳ~V) | 二上山 (72%) | 二上山 | 剝 片 | |
| 17425 | 182- | タ | + | + | (12%) | |
| 17426 | 183- | タ | + | + | (D ² =45) | |
| 17427 | 184- | タ | + | 金山東 (3%)、金山西 (0.1%) | 金 山 | |
| 17428 | 186- | タ | + | 二上山 (59%) | 二上山 | |
| 17429 | 187- | タ | + | + | (5%) | + |
| 17430 | 189- | タ | + | + | (79%) | + |
| 17431 | 190- | タ | + | + | (35%) | + |
| 17432 | 191- | タ | + | + | (95%) | + |
| 17433 | 192- | タ | + | + | (89%) | + |
| 17434 | 193- | タ | + | + | (21%) | + |
| 17435 | 195- | タ | + | + | (65%) | + |
| 17436 | 196- | タ | + | + | (25%) | + |
| 17437 | 197- | タ | + | + | (D ² =65) | + |
| 17438 | 198- | タ | + | + | (37%) | + |
| 17439 | 199- | タ | + | + | (0.1%) | + |
| 17440 | 200- | タ | + | + | (1%) | 剝 片 |
| 17441 | 201- | タ | + | + | (15%) | + |
| 17442 | 226- | タ | + | + | (4%) | + |
| 17443 | 227- | タ | + | + | (5%) | + |
| 17444 | 228- | タ | + | + | (41%) | + |
| 17445 | 229- | タ | + | + | (D ² =72) | + |
| 17446 | 230- | タ | + | + | (57%) | + |
| 17447 | 232- | タ | + | + | (35%) | + |
| 17448 | 233- | タ | + | + | (59%) | + |
| 17449 | 234- | タ | + | + | (23%) | + |
| 17450 | 235- | タ | + | + | (48%) | + |
| 17451 | 236- | タ | + | + | (83%) | + |
| 17452 | 237- | タ | + | + | (9%) | + |
| 17453 | 238- | タ | + | + | (87%) | + |
| 17454 | 239- | タ | + | + | (61%) | + |
| 17455 | 240- | タ | + | + | (21%) | + |
| 17456 | 241- | タ | + | + | (6%) | + |
| 17457 | 無番-1 | | + | + | (1%) | + |
| 17458 | タ-2 | | + | + | (75%) | + |

VII 考 察

1. 遺構について

イ. 調査地点における遺構の変遷と集落の推移

今回の調査で明らかになった各時代の遺構については、本文中で述べた。ここでは、調査地全域における遺構の変遷と、本遺跡における集落の推移について平成7年度現在20次を数える最近の調査成果も一部踏まえて、古い時期から順に述べたい。今回の調査までの位置については第2図、各調査出土遺物の時期などは表22を参照していただきたい。

縄文時代中期後半

今回の調査以外は、遺物が出土していない。これより古い時期の遺物として第13次調査（調査地点の北東400m・標高32m付近）で早期の押型文土器が少量出土しているが、遺構は検出していない。遺物の出土状況から、第I調査区の北側に小規模な集落が存在したと考えられる。

縄文時代後期中頃

遺物は、第I・II調査区で出土しているが、遺構は第I調査区で検出した溝と土壙があるだけである。今までこの時期の遺物・遺構とともに、検出されていない。

遺物出土状況から見て、第I調査区とその北側付近に小規模な集落が存在したと考えられる。

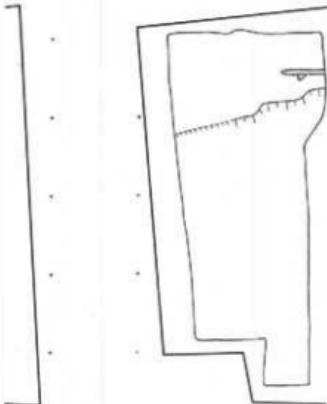
縄文時代後期末

第4次調査（東300m・標高20m付近）で宮壇式に属す遺物が出土している。他の調査地点では出土していない。この付近に、小規模な集落が存在したものと考えられる。

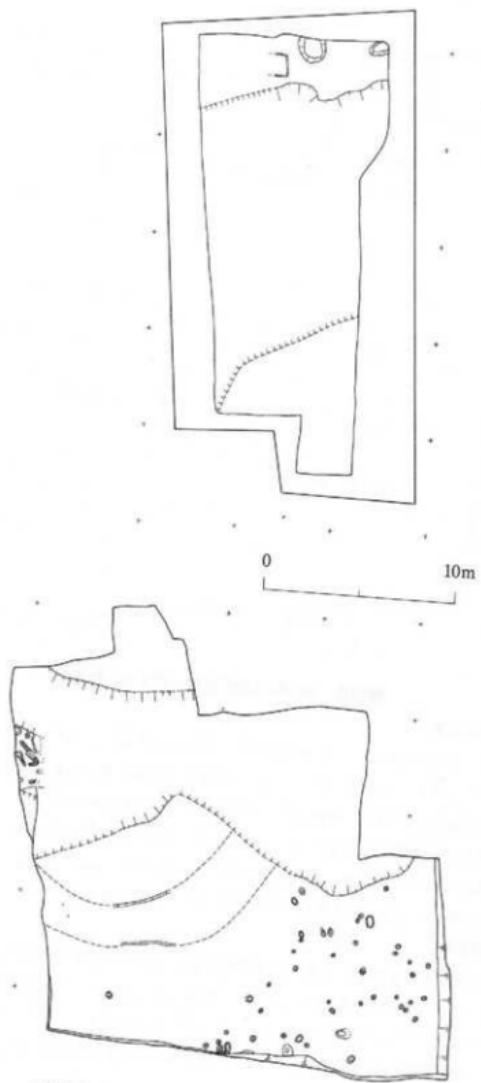
縄文時代晚期中頃～後半

晩期前半の遺物は現在のところ出土していない。中頃から後半（滋賀里Ⅲb～V式前半併行）の遺物は、地点により若干の異なりはあるものの第1・3・4・6次調査と今回の調査で出土している。標高15～20m付近でかなり広く出土している。

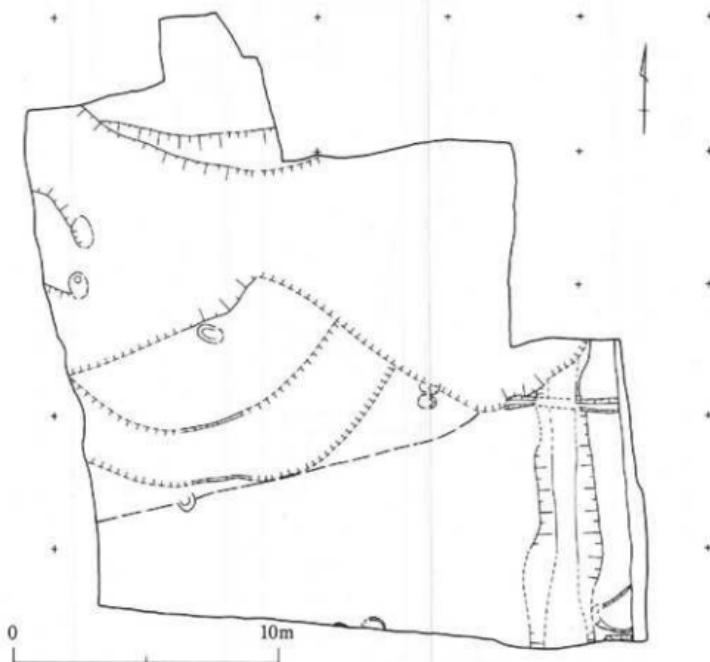
遺構が検出されているのは、今回の調査だけである。本文で述べたように、時期により遺構の性格や密度は異なるものの滋賀里Ⅲb・Ⅳ・V式前半併行の遺構が検出されている。本調査地が集落の中心になる時期は、堅穴住居の柱穴と考えられるピットや再葬墓などが検出された滋賀里Ⅲb併行期である。滋賀里Ⅳ・V式前半併行の時期は、遺構が少なく集落の外れに当たる地と考えられる。この時期の集落の中心は、第II調査区およびその南ないし西側に存



第66図 縄文時代後期遺構（縄文V）位置 在するすると推定できる。



第67図 純文時代晩期遺構（縄文IV）位置図



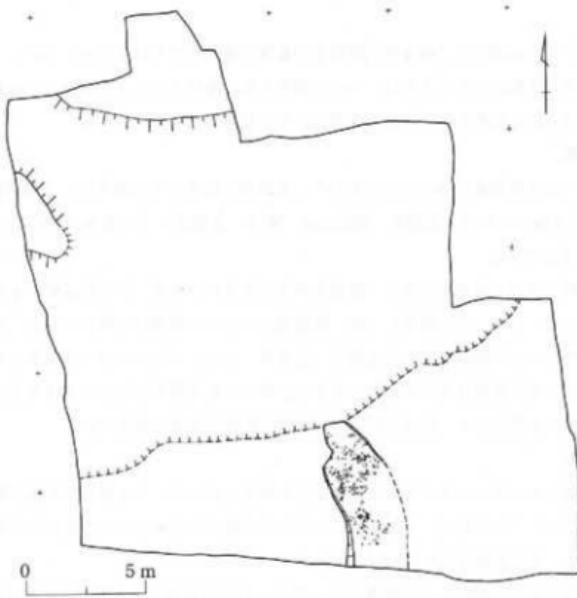
第68図 縄文時代晩期遺構（縄文Ⅲ）位置図

縄文時代晩期末

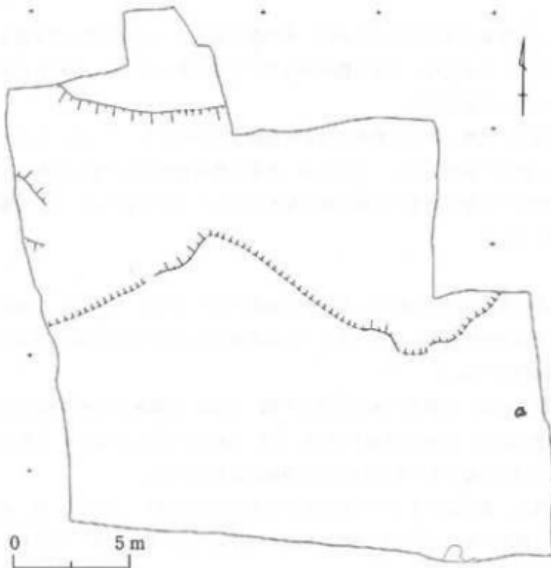
今回は出土していないが、いわゆる長原式に併行する時期の土器が、地点により若干の異なりはあるものの第1・3・4・5・9・13次調査などで量の多少はあるものの出土している。標高は18~32m付近である。遺構は第5次調査でピットが検出されている。第3次調査では遺構は未検出ながら遺物はまとまって出土している。土器だけ見れば最も広範囲から出土しているが、集落の中心は第3次~5次調査地点付近（標高18~25m）に想定でき、前代の居住地から東に約200mほどの生駒山側に居住地を変えたことが判明する。

弥生時代前期

縄文時代晩期末の土器が、弥生時代前期の土器と共に第3次調査がよく知られているが、第1・2・5次と本調査でも出土している。標高は18~25m付近である。遺構は、第5次調査でピットが検出されている。いわゆる長原式土器の出土範囲と比べると分布範囲は狭い。本調査で出土した土器は、自然流路内からの出土品が多く東方からの流れ込みと考えられる。この



第69図 縄文時代晩期遺構（縄文II）位置図



第70図 縄文時代晩期遺構（縄文I）位置図

時期の当初（古・中段階）は、縄文時代晩期末の集落が重なることはまちがいない。

新段階の遺構は未検出ながら土器は、今回の調査と東に隣接する第2次調査で一定量出土している。この段階には前代からの居住域が西方にやや移動したと考えられる。

弥生時代中期

地点により時期や遺物量の多少はあるものの、本調査と第3～6次調査および本調査地点の南東約400mで実施された第9次調査（標高25m・第II～III様式）で土器が出土している。標高は15～25m付近である。

遺構は、今回の調査で確認した第II～III様式の間に営まれた土壙・方形周溝墓・木棺墓・溝がある。墓域については一画が判明したが、居住域についての遺構は未検出である。居住域は、土器の出土範囲から見て前期当初の居住域と一部重複し、そこからやや南に存在すると考えられる。第IV様式に属する遺構はまだ未検出であるが、第5・6次調査などで土器は出土しており、遺構の存在が当然予想される。墓域と居住域の関係の究明は今後の課題である。

弥生時代後期

地点により遺物量の多少はあるものの、本調査と第3～5・7・9次調査で土器が出土している。本調査で出土した土器は、自然流路内からの出土品が多く東方からの流れ込みと考えられる。主たる出土地の標高は19～25m付近である。

遺構は、第3次調査で壺棺、5次調査で火災にあった竪穴住居などが検出されている。したがって居住域は第5次調査地点付近で第3次調査地点は集落の縁辺部に位置すると考えられる。

古墳時代前期

地点により時期や遺物量の多少はあるものの、本調査と第4・5・7次調査で遺物が出土している。本調査で出土した土器は、自然流路内からの出土品が多く東方からの流れ込みと考えられる。標高は20～25m付近である。

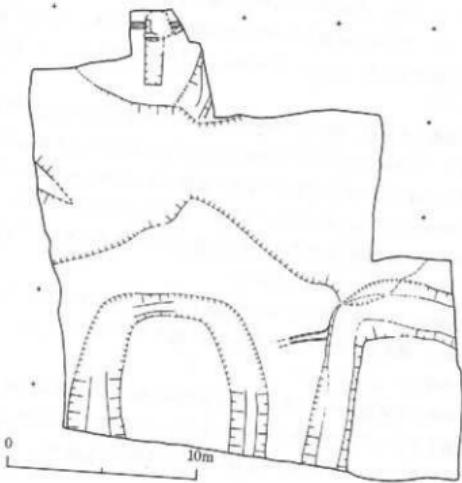
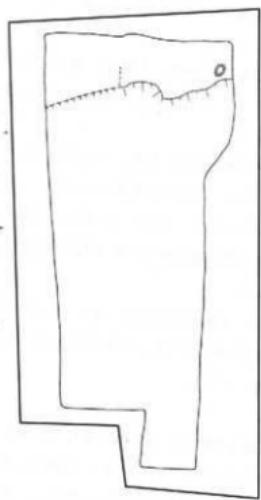
遺構は、第5次調査で土壙、第7次調査で掘立柱建物などが検出されている。したがってこの時期の居住域は、前代の集落より少し南に下がった第5次調査地付近が想定される。弥生時代後期に比して、現状では遺物の出土範囲が狭く量も少ないとから前代よりも小規模な集落である可能性が考えられる。

古墳時代中期

地点により遺物量の多少はあるものの、本調査と第4・6・9・11・13・15・17次調査などかなり広範な範囲で遺物が出土している。第2・3次調査でも土器の存在が推定できる。出土地の標高は19～32m付近である。

遺構は、第6次調査で溝、本調査で掘立柱建物や溝・土壙、本調査地の東約300mで実施された第11次調査（標高30m）で配石遺構や水田、同じく東約500mで実施された第17次調査（標高31m）で作り付けの竈をもつ竪穴住居などが検出されている。

したがって居住域は、本遺跡のかなりの部分を占めていたことはまちがいないが、第5・9次調査など遺物・遺構が出土していない調査地も認められる。居住地が点在しており、それが



第71図 弥生時代中期遺構位置図

一つにまとめて集落を形成していたことを示すと考える。

古墳時代後期

地点により遺物量の多少はあるものの、本調査と第4・6・7・9・13・15次調査などかなり広範な範囲で遺物が出土している。第2・3次調査でも土器の存在が推定できる。出土地の標高は15~32m付近である。

遺構は、第13次調査で溝や竪穴住居・土壤などが検出されている。居住域は中期と同様、本遺跡のかなりの部分を占めていたことはまちがいないが、居住地が点在しており、それが一つにまとめて集落を形成していたことを示すと考える。遺物の出土量や遺構の存在の仕方から見ると集落の中心は、第13次調査地点を初めとする標高24~32m前後の遺跡内では東より（生駒山より）の地と考えられる。

今回明らかになったように居住地を替えることにより6世紀中頃に一旦断絶し、6世紀後半から7世紀前半に遺構が再び形成されるという本調査地の遺構の推移は、遺跡内における居住域の移り変わりを端的に示している。

飛鳥～奈良時代以降

飛鳥時代の遺構は、本調査で検出した土壤1基だけである。今まで実施された調査では、遺構はもちろん遺物もほとんど出土していない。本調査においても遺物の出土量は少ないと、調査地点の近くに集落が存在した可能性が高いとするしか判断できない。少なくとも集落が存在したことまちがいない。

奈良時代は、第5次調査において遺構・遺物の存在が知られていたが、本調査ではこの時代以降の遺構は検出していない。遺物の出土も極く少量で小破片である。今回の調査実施後に行われた各調査によって、平安時代前期までの掘立柱建物や井戸など多くの遺構と遺物が出土している。これらの遺構の分布は、標高24~32m前後、前代の居住域の中心と一部重なり、さらに南北に大きく広がる。

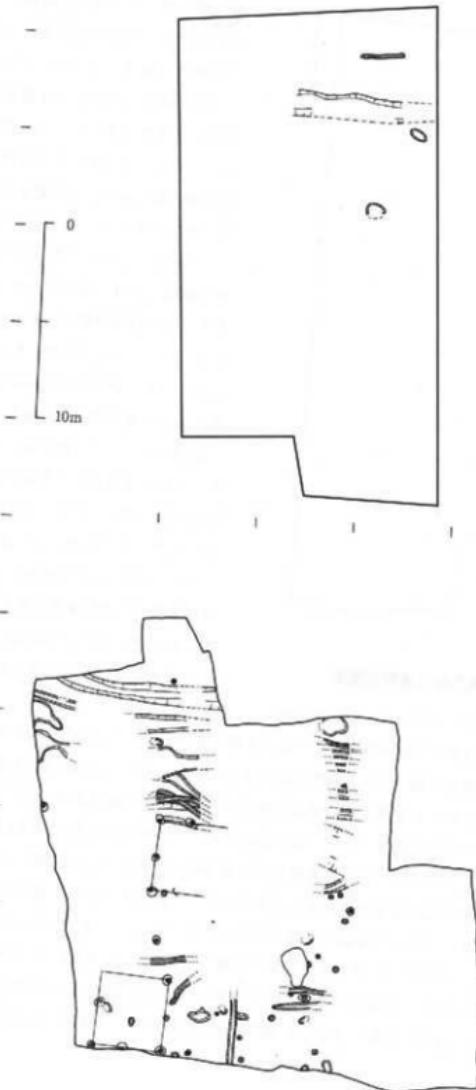
平安時代中期の遺構と遺物は、現在まだ未検出ながら平安時代後期から鎌倉時代の掘立柱建物・井戸・木棺墓などの遺構と遺物は、奈良時代の居住域とほぼ重なる状態で検出されている。

以上、縄文時代から鎌倉時代までの集落の変遷を概観した。遺跡内を時代により点々と居住域を替え、大きな傾向として時代が下がるにしたがって東よりの山側の地に移り住む状況を明らかにできたと考える。縄文時代から現代に続く自然河川に南北を区画された山麓部に安定的に営まれた集落の一つのモデルとなるであろう。

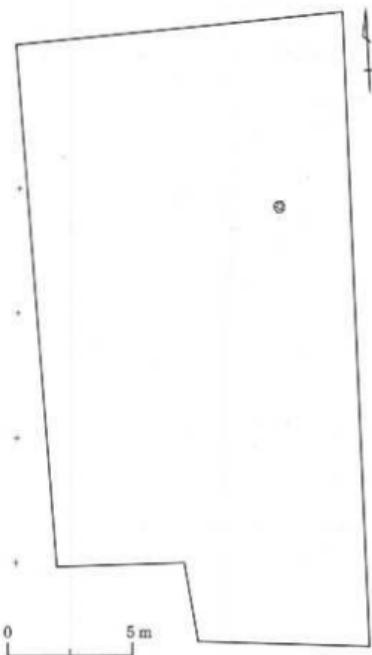
この背景は、山麓部という地形的に安定した状況下において生活基盤となる自然条件などが一定保証された地に、絶えることなく人々が生活した結果ということができる。

ロ. 再葬墓（土壤墓1・2）について

再葬墓は日下遺跡でも確認されているが、第1調査区で検出した再葬墓は焼骨を含むという点で現在、大阪府下でこれ以外の類例が知られていないものである。設楽博己氏によれば縄文時代晩期のこの種の葬法は、中部高地から北陸に広がり伊勢湾・近畿地方に伝播したものとさ



第72図 古墳時代中期遺構位置図



第73図 飛鳥時代造構位置図

焼成したと考えることができるのではなかろうか。

火葬場所は土塙墓とは異なる場所であることは、土塙底面が火を受けていないことから確實である。しかし、両土塙墓の焼骨は大きな骨にかぶされた状況、あるいは埋め土内に混ざった状況で検出していることから、土塙墓に隣接した場所で火葬された可能性が十分考えられる。

土塙墓内に置ける骨の検出状況からは、一定の意識の元に四肢骨や頭骨あるいは下顎骨などを配置したと考えることができる。埋葬者も男女の区別は明らかではないが、歯から見た分析結果を参考にすると、幅の広い年齢層であることが知られる。個々人の関係を家族と早計に判断することはできないが、少なくとも同じ集落で生活した人であることはまちがいない。

この種の再葬墓が、上述のように伊勢湾地方から伝播したとすれば一時期下るもの東海系の縄文土器が存在する背景として理解できる。当時の通常の埋葬法とは異なる再葬墓に葬られた被葬者達の性格については、類例のさらなる增加を待って検討すべき課題であろう。

れる。また、縄文時代の埋葬に際して人骨を焼くことは中期後葉、中部高地で認められ事例数は少ないものの晩期まで継続しているという。

今回の調査で検出した土塙墓の時期は、本文中で述べたように滋賀里Ⅲb～Ⅳ式併行であることは確実で、他遺構の関係から滋賀里Ⅲb式（後半）併行と考えている。時期の認定に誤りがなければ、居住域から北にやや離れた位置に墓を営んだことになる。この時期の墓は、墓域内に密集してつくられることが一般的であるため、第I調査区の北部に墓域が存在する可能性が高いと考えられる。

焼骨という点から見れば、今回検出した例は生焼けや火を受けていない骨も多く認められる。全身骨を完全に火葬したのでないことは明らかである。焼骨の存在理由の一つに1次埋葬地から遺体を掘り出し再葬するに際して、まだ完全に骨化していないものについて骨化させるために

表22 鬼塚遺跡各地点出土土器の時期と標高

| 地点 | 縄文 | | | 弥生 | | | | | 古墳 | | | 標高(T-P) |
|---------|----|-----|-----|--------|----------|------|----------|--------|----------|--------|-----|---------|
| | 中 | 後 | 晩 | I | II | III | IV | V | 前 | 中 | 後 | |
| 1次(A地点) | | | | ※ | ※ | | | | | | | 20m |
| 2次(B地点) | | | | ■■■ | ■■■ | | | | | ■■■■ | | 15m |
| 3次(C地点) | | | | ■■■■■■ | ■■■■■■ | | ■■■ | | ■■■ | ■■■ | | 20m |
| 4次(D地点) | | ■■■ | ■■ | | | ■■■■ | ■■■■■■ | ■■■■■■ | ■■■■ | ■■■■ | | 22m |
| 5次(E地点) | | | | ※ | ※ | | ■■■■■■■■ | | ■■■■■■■■ | | | 25m |
| 6次(F地点) | | | | | | | ■■■■ | | ■■■■■■ | ■■■■■■ | | 14m |
| 7次(G地点) | | | | ■■■ | | | | ■■■■■■ | ■■■■■■ | ■■■■ | | 22m |
| 8次(H地点) | ■■ | ■■ | ■■■ | 柱穴地 | ■■■■■■■■ | 柱穴地 | 柱穴地 | 柱穴地 | ■■■■■■■■ | 柱穴地 | 柱穴地 | 15m |

※ 良好な包含層

■■■ 土器出土

■■■ 土器の存在を想定

注1.設楽博己 1993年「縄文時代の再葬」『国立歴史民俗博物館研究報告』第49集

参考文献

藤井直正・都出比呂志他 1966年『枚岡市史』第3巻資料編 枚岡市史編纂委員会

藤井直正・都出比呂志他 1966年『枚岡市史』第3巻資料編 枚岡市史編纂委員会

藤井直正 1969年「縄文晚期土偶の2例」『河内考古学』3号

久貝健他 1970年「鬼塚遺跡」「河内古代遺跡の研究」大阪府立花園高校地歴部

茅本隆裕 1975年「鬼塚遺跡」「東大阪市遺跡保護調査会年報1」東大阪市遺跡保護調査会

下村晴文 1978年「鬼塚遺跡発掘調査概要1」「東大阪市埋蔵文化財包蔵地調査概報17」東大阪市育委員会

茅本隆裕 1979年「鬼塚遺跡II、若江遺跡発掘調査報告」「東大阪市埋蔵文化財包蔵地調査概報19」東大阪市教育委員会

他各調査報告書

2. 縄文IV～Iの土器について

本文中で遺構・包含層出土土器を縄文IV～Iに分けて時期別の器種構成や在地産と他地域産の比率などについて述べた。ここでは、上述のように分けた各期の特徴や成形・調整・文様などについて、それぞれまとめておきたい。

縄文IV

滋賀里IIIb式に併行すると考えている。最近、家根祥多氏は、滋賀里IIIb式を篠原式と改称し古・中・新の3段階に分ける案を提出されている。篠原式の名称は一先ず置くとして、IIIb式に時間幅があることはまちがいないと考える。

篠原遺跡出土品中には凸帯をもつものはないが、同氏が中段階の一括性の高い資料の代表としてあげておられる恩智遺跡土器集積¹¹の資料内には浅鉢に凸帯をもつものが1点報告されている。本書で報告したこの時期の土器は、少量ながら1条の刻目をもたない凸帯をもつ深鉢H・浅鉢Dが存在する。また底部も丸底が存在している。以上のことから深鉢Iのような前代からの残存型式が少量含まれるもの家の家根氏が提唱される新段階でも最終の時期の資料と考える。

滋賀里IIIb式の土器は、周辺では恩智遺跡のほかに日下遺跡でも出土している。いずれも大洞系の土器（C₂式）を伴出しているが今回は出土していない。たまたま出土していない可能性も否定できないが、本資料の時期が終末に位置づけられるためではないかと考える。

縄文III

滋賀里IV式に併行すると考えている。刻目凸帯が出現しかつ盛行する。周辺では、日下・水走・馬場川遺跡などで少量の土器が出土している。また、前述の恩智遺跡でも少量出土している。しかし、今回の調査ほど良好な状態のものは、まだ報告例がない。現状では、河内のこの時期の土器を考えるうえで欠くことができないものといえよう。

底部は丸底が主体で平底も少量、存在する。小型でミガキ調整することから浅鉢の底部と思われる凹底も少量認められるが、下層の縄文IVの状況から見ても前代の残存型式と考えられる。凹底が残存するのが深鉢ではなく浅鉢という点を注意しておきたい。

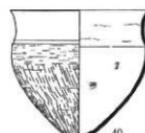
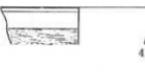
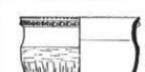
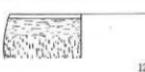
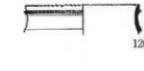
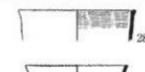
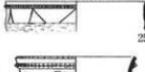
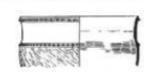
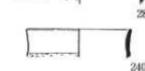
瀬戸内地方の原下層式、九州の夜白I式、東海地方の西ノ山式と併行する資料と考える。大洞系の土器は、出土していない。

また、本文でも述べたが在地産の深鉢の体部片の内面に玄米の圧痕のある土器が出土した。少なくともこの段階で、本遺跡に居住した人々の身近に米が存在したことは確実である。近隣では同時期の讃良郡条里遺跡の最下層から出土した土器にも軽圧痕が認められている。

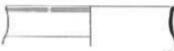
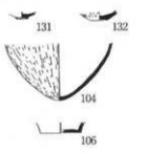
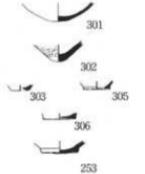
米を栽培したかは現状で判断資料が少ないため一先ず置くとしても、少なくとも北・中河内の縄文人の一部に米の存在は知られていたのである。周辺の遺跡からほとんど出土の知られていない打製石斧の存在も、生業の変化を考えるうえで注目しておきたい。

縄文II・I

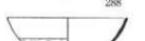
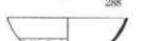
土層や遺構では上下に分けられるが、縄文Iの出土量が多くなく内容もほとんど変わらないため一括して説明する。

| 器種 局位 | A | B | C | D | E | F | G |
|------------|---|---|---|---|---|---|---|
| 繩文 IV |  |  | | | |  |  |
| |  | | | | |  |  |
| 繩文 III |  |  |  |  |  |  |  |
| |  |  |  |  |  | |  |
| |  | | | | | |  |
| 繩文 II・I |  |  |  |  |  |  |  |
| |  |  |  |  |  |  |  |
| |  |  |  |  |  |  |  |
| | | | | | | | |

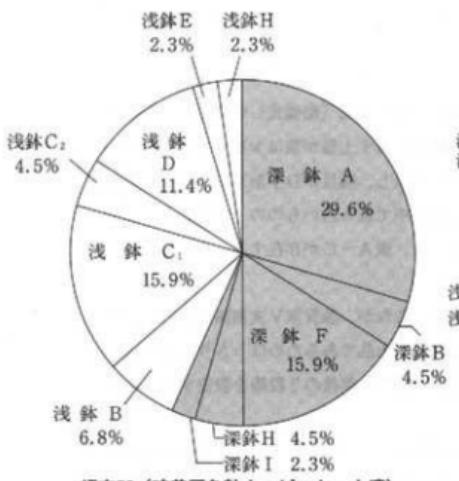
第74図 各遺構・層出土主要繩文土器（深鉢）一覧

| 器種 部位 | H | I | その他 | A | B | C | 底 部 |
|------------|--|---|--|--|--|--|---|
| 繩文 IV |  56 61 |  51 | | | | |  44 |
| 繩文 III |  124 | |  163 |  114 |  227 | |  131 132 104 106 |
| 繩文 II・I |  235 | | |  241 |  293 |  242 |  301 302 303 305 306 253 |

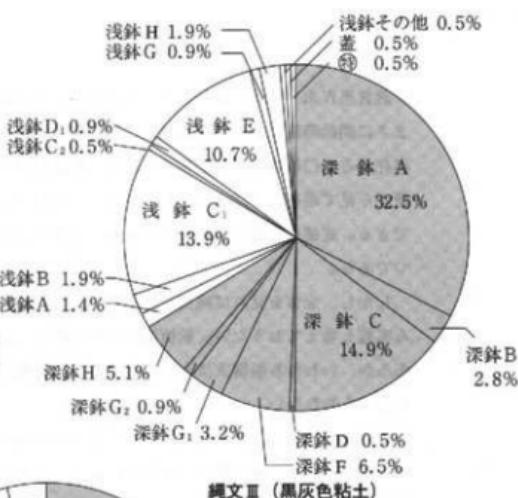
第75図 各構造・層出土主要繩文土器（深鉢・壺・底部）一覧

| 部種 局位 | A | B | C | D | E | F | その他の 鉢 |
|------------|---|---|--|--|--|---|---|
| 縄文 IV | |  64  63 |  43  58  59  60 |  65  62 |  42  57 | |  66 |
| 縄文 III |  98  174  134 |  97  87 |  103  115  120  121  91  123  111 |  159 |  160  229  233 | |  117  228  231 |
| 縄文 II・I |  282  283  328 |  336  338  307 |  288  238  299  291  374  332 |  353  346  278  382 |  257  258  300 |  286 |  297  344  337 |

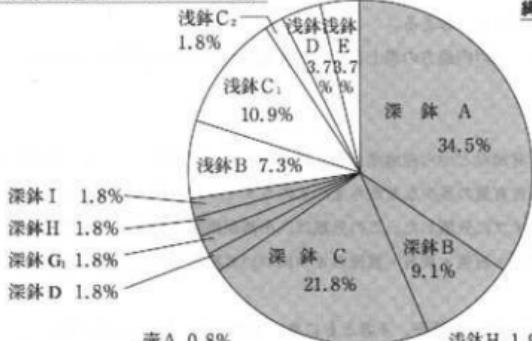
第76図 各遺構・層出土主要縄文土器（浅鉢）一覧



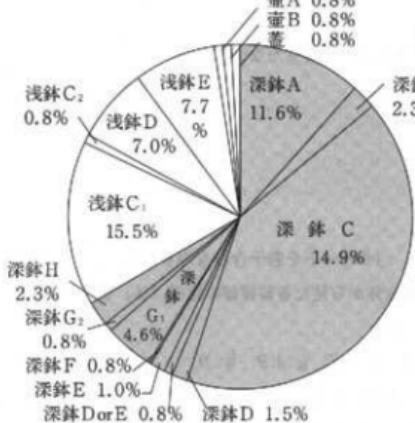
縄文IV (暗黄灰色粘土・ピット・土壤)



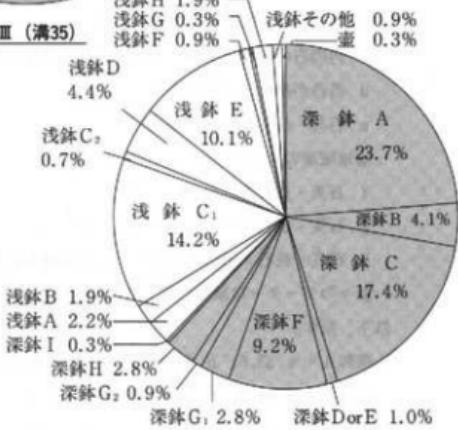
縄文III (黒灰色粘土)



縄文III (満35)



縄文II (満33)



縄文II (黒灰色砂質土)

第77図 各造構・層出土縄文土器器種構成円グラフ

滋賀里Ⅳ末～V式に併行すると考える。2条凸帯の出現をV式（船橋式）の開始とするなら、まさに開始時期にある。深鉢Eとした典型的な船橋式に属す土器が数は少ないものの確実に存在する。口縁端部が面を持ち、凸帯の断面形が方形を呈し、刻目がD字形を呈するなどの特徴から見て現在、河内で知られているこの時期の土器の中で最も古いもの一つということができる。底部に凹底が存在せず平底が一定量あることや、壺A～Cが存在することも特徴の一つである。

しかし、全体を見れば縄文Ⅲと変わらない点も多い。これが、滋賀里V式初頭の河内における実態と考えておきたい。船橋遺跡出土資料は、包含層出土品であるためはっきりしない点があるが、いわゆる船橋式は今回の出土資料と船橋遺跡の資料の前後の2段階を設定することが可能かも知れない。

縄豆の半割れの圧痕や前代と同じく玄米の圧痕が見られる土器片が存在すること、打製石斧が存在する点は、縄文Ⅲから認められることもありこの段階は本遺跡で稻作を開始していた可能性が非常に高いのではないかと考える。

九州の夜白Ⅱa～Ⅱb、瀬戸内地方の黒土BⅡ、東海地方の五貫森式にはば併行すると考える。

胎土について

本文中では、角閃石の有無などから在地産と他地域産の2者に区別したが、より細かく胎土を観察し在地産は角閃石含有量の多少などからa～eの5タイプ、他地域産はチャートの含有の有無からf～hの3タイプに分類した。この分類は、小西が肉眼で判断したものである。

在地産の胎土は、角閃石・石英・長石・雲母の4つについて組み合わせと量の多少で分けた。以下、分類基準を期す。

- a. 角閃石・石英・長石・雲母の量が、4者ともに多いもの（だいたい同程度含むもの）。
- b. 雲母のほとんど目立たないもの。
- c. 角閃石のみが目立ち、石英・長石・雲母も若干含まれるが、目立たないもの。
- d. 雲母が非常に目立つもの。
- e. 石英・長石が目立つもの。

他地域産の胎土

- f. 石英・長石のみを含むもの。
- g. 石英・長石・チャートを含むもの。
- h. 石英・長石・暗灰色の光沢のない砂粒を含むもの。（チャートを若干含むものもある）

個々のデーターは紙数の都合で省略するが、出土土器全体から見た各器種毎の比率（%）を以下、記す。

深鉢A = a.33.6, b.45.1, c.6.6, d.4.9, e.1.2, f.3.7, g.4.9, h.0

深鉢B = a.14.3, b.51.4, c.2.9, d.0, e.0, f.11.4, g.20.0, h.0

深鉢C = a.16.7, b.70.6, c.3.5, d.0, e.0.4, f.2.2, g.4.8, h.1.8

深鉢D = a.25.0、b.25.0、c.0、d.0、e.25.0、f.25.0、g.0、h.0
深鉢E = b.100、
深鉢F = a.40.7、b.37.3、c.10.1、d.3.4、e.0、f.3.4、g.3.4、h.1.7
深鉢G₁ = a.42.5、b.50.0、c.2.5、d.0、e.0、f.5.0、g.0、h.0
深鉢G₂ = a.0、b.77.8、c.0、d.0、e.0、f.5.0、g.11.1、h.11.1
深鉢H = a.22.0、b.65.8、c.4.9、d.0、e.0、f.0、g.7.3、h.0
深鉢I = a.33.3、b.33.3、c.33.3、d.0、e.0、f.0、g.0、h.0
浅鉢A = a.26.6、b.60.0、c.0、d.6.7、e.6.7、f.0、g.0、h.0
浅鉢B = a.26.1、b.30.5、c.4.3、d.4.3、e.0、f.13.1、g.17.4、h.4.3
浅鉢C₁ = a.37.2、b.54.8、c.2.9、d.0、e.0、f.2.2、g.2.9、h.0
浅鉢C₂ = a.14.3、b.42.8、c.0、d.0、e.0、f.28.6、g.0、h.14.3
浅鉢D = a.16.3、b.61.2、c.12.3、d.0、e.0、f.6.1、g.4.1、h.0
浅鉢E = a.15.5、b.59.8、c.1.0、d.0、e.1.0、f.15.5、g.7.2、h.0
浅鉢F = b.66.7、g.33.3、
浅鉢G = a.66.7、b.33.3、
浅鉢H = a.27.8、b.33.3、c.0、d.0、e.0、f.11.1、g.27.8、h.0
壺A = a.50.0、c.50.0、
壺B = a.40.0、b.60.0、
壺C = c.100、
蓋 = a.20.0、b.80.0

在地産で最も多いのは各器種を通じてbとした唇母のほとんど目立たないタイプである。次にaで、両者合わせると深鉢・浅鉢ともに約7~8割を占める。少なくともbは、本遺跡で製作された可能性が高いと考える。その他の在地産の各タイプは、本遺跡で製作されたものが混和材の砂粒の採取地の差が違いとなって現われているのか、近隣の集落で製作されたものかは今後、同様の観点から検討する必要があると考えている。

壺と蓋は絶対数が少ないため不確実であるが、他地域産の搬入品がなく全て在地産である点は、確実に製作・使用されていたことを示している。

成形について

全ての器種が、粘土紐をもちいて積み上げて製作されている。丸底の底部は、円板の内側を凹めたものである。

粘土紐の接合の仕方は、確認できるもの全てが内傾である。粘土紐の幅は、1.2~2.5cmまで見られるが、1.5cm前後が多い。深鉢・浅鉢など器種により変えることはない。また、同一個体においても幅に多少の異なりが見られるものがある。

調整について

外面の調整は、深鉢にあってはケズリ、浅鉢はミガキを主とする。しかし、深鉢A~Dの中

には二枚貝調整をするものが少量認められる。浅鉢の中にもC₁のようにケズリを施すものが見られる。

内面は深鉢がナデ、浅鉢はミガキないしナデを主とする。深鉢には貝殻で調整するものが3%前後、認められる。浅鉢も貝殻調整はほとんど施されないが、C₁に2.8%存在する。深鉢の中に内外面とも、あるいはいずれかの面にミガキを施すものが極くわずかであるが存在する。

壺は、口縁部の小破片しか存在しないため全体は明らかでないが、ナデで調整している。製作技法の復元については今後の課題としたい。

文様について

文様は、基本的に少ない。深鉢・浅鉢の順に述べる。

深鉢 種類として、凸帯・刻目凸帯・刻目・線刻・沈線がある。凸帯・刻目凸帯については後述する。刻目は、大半はヘラ状工具によるが既に述べた半截竹管状工具によるものが少量認められる。刻目の施部位は、凸帯・口縁端部・頸部・頸部と体部の境である。

線刻は、頸部外面にヘラ状工具・半截竹管状工具などを用いて施すものがある。量は少ない。

沈線は、頸部下位にヘラ状工具・棒状工具を用いて施すものがある。1条が多いが2条も少数、見られる。量は少ない。

浅鉢 種類として、凸帯・刻目凸帯・刻目・沈線・突起がある。凸帯・刻目凸帯については後述する。深鉢に見られた線刻は、存在しない。

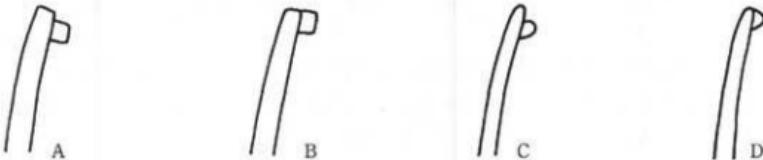
沈線は、口縁部内外面・頸部下位および凸帯上にヘラ状工具・棒状工具を用いて施すものがある。1条のものが多いが2条や多条も少数、見られる。量は少ない。

凸帯について

肩部の凸帯は数が少なく検討する対象にならないため、口縁部外面の凸帯の付く位置と口縁端部の形態の組み合わせを第78図のようにA～Dの4タイプ設定した。凸帯には刻目を持つものと持たないものがある。細かな比率は、表23・24を参照されたい。

A 口縁端部断面が方形を呈し、凸帯が少し下がった位置に付けられる。深鉢・浅鉢とともに存在する。後述するCに次いで多く主体の一画を占めている。

B 口縁端部断面が方形を呈し、凸帯が接して付けられる。深鉢Dに25%認められるが浅鉢を含めて他には存在しない。



第78図 凸帯分類図

表23 深鉢凸帯の施文部位の分類 (%)

| 深鉢 | タイプ | 暗黄灰色 粘土 | 土壌・ビット | 黒灰色粘土 上面 | 溝35 | 土壌22 | 黒灰色砂 質土下層 | 黒灰色 砂質土 | 溝33 | 黄灰色 シルト | 擾乱 | 合計 |
|----------------|-----|------------|--------|-------------|-------|------|--------------|------------|------|------------|-----|------|
| C | A | | | 21.9 | 18.18 | 33.3 | | 18.6 | 10.9 | 7.5 | 5 | 13.5 |
| | C | | | 78.1 | 81.81 | 66.7 | 100 | 81.4 | 87.3 | 90.6 | 95 | 100 |
| | D | | | 0 | | | | | 1.8 | 1.9 | | 0.8 |
| D | A | | 100 | | | | | | | 50 | | 50 |
| | B | | | | 100 | | | | | | | 25 |
| | C | | | | | | | | | 50 | | 25 |
| E | A | | | | | | | | 100 | | | 100 |
| | | | | | | | | | | | | |
| G ₁ | A | | | 14.3 | 12.5 | | | 37.5 | 11.1 | 16.7 | | 15.9 |
| | C | | | 85.7 | 87.5 | 100 | | 62.5 | 88.9 | 83.3 | 100 | 100 |
| G ₂ | A | | | | 50 | | | | 66.7 | | 100 | 40 |
| | C | | | 100 | 50 | | | 100 | 33.3 | 100 | | 60 |
| H | A | | | 18.2 | 14.3 | | | 25 | | 66.7 | | 50 |
| | C | 100 | 100 | 81.8 | 85.7 | 100 | | 75 | 100 | 33.3 | 100 | 50 |
| | | | | | | | | | | | | 83.7 |

表24 浅鉢凸帯の施文部位の分類 (%)

| 浅鉢 | タイプ | 暗黄灰色 粘土 | 土壌・ビット | 黒灰色粘土 上面 | 溝35 | 土壌22 | 黒灰色砂 質土下層 | 黒灰色 砂質土 | 溝33 | 黄灰色 シルト | 擾乱 | 合計 |
|----|-----|------------|--------|-------------|------|------|--------------|------------|------|------------|------|-----|
| D | A | 20 | | | | 20 | 50 | | 44.4 | 20 | | 18 |
| | C | 80 | | 100 | 66.7 | 100 | 80 | 50 | 92.9 | 55.6 | 80 | 78 |
| | D | | | | 33.3 | | | | 7.1 | | | 4 |
| G | A | 100 | | 39.1 | 80 | 50 | | 37.5 | 31.2 | 50 | 42.9 | 50 |
| | C | | | 52.2 | 20 | 50 | 100 | 62.5 | 68.8 | 50 | 57.1 | 50 |
| | D | | | 8.7 | | | | | | | | 2.0 |

C 口縁端部断面が丸みをもち凸帯が少し下がった位置に付けられる。深鉢・浅鉢ともに深鉢Eを除くすべてのタイプに認められる。量も多く主体を占める。

D 口縁端部断面が丸みを持ち凸帯が接して付けられるいわゆる長原式の特徴的なタイプに近いものは、深鉢Cに0.8%、浅鉢D4.0%、Eで2.0%認められるが主体を占めていない。以上のタノブ分類結果によれば、口縁端部上面を面取りし一番丁寧に製作されたAは主体の一画を占めるとはいえ、中心は少し手を抜いたCであることが判明する。また、浅鉢には主体を占めないといふものの、いわゆる長原式の凸帯に近いDが繩文Ⅲの段階で出現し、深鉢では繩文Ⅱで存在する。凸帯の出現も浅鉢が先である可能性が高いことと合わせ、深鉢の変化は、浅鉢の動きを受けて起きているとも考えられ興味深い。

凸帯には刻目を持つものと持たないものがある。深鉢の比率は、繩文IVが持たない凸帯100%、繩文Ⅲ刻目凸帯76.5%、持たない凸帯23.5%、繩文Ⅱ刻目凸帯88.7%、持たない凸帯11.3%、繩文Ⅰ刻目凸帯73.1%、持たない凸帯26.9%と量の少ない繩文Ⅰが少し異なるが、おむね時期が下がるに従い刻目凸帯の占める割合が増加している。

深鉢の刻目凸帯の施文原体は、ヘラ状工具92.9%二枚貝5.3%棒状工具0.3%不明1.5%で、ヘラ状工具によるものがほとんどである。二枚貝によるものは、時期が下がるにしたがい多くなる。東海地方などの他地域の影響と考えられる。

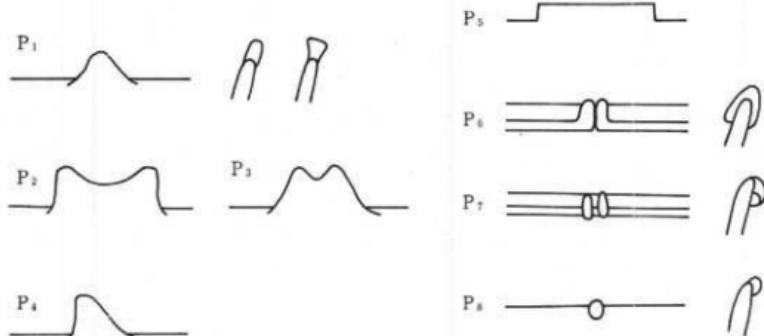
浅鉢の凸帯は、繩文Ⅲで刻目凸帯2.3%、繩文Ⅱで刻目凸帯1.1%がみられるがほとんどないに等しい。刻目の施文原体はヘラ状工具である。

凸帯上の刻目の形状は、D字・小D字、O字・小O字、V字状のものがある。D字・O字状が多いが、各時期ともいづれの形態も存在する。同一凸帯でも位置によりD字がV字状に変化するものも見られる。

凸帯はナデにより貼り付けられる。断面形は、台形・三角形・方形・半円形がある。

突起について

馬場川³⁷・篠原遺跡出土品では、深鉢にも突起をもつものが見られるが今回の出土品では浅鉢にしか認められない。突起は形態から第79図のようにP₁～P₈に分類した。



第79図 突起分類図

表25に示したようにP₁は浅鉢A・Eに、P₂は同B、P₃はC₁、P₄はB・E、P₅はE・G、P₆・P₇はE、P₈はAにみられる。これ以外には認められない。

浅鉢Eは5タイプがあり他に比して多い。Eの中に占める突起をもつ土器の比率は、7.1%である。次いでA(17.6%)・B(21.7%)に2タイプ、C₁(0.7%)・G(33.3%)に1タイプ見られる。突起が1個体に何個つくか明らかでないが特定の器種に一定の突起がつくとは考えられない。

最も単純な器形であるC₁にも突起が認められることから、今回確認できなかったタイプの浅鉢についても存在する可能性はある。

突起は、滋賀里Ⅱ式の深鉢に出現しⅢ式で浅鉢にも広がる。今回の資料はⅣ式で深鉢から突起が消失するか激減し、主に浅鉢に存在することを示している。おそらく穴森口酒井遺跡や長原遺跡の土器から見てV式(船橋式)の段階で浅鉢からも激減することが判明する。

これらの突起は、ほぼ同様の形態が九州から東海地方の西日本一帯の同時期の遺跡から出土している。しかし、他遺跡では1~2タイプがほとんどで、4タイプを超えるのは長行(4)櫛原遺跡(8)など非常に少ない。滋賀里遺跡では3タイプである。本遺跡の突起の多様性は櫛原遺跡と並んで目につく。あるいは、近畿地方は浅鉢に突起を付けることが盛行した地域と言えるのかも知れない。

同タイプの器形のなかで突起を持つ、持たないものがあり、かつ持つものが少ないと云ふのがどのような意味があるかは現時点では明らかにしない。

浅鉢における黒色磨研および磨研風土器について

浅鉢A・B・C₁・D・E・Hに黒色磨研ないし磨研はしていないが、いぶし焼きを行い黒色化させたと考える黒色磨研風の土器が認められる。浅鉢全体(371点)の中では、黒色磨研(16点)4.3%、黒色磨研風(42点)11.3%である。細かな比率は、表26を参照されたい。

時期別に見れば、縄文IVの段階では浅鉢全体に占める黒色磨研土器(15.8)、黒色磨研風土器(10.5)の割合は26.3%である。縄文IIIの黒灰色粘土層出土品は黒色磨研土器(11.4)、黒色磨研風土器(15.7)の割合は27.1%である。縄文IIの溝33出土品は黒色磨研土器(2.5)、

表25 浅鉢、突起の個数と比率(%)

| | 突起の種類×個数 | | | | | 各器種の個体数 | % |
|-----------------|--------------------|--|--|-----|--------------------|---------|------------|
| | 縄文IV | 縄文III | 縄文II | 縄文I | 搅乱 | | |
| 浅A | | P ₁ × 1 P ₈ × 1 | | | P ₁ × 1 | (17) | 17.6 |
| 浅B | P ₂ × 1 | P ₄ × 2 | P ₄ × 2 | | | (23) | 21.7 |
| 浅C ₁ | | | P ₃ × 1 | | | (138) | 21.7 |
| 浅E | | P ₆ × 1 P ₇ × 1 | P ₁ × 1 P ₄ × 1 P ₆ × 2 | | P ₅ × 1 | (98) | 7.1 |
| 浅G | | P ₅ × 1 | | | | (3) | 33.3 |
| 計 | 1点 | 7点 | 7点 | | 2点 | | 100 17点 |

表26 黒色磨研および磨研風土器の個数と比率(%)

| 造構・層位 | 器形 | 黒色磨研土器 | 黒色磨研風土器 | 各造構の各器形に占める割合(%) | |
|--------|-----------------|--------|---------|------------------|---------|
| | | | | 黒色磨研土器 | 黒色磨研風土器 |
| 暗黄灰色粘土 | 浅B | 1 | 0 | 33.3 | 0 |
| 土壤・ビット | 浅C ₂ | 1 | 1 | 50 | 50 |
| | 浅D | 0 | 1 | 0 | 20 |
| | 浅E | 1 | 0 | 100 | 0 |
| | 浅鉢における割合 | | | 15.8 | 10.5 |
| 黒灰色粘土 | 浅B | 0 | 3 | 0 | 100 |
| | 浅E | 1 | 2 | 25 | 50 |
| | 浅H | 6 | 3 | 26.1 | 13.0 |
| | 浅鉢における割合 | | | 11.4 | 15.7 |
| 溝29 | 浅B | 0 | 1 | 0 | 25 |
| | 浅E | 1 | 1 | 50 | 50 |
| | 浅鉢における割合 | | | 6.7 | 13.3 |
| 土壤16 | 浅B | 0 | 1 | 0 | 50 |
| | 浅鉢における割合 | | | 0 | 9.1 |
| 溝30 | 浅C ₂ | 0 | 1 | 0 | 100 |
| | 浅D | 0 | 2 | 0 | 22.2 |
| | 浅E | 1 | 3 | 10 | 30 |
| | 浅鉢における割合 | | | 2.5 | 15 |
| 黒灰色砂質土 | 浅A | 1 | 2 | 14.3 | 28.6 |
| | 浅B | 1 | 1 | 16.7 | 16.7 |
| | 浅C ₂ | 1 | 0 | 50.0 | 0 |
| | 浅D | 0 | 1 | 0 | 7.1 |
| | 浅E | 0 | 7 | 0 | 21.9 |
| | 浅H | 0 | 1 | 0 | 100 |
| | 浅その他の | 0 | 1 | 0 | 33.3 |
| | 浅鉢における割合 | | | 2.5 | 10.9 |
| 黒灰色砂質土 | 浅B | 0 | 1 | 0 | 100 |
| 下層 | 浅E | 0 | 3 | 0 | 18.8 |
| | 浅鉢における割合 | | | | |
| 擾乱 | E | 0 | 1 | 0 | 25 |
| | 浅鉢における割合 | | | 0 | 9.1 |

・黄灰色シルトの中には、黒色磨研と思われるものはなかった。

・浅鉢371点中、黒色磨研16点、黒色磨研風のものは42点それぞれの比率は4.3%、11.3%である。

黒色磨研風土器（15）の割合は17.5%である。同黒灰色砂質土出土品では、黒色磨研土器（2.5）、黒色磨研風土器（10.9）の割合は13.4%である。縄文Iでは出土していない。

縄文IVの朱彩の黒色磨研土器（図42）は、朱彩にベンガラを用いていいことが分析結果から明らかになった。なお、朱彩を施す浅鉢・土製品は非常に少なく分析を依頼したものが出土しただけである。

黒色磨研土器は滋賀里IV式の段階ではほとんど消失すると言われている。本遺跡においては、滋賀里IV式併行期には磨研風土器を合わせればなお3割近く存在する。ようやく、V式初頭に併行する縄文IIの段階で急減しているが、それでも黒色磨研風土器が約1割、存在している。

浅鉢の煤付着

浅鉢に煤が付着するものが認められた。出土層・遺構と器種の比率を表27に示したので参照されたい。

浅鉢C₂を除く全ての器種に認められるが、中心はC₁とDである。時期により異なりはあるものの、C₁で50%前後、Dで50~60%前後を占めている。時期に関係なく少なくともこの2器種に関しては、形態は浅鉢であるが煮炊にも使用されたことは明らかである。

注1.星根祥多 1994年「葦原式の提唱—神戸市葦原中町遺跡出土々器の検討」「縄文晩期—中業の広域編年」平成4年度科学的研究費（総合A）研究成果報告書

注2.嶋村友子他 1987年「八尾市内昭和61年度発掘調査報告書Ⅰ－恩智道路の調査」「八尾市文化財調査報告書」14 八尾市教育委員会

注3.吉村博恵 1985年「日下遺跡発掘調査概要—11・12次調査—」「東大阪市埋蔵文化財包蔵地調査概報」26 東大阪市教育委員会他

注4.中村浩他 1984年「木走遺跡—東大阪生駒電鉄建設予定地内発掘調査概要—」大谷女子大学考古学研究会

注5.西口陽一他 1991年「讃良郡条里遺跡発掘調査概要・Ⅱ—寝屋川市出雲町所在—」大阪府教育委員会

注6.佐原真他 1958年『船橋II』

注7.原田修他 1981年「馬場川遺跡・上六万寺遺跡・山畠66号墳調査報告」「東大阪市埋蔵文化財包蔵地調査概報」22 東大阪市教育委員会

注8.浅岡俊夫 1968年「伊丹市口酒井遺跡の凸帯文土器」「歴史と考古学」高井傳三郎先生喜壽記念事業会

注9.宇野慎敏・山口信義 1983年「長行遺跡—北九州市小倉南区大字長行所在」「北九州市埋蔵文化財調査報告書」20 黒北九州市教育文化事業團埋蔵文化財調査室

注10.末永雅雄・酒詰仲男他 1961年「福原」「奈良県史跡名勝天然記念物調査報告」17 奈良県教育委員会

注11.加藤修・丹羽佑一他 1973年「湖西線関係遺跡調査報告書」滋賀県教育委員会

表27 浅鉢、煤付着の個数と比率

浅鉢の煤の付着

・煤のある個体数／全体の個体数

| 浅鉢の種類 | 暗黄灰色 粘土 上質・ビット | 黒灰色 粘土 | 溝29 | 上槽16 | 黒灰色 砂質土 | 溝30 |
|-------|----------------------|-----------|-----|------|------------|-------|
| A | 0/0 | 1/3 | 0/0 | 0/1 | 0/7 | 0/0 |
| B | 0/3 | 0/4 | 2/4 | 1/2 | 0/6 | 0/0 |
| C | 4/7 | 12/30 | 6/6 | 1/2 | 26/45 | 13/20 |
| D | 4/5 | 1/2 | 1/2 | 3/5 | 8/14 | 6/9 |
| E | 0/1 | 6/23 | 0/2 | 0/1 | 14/32 | 3/10 |
| F | 0/0 | 0/0 | 0/0 | 0/0 | 1/3 | 0/0 |
| G | 0/0 | 1/2 | 0/0 | 0/0 | 0/1 | 0/0 |
| H | 0/1 | 1/4 | 0/0 | 0/0 | 0/6 | 0/0 |

各造構・層位における器種内での比率

%

| 浅鉢の種類 | 暗黄灰色 粘土 上質・ビット | 黒灰色 粘土 | 溝29 | 上槽16 | 黒灰色 砂質土 | 溝30 |
|-------|----------------------|-----------|------|------|------------|------|
| A | --- | 33.3 | --- | 0 | 0 | --- |
| B | 0 | 0 | 50.0 | 50.0 | 0 | --- |
| C | 57.1 | 40.0 | 100 | 50.0 | 57.8 | 65.0 |
| D | 80.0 | 50.0 | 50.0 | 60.0 | 57.1 | 66.7 |
| E | 0 | 26.1 | 0 | 0 | 43.8 | 30.0 |
| F | --- | --- | --- | --- | 33.3 | --- |
| G | --- | 50.0 | --- | --- | 0 | --- |
| H | --- | 25.0 | --- | --- | 0 | --- |

Ⅷ 総 括

今回の調査は、本遺跡で実施された調査の中では規模も比較的大きく伸線工場の基礎などにより破壊されていた部分が多くいたといえ、非常に大きな成果を上げることができた。以下に今回の調査で明らかにできた事柄を、遺構・遺物の順に個条書きで記す。

1. 本遺跡の開始時期は從前知られていたより古く、縄文時代後期に確実に存在し遺物から見れば縄文時代中期後半に遡る。
2. 縄文時代晚期中頃、滋賀里Ⅲb式併行期には第Ⅱ調査区で堅穴住居（2棟以上）、第Ⅰ調査区で大阪府下では現在、類例の知られていない焼骨を含んだ再葬墓（2基）が営まれ、調査地点が集落の中心地であることが判明した。また、引き続き晚期後半まで第Ⅱ調査区および近接地に集落が営まれていることが、土壌や溝の存在から明らかにできた。
現在の知見では、馬場川遺跡がこの時期にほとんど消滅する。自然条件や生業の変化などで移住を考えることができるのではないか。
3. 弥生時代前期以降、居住域が東側に移動するが中期前半から中頃に方形周溝墓が3基（Ⅱ様式1基・Ⅲ様式2基）以上営まれ、墓域となることが判明した。方形周溝墓1では主体部の一つと考えられる木棺1基を検出した。他は後世に墳丘部が削平されているため検出できていない。
4. 古墳時代中期後半から後期にかけて掘立柱建物（2棟以上）や土壌・溝などを確認し、集落の中心の一つであることが判明した。柱穴の中には、柱根が残存するものや根石を据えたものが認められた。
5. 飛鳥時代の土壌を1基検出したことから、現在まだ未発見ながら近隣にこの時代の居住域が存在すると考えられる。
6. 調査地のほぼ中央を、東から西に向かい流れる縄文時代後期以前より古墳時代後期までの最大幅50mの自然河川を確認した。この河川はある時は幅狭く、ある時は幅広く流れを変えることが判明した。おそらく、河川の幅が狭くあるいは、ほぼ埋没した時に集落や墓域の中心地となったと考えられる。
古墳時代後期初頭以降は、完全に埋没し以降の河川が存在しないことから流れを人工的に変えたことも考えられる。
7. 今回の調査でコンテナ300個の遺物が出土した。内訳は、縄文時代に属するものが最も多くコンテナ120個、次いで古墳時代中期の遺物コンテナ100個、弥生時代の遺物コンテナ50個、古墳時代後期以降現代に至る遺物コンテナ30個である。
8. 縄文時代中期後半の土器は、出土数は少ないが從前河内では余り知られていないものである。東日本系の加曾利EⅡ式と西日本系の里木Ⅱ式系の土器が見られ、この時期に河内で使用された土器を知るうえで重要である。
9. 縄文時代後期の土器も量は少ないが、市内の山麓部に日下・縄手遺跡と並んで同時期の

集落が本遺跡に存在したことを示す資料である。

10. 滋賀里Ⅲ b 式末期から V 式初頭に併行する土器は、周辺では断片的に知られていただけで今回のように包含層や遺構からまとめて出土した例は報告されていない。出土資料から各時期を通して在地産が 9 割前後、他地域産が 1 割前後であることが判明した。
特に、滋賀里Ⅳ式併行の土器は、この時期を通じた資料で当時の河内における実態を知る上で今後、欠くことのできない資料となろう。
11. 滋賀里Ⅳ・V 式併行の玄米の圧痕が付いた土器は、畿内で現在知られている最も古い米に関する資料の一つである。この時期に米が身近に存在したことを端的に示している。緑豆の圧痕とあわせ、農耕の開始を考える上に重要な資料である。
12. 前代と変わらぬ土偶や土製品の存在は、米を知った段階でも精神生活は依然として前代の流れの中にあることを示している。
13. サヌカイト産地同定の結果、わずかながら香川県の金山産のものが含まれていることが明らかとなった。弥生時代前期から中期初頭にかけて同地産のサヌカイトが多くもたらされているが、既にこの時期に萌芽があったことを示している。
五貫森式に属す東海地方系の縄文土器や瀬戸内地方の原下層式の影響を受けた土器も出土している。滋賀里Ⅲ a 式以前には、河内でも存在が知られる大洞系の土器（C₁～C₂ に併行すると考えられる）は今回の調査で出土していない。これらの事柄は、当時の他地域との交流を考える上で重要である。
14. 石錘や打製石斧の存在は、当時の生業を考えるうえに貴重な資料である。特に滋賀里Ⅳ・V 式に併行する打製石斧は、馬場川や日下遺跡からは出土が報告されていない。上述の米の圧痕とともに農耕の開始を考える上で今後、検討を要する。
15. 弥生時代前期の土器は、自然流路などからの出土で量も少ないが、従前知られていない新段階のものも存在し、古・中段階に引き続き生活が営まれたことを示している。
16. 弥生時代中期（第Ⅱ～Ⅲ様式前半）の土器は、量は少ない。しかし、方形周溝墓 3 に供獻された土器群のように第Ⅲ様式前半の良好な一括資料が見られる。この資料は、同時期の周辺の方形周溝墓に供獻された土器に比して、他地域産が多いことが被葬者との関連で注目される。また、自然流路や遺構内出土品で完形品ないしは完形に復元できたものの多くは、出土状況や体部に穿孔をもつものが認められることから見て墓と何らかの関係を有すると考えられる。
17. 古墳時代中期（5 世紀後半から 6 世紀初頭）の遺物には、渡来系の移動式の竈や土製支脚が見られる。また、韓式系土器の中には、角閃石を含む在地産のものが認められる。
算盤玉形の紡錘車と通常、古墳の副葬品にしか見られない鋳造鉄斧も各 1 点出土した。製塩土器や轆の羽口も出土している。これらの遺物は、当時の本遺跡に居住した人々の性格を考える上で非常に重要である。

図 版



第1調査区調査開始風景（南西より）



第2調査区擾乱検出状況（北東より）

図版2

調査地土壠断面



第2調査区南壁断面（北より）



第2調査区東壁断面（西より）



第2調査区南壁断面（北より）

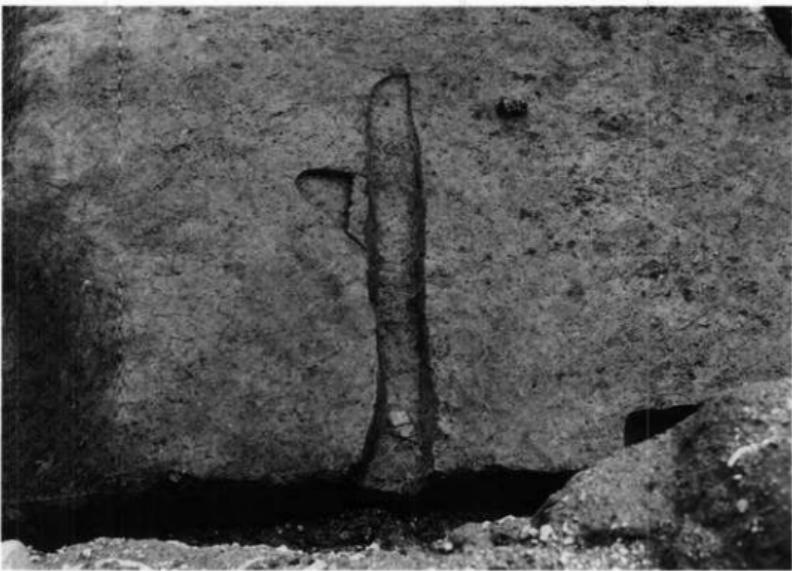


第1調査区北壁断面（南より）

図版 4 調査地土層断面・遺構



第1調査区西壁断面（北より）



縄文V遺構（溝38・土壤48）検出状況（北より）



第1調査区土壤墓1・2検出状況（北より）



第1調査区土壤墓1検出状況（東より）

図版 6 遺構（縄文IV）



第1調査区土壤墓1
中央集骨状況（北東より）



第1調査区土壤墓1
石撤去後の状況（東より）



第1調査区土壤墓1
完掘状況（北東より）



第1調査区土壤墓2検出状況（北より）



第1調査区土壤墓2検出状況（南より）

図版 8
遺構（縄文 IV）



第1調査区土壤墓2
集骨状況（南より）



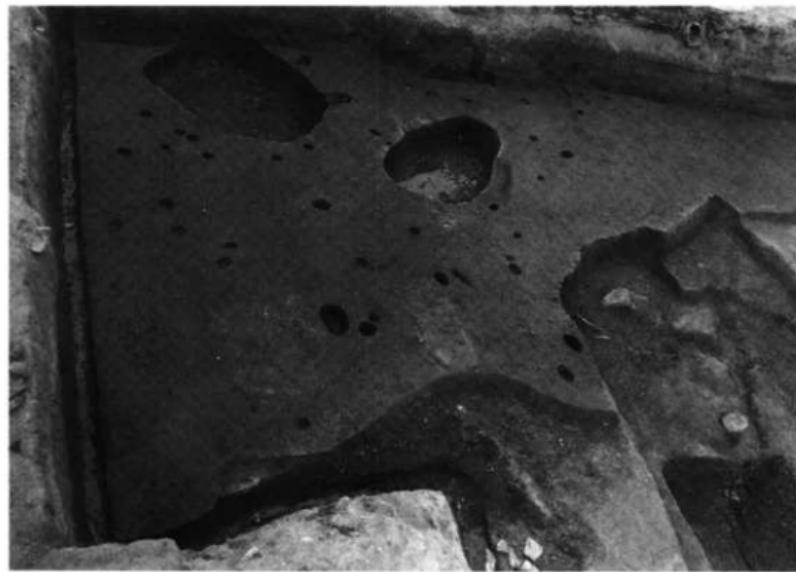
第1調査区土壤墓2
完掘状況（北東より）



第1調査区土壤墓1・2
完掘状況（北より）



第2調査区ピット検出状況（南西より）

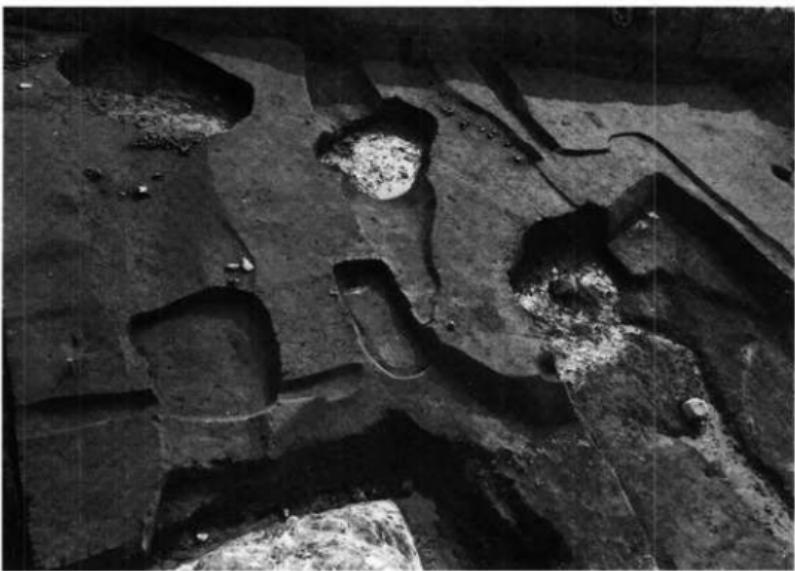


第2調査区ピット検出状況（北より）

図版10
遺構（縄文IV・III・II）



第2調査区ピット検出状況（東より）



第2調査区溝35・33 検出状況（北より）

図版11 遺構（縄文Ⅲ・Ⅱ）



第2調査区溝35検出状況（南西より）



第2調査区溝33検出状況（北より）

図版
12

遺構
(縄文Ⅲ・Ⅱ)



第2調査区溝33 遺物出土状況（南西より）



第2調査区土壤22 遺物出土状況（北より）



第2調査区溝33
遺物出土状況（北より）



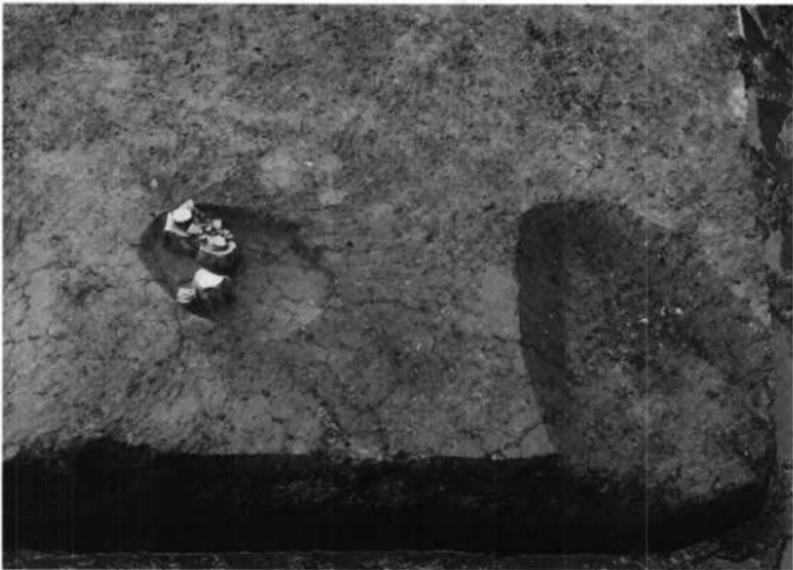
黒灰色粘土層遺物
出土状況下（北より）



第2調査区暗黄灰色粘土層
深鉢出土状況（東より）

図版
14

遺構（弥生時代中期）



第1調査区土塚14発出土状況（北より）



第2調査区方形周溝墓2周溝検出状況（南より）



第2調査区木棺墓検出状況（西より）



第2調査区木棺墓蓋撤去後状況（北東より）

図版16

遺構（弥生時代中期）



第2調査区木棺墓人骨検出状況（南より）



第2調査区木棺墓人骨取り上げ後の状況（東より）



第2調査区木棺墓人骨上半身検出状況（東より）



第2調査区木棺墓、堀方埴土の状況（南より）

図版 18

遺構（弥生時代中期）



第2調査区木棺墓、掘方埋土の状況（東より）



第2調査区方形周溝墓3、西側周溝供獻土器出土状況（北より）



第2調査区方形周溝墓3、西側周溝供獻土器出土状況（南より）



第2調査区方形周溝墓2、北側周溝供獻土器出土状況（南より）

図版
20

遺構（弥生時代中期）



第2調査区方形周溝墓2
北側周溝供獻土器出土状況
(北より)



第2調査区方形周溝墓2
西側周溝甌出土状況
(東より)



第2調査区自然流路3
甌出土状況(南より)



第1調査区自然流路1完掘状況（南より）



第1調査区自然流路1完掘状況（北より）

図版
22

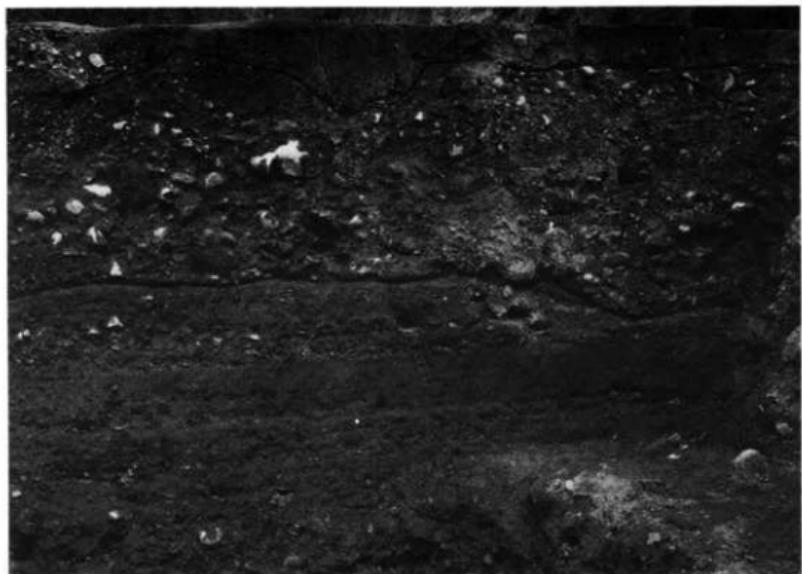
遺構
(自然流路)



第1調査区自然流路1完掘状況（東より）



第1調査区自然流路1肩口完掘状況（東より）



第1調査区自然流路堆積土断面（東より）



第1調査区自然流路1肩口自然木検出状況（南より）



第1調査区遺構検出状況（北より）



第2調査区遺構検出状況（北より）



第2調査区遺構検出状況（東より）



第2調査区中央部北半遺構検出状況（東より）



第2調査区北西部遺構検出状況（東より）



第2調査区中央部南半遺構検出状況（東より）



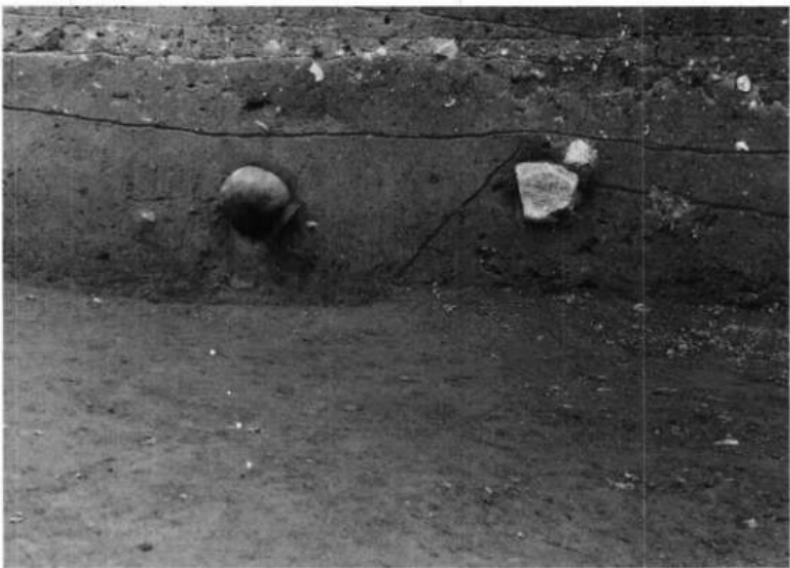
第1調査区溝5遺物出土状況（西より）



第1調査区土塙4遺物出土状況（東より）

図版
28

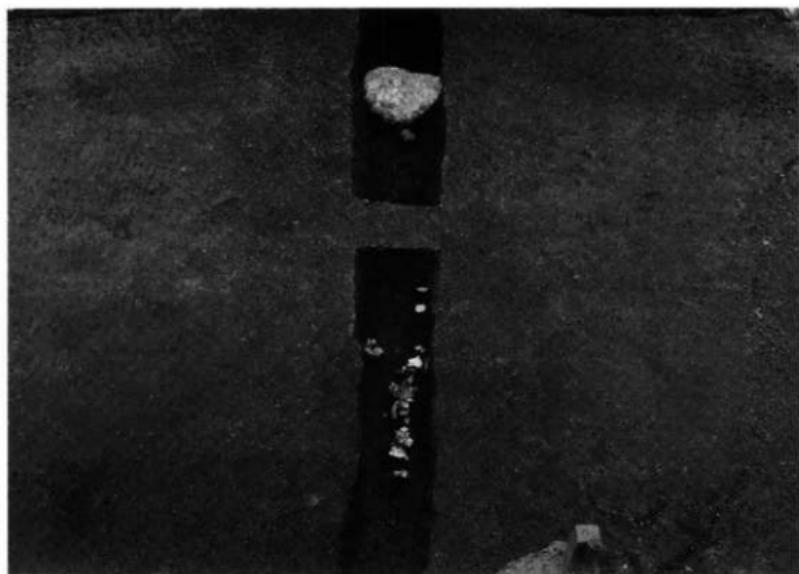
遺構（古墳時代中期）



第1調査区東壁断面遺物出土状況（西より）



第1調査区遺物出土状況（北西より）



第2調査区溝21 製塙土器他出土状況（北より）



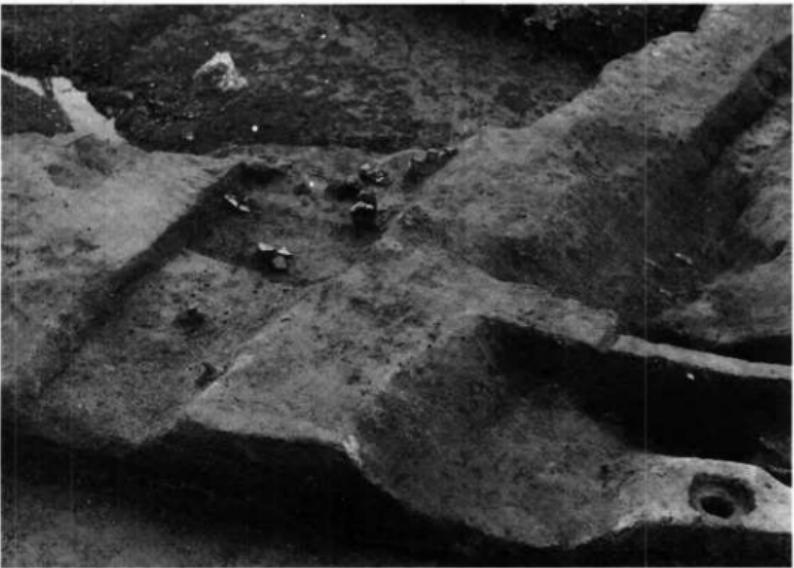
第2調査区溝・ピット検出状況（北より）

図版 30

遺構（古墳時代中期）



第2調査区溝27 遺物出土状況（南より）



第2調査区溝26 遺物出土状況（西より）



第2調査区南西部溝・ピット検出状況（北より）



第2調査区ピット33柱根検出状況（西より）



第2調査区ピット32検出状況（北より）



第2調査区掘立柱建物1柱穴（ピット32・33・35）断ち割り状況（西より）

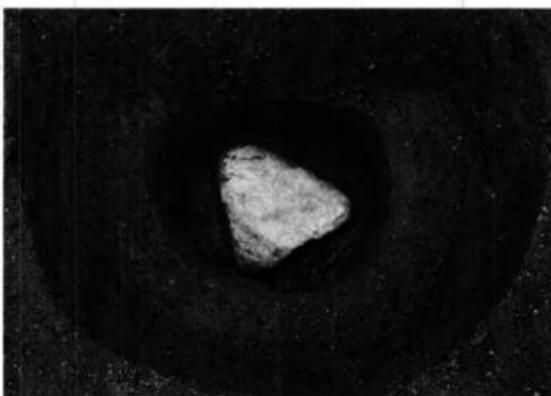


第2調査区ピット35断ち割り状況（西より）



第2調査区ピット32断ち割り状況（西より）

図版
34 遺構（古墳時代中期）



第2調査区ピット28
根石検出状況（南より）



第2調査区ピット28
検出状況（東より）



第2調査区ピット30
根石検出状況（西より）





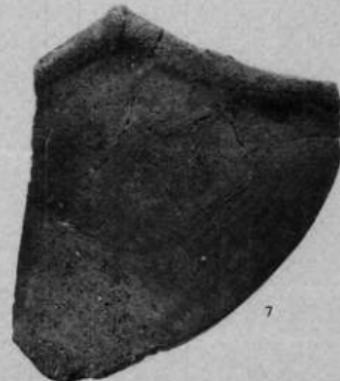
1



4

深鉢

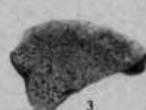
深鉢



7



6



3

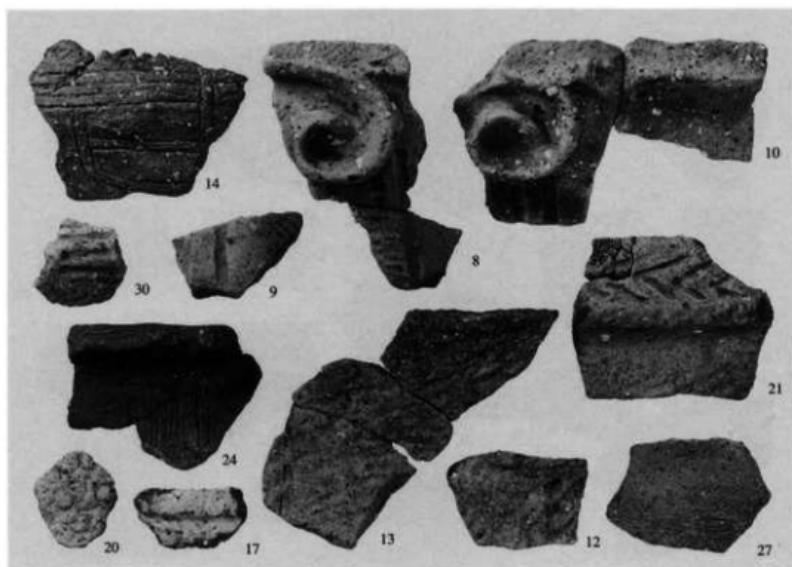


2

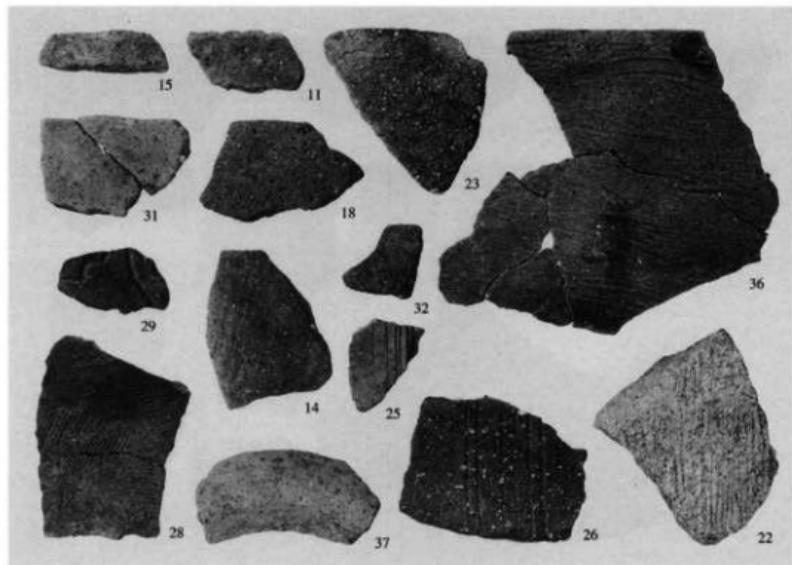


5

深鉢・浅鉢・底部

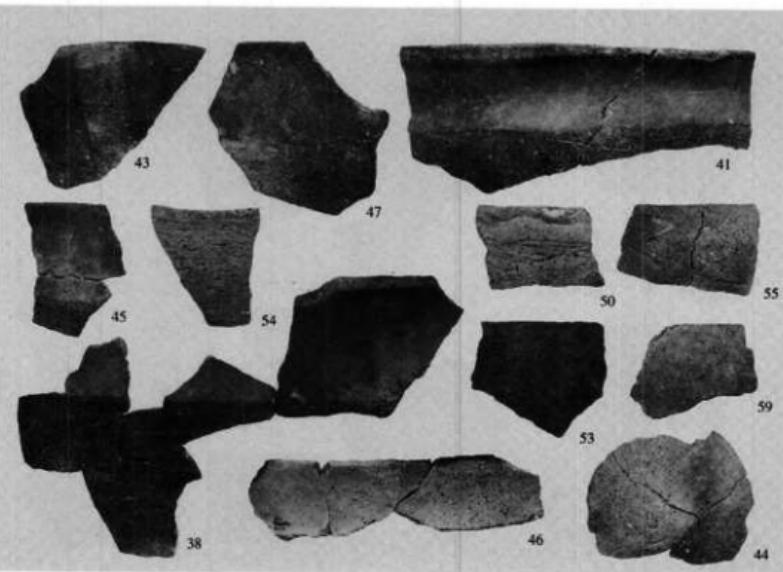


深鉢・浅鉢

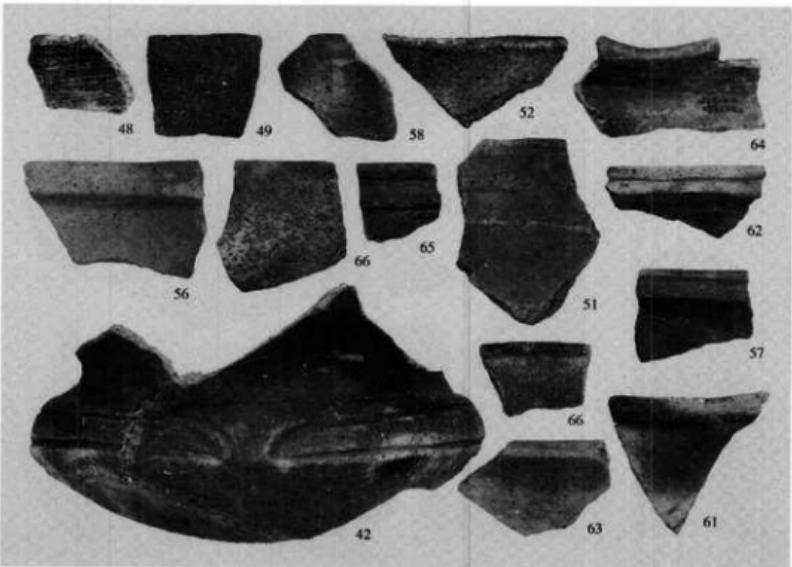


深鉢・浅鉢・底部

圖版 38
遺物（繩文 IV）



深鉢・浅鉢・底部

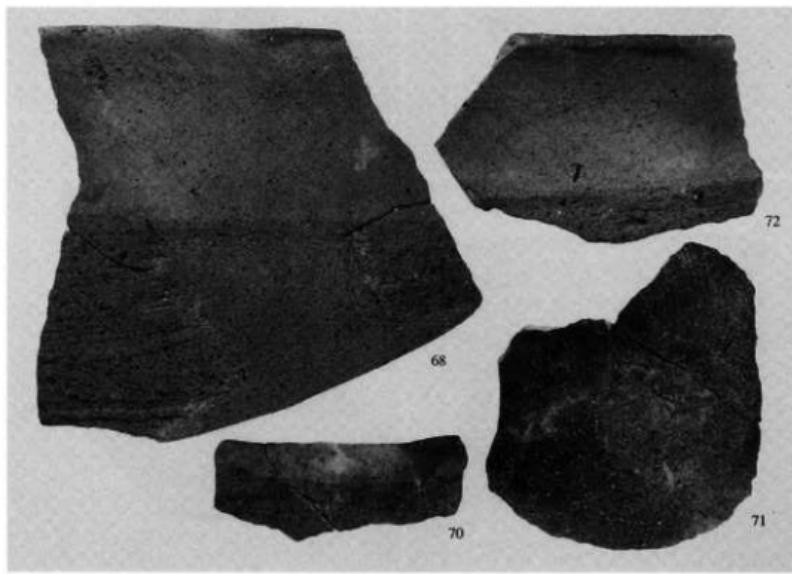


深鉢・浅鉢

図版39 遺物（縄文IV・III）

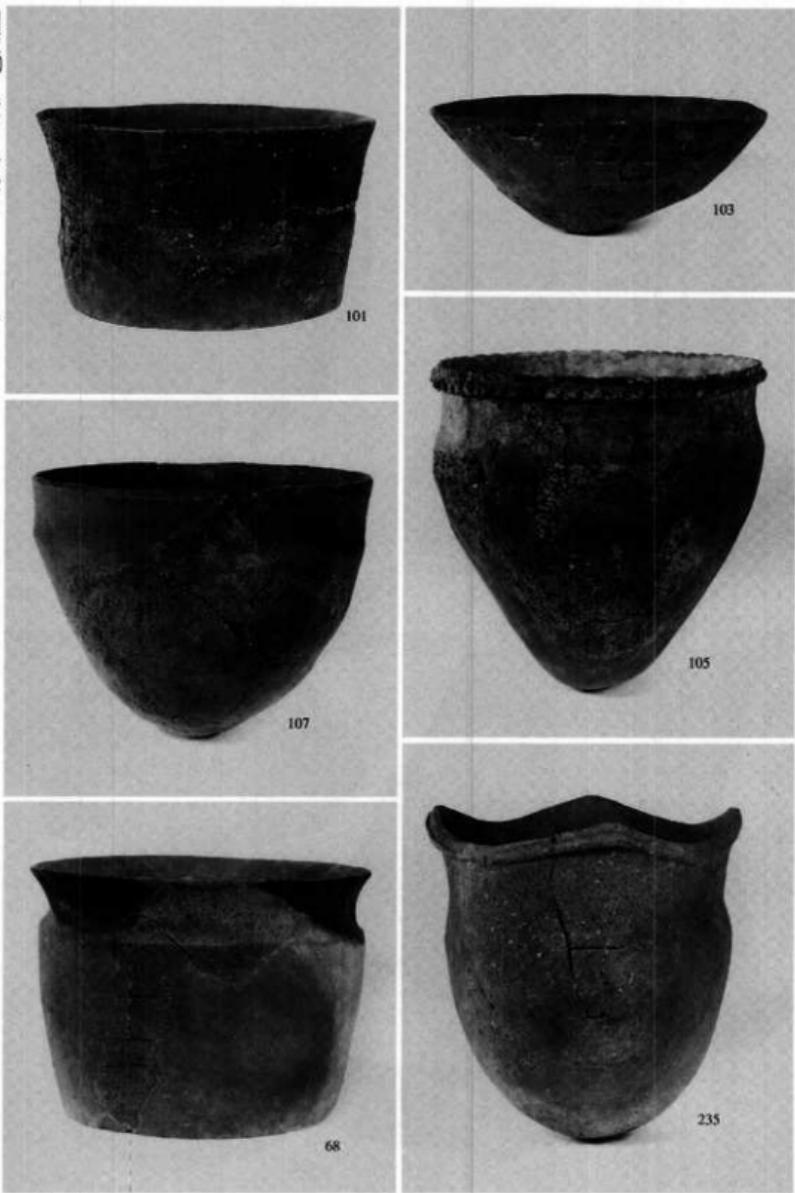


深鉢



深鉢・底部

図版40
遺物（縄文IV・III・II）



深鉢（68・101・105・107・235）浅鉢（103）



239



133



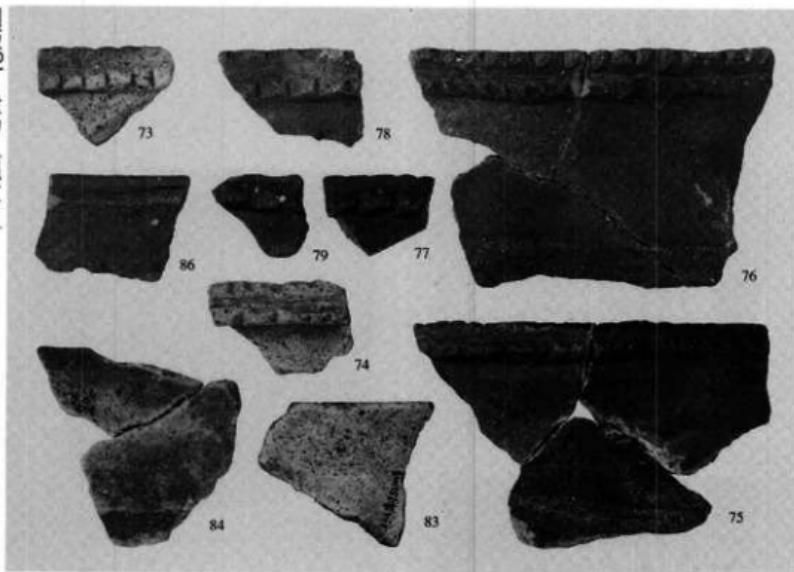
243



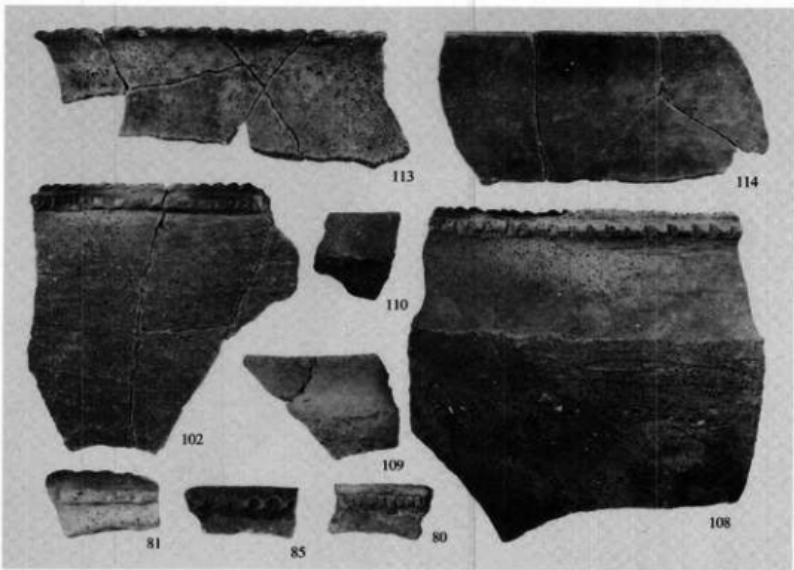
249



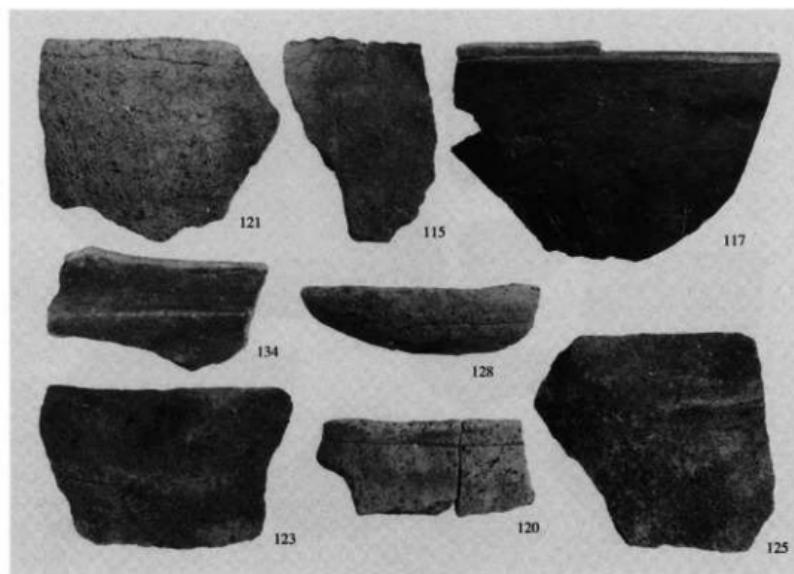
248



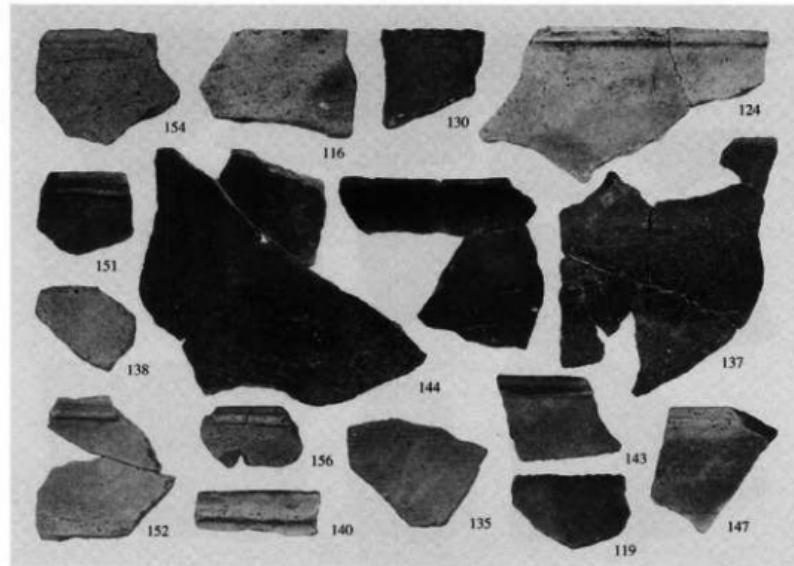
深鉢・浅鉢



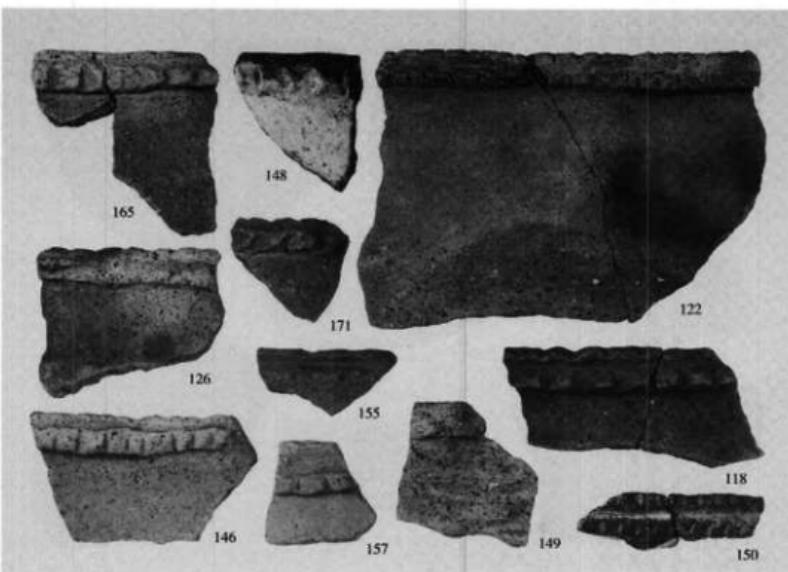
深鉢・浅鉢



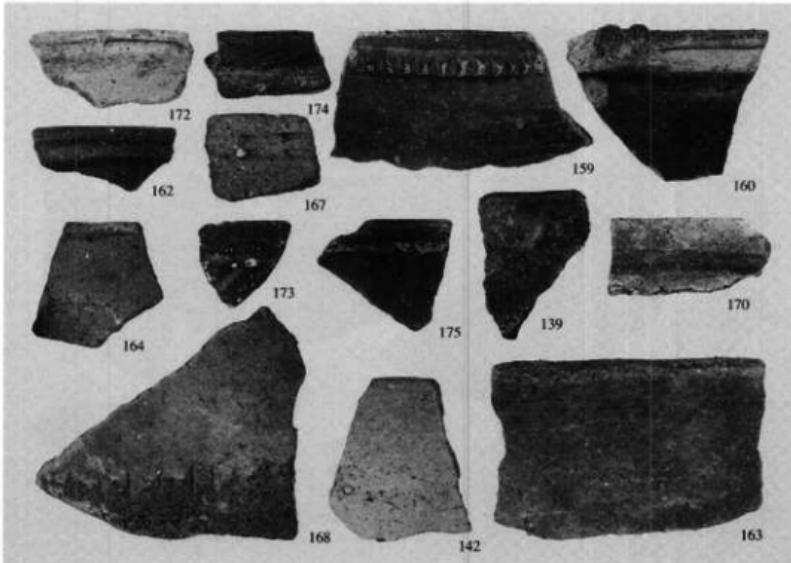
深鉢・浅鉢



深鉢・浅鉢

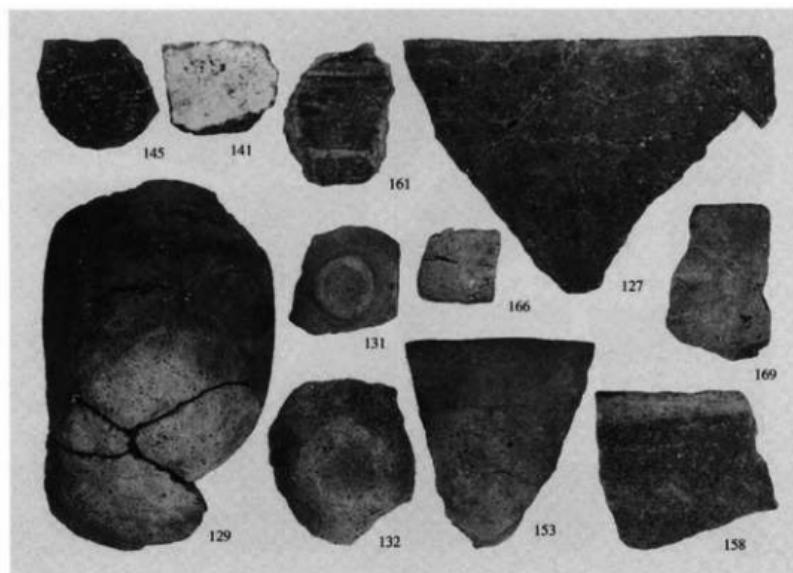


深鉢・浅鉢

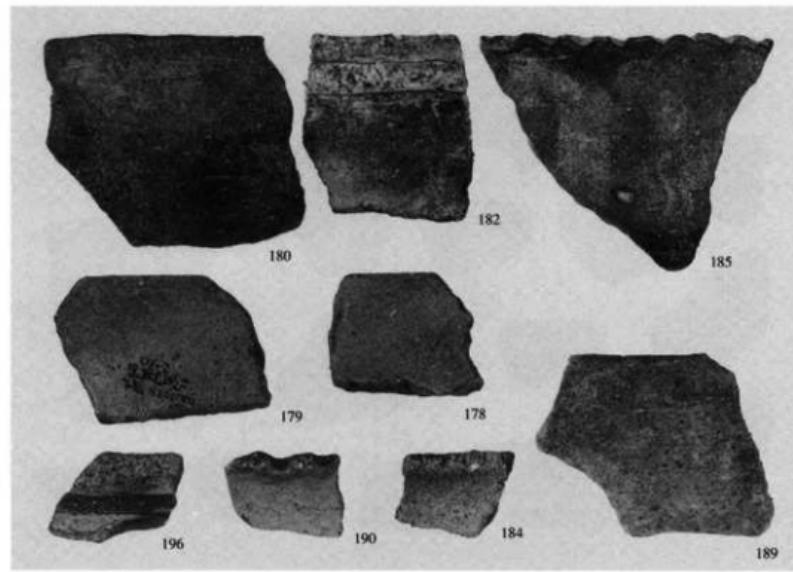


深鉢・浅鉢

図版45 遺物（縄文III）



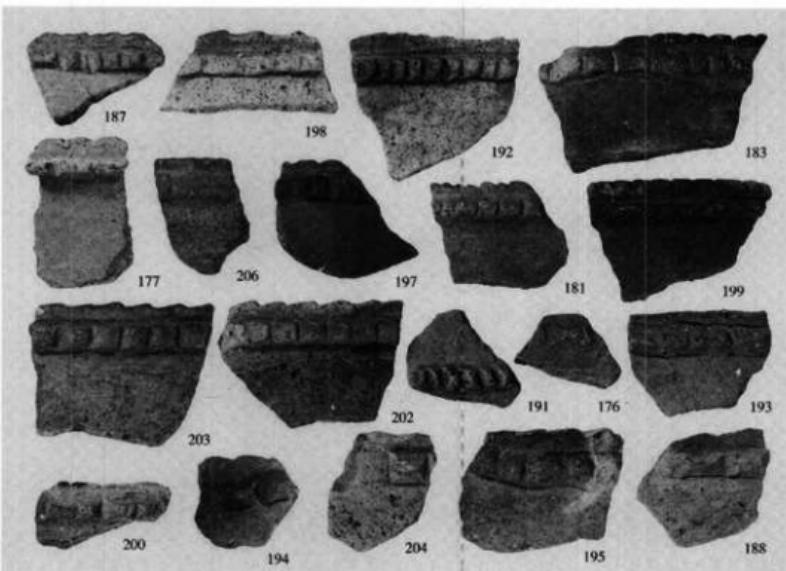
深鉢・浅鉢・底部



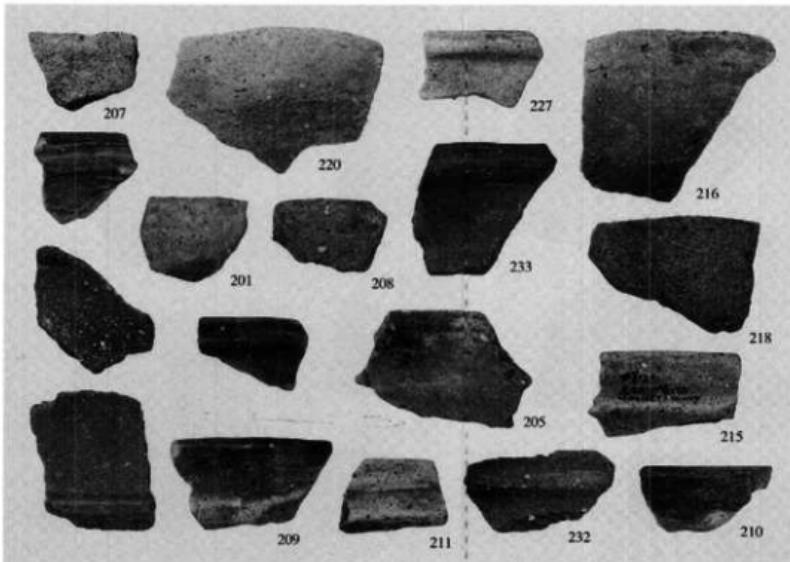
深鉢・浅鉢

図版
46

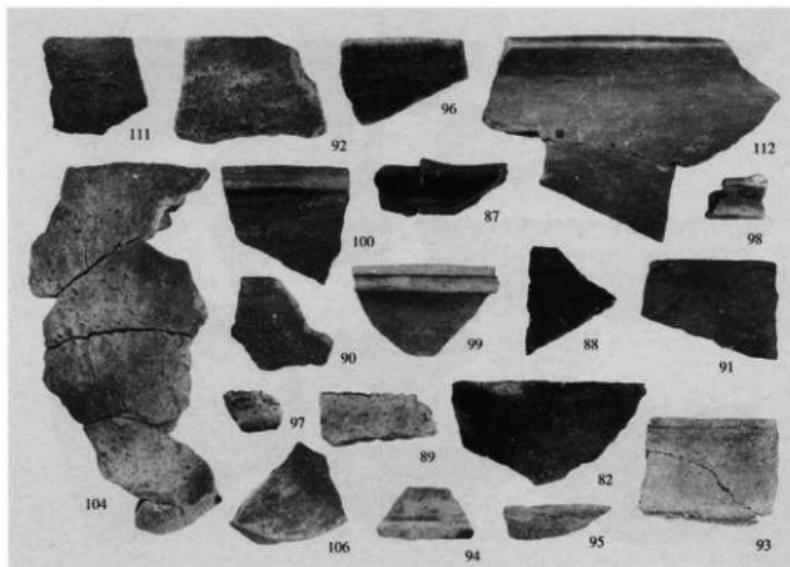
遺物
(縄文Ⅲ)



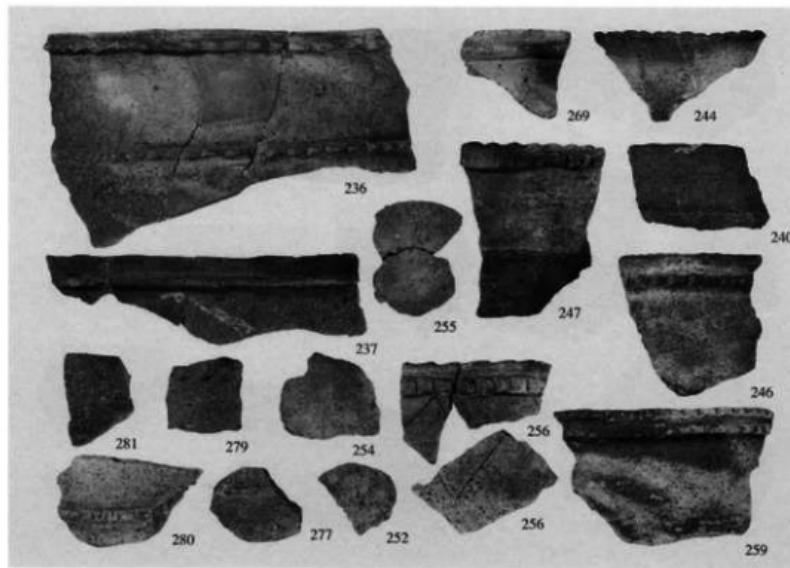
深鉢・浅鉢



深鉢・浅鉢

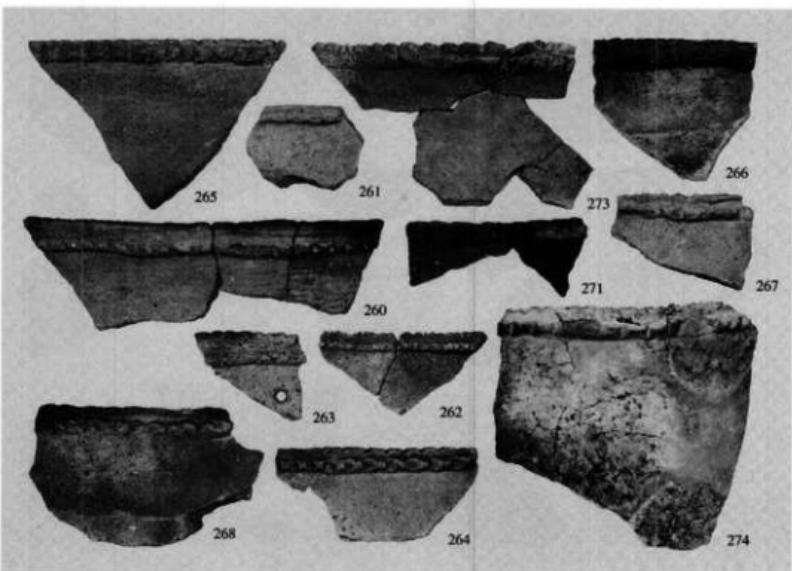


深鉢・浅鉢・底部

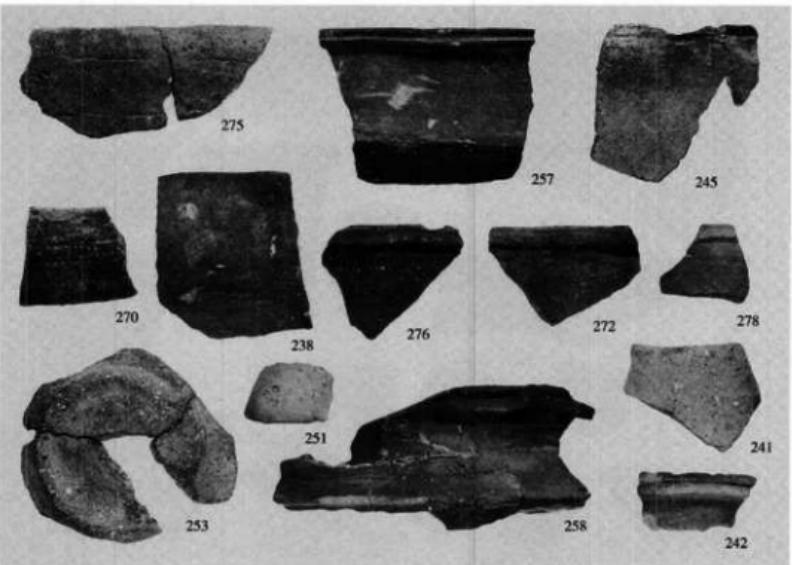


深鉢・浅鉢・底部

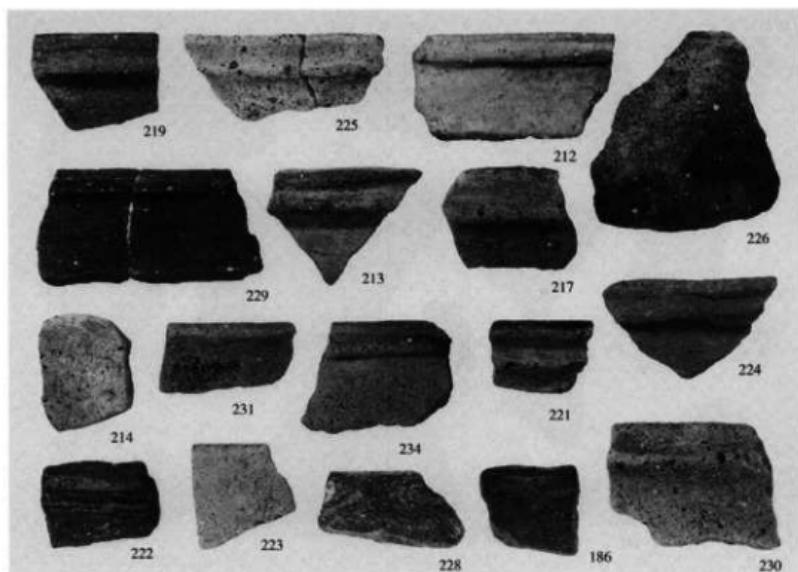
図版48
遺物（縄文II）



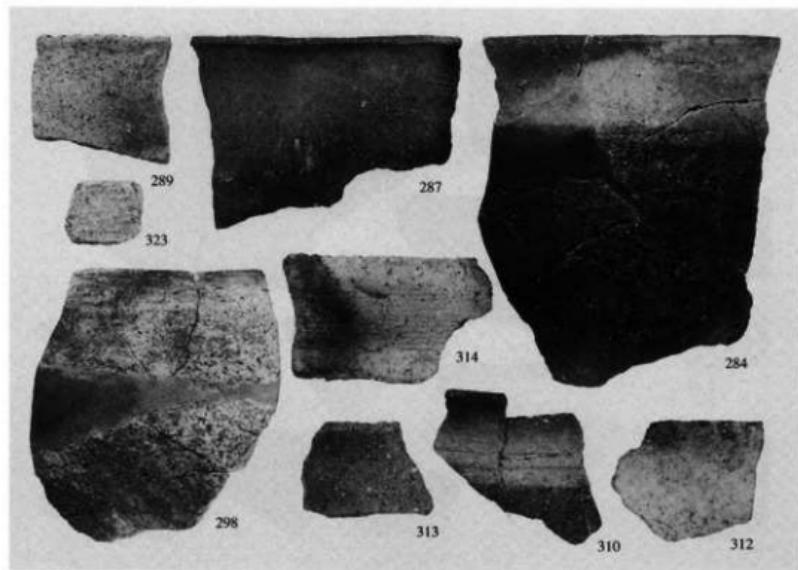
深鉢



浅鉢・底部

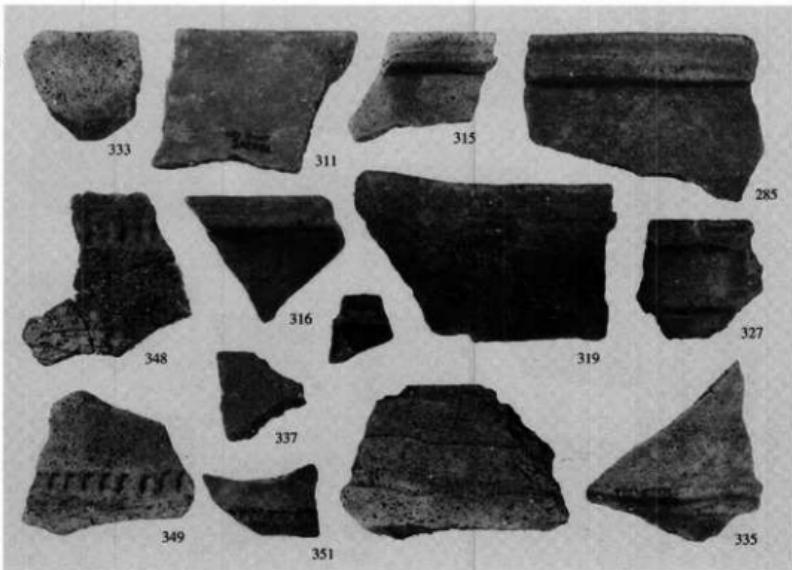


深鉢・浅鉢・底部

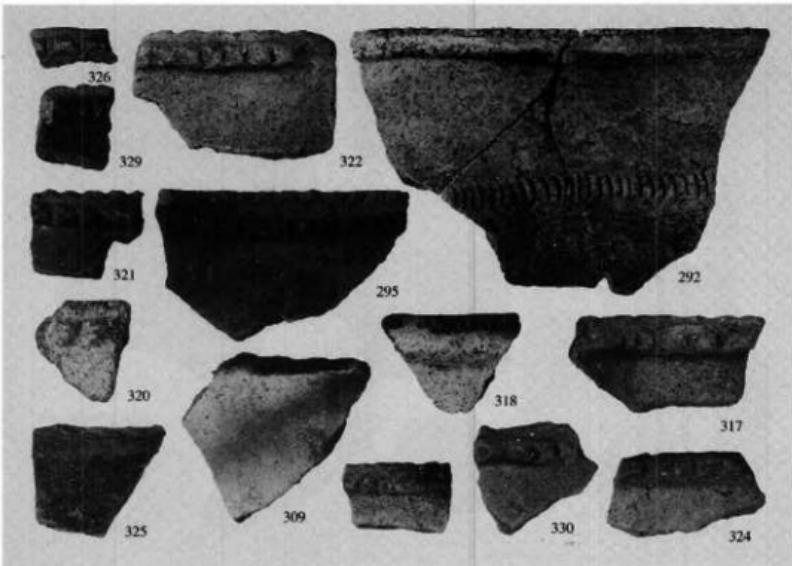


深鉢・浅鉢

図版50
遺物（縄文II）

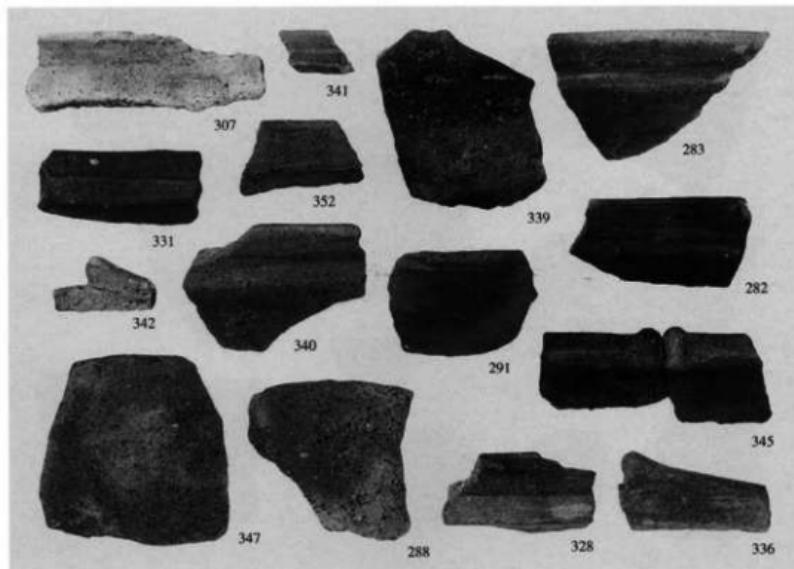


深鉢・浅鉢

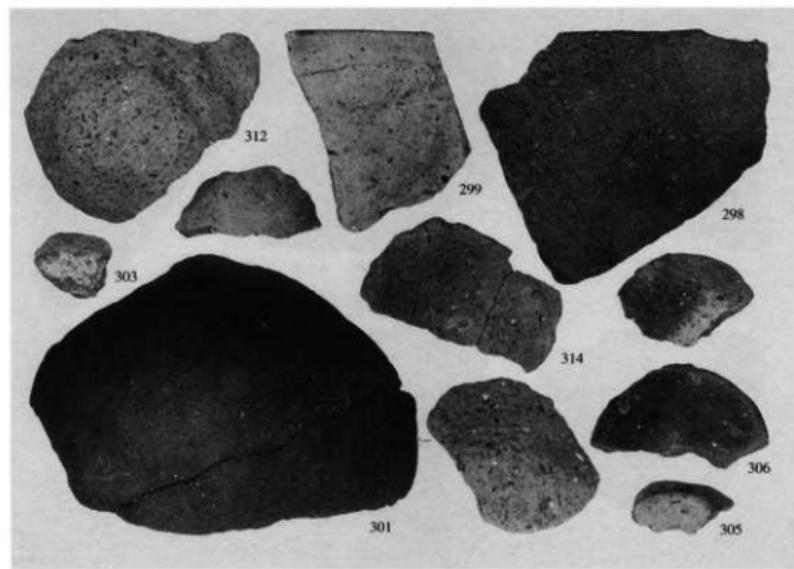


深鉢・浅鉢

図版 51 遺物（縄文 II）

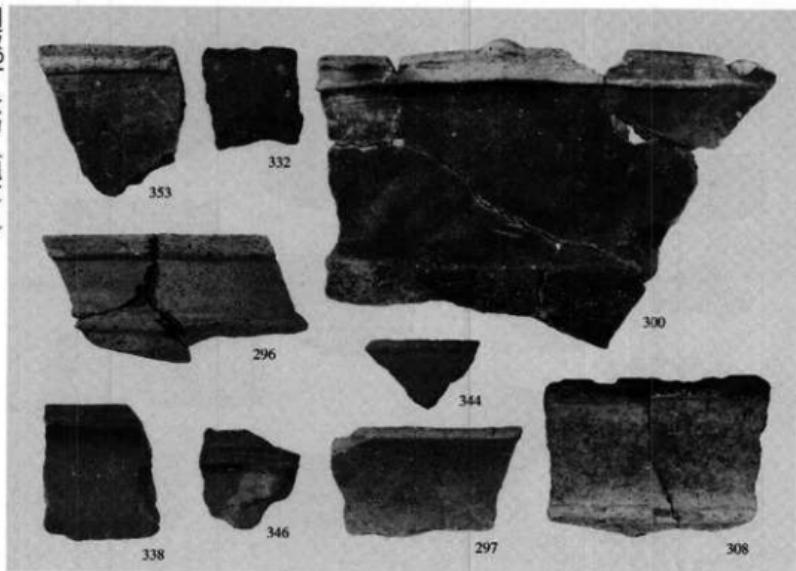


浅鉢

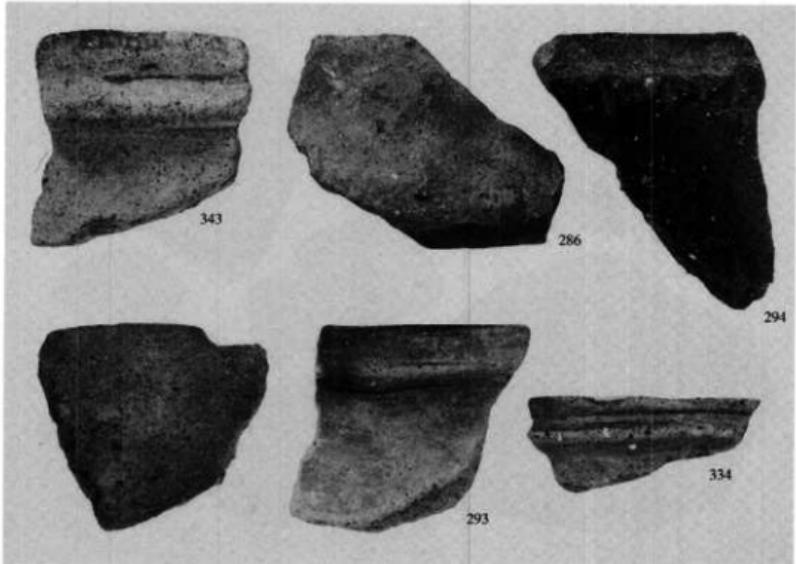


深鉢・底部

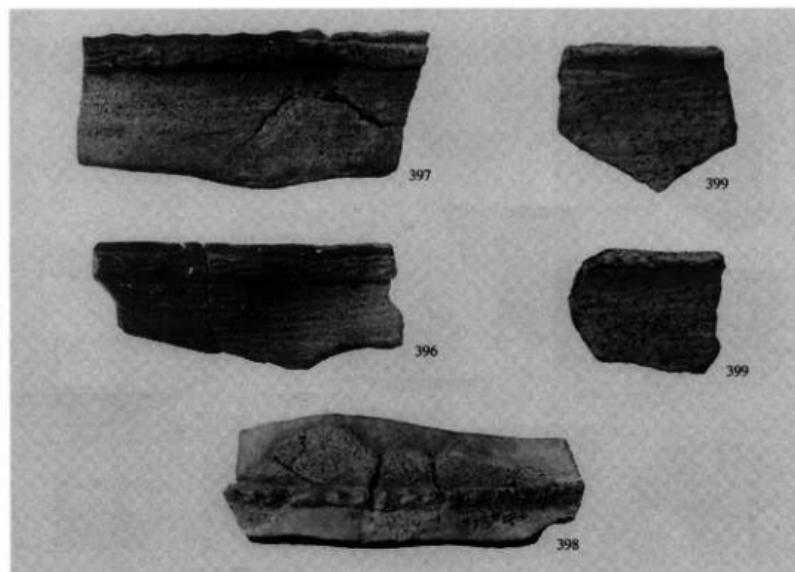
図版 52
遺物（縄文 II）



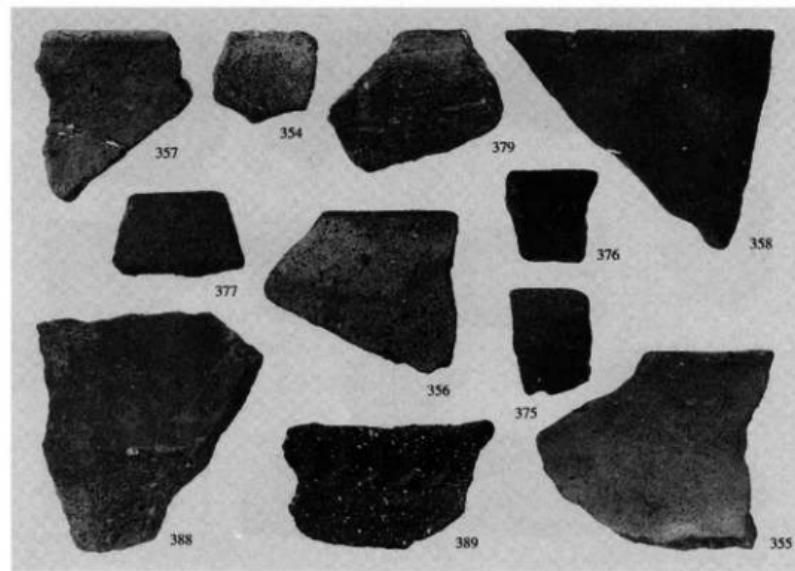
浅鉢



浅鉢・壺

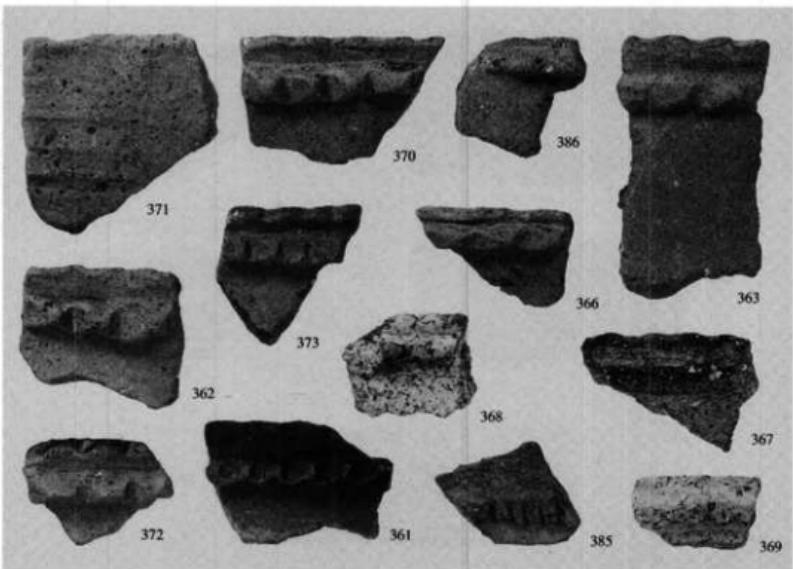


深鉢（東海地方系）

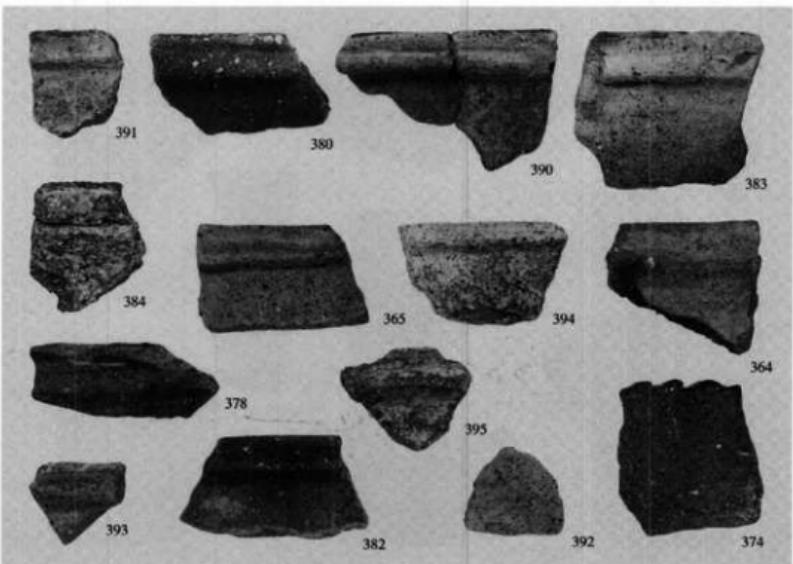


深鉢・浅鉢

図版 54 遺物（縄文 I）

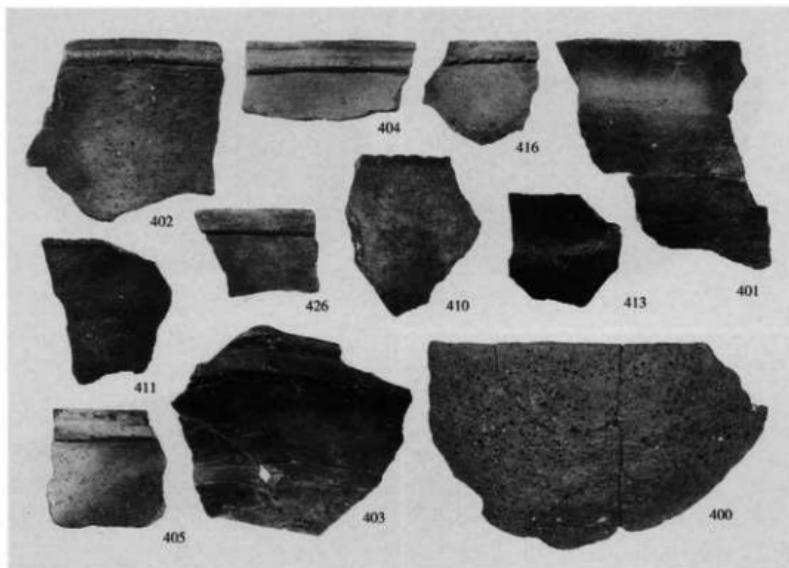


深鉢・浅鉢

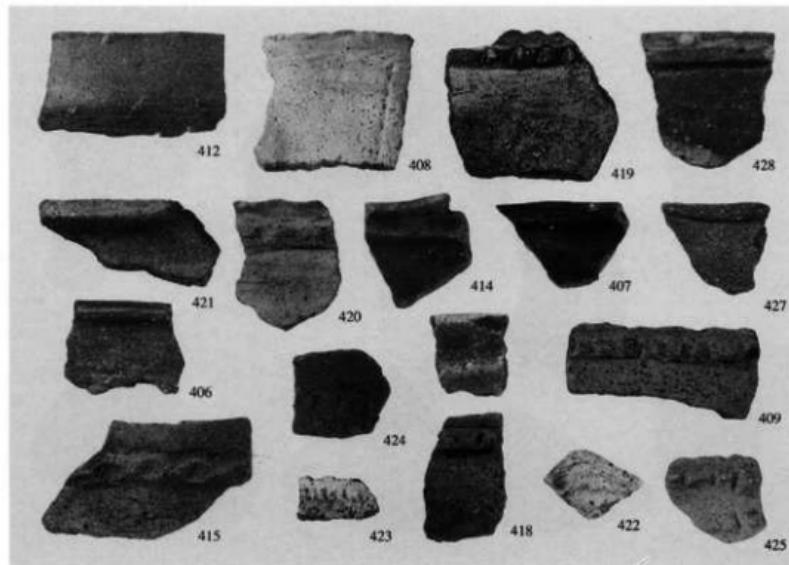


深鉢・浅鉢・蓋 (392)

図版55 遺物（縄文時代晩期・土器）

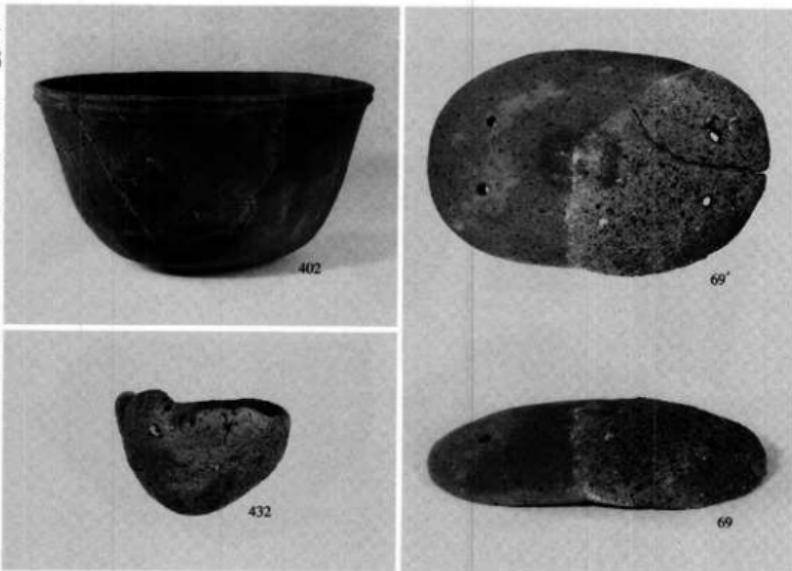


深鉢・浅鉢（攪乱出土）

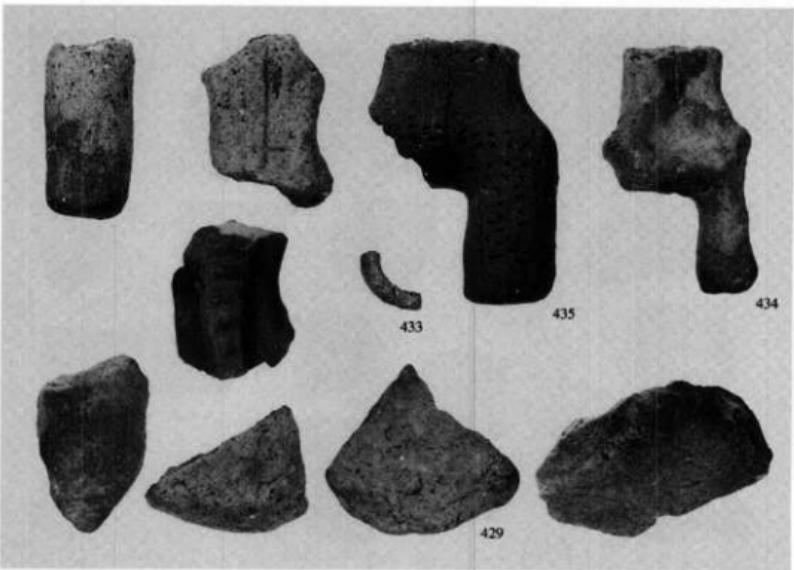


深鉢・浅鉢（攪乱出土）

図版 56
遺物（縄文時代晩期・土製品）

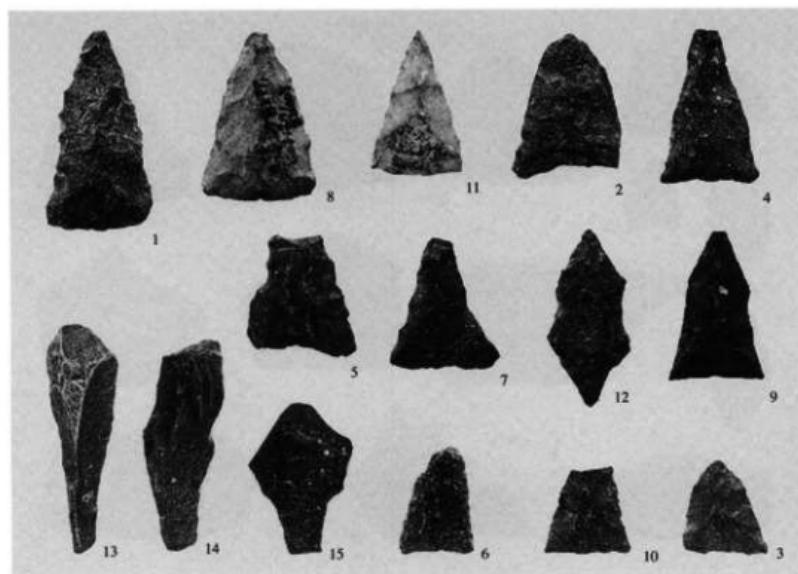


浅鉢・ミニチュア鉢・蓋

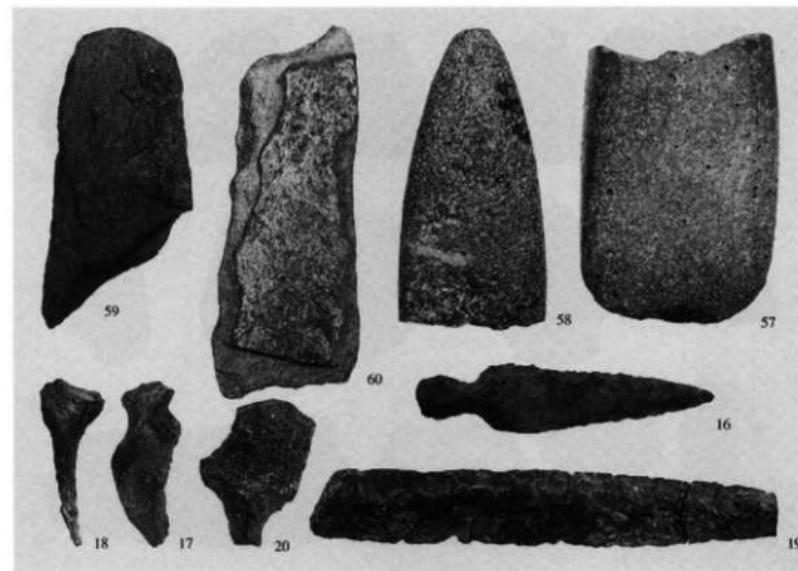


土偶・土製品

図版 57 遺物（石製品）

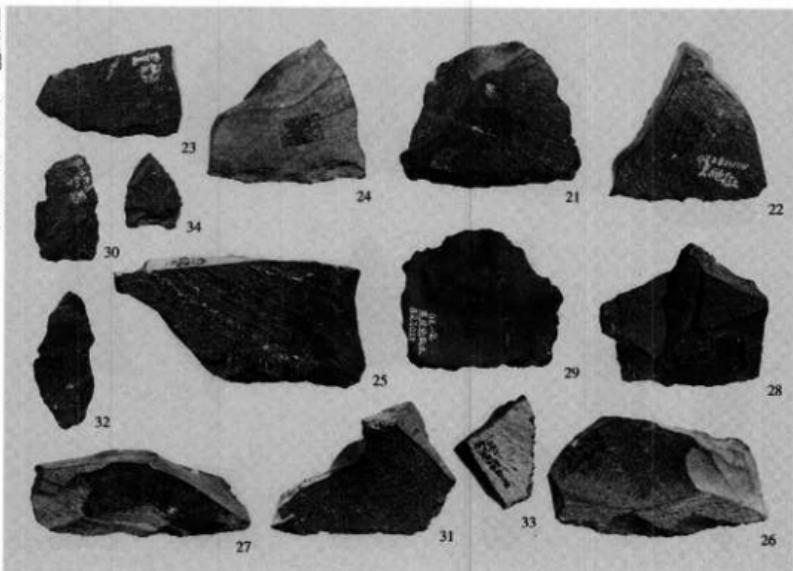


石鏃・石鋸

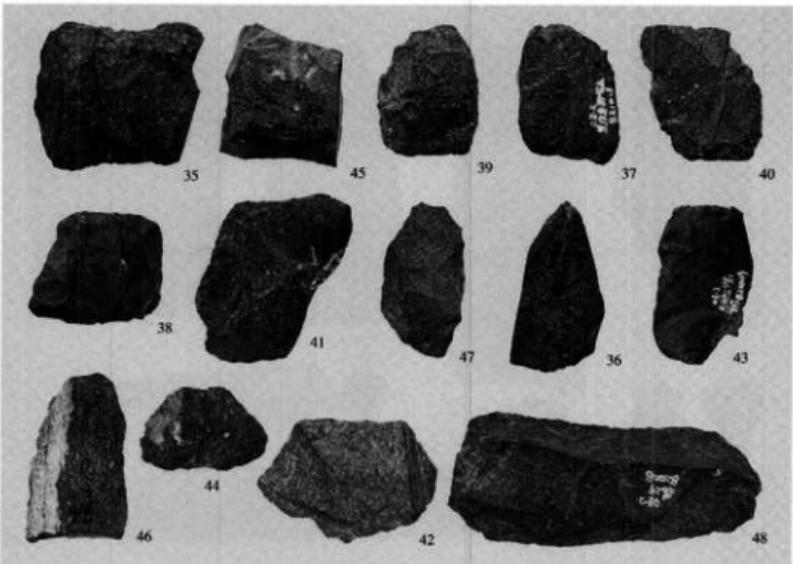


磨製石斧・打製石斧・石鎌・石匙・打製石劍・打製尖頭器

図版 58
遺物（石製品）

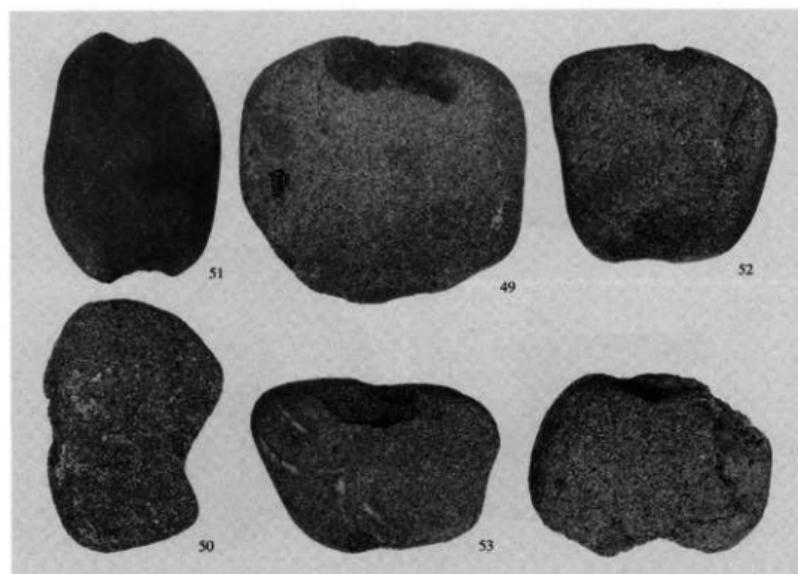


直刃削器他

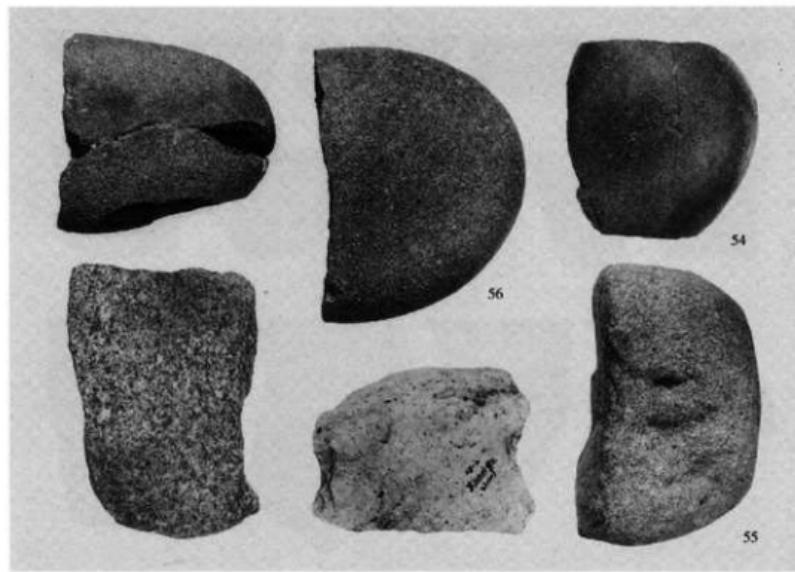


ピエス・エスキーエ他

図版59 遺物（石製品）

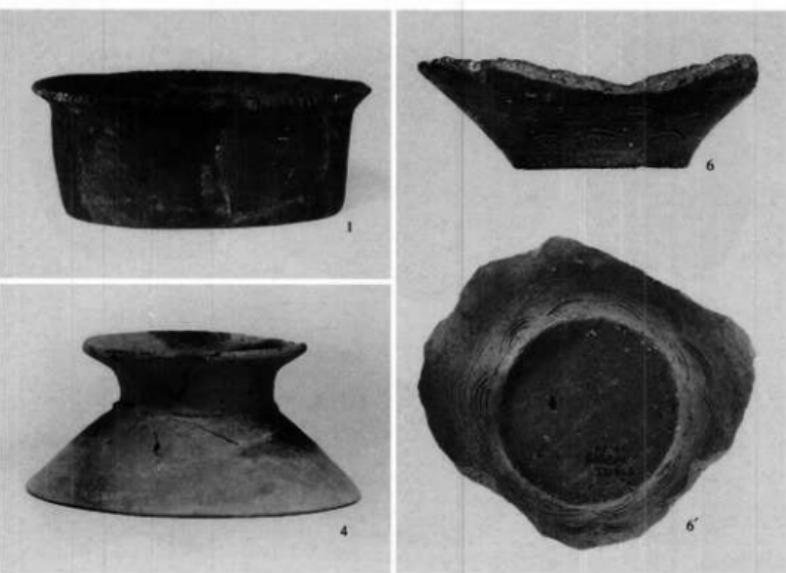


石錐

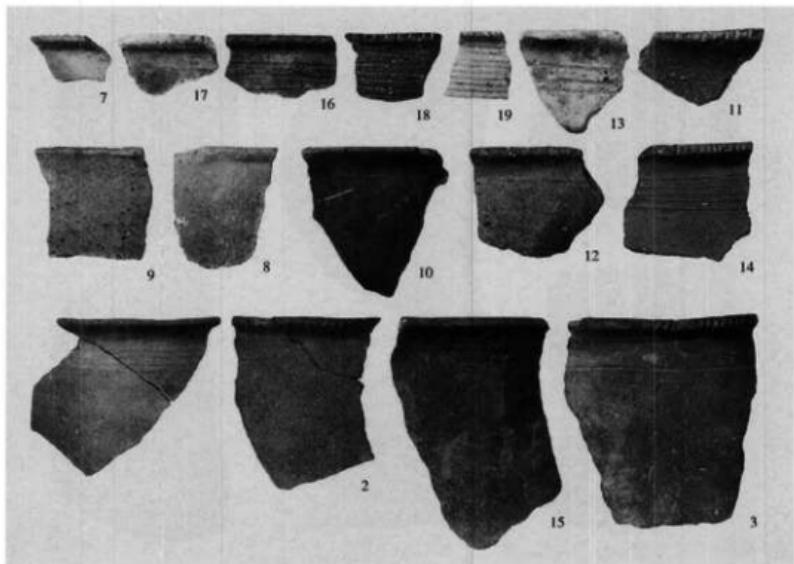


磨石・敲石

図版60
遺物（弥生時代前期・土器）

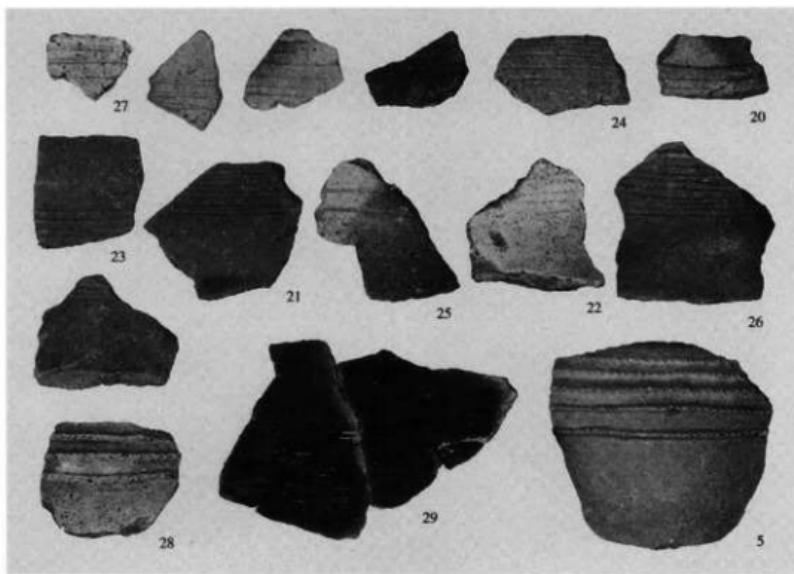


壺・甌・壺底部

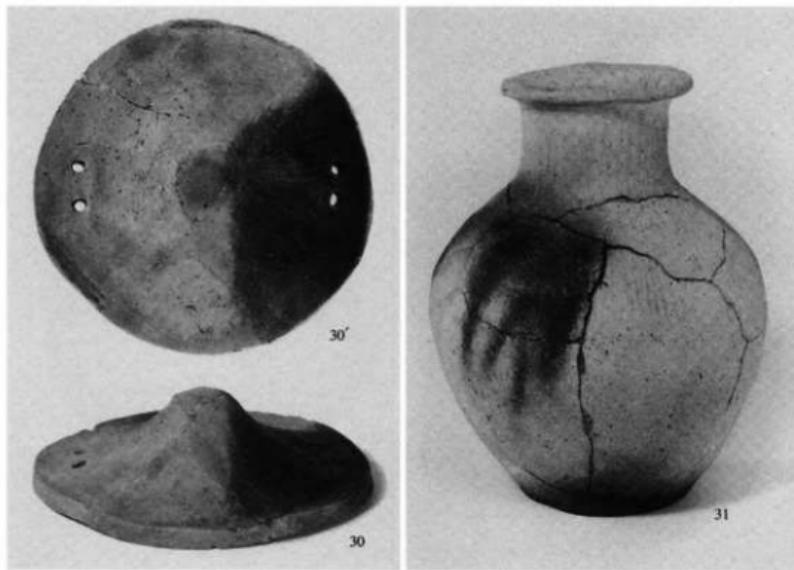


甌

図版61 遺物（弥生時代前期～中期・土器）



壺

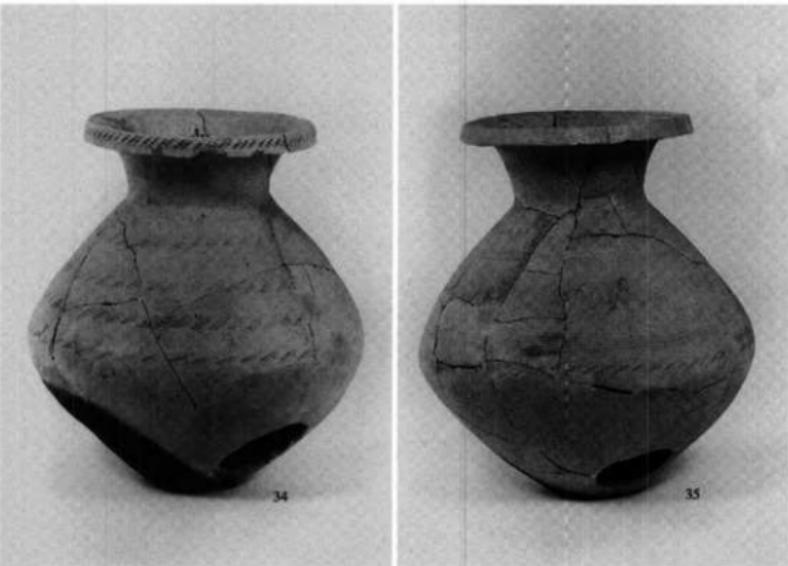


蓋・壺



32

33



34

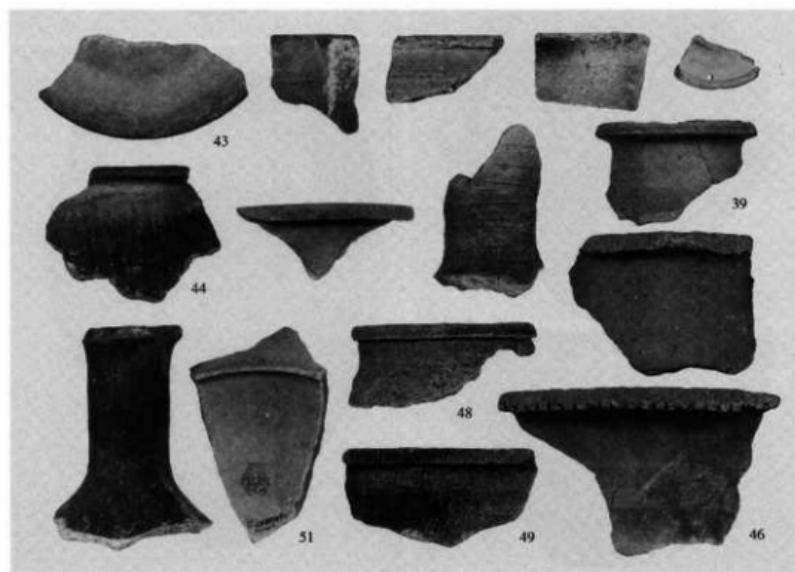
35

壺

圖版 63 遺物（弥生時代中期・土器）



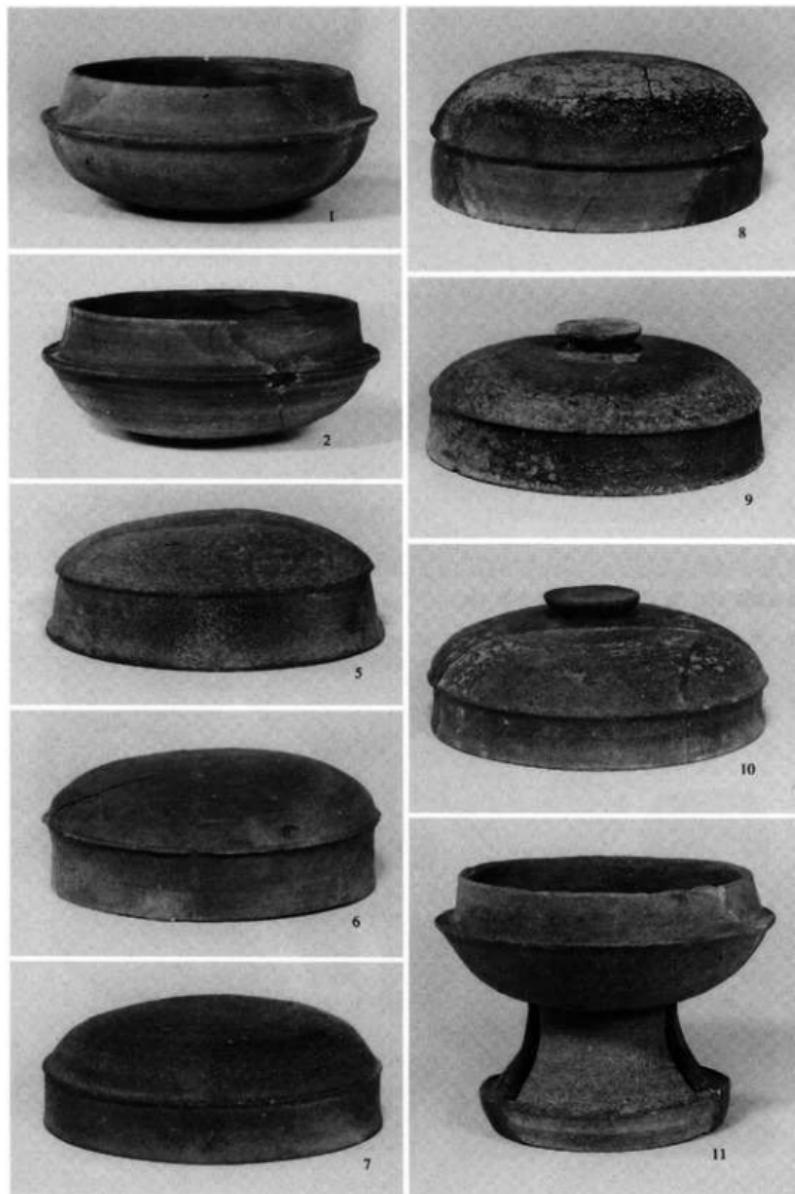
壺



壺・甕・高杯

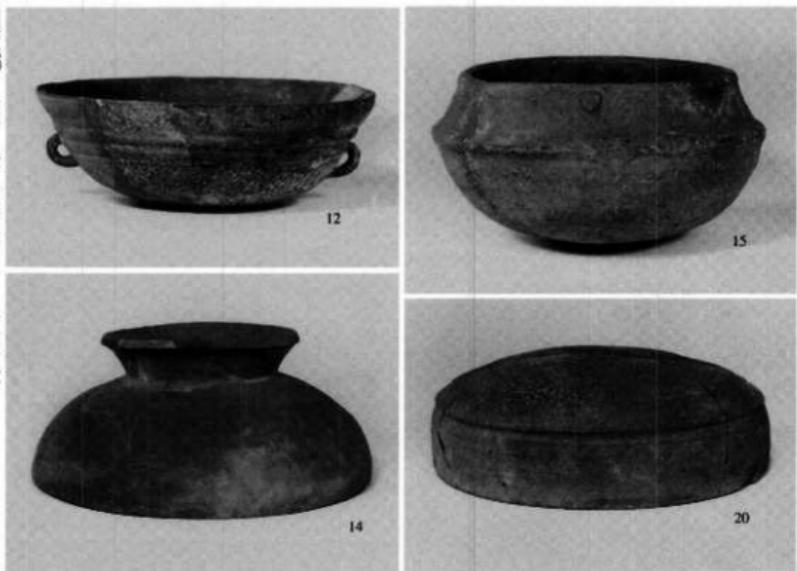


蓋（38）壺（40・41・52）壺（42）鉢（50）

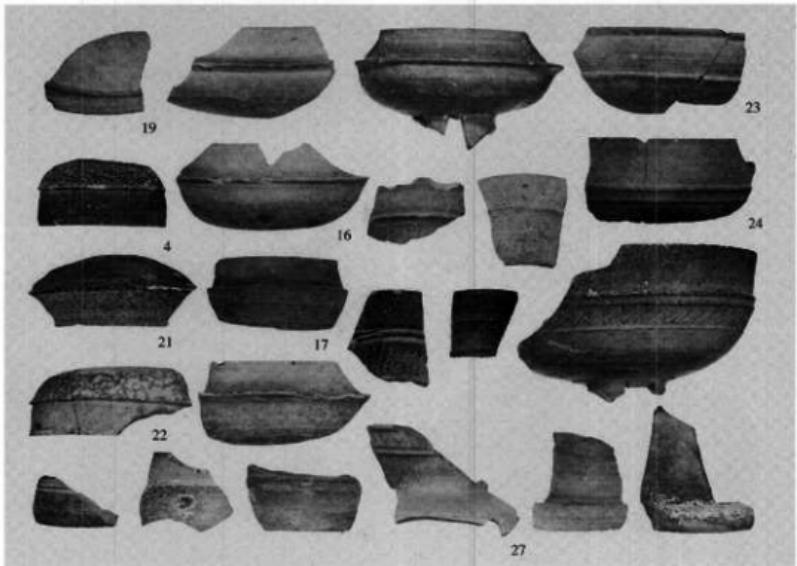


杯（1・2）杯蓋（5～7）有蓋高杯蓋（9・10）有蓋高杯（11）

圖版 66
遺物（古墳時代中期・須恵器）



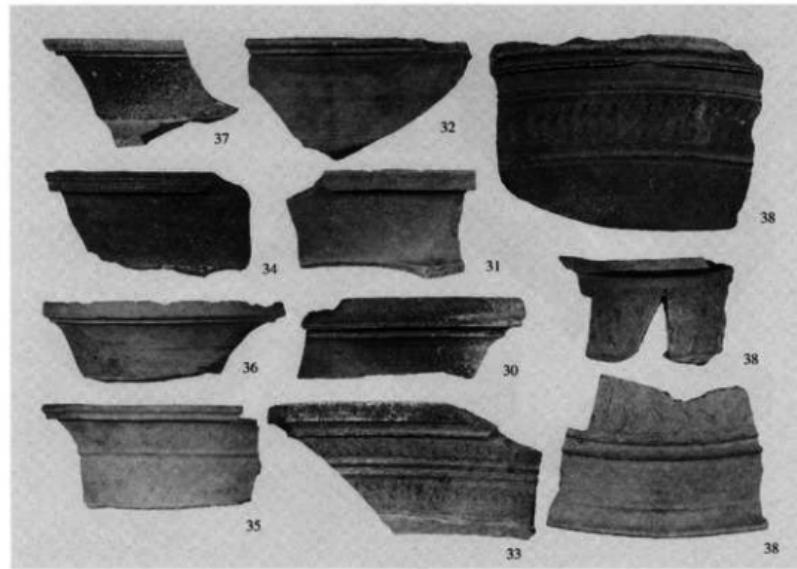
無蓋高杯（12）壺（14）杯身（15）杯蓋（20）



有蓋高杯・壺・高杯・杯身・杯蓋

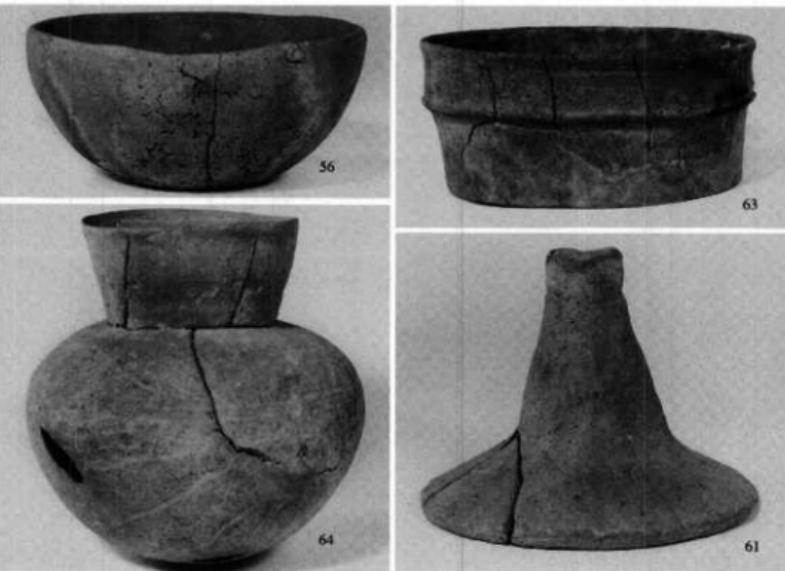


高杯（25）有蓋高杯（26）壺（28）

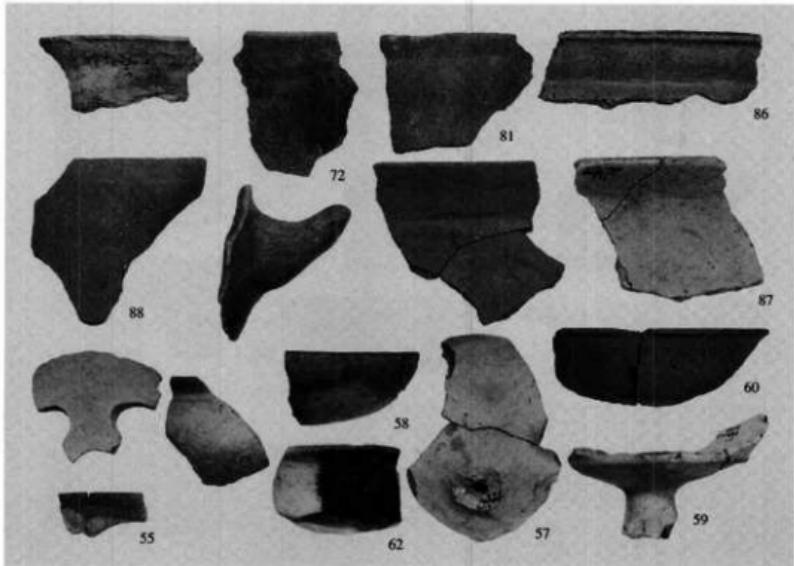


壺・壺・器台

圖版 68
遺物（古墳時代中期・土師器）

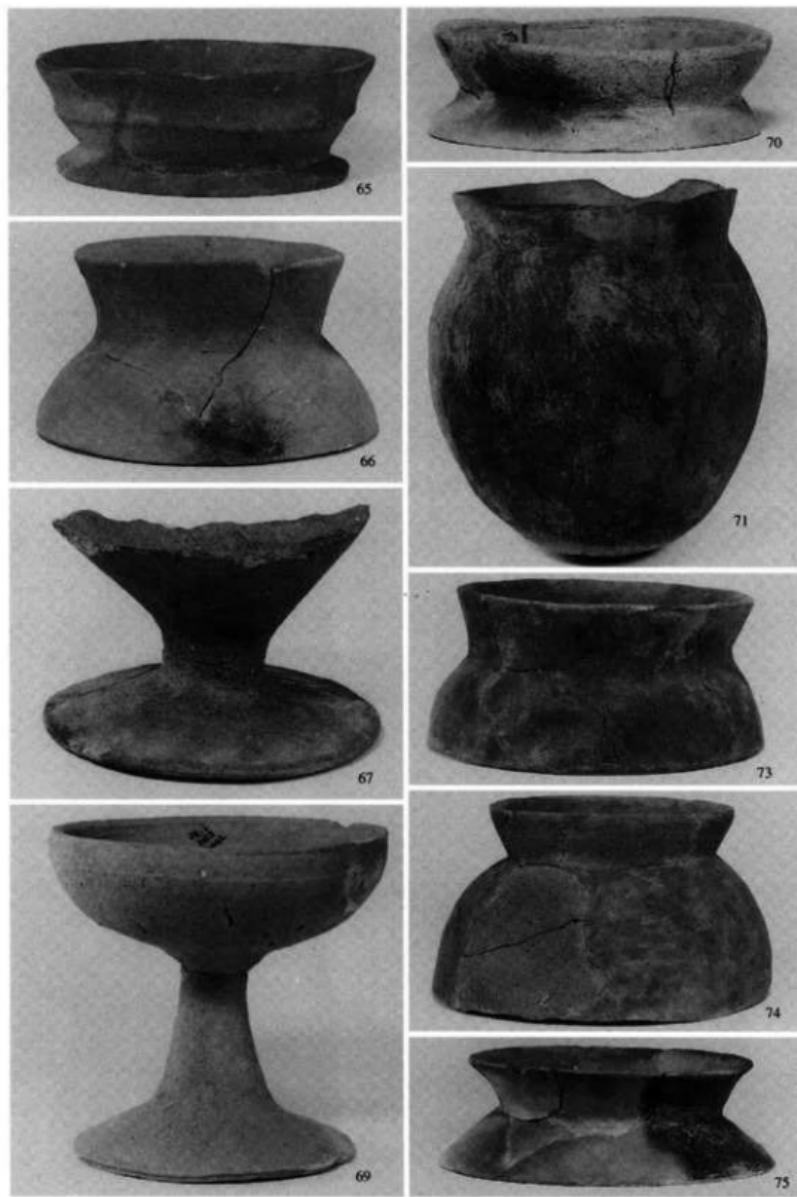


鉢 (56) 壺 (64) 壺 (63) 高杯 (61)



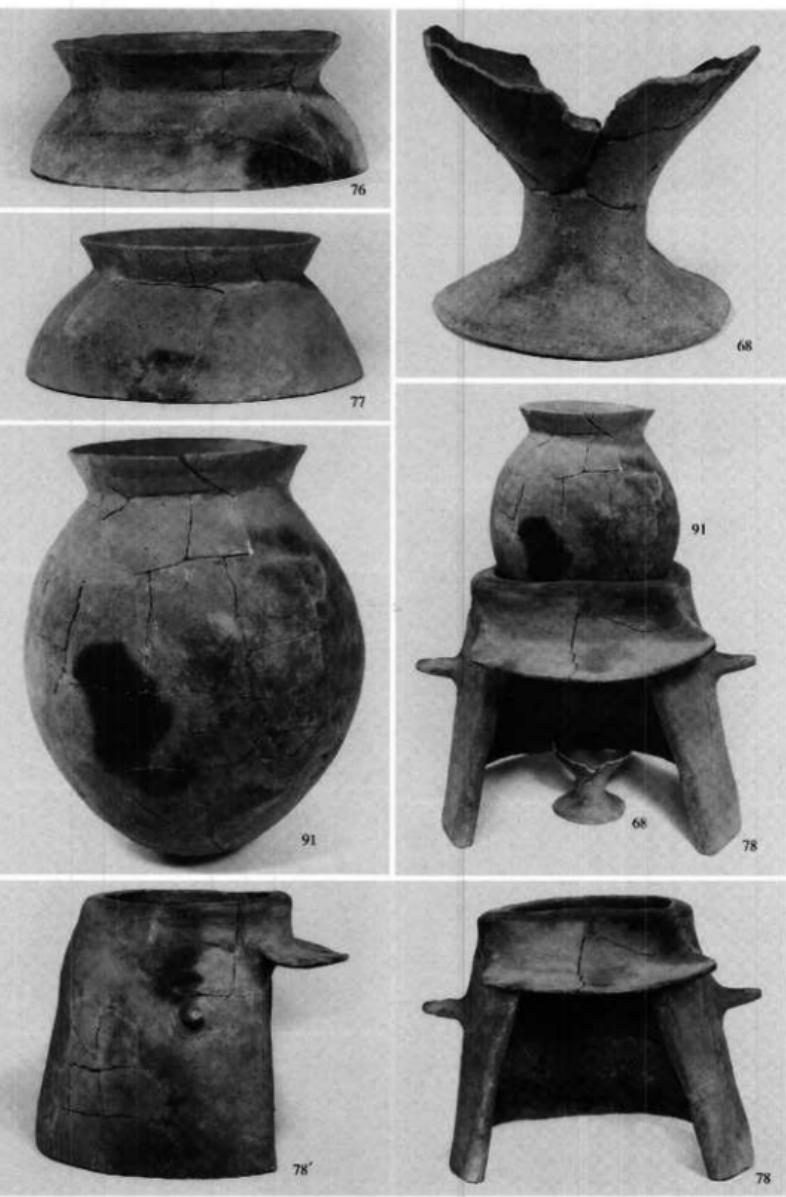
壺・高杯・他

図版69 遺物（古墳時代中期・土師器）



壺（65・66）甕（70・71・73・74・75）土製支脚（67）高杯（69）

図版70 遺物（古墳時代中期・土師器）

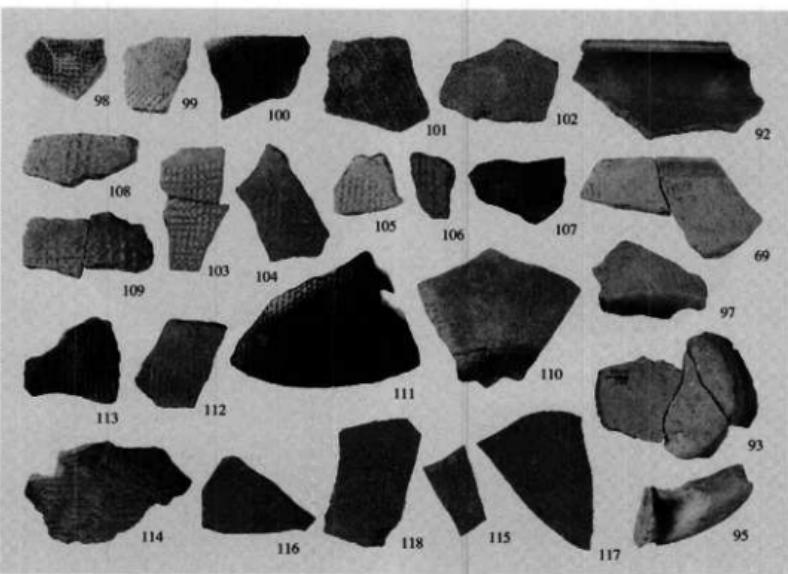


壺（76・77・91）土製支脚（68）移動式壺（78）

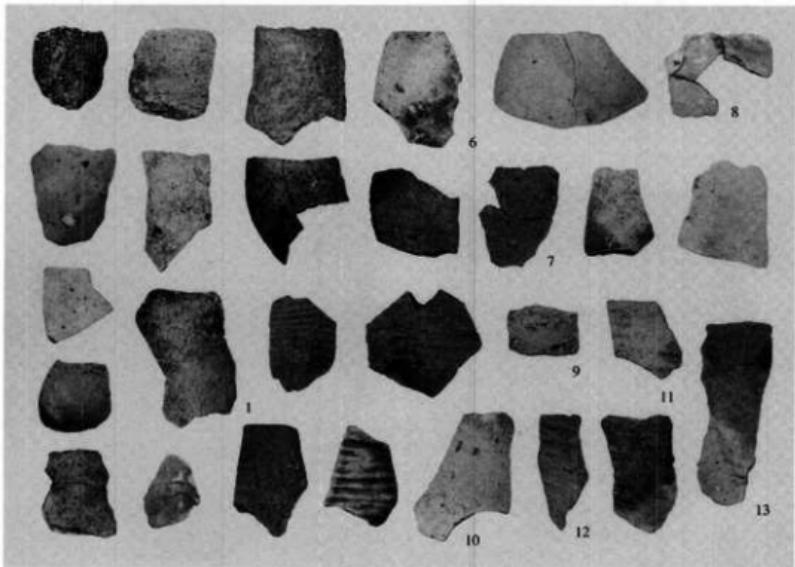


甕 (79・82~85・90)

図版72
遺物（古墳時代中期・土器類）



韓式系土器甕他



製塙土器



15



14



17



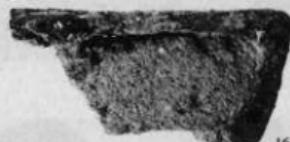
17'



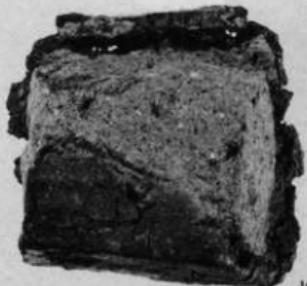
15'



18'



16'



16



18



16'

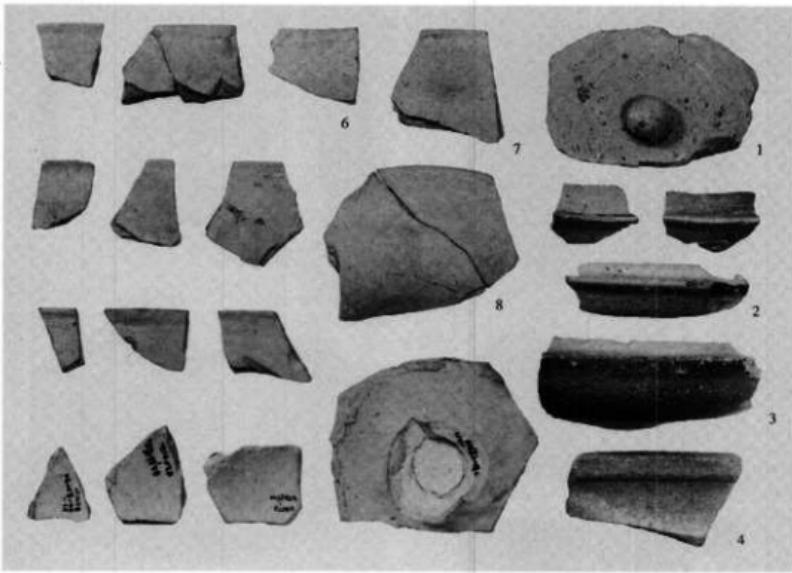


5

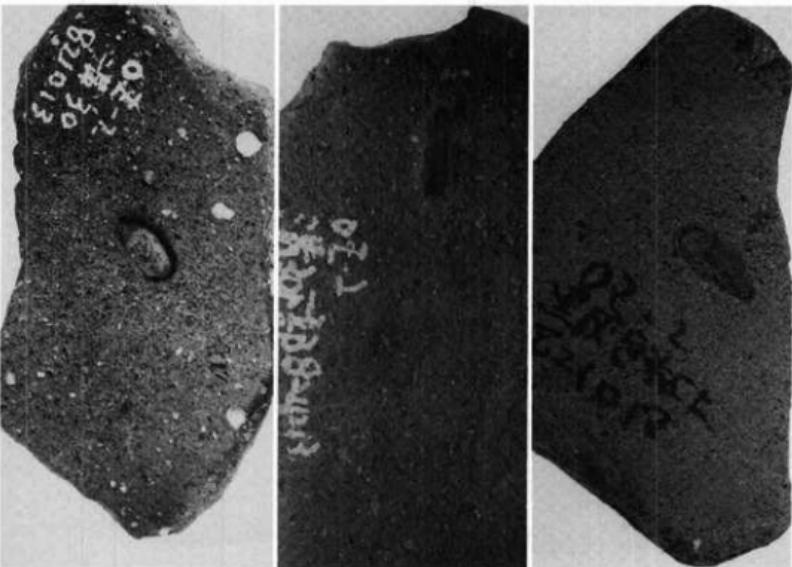
土製紡錘車 (15) 鋳造鉄斧 (16) 土錐 (14) 滑石製双孔円板 (17) 軸羽口 (18) 須恵器鉄体 (5)

図版74

遺物（縄文Ⅲ～Ⅱ、飛鳥時代・土器他）



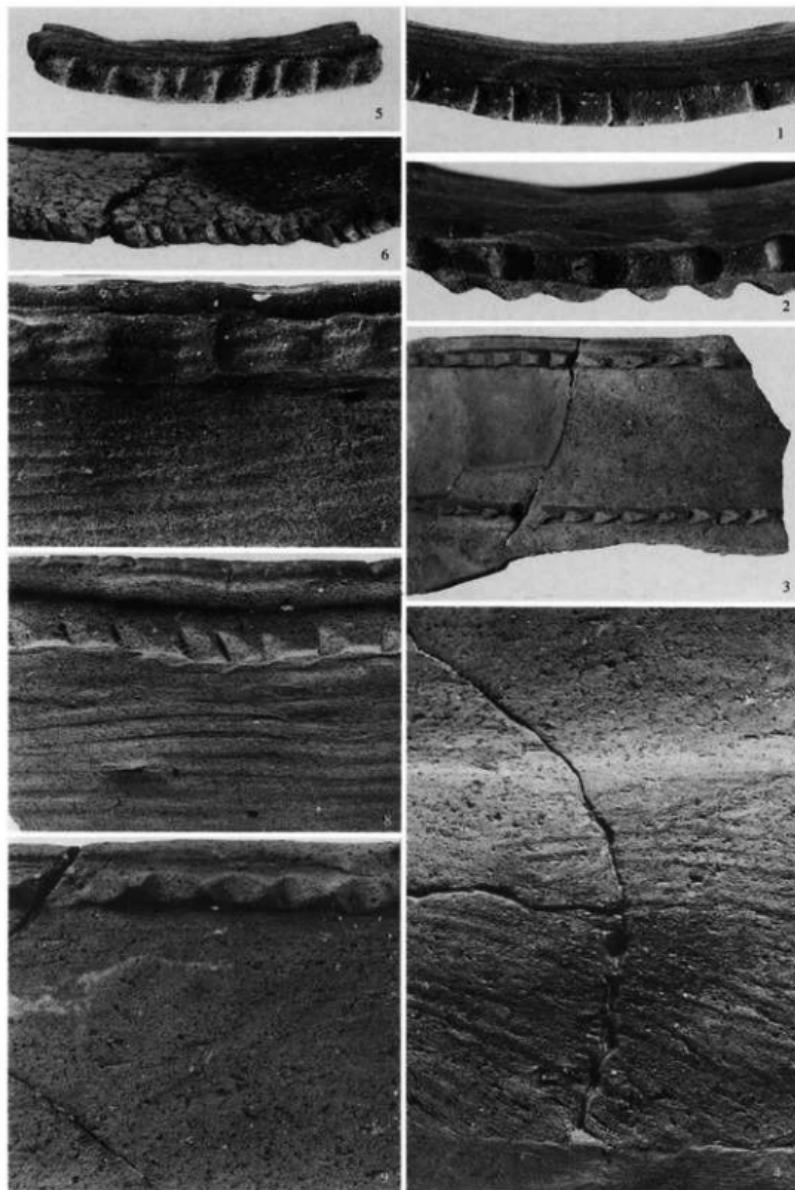
須恵器杯身・杯蓋・壳、土師器他



緑豆の半割れ

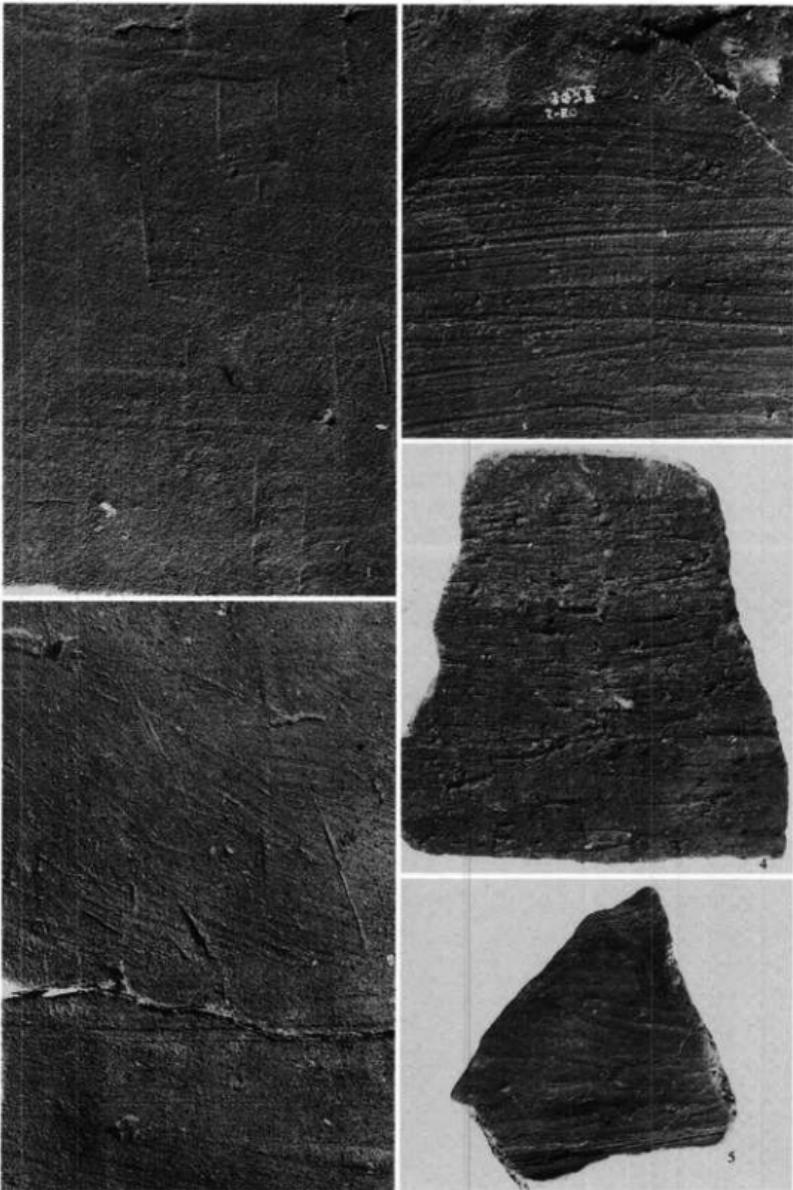
米（玄米）圧痕

米（玄米）圧痕

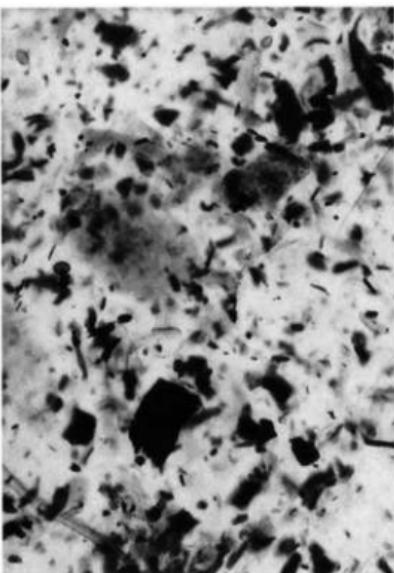
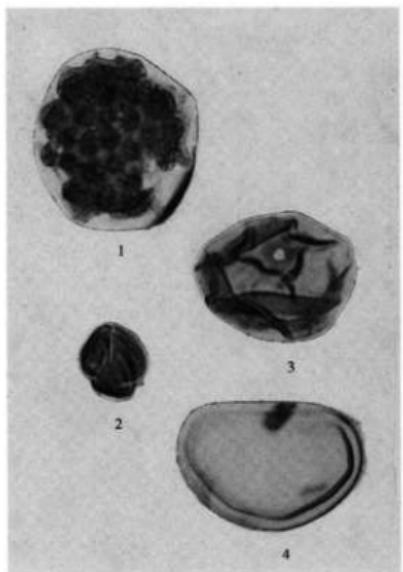


口縁端部の刻目 (1・2・5・6) 1条凸帯の刻目 (7・8・9)
2条凸帯の刻目 (3) 体部の二枚貝調整 (4)

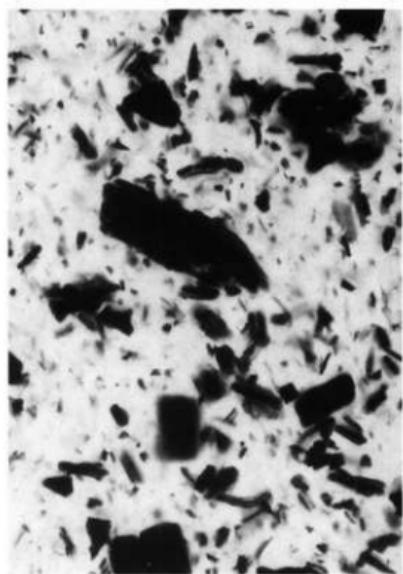
図版76 遺物（縄文時代晩期・土器の調整）



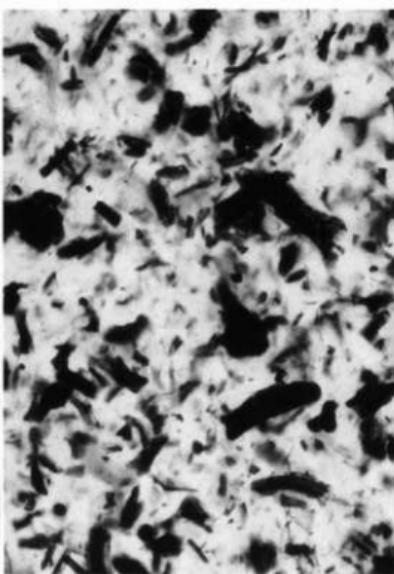
板ナデ（1・2）ケズリ（3・4・5）



5

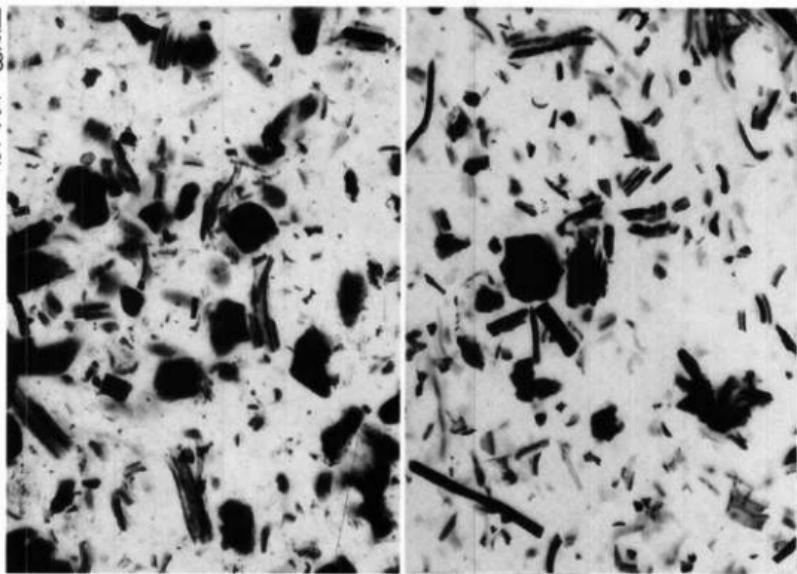


6



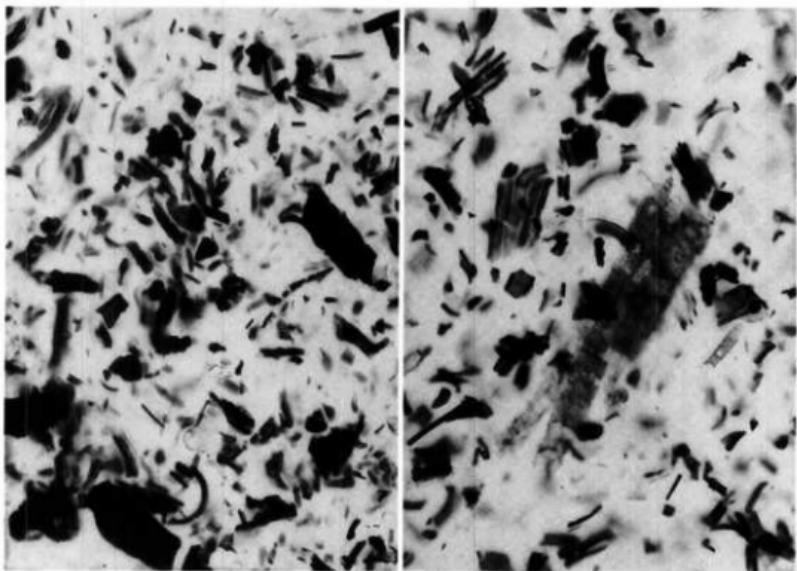
7

1.Carduoideae 2.Artemisia 3.Gramineae 4.Monolete spore 5・6・7. 状況写真



8

9



10

11

8~11. 状況写真

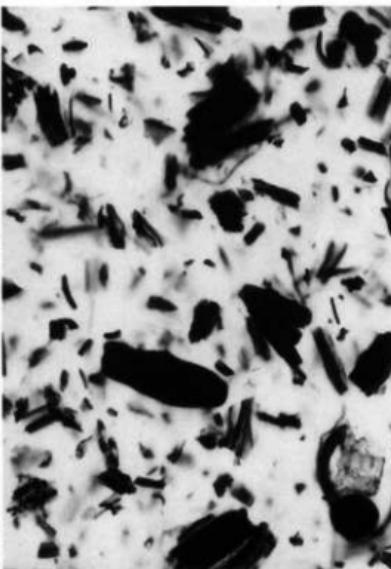
PLATE 1-3

図版
79

花粉化石



12



13

12・13. 状況写真

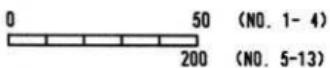
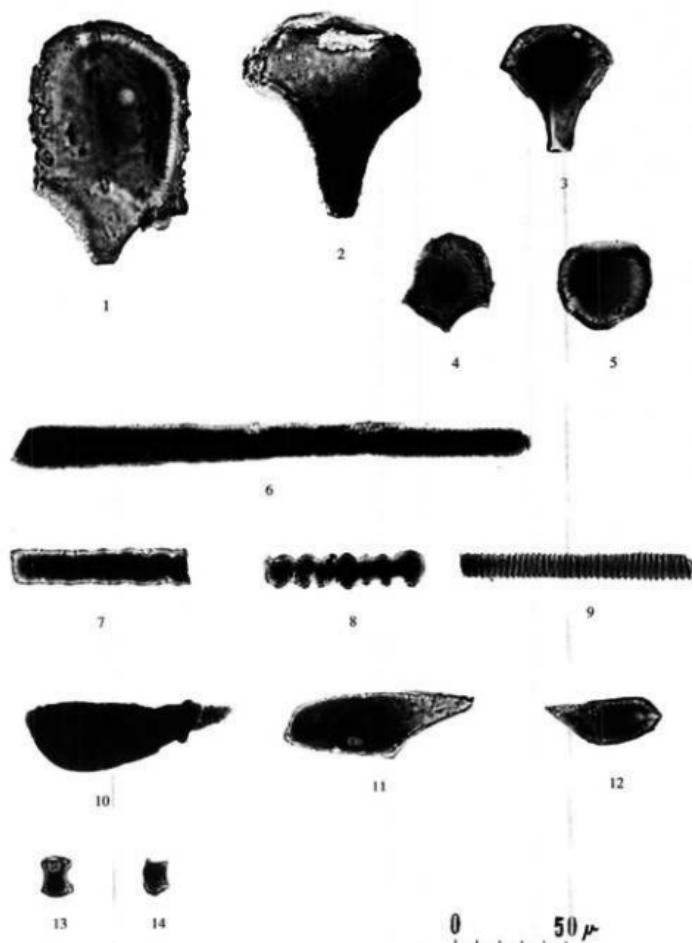


PLATE 2-1

図版 80
珪酸体化石



1~5. ファン型、6~9. 巻状 10~12. ポイント型、13・14. ササ型

報告書抄録

| | | | | | |
|-----------------|---|-------------------------------------|--|---|-------------|
| ふりがな | おにづかいせきだい じはっくつちょうさほうこく | | | | |
| 書名 | 鬼塚遺跡第8次発掘調査報告 | | | | |
| 副書名 | | | | | |
| 卷次 | | | | | |
| シリーズ名 | | | | | |
| シリーズ番号 | | | | | |
| 編著者名 | 福永信雄・中西克宏・多賀谷昭・金弘美・安田博幸・井村由美・糸科哲男・東村武信・小西優美・津田美智子 | | | | |
| 編集機関 | 財団法人東大阪市文化財協会 | | | | |
| 所在地 | 〒557 東大阪市荒川3丁目28-21 | | | | |
| 発行年月日 | 平成9年3月31日 | | | | |
| ふりがな 所収遺跡名 | ふりがな 所 在 地 | 市町村コード | 調査期間 | 調査面積 m ² | 調査原因 |
| 鬼塚遺跡 (第8次調査) | ウガシカシヨウカシムラ 東大阪市新町456番地 | 27227 | 昭和57年 5月24日 ~11月9日 | 850 m ² | マンショ ン建設 |
| 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | 特記事項 | |
| 集落 墓域 | 縄文時代中期後半~ 古墳時代後期初頭 | 柱穴・溝・土壙・ 再葬墓・方形周 溝墓・掘立柱建 物 | 縄文土器・石器・ 弥生土器・須恵 器・土師器・韓 式土器・金属製 品 | ・滋賀里Ⅳ併行の一 括資料 ・焼骨を含む再葬墓 ・玄米圧痕をもつ縄 文晩期土器 | |

鬼塚遺跡第8次発掘調査報告書

1997年3月31日

発行 財団法人 東大阪市文化財協会

印刷 株式会社ミラテック